

日本近代文学

第68集

論文

構成される「少女」——明治期「少女小説」のジャンル形成—— 主体を透明化させるための論理 ——柳宗悦初期の〈科学〉をめぐる言説の持つ意味——	久米依子	1
われわれの内なる《アメリカ》 ——『痴人の愛』と〈排日移民法〉言説——	西山康一	16
「書く」行為の背後にあるもの——宮沢賢治と中原中也——	五味淵典嗣	34
昭和十年前後の私小説言説をめぐる ——文学（者）における社会性を視座として——	加藤邦彦	49
プロレタリアの娘・豊田正子 ——一九五〇年前後の〈書く〉場をめぐる——	松本和也	64
近代文学のなかの短歌・短歌のなかの〈女〉 ——女歌論議をめぐる——	中谷いずみ	78
グランド・ゼロに立って〔講演〕	阿木津英子	92
	林京子	108

展望 谷崎潤一郎の「転換期」

——『春琴抄』をめぐる——	水村美苗	118
占領雑誌データベースと雑誌『Intelligence』 「もの語り」の座標軸を立体化する ——メディア研究の視座から 言と文の関係性を考える——	山本武利	126
同じテキストを読む——日本文学研究と日本文学——	山口誠	130
二一世紀の中・日関係を築くために ——「日中・知の共同体」の六年間——	中川成美	137
で、どうしたいの？	小森陽一	145
	跡上史郎	152

研一窠

「口承」orality ということ ——声、ことばの身体性——	兵藤裕己	158
遠くからの声——中上健次の文字（書くこと）——	種田和加子	165
共同体の〈声〉／複数の〈声〉 ——時局雑誌『放送』と〈書く〉こと——	黒田大河	173

日本近代文学会会則

総則

第一条 この会は、日本近代文学会と称する。

第二条 この会は、日本近代文学の研究を推進することを目的とする。

第三条 この会は、本部事務局を、総会で定めた当番校におく。

ただし別則に従って支部を設けることができる。

第四条 この会は、第二条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1、研究発表会、講演会、展覧会などの開催。
- 2、機関誌、会報、パンフレットなどの刊行。
- 3、海外における日本文学研究者との連絡。
- 4、その他、評議員会において特に必要と認められた事項。

会員

第五条 この会の会員は、日本近代文学の研究者、およびその関係機関をもって構成する。会員は、付則に定める会費を負担するものとする。

第六条 この会への入会には、原則として会員二名の推薦を受け、理事会の承認を得なければならない。

役員

第七条

1、この会に次の役員をおく。

代表理事 一名 常任理事 若干名

理事 若干名 評議員 若干名

監事 若干名

2、代表理事は、この会を代表し、会務を総括する。理事は、理事会を構成し、総会および評議員会の議決に従って、会務の執行に当る。

常任理事は、それぞれ総務、財務、運営、編集を担当し、代表理事を常時補佐する。代表理事に事故があるとき、または代表理事が欠けたときには、総務担当理事がこれを代理し、その職務を行う。

評議員は、評議員会を構成し、この会の重要事項について審議決定する。

監事は、この会の財務を監査する。

3、評議員は、別に定める内規に従って候補を選出し、総会において承認を得る。

理事は、別に定める内規に従って評議員の互選により選出する。代表理事および常任理事は、理事の互選により選出する。ただし運営担当理事（運営委員長、編集担当理事（編集委員長）は、第八条第2項および別に定める内規に従って選出する。

監事は、別に定める内規に従って候補を選出し、総会において承認を得る。

4、役員任期は、二年とする。再選を妨げない。

ただし、理事および監事の任期は、継続四年を越えないものとする。

構成される「少女」

——明治期「少女小説」のジャンル形成——

久 米 依 子

一 「少女小説」の発生とモードの淘汰

「少女小説」と呼ばれる物語が近代日本に登場したのは二十世紀が始まろうとする明治三十年代であるが、その後もこの名称は引き継がれ、百年が経過した現在でも片隅の文学ジャンルとして一定の認知を受けていると思われる。しかし物語のパターンや構造、中心的意味と教訓、言説のモード、主たるコードなどから見れば、少女小説は発生以来決して均一な範型で推移してきたわけではなく、むしろかなりの変容を経てきている。当初「少女小説」という名称は少女が登場する成人向け小説にも使われ、それが少女読者をターゲットにした作品の総称に変更されていったのだが、年齢別、ジャンル別の細分化されたジャンルであるために、領域の自立性を認めるには不安定な要素が多かったと思われる。また必ずしも読者の要求に応じて始まったわけではなく、出発期には特に規範の教化装置としての役割を強く担っていた。その一方でマーケティング重視

の姿勢は、初期から現代の少女小説まで連続と続いている。こうした断絶と連続をはらむ歴史性を等閑視し、少女小説の幾度目かのブーム、などと通時的な見方を強めてしまうと「少女小説」がその都度果たしてきた役割を見誤る危険性もあると思われる。

例えば現在の「少女小説」という名称の流通に関しては、一九八〇年代に集英社のコバルトシリーズにおいて作家氷室冴子が意識的に復活を仕掛け、それがマーケティング戦略に利用されたと自ら証言している⁽¹⁾。これらの結節点に注意を払う必要がある。或いは最近、評論家の斎藤美奈子が『若草物語』『赤毛のアン』など欧米の翻訳「家庭小説」を「少女小説」と呼び「使用法のいかによって、少女小説というのはけっこう使える道具なのだ」と意味づけ⁽²⁾た。少女をエンパワーする作品を再評価したいという斎藤の意図は理解できるが、本来「家庭小説」と呼ばれた十九世紀欧米の物語が「少女小説」と呼び替えられることで、「家庭小説」に収まろうとしていた当の作品群の枠組みも、過去の日本の少女小説の軌跡も混

合されて、曖昧化される危惧がないとはいえない。

少女のための「少女小説」、という概念が普遍化されて理解されてしまうと、「少女」が実は歴史的なカテゴリーであること⁽³⁾や、「少女」集団の内部の差異が見過ごされがちになると思われる⁽⁴⁾。そして非歴史的な少女読者が愛読するのが「少女小説」と見なされて、読者と物語形式との密接な関係が自明性をもって受け取られる。それはまた「少女小説」を好む存在が「少女」である、という逆方向の抑圧的な措定も呼び込む可能性があるろう。少女読者の実態が「少女小説」から測られるという、厄介な転倒が生じるのである⁽⁵⁾。

もちろん以上の問題はどのようなカテゴリー、享受者、文化についても考慮すべき事柄であるが、特に「少女小説」は近代のジェンダーの構築に関わる領域でもあることから、役割の変遷に留意すべきだと考える。ワイリー・チャー・デイモックが述べるように、「ジェンダーを差異という不変の範疇に変えてしまわないためにも、また、差異を永久に変わることのない生産の場に限定しないためにも」「歴史的な読み」が必要となる。ジェンダーを「時間の中に構築され」「時間の変遷に従うものと理解」し、「その変遷する背景の状況や様式や機能する中心となる軸を見つけ出」すこと⁽⁶⁾が、少女小説の分析にも求められるのではないだろうか。

以上のような問題意識に立つて、本稿では「少女小説」の発生期から発展期にあたる明治四十年代前後を考察し、「少女小説」が文学の一ジャンルとして認められていった経緯を辿りたい。まず、発生期からの少女小説の動きを以下に概観する。

明治の少女向け物語は、商業出版の一企画として、博文館の雑誌『少年世界』（明治28・1創刊）で本格的に始まるが、同誌が「少女小説」という呼称を付けたのは三巻一号の田中夕風「水の行方」（明治30・1・2 三巻一・三・五号）からである。同時期には「少女教訓談」「少女お伽噺」「少女談」なども使い分けられ、「少女小説」は写実的で小説的結構をもった物語に使用された。やや年齢の高い読者層を狙った「少女小説」の呼び名が、のちに小学校高学年から女学生を対象に創刊された少女雑誌群にも受け継がれ、総称的に一般化したと考えられる。

この『少年世界』の少女小説は、近代日本の非対称なジェンダー構造に即し、年少者を男女別に区分けしてそれぞれに異なる訓話を与えようとしたものである。同じ雑誌の中で少年向けには立身出世をモットーに、所与の境遇を乗り越える出世や冒険のドラマが語られたが、少女向け物語では家の娘としての規範を守ること、また一旦不運な境遇に陥れば少女自身ではそれを乗り越えられないことが説諭された。ただしその固定的な差異は同じ誌面に並ぶにはあまりにバランスが悪く、主たる読者である少年の支持も得にくい⁽⁷⁾中で、少女小説はかろうじて細々と存続する存在にすぎなかった。

しかし明治三二年に高等女学校令が公布され女子中等教育が国策として振興されると、課外読み物として正当性を得た少女雑誌が次々に創刊され⁽⁸⁾、少女小説の量産時代が訪れる。女学生数の急速な増加が雑誌の創刊を促したのであり、その変化が少女小説の基本構造に及んでもおかしくはなかった。事実、少女雑誌にはそれまで見

られなかった立身出世する少女や冒険する少女の話が現れている。しかしここで注目されるのは、その新しい物語が決して少女小説の主流モードとはならず、痕跡を残さなかったことである。それらは確かに存在し読まれてもいたのだが、あたかも無かったように扱われ、現在では児童文学史的にも無視されている。ジャンルの中核と認知されないまま消えていった少女向け物語の亜種をここで確認しておきたい。

少女雑誌の先駆けとなった金港堂『少女界』（明治35・4創刊）は、出版元が教科書出版も手がけていたため割合ストリートに勉学の勧めを説き、学問によって出世した女性の物語を比較的多く掲載する一方、やや古風な前近代の孝女烈婦像も盛んに紹介した。両者を併存させた『少女界』は学問に励む女子を儒教的倫理に反するものとは捉えず、明治の女子の務めが新たに勉学にまで広がったと単純に解釈していたように見える。

例えば四巻一号（明治38・1）の臨時増刊号「少女鑑」は「将来皆さんの中から一人でも多く斯ういふ豪い方が出ることを望むとして、勉学によって出世した著名婦人十二人の半生記を物語化して並べている。或いは水島丹崖の少女小説「不具者」（明治40・12 六巻十四号）は、足に障害のある主人公が学校の先生に「勉強さへすれば、人におくれる氣遣はない」と教えられ、絵の勉強に励み某宮の妃殿下に絵が買い上げられる。銀溪の「友垣」（明治41・1 七巻一号）では父を亡くし牛乳配達をしながら通学している友人を見た少女が、何不自由なく学ばせてくれる親に感謝し「如何かして一生

懸命に勉強して偉い人になつて御恩を報ひなければならない」と考える。また執筆陣の一人である新保一村が金港堂から刊行した単行本の少女小説「娘浦嶋」（明治42・6）は、亡き母の墓参りに出かけた少女が不思議な力を得て裁縫女学校の校長にまで出世する話である。

もし高等女学校令が男子中等教育と同様な学問を女子にも課そうとする制度であったなら、勉強と出世を奨励する金港堂と『少女界』の路線は正しかったと考えられる。しかし少女立身物語は、後続の他の少女雑誌にはほとんど載らず、『少女界』そのものも早々に市場から撤退してしまつた。

一方、『少女界』より創刊は遅れたが発売後たちまち『少女界』の読者を奪つたと評される博文館『少女世界』（明治39・9創刊）は、『少年世界』のノウハウを活かした美麗な誌面でまず読者の心を掴み、読み物では新しい試みの少女冒険物語を掲載した。華麗な設定で「貴女冒険小説」と称されたりした（押川春浪「空中の奇禍」「少女世界」大正2・6、大正4・3）冒険物語には、投書欄で常に熱い期待が寄せられ、少女読者も少年と同様にスリルとサスペンスに満たされた活劇に惹かれていたことが分かる。

しかし少女冒険小説は後続の『少女の友』『少女画報』『少女』各誌にも数多く掲載されながら、名作と名指されるような作品は特に残らず、ほとんど単行本化もされなかった。『少女界』の立身物語の方は少数派として急速に消滅したが、こちらの方はおびただしい数が発表され人気があつたにもかかわらず、忘却されてしまつた物

語群といえるだろう。

二 家父長制下の家庭悲劇と女性の分断

こうした「少女小説」初期のモードの淘汰と認知の動きについては、当時の女子教育からの考察が必要になると思われる。その問題に向かう前に、『少女界』で頭角をあらわし『少女世界』『少女の友』『少女画報』でも活躍した女性作家、尾島菊子の作品に注目してみたい。尾島菊子（大正三年結婚後は小寺姓）は田村俊子「あきらめ」が当選した大阪朝日懸賞小説（明治43・11）で次席となり、『青鞥』への参加や徳田秋聲に師事したことも知られるが、明治四十年代初めから次々と少女小説を発表し単行本も上梓され、恐らくは最初の著名な女性少女小説家となっていた。複数の少女雑誌に作品を掲載し少女小説界を横断することができた彼女の作風から、当時典型として求められていた物語パターンが抽出できると思われる。

尾島作品によく見られるのは、主人公の少女が実母を亡くし、或いは何らかの事情で実母と別れて暮す中で、継母や親族や先輩奉公人の女性にもごい仕打ちを受けて苦しむという展開である。例えば以下の「都の夢」では進学のため寄宿した叔父の家において叔母との確執が、また「なさぬ仲」では継母に疎まれる少女の悲哀が詳細に描かれる。

「真実ほんとに西も東も知らぬ田舎からほつと出の貴女を是までに上げて私の丹精はどれ位だと思ひます。飼犬に手を喰はれらると云ふのは此事ですよばかしくしい。然さうやつて一々叔父様

に讒訴ざんそなさるなら、私も今日限り貴女のお世話は出来ませんから、何卒なにと貴女の御自由になすつて下さいまし。」これが貴女を娘のやうに思ふと云つて下さつた叔母様のお言葉でありませうか！ 清子はわつと泣き伏すと、（中略）悲しいやら悔しいやら、少時しばらくは正体もなく泣き沈みました。

〔都の夢〕『少女界』明治41・10 七巻十号

高子は（中略）お母様の尖り声や、お父様の不快なお顔（中略）を見るのが、自分の身を斬られるやうに切なく感ずるのでございます。（中略）けれど又静かに考へなほして見ると、一家内うちに起る暗闘は、皆自分から始まつてるのであります。故に私の行為おこなひさへ真直まっすぐで、私さへお母様に誠心から尽し真実ほんとのお母様と思つてお慕ひ申したなら、幾ら癩癪まじまじの強いお方だつて、何時かは心も和らいで（中略）母様の可愛い／＼娘よ、と云つて両手に抱き締めて下さる時機ときが来るだらうと、幼心せうしんにも果敢はかない頼みを力に、つひ空を眺めてホロリとすることが往々まありました。

〔なさぬ仲〕その三『少女の友』明治44・6 四巻七号

これらは尾島作品に固有な設定ではなく、同時期の少女雑誌には同じような不幸物語が頻繁に掲載されていた。系譜的には『少年世界』の「水の行方」を受け継ぐもので、主人公が貧困や病氣や親の死などの悲運に翻弄される話によって、平穩な生活を送る大方の少女読者に感謝の気持ちを抱かせつつ、転落への恐怖も教えようとしている。その中で尾島の少女小説は、敵役の女性の辛辣な台詞や主人公の嘆きをより緻密に再現して悲劇のテンションを高め、類似作

の中で一頭地を抜く存在になったと思われる。ただし悲惨な状況がことさらに強調されるので、例えば「なさぬ仲」に対しては継母というだけで悪者扱いしていないか、と問う読者からの投書もあつたらしい（水裏生「なさぬ仲」に就て）『少女の友』明治44・6 四巻七号。読者の要望に添った物語であつたかどうかは、判断しにくい面がある。

またこうした不幸な物語には下層階級の少女を描いて読者に（向こう側）への同情を起こさせるタイプもあるが、尾島作品では主人公は概ね読者と同じ中産階層に属し、その家庭内で逃れたい不和や不如意が生じる。主人公の少女は激しく苦悩するが根本的な解決能力はなく、そのまま物語が終結する場合もあるし、ハッピーエンドは偶然の憐悻か少女の生命の危機が他の登場人物を改心させたりしてようやく訪れる。

家庭内の女性の受難が描かれた点で、この物語パターンを「家庭小説」の一変形・少女版として捉えることもできよう。尾島菊子が少女小説を書いた明治四十年代には、既に「家庭小説」は道德性が批判されて成人文学の主流から退いていた。しかし「少女小説」という教化性の強い周縁領域の物語においては、家庭小説的教訓がまだ有効だったと思われる。

ただし家庭小説に関する諸定義から考えると、共通点と共に微妙なズレも見いだされる。前田愛が家庭小説を論じた際の「ひたすら忍従を美德」とする「被害者的女性」が「自力では脱出不可能な宿命の陥穽に引き入れられて行くところに、同情と憐憫の優越した境

位」を「約束」し、「家」の秩序を再確認させる⁽¹³⁾という指摘や、金子明雄の言うヒロインの「徹底した受動性」などは相似するものの、加藤武雄の著名な定義にある、家庭小説は「どこかに救ひがなければならぬ（中略）結局に於て道德の勝利といふものが歌はれるなければならぬ⁽¹⁵⁾」や、瀬沼茂樹の言う「家庭婦人に（中略）慰藉をあたえるときにも」「かれらを勇気づけようとした⁽¹⁶⁾」という結末の光明性は、少女小説には希薄だと思われる。主人公は「家庭婦人」以上に家の内部に束縛され、出口を閉ざされている。もともと「家庭小説」は「家庭の趣味を高め、家庭の和氣を図る」（「家庭と文学」『帝國文学』明治29・12）ことで理想的夫婦関係の一助となるよう期待されたジャンルだが、しかし家庭内の被保護者でしかない少女には当面「家庭の改良⁽¹⁷⁾」者（喜ぶべき現象）『帝國文学』明治34・9）となる資格がなく、受け身の忍従が強調されるしかなかったのかもかもしれない。とても「愛の珠の叙事詩」（「家庭小説」『帝國文学』明治30・5）とは読みとれない物語であつた。

さらに尾島の作品や類似の少女小説群では、家庭内を攪乱する（悪）としての女性像が前景化される。継母・叔母・兄嫁らと主人公の力関係が争われ、家庭内で女性同士が分断される話となつている。これは父の権力を頂点とする家父長制下の家の、どこに女性が配置されるかという問題に繋がっている。「家」における少女は始めから家督相続者になれない弱者の立場にいるが、とりわけ実母を失い新たな母を迎えれば最も不安定な厄介者の位置に追いやられる。また兄嫁なども外部から到来した女性として、以前から居る女

性と葛藤を起こしやすい。継母や兄嫁と少女の間のシスターフッドを妨げるのは、家父長制内のヒエラルキー構成だといえよう。そして少女不幸物語はたとえ親族であつても実母以外の女性を決して味方になつてくれぬこと、したがつて父の忠実な娘とならざるをえないことを繰り返し教へ込む。それは結局「女性の自発的な献身を動員する」という「家父長制の成功」(18) (上野千鶴子) へと、少女を導いていく物語だつたとみなせよう。

こうした物語が流行した点に、高等女学校に進学の道が開かれても少女が依然として家の秩序に強く拘束されていたことが示唆されている。そもそも高等女学校令は良妻賢母主義——家父長制度下で再生産様式を担う女性を育成するイデオロギー——に則っていた。父の娘を別の家長にゆずり渡す「再生産手段」すなわち女性の分配(上野)を補強する教育制度である。それはまた、本格的な産業化の始まつた近代日本が市場の外部に再生産の場を確保するための戦略の一つであり、そのために女子を国民化するという意義を担っていた。

ただし急激な進学率上昇の実質的モチベーションとなつたのは、学歴を女子の嫁入りのための箔付けとし、「家」の付加価値を高めようとする意識であつたらう。以下は日本女子大学の卒業生の機関誌に載つた地方の寄宿舎付き実業女学校に勤める者の報告であるが、女学生の生活実態と勉学の内容が乖離していた様子がよく分かる。

一体、地方の中流以上では却つて台所などには子女を出しま

せん、それで生徒の中で手を傷けずにお漬物を切る事の出来る物は無いんで御座います(中略)朝はおさげの髪が結はず、夜は泣いて一人では寝ませず、掃除といひ整理といひ、一人の力ではお箸一本も満足に動かせない有様ですから、恰ど人形と申しませうか、(中略)夜は私の両側に七八人づ、抱いて寝ました。(中略)洗濯だの水汲みなどいふ事は賤しい物と思つて居ります。ですから学課に、刺繡、裁縫、編物、料理、染色、機織など色々御座いますが、興味を以てする物は少ないので、皆学課からお勤めにするのです。(中略)今は漸く一人も残らず御飯を炊く事と、洗濯は出来る様になりました。

〔地方女学生の実状を觀て〕「家庭週報」明治41・4・20、第四百四十号

このように女学校のカリキュラムには中流以上の家庭にそぐわない面があつたにもかかわらず、各家庭は有利な嫁入りの条件として、ひいては「家」の格付けとして女子の進学を認めていたと考へられる。良妻賢母主義教育と家の思惑は、そういう形で噛み合っていた。

その状況下で描かれた少女小説の家庭悲劇は、本田和子氏が述べるような「お涙頂戴」で「感傷過多」(19)のドラマでありつつ、実は体制の要請に見事に応え、読者の少女たちに家の秩序を守り、できるだけ有利な分配のシステムに乗るよう促していたのではないだろうか。尾島菊子の作品でも初めの頃は、主人公が止むに止まれぬ行動を起こして状況を打開する話が見られた。しかし次第に少女が身動

きのとれない事態に囚われる話が増えている。同時に尾島は成人向けの小説でも、働く女性がとめどない不幸に陥り嘆くさまを執拗に描いた。⁽²¹⁾尾島なりに女性たちが選択し乗るべきルートをリアルに掴み、教訓的に述べようとしていたのかもかもしれない。

しかし、自力で解決できない悲劇の反復は物語自体の閉塞感を強める。少女雑誌は次なる可能性を探り、良妻賢母主義に抵触せず、家の重圧にも逼塞しない少女規範の成立が図られる。そこで見出されたのが少女のセクシュアリティであり、それはまたジャンルの中核となる物語を引き出していくことにもなった。

三 少女セクシュアリティへのまなざし

いち早く新たな少女観を示した『少女世界』は、「愛らしい少女」というキーワードのもとに編集主幹沼田笠峰が「皆さんは（中略）至るところで、愛せられるやうにならねばなりません」（少女教室）明治40・2（二巻三号）「少女は何処までも愛らしく、やさしく、従順でなければなりません。その愛らしさ、そのやさしさ、その従順なる美德が、実に少女の根本となるのです」（少女の世界）明治41・1（三巻二号）と説いた。⁽²²⁾この「愛らしい」という画期的な規範は、少女を旧態依然の節制に縛りつけることなく女学生らしいお洒落も許容する。沼田は『少女世界』やエッセイ集の中で少女の美しい装いを奨励し、身だしなみやリボンの付け方まで指導をした。

少女会とか、学校の運動会とか、多くの少女が集まる場所へ

行くには、なるべく強い色のリボンをつけるのが宜しい。而して、⁽²³⁾外の少女が皆、無地のリボンをつけて居る時に、一人か二人、あらい縞のリボンをつけたのは、非常に際立つて、美しく見えるものです。けれども、あんまり大柄の縞リボンは、見ざめがしますから、始終用ひるには不適當です。時々取りかへるやうにせねばなりません。

〔リボン〕「少女百話」博文館 明治44・7

明治末には好景気の到来によって、それまで訓戒の中に封じ込まれていた少女の装いへの欲求が徐々に解放され始めていたが、それを積極的に追認したといえよう。

このパラダイム変換の背後には、時代風潮とともに『少女世界』の編集に携わっていた田山花袋の言説の影響が考えられる。花袋の小説・詩における少女像——少女セクシュアリティの発見が、新しい少女規範と関わりがあった可能性は高いと思われる。

田山花袋は、自ら明治「二十八年頃から三十二年までの間は、例の少女小説、憧憬小説をよく書いた時代である。女性崇拜の甘い小説を無数に書いた⁽²⁴⁾」と述べているように、少女小説が「少女人者だった。自然主義に転じてからは『少女病』（明治40・5）『蒲団』（明治40・9）と、少女や女学生系の女性に対するまなざしを憧憬から欲望へとシフトチェンジさせたが、博文館の社員として同時期にも『少女世界』に関わり、以下のような詩を発表し続けた。

（前略）少女子よ、何をわづらふ。／侘しげに佇立⁽²⁵⁾むすがた、

／悲しげに垂る、かうべや、／睫毛には露こそか、れ。(中略)
 やさし眉、うつくし額、／黒髪のか、りも、艶に／振袖の長さ
 うれひも、／まだ知らぬ十六姿。／されどわがいとし少女子、
 ／うつくしき額を挙げよ。／春は唯かくて時の間／たゆたひの
 間にこそ過ぎぬ。(後略)

(「少女にいふ」『少女世界』明治40・5 一巻六号)

もちろんそれらの詩は男性側のむき出しの欲望を表現したものでないが、少女の官能美に陶醉し賛美する態度は現れていた。こうした花袋の言説を誌面を含む『少女世界』のスタンスは、自然主義的な少女へのまなざしを排除するのではなく、むしろそれと呼応関係にあったと考えられる。例えば『蒲団』の中年作家が渴望した「ハイカラな廂髪、櫛、リボン」で装う教養ある若い女性の姿は、少女雑誌を読むような少女の理想的成長の姿と捉えられるだろうし、『少女病』の主人公が通学中の「頬の桃色の、輪郭の丸い、それは可愛い」女学生の「派手な縞物に、海老茶の袴を穿いて、右手に女持の細い蝙蝠傘、左の手に、紫の風呂敷包を抱へて居るが、今日はリボンがいつものと違って白い」様子を凝視したのと同じく、沼田笠峰も電車内で見かけた優美な少女を誌上で度々紹介している。

どこかの女学校へ通つてゐるのでせう、袴をはいて書物包みを持つてゐました。漆のやうに黒い髪を頭の真中からきれいに分け、左右の耳の所で編んだ余りを後方に垂らして、純白のリボンをかけてゐました。ほんのりと桜色に紅らんだ顔と、真黒

なお垂髪をあざやかな白リボンとが美しく配合して、ちやうど絵に描いた天平時代の少女のやうでした。少女はしとやかに腰掛けて、膝においた書物包みの上に軽く両手を載せ、うつとりと窓外の景色を見てゐました。

(沼田笠峰「手帳の中より」『少女世界』大正2・12、八巻十二号)

従来の婦徳尊重から考えれば、人目を気にしてリボンや袴の着こなしに苦心する少女は驕奢の禁忌に触れている。しかし通学時に人目に晒される生活が一般化し、また実良妻となるためには、男性からの審美的なまなざしに耐え得ることも必要な時代になってきた。家同士の狭い交際域で結婚が決まった時代に比べ、まず身分程度のしがらみが解け、次に近代化の進展で男子の活動範囲が拡大し、結婚相手の選択の幅が広がる。田山花袋自身も雑誌の誌友会で知り合った太田玉茗の妹と結婚し、弟は士官として弘前師団に赴任した時の下宿先で結婚相手を見つけている。良妻賢母主義もへ見られる存在としての少女の美的価値を否定することは難しくなり、少女の「愛らしさ」は良妻になる資質として認められることになる。家長規制下で男性によって統制分配される女子は、(愛する)のではなく、客体として(愛され)へ(選ばれ)なければならぬ。少女雑誌はどのようにすれば(愛される)のかを、さまざまな角度から教える場ともなった。投書文の書き方でも「皆さんの柔らかな皮膚のやうに、ふさ／＼とした黒髪のやうに、涼しい眼もとのやうに、八ツ口をこぼれる美しい振りのやうに、しほらしい素直な心を本として、情のあふれた優しい文章を書いて下さい」(沼田笠峰「記

者より」『少女世界』明治42・5（四卷七号）と指示される。新たな教化の始まりである。こうして明治四十年代の少女雑誌各誌は、さまざまに愛らしく美しい少女イメージを図版や記事中で示すようになってきた。

ただしそれらはあくまで「見られる」ことで発生し認められる官能美であり、少女自身が積極的にセクシユアルな態度をとることが許されたわけではない。少女本人が意識しない形で発露されるような、清楚で無心なセクシユアリティが求められている。

また物語の中では、異性に直接「愛される」ことを描く話は慎重に避けられた。実は少女雑誌の図版や物語には家族・親族以外の男性は老人と幼児しか出てこないといっても過言ではなく、強力な異性愛排除の姿勢が貫かれていた。「良妻賢母」という目標が課せられながら、少女たちには理想的異性の見分け方も出会いの方法も教えられなかったのである。家長の許可なく結婚が認められない時代に少女雑誌が厳重に異性愛を排除したのは、統制分配を待つ女子に、主体的な恋愛などを知らせないための配慮としか考えられない。良妻賢母主義教育と「家」の秩序はその点にだけは妥協しなかったといつてよい。

だとすれば少女雑誌での「愛」の教育、ペアになることの手本はどのような物語を通じて語り得るのか。ここで浮上したのが少女同士の友愛物語だと考えられる。

四 文学共同体の認知とジャンルの成立

少女小説の代名詞的作品として挙げられる吉屋信子の『花物語』（刊行大正9）も、全編同性思慕物語といえることができるが、これは決して吉屋のオリジナルな発明ではなく同時代の少女雑誌に溢れていた物語パターンだった。開発したのはやはり『少女世界』である。吉屋自身が大正末に、かつて少女雑誌で愛読した作家を回想しているが（「憧れし作家の人々」『文章俱樂部』大正15・10）そこには当時少女小説作家としてずっと著名であった尾島菊子も三宅花圃の名も見当たらない。代わりに挙げられている沼田笠峰、西村渚山、黒田湖山、松井百合子、山田邦子は、実は皆少女同士の友愛物語を書いた人々である。また沼田以下松井百合子までは『少女世界』に執筆し、山田（今井）邦子は『少女の友』の作家だが『女子文壇』を介して花袋の弟子水野仙子と親友であり、いずれも花袋的少女セクシユアリティの描き方をよく知っていた作家たちといえる。彼らの作品では以下のように、美しい少女同士が切なく心を寄せ合っていた。

美輪子は烈しい思ひに堪へかねて、いきなりお澄の後から纏りつきました。（中略）まだ巢立たぬ雛の和毛（にこげ）にも似た、ふうわりと柔らかい前髪が、一寸ほど丈高いお澄の頬をかすめて、泪か氣息（いぶき）か暖かに通ふほど、ひとと取りついた美輪子は微かにふるえて居りました。（中略）二年ぶりですわねえ、どんなにお目にか、りたかつたか知れないのよ。（中略）いつも悲しい思ひ

ばかり……」と、そつと臉をふいて、闇に咲いた白芙蓉か、たゞほんのりと薄白のお澄の顔を仰いで、興奮してゐた心の幾分かゞ慰やされたやうに、ホツと熱い息を吐きました。

（松井百合子「宵闇」『少女世界』明治44・11 六卷十五号）

「ね、七重さん、私たち二人はどうしてこんなに気が合つたんでせう、私あなたのおつしやる事を伺つてゐる半分頃からどうかすると何んだかあなたが私の心の中を言つてゐらつしやるぢやないかと思ふ事があるのよ」（中略）秋の水のやうな人と、春の花のやうな人が何故か空の星の美しさ、尊さ、なつかしさをしみぐと見つめてゐるやうな澄み渡つた真心に思ひ至る時、離れられない同じ受感と同じ憧憬とのあることを二人はおのづから知つて自ら近づつてゆきました。

（山田邦子「野菊の花」『少女の友』大正2・11 六卷十三号）

こうした少女友愛物語ではまた、友愛の前提となる「寂しさ」も頻繁に描かれ、例えば「あなたが病気で、東京に居らつしやらないと、私も寂しいわ。誰も頼りにする人が居ないんですもの。早く快くなつて頂戴な」「斯うして別れて居ると、何だか一人ぼつちになつたやうで、心ほそくて仕様がないうわ」（沼田笠峰「さびしい二人」『少女世界』明治43・2、五卷三号）と語られた。この「寂しさ」は同時期の青年たちも雑誌で吐露していた「青年のアイデンティティを保証する感情」であり、それへの共感と真情告白を介して「ホモソーシャルな文学ネットワーク」が形成されたことを、飯田祐子氏が分析している。少女読者に即して考えれば、学校という「家」の

外部の場が重視されるようになって（個）の感覚が生まれ、友愛への切実な希求にリアリティが生じていたと考えられる。ただし青年たちの「寂しさ」が特権的な共感の輪を介して集合的文学ネットワークの形成に向かつたのに対し、少女の「寂しさ」は物語においても雑誌の投稿においても、共同体よりも個別特定の相手に向かう感情として表わされる。少女雑誌の投書欄には、自らが読者共同体に属することを確認する文章も見えるが、それにもまして特定の相手に呼びかける文面が多く、ペアの関係を形成しようとする強い欲求が認められる。青年たちのホモソーシャルなネットワークが共有化されるのに比べ、少女の「寂しさ」はあくまで「対の関係」上で解消されるのを前提としたようである。⁽²⁸⁾

ともあれ耽美的な愛情の交流を描く少女小説はたちまち読者に影響を与え、各誌の投稿欄には美少女を称えたり同性への思慕を綴る作文が増え、選者もそれを歓迎した。その中で投稿少女として頭角をあらわした吉屋信子が、当時最も華麗な誌面を展開していた「少女画報」に大正五年七月から「花物語」を連載し始めるのである。

以上の経過を顧みれば、少女雑誌中の同性思慕は決して時代の規範に反するものではなく、むしろ制度の補完作用として働いていた。この点では、同時代の大方の成人向け小説の、女性間の関係の描き方と通底している。

当時は成人文学でも女性同士の絆がさまざまに取り上げられたが、それは女性のセクシュアリティが問題化した時代現象の一環と考えられる。リリアン・フェダマンが述べるように、西欧社会にお

いても「女性に独立したセクシュアリティを認めてはいなかった」時代には「女性愛の描写どころか、その概念すら存在しなかった」のであり、十九世紀後半以降、ハヴロック・エリスらの性科学の言説が女同士の関係を「ロマンティックな友情」ではなく「倒錯」「異常」と定義したことで、「レスビアン」という存在が構築されたのである。日本の明治四十年代もまた、女性が性的存在であることが認められ注目されていく時期にあたり、同性愛についても旧来の「男性中心の同性愛から女性中心の同性愛へ」という認識論的転換⁽³⁰⁾や用語の変化があったとされる。

その状況下の成人向け小説は、小杉天外『魔風恋風』(明治36)が、美人女学生に近づく女性教師の「悪い癖」に触れつつ、主人公の義姉妹関係が異性愛関係に破れるさまを描いたのを始めとして、『女子文壇』に掲載された投稿作家の諸短編でも、概ね女性同士の関係の異常性が指摘され、或いは関係を断念して異性愛を選択する挫折の物語が語られた⁽³¹⁾。結果的に強制的異性愛体制を強化し、女性のセクシュアリティを馴致して抑制する言説となったといえよう。

ただし田村俊子『あきらめ』(明治44)や『青鞥』の同性愛小説の一部にはやや異なる指向が認められる。『あきらめ』は、結束から見れば女性の絆をへあきらめ〜してしまう話だが、女性同士の甘美な親密さに「恍惚⁽³²⁾」する主人公に対し「惚れてゐるんだ」と「いやな事」を言う男性が登場し、それに反発する主人公の姿も示される。また『青鞥』の菅原初「旬日の友」(大正4・3)では女性カッブルが公園で警部に「お前達は、近頃流行る、同性の恋じゃないか」と

詰問され、停車場で別れる時には人目があつて口づけを交わせない。同性愛を取り巻く外部の圧力としての男性や社会制度の存在が多少とも書き込まれ、それを「いやな」「口惜しい」(あきらめ)「私の自然」を死なすもの(旬日の友)と捉えたところに、強制的異性愛制度内のジェンダー・トラブル⁽³³⁾——ジェンダーの攪乱の物語であり、抵抗の実践的セクシュアリティになるというサインが発せられていたと考えられる。

それらと対照すると少女雑誌の友愛物語は、異性愛制度を支える側の物語として機能した。少女友愛物語は外部・男性の存在しないファンタジー空間で展開され、現実への還元を拒んでいる。また描かれる少女の美しさとペア二人の相同性には、小平麻衣子氏が指摘する「男性に望まれる女性への同一化の欲望」⁽³³⁾が認められる。少女の官能的魅力を際立たせながら、男性に好まれる女性の美と、カッブル間の親密な交情を学ばせる、まさに異性愛のレッスンとなる物語であつた。その疑似恋愛を味わつた読者にはいずれ、よりへ正常な異性愛の絆と、男性に望まれへ愛される〜女性の物語が教えられることになるだろう。

つまり現在から見れば異様に感じられるかもしれない少女同士の友愛物語は、家父長制度内で強制的異性愛を管理されるという厳しい枷があつた時代に、少女に許された／勧められたへ愛の表象なのである。したがって『花物語』などの物語に「体制」や「秩序に位置する価値とは無縁」⁽³⁴⁾な「愛の原型としての始原の合一」⁽³⁵⁾、或いは「汎エロスの差異のざわめく自然」⁽³⁶⁾を見たりすることは、現時

点でのテキストの楽しみ方ではあるかもしれないが、非歴史的な読みになる可能性がある。少女友愛物語はオルタナティブなセクシュアリティの示唆などではなく、近代家父長制と女子教育制度の規制に従っていた。沼田笠峰が教育論『現代少女とその教育』（同文館 大正5・10）で「同年輩の少女たち」が「特別に親密な交わりを結んでも、或る時期を待ちさへすれば、何時とはなく自然に冷めて行く。ただその情熱が極度に達しないやうに、遠く離れた所からこれを監視して居ればよいのである」と述べていたように、現実の少女たちの親密さも所詮一過性で「監視」可能な関係と見なされたからこそ、友愛物語は成立し消費されたのである。

そしてこの友愛物語の精華として『花物語』が登場した時、「少女小説」は成人文学からの距離を測られつつ、ジャンルとして定着したように見える。それは『花物語』がジャンルを代表するロングセラーとなり、大衆小説家でもある作者の知名度が高かったというだけでなく、中心となる成人文学の領域から見ても「少女小説」としてのある程度の固有性——独特な世界を認めることができたからではないかと考えられる。

この場合の固有性は、あくまで中心文学の認知の枠組みによる判断である。華麗な筆致で濃厚な少女セクシュアリティを描出した『花物語』には、「文学」の価値を支える読者も巻き込んでいく力があった。北畠八穂は昭和十年頃、自宅に遊びに来た林美美子が、来合わせた「英国のカンタベリー寺院で修業を終えた東大出の人と、これも東大出の哲学者」に吉屋作品を読んだかと聞いたところ、

「二人の若い男性は、ちよつとはにかみながら、従妹いとこと姉の『花物語』の麗筆をこっそり読んで酔ったと答えた」ことを回想している。⁽³⁷⁾『花物語』が中産階級の少年読者にも密かにセクシュアルな物語として享受されていた事情が窺える。男性の存在しない世界で「男性に望まれる女性」の美しさを持つ少女が互いに惹かれ合う物語は、ホモソーシヤルな社会の共通感覚や男性の優位性をいささかも傷つけることなく、官能的なファンタジーの楽しみを提供したのである。

こうした点を踏まえて「少女小説」を展望すると、教訓物語として出発した少女小説は家の秩序と少女の無力性を強調する物語を繰り返しながら、やがて田山花袋が言説化した官能的な少女へのまなざしも友愛物語によつて撰取し、そこに男性読者も酔うようになって、嗜れて文学内部での序列化・配列化がなされたといえるのではないか。ホモソーシヤルな文学共同体が無視できなくなつたことで、年齢・ジェンダー別の並列的な商品であつた「少女小説」は大文字の「文学」の下位ジャンルへ組み込まれ、周縁化される。ただしそれは単なるサブカルチャーとしての扱いにとどまらず、ジェンダーも関与した軽蔑の混じる周縁化であつたと思われる。家父長制下の規範を物語化してきた少女小説が、男性の欲望を取り込むことで男性にも密かに楽しめるものとなり、しかしあくまで少女が好む些末な物語とみなされて、下位ジャンル化される。同時に読者であるはずの少女たちの趣味嗜好も周辺化され、ホモソーシヤルな集団の欲望と蔑視が、想定される少女読者集団に向けられていくこと

になるのである。こうして少女が軽視されつつそのセクシユアリティが賞翫される中で、成人向けの小説においても清纯さとエロティシズムを併せ持つステレオタイプな少女像が定着し、文学共同体が作り上げた少女の表象が再生産される。

次に挙げるのは菊池寛の『真珠夫人』（大正9）で、十六才の少女が憧れの青年に思いがけず「女性らしい聡明さ」を誉められた時の反応である。少女の「処女らしい」恥じらいが、一種エロティックな身体表現を伴って描き出されている。

「まあ！ あんなことを。妾お恥かしうございますわ。」

さう云つて、美奈子は本当に浴衣の袖で顔を掩うた。処女らしい嬌羞が、その身体全体に溢れてゐた。が、彼女の心は、憎からず思つてゐる青年からの讃辞を聴いて、張り裂けるばかりの欲びで躍つてゐた。⁽³⁸⁾

改めて考えてみると、時代の変遷に従つて次々と名称を変える文学ジャンルが少なくない中で、「少女小説」は内実を変容させながら同じ名称で百年間も流通してきた。周辺化された読者集団に向けられた周縁領域の文学であるが、そのことが却つて名称とジャンルを延命させた面もあるようだ。しかしだからといって、周辺であることを殊更に称揚したり、特権化して捉えたりすると、言説の歴史的意義と働きを隠蔽することになりかねない。「少女小説」を問うことは、近代日本が「少女」というカテゴリーをどのようなものとして構築し、それをなぜ維持しようとしてきたか、という問いに常に繋がっていくべきではないかと考えている。

(注1) 水室苺子「思想の科学」編集部秩父啓子さま（執筆一九九一）

七）「水室苺子読本」徳間書店 一九九三・七

(2) 齋藤美奈子「少女小説」の使用方法「文学界」二〇〇一・六

(3) 「少女」という語は明治三十年代以前には「若い女性」を意味する場合が多く、島崎藤村「若菜集」の「処女」と同様に恋愛や結婚の対象となる妙齡の女性にも使われた。現在のように十代半ばまでの女性を指すように低年齢化したのは、女学校教育を意識した雑誌メディアの使用法が浸透したためと考えられる。

(4) こうした陥穽については和田敦彦氏が「メディアの中の読者——読書論の現在」（ひつじ書房 二〇〇二・五）において「中立的で偏らない「読者」も、平均的な「読者」というものも存在はしない」「読者」という語が無限定に用いられる時、そこでは様々な差異が無視され、抑圧されている」と論じている。

(5) 本田和子氏は「少女小説」の表現様式を「少女たちの嗜好に答え得た」と判断し「情緒纏綿、歎きの声が四圍に満ちるとでもいうような感嘆場（中略）も、少女たちが泣きながら愛読する一齣ではないか。口の悪い批評子たちから、「お涙頂戴の少女小説」と蔑まれる所以である。洗練された感受性が辟易するような感傷過多、悲劇を悲劇たらしめる不自然なまでの作為。（中略）それは、恐らくは確実に少女たちの嗜好に答え得たのであろう」と論じている。（「女学生の系譜」「少女」への凝集化）青土社 一九九〇・七）

(6) ワイルチー・デイモック 福田敬子訳「フェミニズム、ニューヒストリシズム、読者」富山太佳夫編「現代批評のプラクティス——2 ニューヒストリシズム」（研究社出版 一九九五・一）所収。デイモックは「ジェンダーを時間の中に位置づけること」を強調し、「その位置づける行為は同時に足元を揺さぶることでもある」とも述べている。

(7) 明治三十年代の「少女小説」については拙稿「少女小説——差異と規範の言説装置」（小森陽一・他編「メディア・表象・イデオロ

ギ一」小沢書店 一九九七・五)に詳述した。

- (8) 明治四三(一九一〇)年版「尋常小学修身書 卷六」第二十四課 男子の務と女子の務」には「男子は成長の後家の主人となりて職業を務め、女子は妻となりて一家の世話をなすものにて、男子の務と女子の務とは其の間に異なる所あり」と明記されていた。

- (9) 「少年世界」明治三二年六月(四卷十四号)の「少年演壇」には「少年を益する処少なき」として、少女小説を掲載しないよう求める当時の読者の投書が載った。

- (10) 当時の主な少女雑誌は金港堂「少女界」(明治35・4・大正2?)博文館「少女世界」(明治39・9・昭和6・10)実業之日本社「少女の友」(明治41・2・昭和30・6)東京社「少女画報」(明治44・1・昭和17・4)時事新報社「少女」(大正2・1・大正12?)である。

- (11) 「少女世界」や「少女画報」に寄稿した三宅花圃の作品はこのパターンが多い。

- (12) 飯田祐子氏は明治三二年頃には「家庭小説と少年文学との領域が曖昧」だったと指摘している(「彼らの物語」境界としての女性読者」名古屋大学出版会 一九九八・六)。また明治末年頃には実際に「家庭少女小説」と角書された単行本も出版されているが、内容的には一般の少女小説よりも物語展開が複雑で成人向きなので、少女が登場する家庭小説のヴァリエーションと見なした方がよいようである。

- (13) 前田愛「近代読者の成立」(大正後期通俗小説の展開——婦人雑誌の読者層)有精堂出版 一九七三・一一

- (14) 金子明雄「家庭小説」と読むことの帝国——「己が罪」という問題領域」注(7)前掲書所収

- (15) 加藤武雄「家庭小説研究」(日本文学講座14 大衆文学篇)改造社 一九三三・一一

- (16) 瀬沼茂樹「家庭小説の展開」『文学』一九五七・一二。のち「明治文学全集93 明治家庭小説集」筑摩書房 一九六九・六。

- (17) 「帝国文学」の無署名「喜ぶべき現象」(明治34・9)は「社会の

改良は、家庭の改良に在り、家庭の改良に、大勢力を有するは、家庭小説なり、而して上下あらゆる家庭が、好んで之を読まんとするの傾向を示す」と「家庭小説」の流行を高く評価した。

- (18) 上野千鶴子「家長长制と資本制」岩波書店 一九九〇・一〇

- (19) 前掲注(5)に同じ。
少女自らが行動し事態を改善させる例としては、家を出た母に会いに行く「春の風」(少女界 明治40・3 六卷三号)「御殿桜」(金港堂 明治42・5)が挙げられる。

- (21) 尾島の家庭小説「文字乃涙」(金港堂 明治43・4)では、学校事務員で独身の文字が、男性に中傷され陥れられ、幸福感のない生活を送りながら「あ、嫌だ、私は何の為に生きてゐるのだらう?」「我前途は永久に闇だ」と嘆く。

- (22) 同様な「愛らしさ」を求める態度は他誌にも波及し、例えば「少女の友」では「少女といふものは、ひねくられて居てはいけない、素直でなければならぬ。下品ではないけない、上品でなければならぬ。常に清く美しく敬く、すべてに於て愛らしくなければならぬ」と述べられた(「家族的親愛主義」大正2・3 六卷四号)。

- (23) 田山花袋「小説作法」第二編 私の経験 博文館 明治42・6。また「東京の三十年」(博文館 大正6・6)には「少女譜」(文章倶楽部)明治37・1)を生田長江に「相愛らず少女宗ですね。何うも田山君の憧憬と来たらかなはん」と笑われる場面がある。

- (24) 引用は「田山花袋全集」第一巻(文泉堂書店 一九七三・九)に拠る。

- (25) 小平麻衣子氏は明治二十年代に女性の「眉目」を評価する社会風潮が強まったことについて「身分制度が廃止されて、結婚相手に美人を求めることが自由になった」と論じている(「尾崎紅葉」へ女物語)を読み直す「第四章2 「二人女房」——幸福の選択肢」日本放送出版協会 一九九八・一〇)。

- (26) 単行本の作品では、植松美佐男「少女小説 月見草」(本郷書院

- 明治43・12)のように、淡い初恋が描かれる例外的なケースもある。
- (27) 飯田祐子「彼らの独歩——『文章世界』における「寂しさ」の瀕漫——」『日本近代文学』第59集 一九九八・一〇。
- (28) この点には、少女雑誌の読者共同体が男性編集者の強い管理統括下にあったという事情も絡む。少女読者の通信行為が興味嗜好、読者会の運営などは常に「記者さま」が許す範囲に留められた。これは年少者ゆえの統制というより、「女子文壇」にも見られた「保護者」としての記者を「上位のレベルに仰ぎ」、読者が「並列的に戯れ交流する」(飯田祐子「愛読諸嬢の文学的欲望——『女子文壇』という教室」『日本文学』一九九八・一一)という、女性雑誌内のジェンダーの問題と考えられる。
- (29) リリアン・フェダマン 富岡明美・原美奈子訳「レスビアンの歴史」筑摩書房 一九九六・一一。
- (30) 古川誠「同性「愛」考」『イマーゴ』一九九五・一一。
- (31) これらの作品の同性愛描写が異性愛と拮抗しない点については、大森郁之助「魔風恋風」・幻の《義姉妹》考(札幌大学女子短期大学部紀要)22号 一九九三・九)や小平麻衣子「けれど貴女! 文学を捨ては為ないでせうね。」——『女子文壇』愛読諸嬢と欲望するその姉たち——(『文学』二〇〇二・一、二)が論じている。また「青鞥」で平塚らいてうが性科学言説を取り込んで同性愛を「倒錯」と見なした経緯は、黒澤亜里子「一九二二年のらいてうと紅吉——『女性解放』とレスビアニズムをめぐって——」(西田勝退任・退職記念文集編集委員会編『文学・社会へ地球へ』三二書房 一九九六・九)に詳しく。
- (32) ジュディス・パトラー 竹内和子訳「ジェンダー・トラブル」青土社 一九九九・四。パトラーは「強制的異性愛」は「ジェンダー・アイデンティティを一定不変のものにしようとする規制的な実践」であるが、それを「疑問に付すことができる」「攪乱的な反復」としてのジェンダー・トラブルが、いかに「発生」しうるかを問いかけてい
- (33) 注(31) 前掲の小平麻衣子「けれど貴女! 文学を捨ては為ないでせうね。」——『女子文壇』愛読諸嬢と欲望するその姉たち——。小平氏は「懂れの女性を、それにへなる」ことを通して手に入れる、というのが、女性の自己成型とエロスの構造なのだといえよう」とも指摘している。
- (34) 本田和子「異文化としての子ども」変貌するまなざし」紀伊國屋書店 一九八二・六。「少女文化」が体制と結ぶことは、絶えてない「信子のまなざしは、直進する明治を遮断し、(中略)秩序に位置する価値とは無縁の、小さな箱船を作り出した」と論じている。
- (35) 本田和子「S」——他愛なく、しかも根源的な愛のかたち「イマーゴ」一九九一・八。「花物語」などに描かれる「女学生」のエロスを「文化規範から逃れ」た「愛の原型としての始原の合」とする。
- (36) 川崎賢子「少女日和」吉屋信子論」青弓社 一九九〇・四
- (37) 北島八穂「吉屋信子——『女の世界』一筋に」『日本女性の歴史14 女流文化の世界』(暁教育図書 一九七九・二)所収。北島はエッセイ「透った人」(新潮)一九六八・九)でも同じことを回想している。
- (38) 引用は『菊池寛全集』第五卷(菊池寛記念館 一九九四・三)に拠る。

付記

引用文は新字に改め、ルビを適宜省いた。なお本稿は、日本近代文学会二〇〇二年度十一月例会における口頭発表を加筆訂正したものである。

主体を透明化させるための論理

——柳宗悦初期の「科学」をめぐる言説の持つ意味——

西 山 康 一

柳宗悦ほど多岐に互る分野で活動した人物も珍しいだろう。初期の「科学」への興味から宗教哲学やW・ブレイクら神秘主義芸術の研究、大正半ば頃からの日本の「朝鮮」政策への批判、それと並行した民芸運動の創始者としての活動、そして晩年には様々な仏教徒の研究なども行なっている。またこの他にも第二次大戦中には沖縄方言論争を引き起こすなど、彼の活動に関しては枚挙に遑がないほどであるが、一方彼をめぐる研究は、民芸運動や「朝鮮」・沖縄問題に関する活動中心になされてきて、初期の、特にその思想的出発でもあった「科学」をめぐる言説⁽¹⁾いわゆる「科学学習ノート」については、ほとんど真正面から取り扱われて来なかった。論理が

辿りづらかったり、実際矛盾したところがあることにも 불구하고、そうした問題の意味も問いつつ、柳がこの「科学学習」を通して何を見出していったかは、やはりきちんと考えておかねばならないだろう。というのも、そこで学んだことこそ後の彼の活動の原動力となっており、それを見ない限りその後の彼の活動についても理解

したことはないと思われるからである。また広い視野で見れば、そこから始まる柳の思想が持つ問題性は、彼一人のものでなく、同時代のパラダイム全体が持つ問題だったとさえ思われる。そこで本論ではまず柳初期の「科学」をめぐる言説を一つ一つ分析した上で、それらが持つ意味を彼の後年の活動や同時代のパラダイムを通して見てゆきたい。

1. 学ばれた欧米の動向

——身体的な「知」の領域への探究——

柳宗悦の最初のまとまった「科学学習」の成果である「新らしき科学」⁽²⁾「白樺」明治43・9・10⁽³⁾は、英国の心靈現象研究会(Society for psychical research 通称S・P・R)⁽³⁾を中心に当時欧米で流行していた心靈学について、主にS・P・Rのメンバーで犯罪人類学者C・ロンブローゾの『死後、そは何ぞや』と、同じくメンバーで電気物理学者O・ロッジの『人命の残存』(題名は柳による訳語に従う)⁽⁴⁾とを

通じて紹介したものである。そして次の「科学学習」の成果である「メチニコフの科学的的人生観」(「白樺」明治44・8・9)とともに、後に「科学と人生」と題して本に纏められる。その「序言」で「自分は(中略)死に対する答を科学に訪ねたのである、此処に納めた二つの解釈は、かゝる道で摘み得た二つの美は美しい花である」といわれるように、この二つの文章は結論は違えども、ともに「死」をテーマにしたものであった。しかし一方でその後の柳の思想展開からするならば、そこから学び取ったことは決して「死」についてといったことに留まるものではなかったと思われる。

「高等学科に入った」頃の、こうした同時代の欧米の(科学)に接していった動機を、後年柳は「學術の爲の学校は決して私の心の飢えをも満たしてくれる所ではありませんでした。私はやはり書籍に心の師を見出すより道はなかつたのです。(中略)その頃の私の考を根本的に動揺させた一つの思想は進化論の教へでした。私は兎も角実証的に思想を築かねばならぬ要求に迫られました」といい、「ヘッケルの物質主義に不満であつた私はその折精神と肉体との問題が気になりました。その答をどうかして得たい為に心理学と生理学との二科学が私の心を最も引いたのです。(中略)メチニコフの著書とロッヂやロンプロゾーの本は私の飢えた心にはどれだけ嬉しい糧だつたか分りません」(「諸先生に望む」「白樺」大正5・2)と語る。これによると柳が「科学学習」に向つてゆく動機の一つに、それまでの学校で扱われるような「學術」的学問体系に対する懷疑・反発があつたことがわかる(それ自身が既に欧米の思想との接触による

のかもれないが)。だが実際にその懷疑・反発に、(科学)がどのような形で応え得るのだろうか。また「新らしき科学」と同時期に書かれた「近世に於ける基督教神学の特色」(「白樺」明治43・6)で柳は、自らのことではないにしろやはり伝統的価値体系への懷疑・反発ということで、当時西欧で起こっていたキリスト教の「自由神学」の動きを取材している。その中で柳は「自由神学」の動きを、伝統的な教条主義の「客観的題目」に対する「主観的事実」の重視と捉えるのだが、同時に「自由なる神学を喜ぶ彼等には客観的教理よりも寧ろ神経質な実感的な経験が信仰の土台となつて居る、

(中略)若し宗教が人心の経験的事実に基くならば、それを学ぶものは神学者ではなく心理学者、生理学者でなければならぬ」とし、さらには「一面に於てか、る要求に応じつ、人間の神秘なる精神現象を探らんとして起ちつ、あるものは、即ち、Psychical Researchを専攻せる心理学者である」といい、「新らしき科学」で扱われるようなS・P・Rの活動をここで挙げるのである。一見不思議な組み合わせだが、伝統的の神学に対し「主観的事実」を強調する新しい神学界の動きと、心理学、特にS・P・Rの活動に代表されるような深層心理や心靈に関する研究の動きとがどうして結び付けられるのか、あるいは先の(科学)と従来の「學術」への懷疑・反発との関係については、それらを生み出した当時の欧米の(科学)いや思想界全体の動向を考慮しない限り見えてこない。

当時の欧米は一八世紀啓蒙主義以降、絶対的威信を誇つてきた科学的実証主義・合理主義に基づく(近代性)とは異なる、まさにそ

これらの前提とする世界観を疑い反発する、新たな〈近代性〉（以降後者の〈近代性〉を指して〈モデルネ〉という）⁽⁵⁾が起こつた時代であった。特に科学が人間も含めたすべてをその研究対象としてゆき、法則的な存在として捉え、機械論的・決定論的世界観の支配下に置かうとした結果、逆にそこに収まりきれない、むしろそれまで切り捨てられてきた情動などの身体性に満ちたものとして、人間の〈意識〉あるいは生物全体の〈生命〉の姿が見出されたのだつた。F・L・バウマーによれば、それは宗教の世界にも波及し、当時宗教学に現われた「新神秘主義は、深層心理学が発達し、精神生活の非理性的側面が評価されたことと時期をおなじくし、（中略）さらにまた、直接体験を重視し、教義を我慢ならないものを感じる態度とも時期をおなじくしていた」という。これはそのまま柳のいう「自由神学」の動きでもあるだろう。また人間の「潜在意識」「心靈」といった目には見えない非合理的な身体活動に着目し、それを〈科学〉的に捉えかえそうとしたS・P・Rの活動も、こうした時代の動向を一つの背景として成立したということは、W・ジェームズ、H・ベルグソンなどといったメンバの顔ぶれを見れば明らかである。特にこの両者は最終的に、対象を外から静的に捉える従来の科学が立脚する分析的で合理主義的な〈知〉に対して、それにとらわれていない、すなわち自他が分離する以前の個人の内的で直接的な「純粹経験」や「純粹持続」を重視し、そこに従来の知識や理性とは異なる、直観なども含めた身体的な〈知〉の領域の新たな可能性を見出し提示していった点で、今見た同時代の動きの中心的存在であつた。そしてこうした動きの中で、従来の〈知〉から逸脱するよ

うな心靈現象や宗教における個人の内的な事実・経験は、〈科学〉の対象と矛盾しないものとなる——というよりも宗教や〈科学〉を越えて当時の欧米思潮全体によつて、むしろ重要視され理想化されていった。柳が〈科学〉への接近により求めた「実証」性も、客観的普遍性といったものではなく、むしろこうした「主観的事実」性だつたのであり、それによつて従来の「學術」的学問体系を相対化しようとしていたと思われる。つまり具体的にいうならば、従来の科学の中で個人の内的事実・経験として抑圧されてきた身体的な〈知〉の領域について、欧米の動きを反映して、存在論的にそれらはいかなる可能性を持ち存在するのか、あるいは認識論的にいかにそれらを知り語り得るかなどと探究していくことが、柳の一連の「科学学習」の目的としてあつたといえるのではないだろうか。

「新らしき科学」では、「精神感応」「透視力」などの心靈現象の実例が数多く挙げられている。が、それらの現象は「吾人が五個の官能によりて単に説明し難き事である」ため、結局「催眠状態」時の「五官以外の感覚」として、「潜在感覚 (subliminal sense)」という一つの身体能力の存在が想定されることになる。つまりそれは不可思議な（今までなら迷信とされてきた）個人の内的事実・経験に基づいて、従来の自然科学（「生理学」）の秩序だつた感覚により合理的に行動するという理性的あるいは機械論的人間観では捉え切れない、神秘的な身体的〈知〉の領域の新たな可能性が、むしろ従来の自然科学の視線の先に発見され提示されているといえよう。実際こ

これらの「知」の領域の可能性は、後にニーチェなどの思想家や藝術家の「生理学」的には「異常」な「天才」の「知」的活動とも結び付けられていく。そして進化論的に「況んや吾等が、将来に於て此潜在せる能力を用ゆ可き時期の来る可きは、最も可能的なる推論である、(中略)げに人類は其心霊の力に於て希望ある発展の未来を有して居る」と、その可能性や将来の文化における重要性が訴えられ、理想化されてゆくのである。

だが「生理学」の視線の先にこうした新しい「知」の領域の可能性が存在論的に指摘される一方で、認識論的には、これらの「知」の領域は「単に物質の法則によつて説明せらる可きものでなく、最終的には「生理学」など「在来の科学」のアプローチでは捉えられないものであるとされる。その際「在来の科学」で捉えられない理由として、実際にそれらの現象が「自然科学の法則を違反せる行為を行ふ」こととともに、人間の思考・行為を「脳の働き」に還元する「在来の科学」では、その「脳の働き」を「衝動」するさらなる「本原」(「動因」)について不問にせざるえないとして、その限界を指摘する。そして直後に「而して心理作用の道より其原因を探らんとするものは此新しき科学である」と「新らしき科学」の有効性を説くのである。こうしたさらなる「動因」を問うというのは、先に見た科学の人間・世界観に反発する欧米の「ヘモデルネ」運動における「生命」論(「生氣論・ヴァイタリズム」)の基本的な発想であり、またこの後の柳の文章にも繰り返し用いられており、そこにも

この運動から柳が受けた影響の一端が窺える(ただし「新らしき科学」についてはロッジの書に該当部分があり、直接はそれによるのだろうか)。

ただ結局「在来の科学」では捉え切れない不可思議な内的事実・経験の可能性をいかにして知り語るか、「新らしき科学」では認識論的には「心理作用」の面から見ていくとしか語られなかった。むしろその存在を指摘することは出来たとしても、「催眠状態」「潜在感覚」という「生理状態」として、これらの「知」の領域の可能性を捉えていた先の部分からも明らかのように、その全体の記述スタンスからいえば結局従来の「生理学」的視線に基づくアプローチでしかなかった(実際この後心霊現象に対しその被験者の頭蓋の容積、体重や力の増減などのデータを載せたりもしている)。その意味で柳がそれらに対する特殊なアプローチの仕方、特に自然という他者の内的事実・経験の理解・記述において学び記したのが、メーテルリンクの「Intelligence des Fleurs」の「梗概」である「花の知能」(「白樺」大正元・8)ではなかっただろうか。ここでもやはり「或人はか、る花の知能を嘲つて其様々な性行も只反復に過ぎないと主張するかも知れない。(中略)然し(花の生命を機械的反復として見ている限り——西山注)来る可き幾年の後に於てかの水を貯へた蘭が四囲の境遇の変化によつて如何なる適応を試みるかを知ることとは出来ない」と、「適応」の「動因」を問えない機械論的「生命」観は否定されるのだが、同時にこの文章で印象的なのは、たとえば次のような自然の捉え方である。

永く人目に触れないで蔭に朽ちて了う花にでも、一つとして叡智に欠けたものはない。(中略) 是等植物の第一の意志は、かゝる地上の束縛を脱れて空間的自由を得たいと云ふ希ひである。之が為に彼等には種々な機械の装置が見られる。例へば種子の散布に対しては発射体の装置が行はれ又風力を応用する飛行機や、虫媒等の機関が存してゐるのである。(中略) 此自由を欲するの意志は、吾々に反抗、勇氣、忍耐、敏捷の大きな実例を与えてゐるのである。

この後にも「アルキメデスの発見」などに植物の構造が譬えられたりと、進化の先に辿り着いた現在の形態やその他の本能的行為をもつて、植物や昆虫をいったん「機械」として眺めつつも、その先にそれらの進化や本能的行為の現象を起こす背景Ⅱ(へ動因)として、「叡智」や「意志」「知能」の存在をも見出す(想定する)。つまり意志的・知的行為と、進化を含めた本能的行為との境界を流動的に用いることで、それらの本能的行為を「心理」的に一つの内的事実・経験として理解し(へ生命)を捉える、機械論とは異なる一つのアプローチが展開されているのであり(それが本当に可能なかはともかくとして)、柳はそこに注目したのではないだろうか。

事実「序」において柳は、この「花の知能」という「論文」を「科学と詩歌とが美はしくも結びついた」ものとし、また作者メーテルリンクを、ロダンと共に「最も多くの自然を理解し人生を味つてゐる人」であり、その思想は「知と愛」が背景を形作つてゐるといふ。この「知」「科学」「理解」に結び付く「愛」あるいは「詩

歌」(Ⅱ「芸術」)「味」うといった言葉は、柳の中で特殊な意味を持つ。それは続く「生命の問題」(「白樺」大正2・9)を見てゆく時、より一層明らかになる。ベルグソンなど当時の欧米のヴァイタリズムを背景に、反機械論・決定論的(へ生命)観を今まで以上に強く打ち出したこの文章でも、「生命の活動、創造は決して予定的計画(Desired Plan)の発表ではない。寧ろ一切の計画を許し得ない程彼の力は自由に溢れてゐる」とし、「自己の無限な力」による「生命の創造的衝動」が称揚される。そしてこの「生命の創造的衝動」もまた、飛躍とともに「偉大な宗教家、哲学者、芸術家の一生と事業」と結び付けられるのであり、「衝動」という表現からも明らかのように、それはやはり理性というよりはむしろ身体的な(へ知)の領域における、創造的可能性を示したものだといえる。

一方、存在論として描き出された「生命」のこのような可能性に対して、認識論的にはやはり「その活動を可能ならしめる何等かの素因(Factor)Ⅱ(へ動因)を問うことで、「是等の現象を支配する素因に就て機械論は何事も物語り得ない」と、「機械論」を批判する(正確にいえばその適応範囲を限定しようとする)。だがここではそれを「機械論によつて生命を味識することは許されない願望である」ともいふ。この「味識」とはどのようなことを意味するのか。これに続けて柳は、具体的に「生命」という内的な事実・経験をとらえるには「歴史的観察」「心理的方法」「哲學的説明」の三つが必要だとし、特に「心理的方法」について「生物が常に生命を中心力としてかく自律的統治を営む事を知る吾々は、其現象の説明に心理

的基礎をおく可きは自明の理と云はねばならない。恐らくは進化の素因に最も重大な関係を持つものは、自然淘汰よりも、異類変化よりも心理的生成の事実にある。(中略) 進化の真意を理解しようと試みるならば、吾々は凡ての生物に内在する生命に就いて之を内部より観察しなければならぬ」という。この「心理的方法」——「進化」など機械論で取られがちの「現象」を「内在する生命に就いて之を内部より観察」すること——こそが、「味識」という身体的な理解をイメージさせる言葉の指す内容(少なくともその一部)であり、柳が一連の「科学学習」の中で見出した、「生命」の内的事実・経験に対する同じく内的で身体的なアプローチの仕方を示しているのではないか。いうなれば「生命」の内的事実・経験は、それを内的・身体的に生きなおすことによつて理解できるのであり、先の「花の知能」の自然物を徹底的に擬人化して捉えるような文章は、それを実現した一つの形といえるのではないだろうか。「生命の問題」ではそうした理解のあり方を、別に次のような事態としても提出している。

心ない者には一個の林檎又は花瓶も何等生きた意味を持ち来さない。然し画家にとつてはそこに深い意味の世界が現はれてくる。彼は画く時その静物に自己を見出すと共に、静物も亦画家の心に生きてくる。両者の相互依存が其深さの極致に達する時、彼等は一個の意味の世界に漂ふてくる。一切の偉大な芸術はかゝる意味の世界の表現に外ならない。(中略) 全自然はかゝる二つのものに漂ふ韻律の現はれである。全宇宙は二つの心の

追ひ慕う愛の園生である。(中略) 吾々が自然に生き、自然が吾々に活きる時、永遠の生命、實在の靈氣に吾々は深く漂ふ。

自分が対象を「活き」、対象が自分の中に「生きてくる」こと、もしくは「愛」という言葉でも表現される、こうした「味識」的理解のあり方を、これに続く部分で柳は「三元の一元論」と呼ぶ。しかも認識論上こういつたアプローチの仕方を、柳は結局科学よりもむしろ芸術行為の中に見出してゆく(もちろん同時に「科学」を広く捉え芸術と一致するともいつているのだが)。つまり芸術や宗教などにおける「知」的活動は、「味識」の対象であると同時に「味識」の方法そのものともなつて来るのだ。そして自らの目標を「恐らくは哲学を出来得る限り、芸術(又は宗教)に接近させやうとする事を一生の努力としたいと思つてゐる」と語るように、それは柳自身の哲学、というより「知」的活動すべてにおいて、目指されるべきスタンスとなつていつた。後年の柳の論文を論ずるにも、まずは以上のような欧米思想から導き出された、客観的普遍性よりも内的で身体的な事実・経験の「味識」を重視する、彼のスタンスを踏まえた上で行わなければならないだろう。

2. 科学を取り込む神学的世界観——受容と恣意性——

だが柳の見出したこうしたスタンスの拠りどころである、身体的な「知」の領域の新たななる可能性とは、果して本当に「無限」の可能性をもつて見出されていたのだろうか。完全に従来の科学的な「知」から独立して存在し得ていたのだろうか。たとえば先に「新ら

しき科学」で見た、「在来の科学」では捉えることの出来ないと思われる「脳の働き」を「衝動」する（動因）とは、実は結論として提示される次のような発想に基づく言葉でもなかったか。

而して心霊と物質とは其根源を一にせる両面の世界である、物質を構成せる力と人生を支配せる力とは、かくて形而上学的意義に於て等しく同一の宇宙が実体より出でたるものである、而してか、る実体の一部たる吾等が心霊を外界に表現せんが爲に物質は存在するのである、而して自然界に於ける法則とは、要するに宇宙が意志そのものに外ならぬ、かの微細なる原子にもかゝる意志は現はれて居る、かの宏大なる星の運行にもかゝる意志は流れて居る、一切のものは宇宙が心霊の影像である、『自然は内在せる神が出現の啓示である』と云つたロッヂの言葉には深き真理がある。

こうした発想からするならば「物質」現象の（動因）は、人間の「心霊」によるのではなく、むしろ最終的にはその先にある、人間の「心霊」もその「実体」の一部とされる「宇宙の意志」もしくは汎神論的「神」の力ということにならう。つまりここで意志する主体は最終的には「宇宙」や「神」なのであり、しかもその「宇宙の意志」こそが「自然界に於ける法則」でもあるとされているように、それは明らかに科学的な（知）同様、何らかの合理性や不変的法則性を有するものであることが前提とされている。つまり従来の科学的な（知）の枠組は、ここで神学的な観念論に姿を変えつつ生き続けているのであり、その結果人間を含む自然の「心霊」や（生

命）も、独自の意志を持ち偶然性を孕む「無限」の可能性を与えられた存在ではなく、「宇宙」や「神」の「意志」に基づく（従つた）と今は捉えられなくとも最終的には法則性に還元され得る）合理的存在として想定されることになるのである。先に見た心霊現象と結び付けられた「天才」の行爲も、一方で「天啓」＝「宇宙」や「神」の「意志」を知りそれに従つた行爲として整理されており、その「天才」との結び付けにより心霊現象に導入された進化論的発想も、結局は「無限」の可能性に向かつて開かれていくというよりは、むしろ固定的な理想状態＝合理・法則的な「宇宙の意志」を常に反映する人間像を未来に予測し、また現在もそこに向かう過程として還元してしまふものだといえる。何れにしろ従来の科学の機械論的スタンスと、決定論ということでは連続してしまう神学的眼差しの下、（生命）自体の主體的意志を欠いた人間・自然像が、そこで理想化され目的論的に提示されているといえよう。

さらに続くロシアの生物学者兼医学者E・メチニコフの「*The Nature of Man*」と「*The Prolongation of Life—Optimistic Studies*」の思想を紹介した「メチニコフの科学的的人生観」では、先述したように「死の問題」に対し科学が答を出そうというスタンスがとられている。が、それもすぐに「死の問題も人性を離れては存在しない」「人性の問題は要するに人性に存する調和、不調和の問題が基になる」と焦点がずらされ、結局「自己の生活と外界との調和を意味する」とされる——すなわち進化論をやはり背景とした「調和」という概念をめぐる論は展開する。具体的には人間が「調和」に

よつて最終的に辿り着く、「一切の恐怖も不安もない、宛ら眠るが如き自然の死」に至らしめる、「死の本能」なる潜在的本能を見出し（想定し）、「かゝる死の本能、自然死とは吾々が人性的の根底に与へられたる本然の性である」と理想化する反面、現在の「病理的」「老衰」を起こす人間の「不調和な性を除く事を企てねばならぬ」と目的論化する——概括すればこのような主旨の文章である。

だがこの文章は問題も多い。その一つとして今述べたところからも窺えるように、「調和」や「自然」「本然の性」という概念（そうしたものが何を基準・根拠にして見出し得るのかという、設定自体の問題性が既にそこにはあるのだが）が、初めは外界からの影響の結果として、機械論的に起る進化として提出されていたにもかかわらず、いつの間にか意図的に起すものとして目的論化してしまひもすることが挙げられる。つまり「花の知能」などでも見た機械論と目的論の混交、すなわち「生命」の本能的行為と意志的行為の流動化——これこそが「科学学習」の中で柳が当時の欧米思想から学んだ一つの可能性であったと同時に、一方で後に3で見るような問題を引き起こす根幹ともなった発想法だといえよう——が、やはりここでも起つていたのである。それによりこの文章では単に外的環境に應じて変化するものとしてあつたはずの「調和」が、いつの間にかそれ自体固定的な理想の状態として、しかもそれが「自然」であるかのように無批判に目的化されてゆく反面、時にそのような目的論も結局今見た流動化の中で逆に、あたかも人間の中に備わっているとされる「自然」に即していれば、それこそ「自然」と「調和」という

理想の状態に至るといった安易なものとしても語られてしまふ。特にそのロジックが「個体」だけのことでなく「社会」の問題にまで用いられた時、「社会」は「自然」とよくなるものとして想定され、そこでは実際の社会問題は捨象され、問題解決のための具体的な検討も必要でなくなる（こうした社会観は後に見るように柳の「朝鮮」に関する言説を予想させるに充分である）。何れにしろ「調和」という辿り着くべき理想の状態は既に「自然」と決められているのであり、現在をそこに向かう過程として還元してしまふことも含めて、結局生物の主体性を認めない決定論的「生命」観がそこにあるといえよう。実際この文章ではメチニコフの物質一元論的立場を反映して「神」や「宇宙の意志」といった言葉こそ使われていなかったが、続く「花の知能」では「メチニコフの科学的人生観」に出てきたのと全く同じ「蘭」の具体例から、今度は「調和」という概念がやはり「新らしき科学」同様、「神の不可知の技術」「自然の意志」「宇宙の意志」といったものにまで結び付けられている。しかもこれらの大きな「意志」は、やはり「彼等（生物たち——西山注）を刺激し支配する法則」と言い換えられるものとして想定されており、その結果「調和」と呼ばれる状態もそれらの大きな「意志」の下、「法則」的に既にデザインされているものとして、また生物それぞれの「知能」も、結局それらに従ういわば主体性の欠如したものとして扱われてもいるのである。

最後に「生命の問題」で主張されていた「二元的一元論」についても、もう一度見てみよう。

自然に於ける相關の活動とは凡てか、一個の意味を得るが為の活動である。(中略) 換言すれば、一つを得んが為に二面を要し、二面の相求むるは一つを捕へんが為である。かくて二元論一元論 (Dualistic Monism) の言葉を用ひる事を試みたい。(中略) 茲に二元とは現象界に流れる原理を指示し、一元とは其背景を形造る意味の世界即ち自分の認める實在の世界を表示するのである。

ここでいっていることからすれば、「二元」である(対象とそれを見る主体の存在する)「現象界に流れる原理」の「背景」に、「一元」の「實在の世界」が存在するのだが、柳の場合それを「意味の世界」であるともいう。すなわちここで示された「二元論一元論」とは、先に見たようにただ内側から対象を「味識」するだけではなく、それが到達すべき「一個の意味」という、いわばイデア的な「真理」の世界が前もって想定されているのであり、そのために「二元」が存在するとされる。しかもそれがやはり「深い自然の意志」の下に求められるべきものとして決められていると、別の部分では言われており、結果「生物進化の意義は実にかゝる意味の世實在の世に融れるが為である」といった、本能と意志を流動化した目的論的進化論がここでも登場する。こうした論理により個人の主体は「自然の意志」の下に溶解し透明化され、また前述の「科学学習」の中で見出された、身体的な「知」の領域の「自由」で「無限」の可能性を持つた「生命の創造的衝動」も、むしろ自らの内の「自然」性として見出され(想定され)、それに身を委ねることこそより大きな「自

然の意志」に従うことだとして——すなわち主体の溶解し透明化をもたらず手段として結局機能することとなる。その意味では「自然の意志」の下、主体の自由を許さない、自らが否定していた機械論と限りなく近い決定論的「生命」観に陥ってしまう。

何故このようなことが起るのか。上山安敏氏(注5参照)によれば「一八八〇年代から一九一〇年代にかけて」の「モデルネ」は、「運動の内部で絶えず反転しながら展開していくため、どんどん自己転回していく」構造を持ち、「科学主義を濾過しながら生、体験、感情、感覚を通じて神秘主義にまで行きつく」、すなわち「自然科学からの宇宙論的神秘主義による新しい宗教の模索」でもあった。その結果「ニーチェの反キリスト思想と呼応」するほどの多方向性を包含し展開することにもなるのだが、本来それは「非科学でも反科学でもない」「科学の場でなされたのである」。つまり「心靈」「生命」あるいは「世界」の「無限」「神秘」性は、「新らしき科学」でも見たように、科学的な決定論的視線の先に見出されたものであったわけで、それらを科学の延長線上に見出すことと、最終的にそこに「宇宙」や「自然」の「意志」などといった、宗教的な觀念論として捉えかえした決定論的合理性・法則性を想定することとは、科学と両立する「新しい宗教の模索」でもあった(モデルネ)運動当時の感覚からすれば、必ずしも矛盾ではなかったといえよう。実際先述したパウマーによれば(注6参照)、S・P・Rの中でもF・マイヤーズなどは「通常の意味においてはではないにしても、宗教の一種の復活を望んでいた」結果、心靈学に向かったとさ

れる。そして日本の心靈学書でもそうした欧米の動向に強く影響を受けたものは、やはり柳の「新らしき科学」と同じように心靈学を宗教的な観念論として論じているのである（もちろん柳の場合そこから最終的には心靈学のような科学的外見を脱ぎ捨ててゆくのだが）。

だが反面そうした様々な方向性の混在する（モデルネ）の運動から、最終的に大きな「意志」による決定論的立場を選んだ柳の意志がそこに働いているのも確かだ。目的論的進化論を「機械的な因果律の場合と同様、（すべては与えられている）」という結論に行きつくと否定し、むしろ「方向感覚喪失」の「開放性」を「歓喜していた」（パウマー前掲書）ベルグソンや、「超人的な意識」ないし「神はあるけれども、それは力か知識か、あるいはその両方において有限である」として、どんな宗教や自然科学もすべて人間と世界の関係性から生れるに過ぎないと多元的世界観に徹したジェームズ、さらにはニーチェなどといった（モデルネ）運動を象徴する者たちと、柳は最終的に明らかに方向性を異にする。さらにいえば「新らしき科学」で初めて提示された、宗教的で決定論的なこの（生命）観・世界観ではあるが、実は同書が主によったとする二書のうちでも、ロンブローゾの書では、科学的な意味での法則性は前提にしているものの、「宇宙の意志」などといったすべての「純粹の実体のない靈魂（是我々の想像し得ざる者である）を弁護しようと思はない」ともいっており、そこに既に柳の恣意的選択（もしくは理解度の問題）が窺えるのである。

それはまた柳の欧米（モデルネ）運動受容の根底に、結局は何ら

かの絶対性に触れるような宗教的事実・経験を探るといった動機が常に存在したことを意味するのであろう。先に見たように柳は自由神学の研究からS・P・Rの活動やそれを含めた当時の欧米思想界全体の動向に注目したのであったし、事実文中でも「今の吾々に再び宗教的経験を与ふるものがあるなら、それは科学によつて立証せられたる宇宙の神秘である」（「科学と人生」「序」より）などと、「科学学習」の目的が新しい宗教の模索にあることを述べていた。またさらにその背後には、柳の若い頃に起った、日清日露戦争間からの、個人主義的で精神修養主義的な宗教熱の影響を見て取ることもできよう。生方敏郎が「日清戦争後には世間一帯の考えが精神的に趨り、宗教道德問題が世に喧しかつた。（中略）その時分の学生は、宗教問題、倫理問題に没頭していた」と回想するように、明治三〇、四〇年代には、それまで国家的目標としてあった富国強兵がある程度達成され、社会整備も進む中で、逆に国家・社会への無関心といった社会的弛緩状態が起り、それと並行して国家から分離した個人の内面の「修養」が重視され、宗教熱が高まったとされる。柳にも日露戦争を境にして国家主義からの離脱が見られることは夙に指摘されているが、それは同時にやはり宗教への眼差しを伴うものであった。その頃学習院高等科に入学したばかりの柳は、次のような文章を書いている。

噫人は憐れむ可き卑しむ可き、外界の敵を殺戮して、尚誇となし、世は巨額の黄金と、高貴なる位爵とを以て其勞に酬ゆ。

あ、さらば、赦す可からざる憎む可き内界の敵を征服したる

時、人は何ぞ、そを名譽となさざる。かくて得たる神の是認、聖靈の慰安、あ、そは、至高至極の祝福にあらざして何ぞや。吾れ等は、カイザルのものを得んが為に争ふ可からず、神のものを返さんが為に戦ふ可き也。

(「聖なる勇士」、『学習院輔仁会雑誌』明治41・6)。

ここに同時代のパラダイムとともに、何らかの絶対性に触れるような宗教的事実、経験の探究に向かつていった、柳の一つの精神的出自を見て取ることも出来よう。そしてそれこそが「科学」を学びつつも、最終的にそこから宗教的な大きな「意志」に基づく決定論的(「生命」観や世界観を選択していった(もしくはそのようにしか理解できなかった)、柳の根底にあったものだと思われる。

この後柳は実際にその学んだところを宗教——主に東洋の、それもやはり言葉による合理性を否定し身体的な理解を求める、「不立文字」「不言之教」を中心概念とする禅や老荘思想などの理解に生かすことになる。たとえば『宗教とその真理』(大正8・2、叢文閣)ではそれらの東洋思想の下、「即如」や「無」という概念が提示される。それらは明らかにジュームズやベルグソンなどから学んだと思われるところもある反面、やはりその先で「神」の下での主体の溶解＝透明化を促すものであり、結局そこで求められているのは「如何にして何等の独断を加へず神の認識を得べきであるか」であった。つまりそこでは「相対的断案が否定されて後現はれる」「究竟の真理」としての「宗教的真理」といった(以上「序」からの引用)、やはり先の「二元的一元論」を思わせるような決定論的世

界観が前提とされており、(モデルネ)運動から学んだ身体的な(知)の領域の可能性も、「即如」や「無」という決定論的世界像に触れるための手段として焼き直されるのである。同時代の(科学)の動向を受けながら成立した欧米の(モデルネ)運動は、こうして柳の中で東洋の伝統的な宗教の再評価にまで繋がってゆく。このような恣意性も含めた柳の(モデルネ)運動の受容は、どのような意味を持つのか。彼のさらに後年の活動とともに見てゆこう。

3. 初期「科学学習」が持つ意味

——後年の活動を射程に入れて——

近年のポスト・コロナル研究の盛んな中、柳の「朝鮮」に関する言説も改めて注目されてきた。一九一〇年の日本による韓国併合当時において「朝鮮」の独立を訴える柳の正当性、また実際その地に赴き人々の日本に対する怒りを直接受け止め、なおかつその地で行った様々な活動における彼の真摯な態度は、現在においてもやはり評価されるべきであろう。また柳の言説は当時の過酷な日本統治下の「朝鮮」においては、消極的で抽象的な形ではありながらも、一部の「朝鮮」の人々に宗教的な慰め、あるいは生きる希望を齎すことにすらなったかもしれない。だが一方で既に多くの指摘があるように、彼の「朝鮮」をめぐる言説には、その上でなお批判されるべき要素や限界のあることも否めない。そういった言説を発表してしまった柳の責任は、これからも常に問われ続けなければならないだろう。が、そのことが確認された今、さらにその柳の言説を生み

出す背景にあったものを見てゆくことも、また必要ではないだろうか。

たとえば柳の「朝鮮」に関する言説では、政治の場面で「情愛」などのヒューマニズムに訴え、具体的な国際関係を「個人と個人」「朝鮮の友に贈る書」大正9・6「改造」——以下「友」の問題に還元してしまふこと、特にその際「朝鮮」の芸術を称揚し、そこからそれを作る民族の独立性を認めるという書き方も見られ、そうした彼の言説のオリエンタリズム的要素が問題化されてきた。ならばそうした柳の言説が立脚しているものは何なのか。次のような文章を見る限り、実は多くの部分でやはり初期の「科学学習」の中で学んできたことが影響しているように思われる。

余はしばしば想ふのであるが、或国の者が他国を理解する最も深い道は、科学や政治上の知識ではなく、宗教や芸術的な内面の理解であると思ふ。云ひ換へれば経済や法律の知識が吾々を他の国の心へ導くのではなくして、純な情愛に基づく理解が最も深くその国を内より味はしめるのであると考へてゐる。(中略) 芸術は実に鋭い直観の理解であるが、科学や政治は却つて屢々独断に充ちた不純な理解であつた。特に他人の心に触れ逢はうとする微妙な契機に対して、知よりも情こそ深い理解の道であらう。

(「朝鮮を想ふ」大正8・5・20〜4「読売新聞」——以下「想」)
ここでいう「科学や政治の知識」⁽²²⁾に対する「宗教や芸術」、すなわち「知よりも情」がもたらす「内面」の「直観」による「深い理

解」こそ、先に見た内的事実・経験に対する、やはり内的で身体的な「知」の領域によるアプローチであることは明らかであろう。初期「科学学習」の中で、人間や生物の「内面」を表すものとして、あるいはそれを認識する手段として召喚された芸術や宗教的行為が、今「他国」すなわち「朝鮮」の人々を理解しようとする際にも持ち出されるのである。実際この他にも「想」では「只ひとり宗教若しくは芸術的理解のみが人の心を内より味ひ、味はれたものに無限の愛を起こすのである」といわれ、また「友」でも「芸術に於て人は争ひを知らないのである。互に吾れを忘れるのである。他の心に活きる吾れのみがあるのである。美は愛である。わけても朝鮮の民族芸術はかゝる情の芸術ではないか」と、内的・身体的な理解からその芸術や民族の性質までもが断定される。つまり初期の「科学学習」⁽²³⁾「欧米へモデルネ」運動受容の中で見出した、内的で身体的な「知」の領域による理解という発想こそが、柳に「朝鮮」という「他国」の人々の経験への、「真の理解」(「友」)を可能にさせている(あるいはそう思わせている)のであり、逆から言えば余りに安易にこれを前提にするがゆえに、時に「朝鮮がいつも保有する深さと神秘」(「友」)を見出しつつも、結局「朝鮮」の他者性が見失われていってしまい、外的な現実につけていっている問題が捨象されることになり、今では悪名の高くなつた「朝鮮」芸術に対する「悲哀の美」論なども生れてくるのである。

そして何よりも、今見たような「情愛」による「真の理解」が日本と「朝鮮」の間で可能であり、それにより両国間の「一致」「真

の愛や平和」が必ず訪れると断言できるのは、やはりそれが人間の「本能」であり、「人間のうちに潜む深い性質」「人間の本質」であり、最終的にはそれらにより人間は「自然の意志」（以上「友」）に基づくものであるといった、おなじみの決定論的人間・世界観がそこに存在しているからである。

此世に暗黒の時が来ようとも、それは人間の本質をも奪う事は出来ぬ。自然はいつも甦る力を堅く支へてゐる。（中略）私は今の状態を自然なものとは想はない。亦此不幸な関係が永続して、ものだとは思はない。不自然なものが淘汰を受けるのは此の世の固い理法である。（中略）私は未来の日本を信じてゐる。情の日本を疑はない。（中略）貴方がたも私と共にそれを信じてほしい。人間そのもの、本質を信じる事によつて、再び希望を私と共に甦らせてほしい。

（友）

日本と「朝鮮」の「真の愛や平和」が成立する両国の「一致」点は、獲得すべき理想・目的としてあると同時に、このように「法的」的機械・決定論的「自然（の意志）」によりいつか「自然」と辿り着く、既に絶対的に決まったものとして描かれている。つまりここでもまた初期の言説の中で多く見られた意志と本能の流動化が繰り返されているのであり、その流動化の中で見出される目的論的／機械・決定論的人間観の下に、日本と「朝鮮」の関係を捉えるがゆえに、それは抽象的で予定調和的な見解にしかならない。両国の「一致」は目的としては存在しても、具体的に解決を模索する道としては既に最初から閉ざされてしまっている。換言すればたとえ日

本の非を認めたとしても、最終的に「自然（の意志）」の下に主体を他者のそれともども溶解し透明化させた瞬間に、その日本に属していることで問われるはずの主体個人の倫理的責任は、自らのこととして問題化されることなく終わってしまうのである。

柳が「想」や「友」を書いていた当時、「朝鮮」では三・一独立運動とそれに対する激しい弾圧が起っていたが、日本の当局はこれを契機に内外から批判の多かった、それまでの「朝鮮」に対する武断政治に代わる新しい支配方法を模索することになる。大正八年八月「朝鮮」総督が齋藤実にかわり、政務総督には学者でもある水野錬太郎が就くと、それまでの弾圧から一転して合法的闘争や合法的新聞の認可、あるいは大正十一年六月の朝鮮総督府美術展創設などに見られる芸術奨励などの、いわゆる文化政治を打ち出す。だがそれは独立運動の指導者であるエリート層を統治に巻き込むことで運動を分断し、他方旧来の自国（日本）中心的な価値観に基づく文化・社会的差別を温存するものでもあった。芸術を通じた「直観」＝身体的な（へ知）の領域における「内面」の（逆に言えば外的現実にとらわれない）理解こそ必要である、あるいはそのような理解として両国の間の「真の愛と平和」は、「自然の意志」において必然的に（主体個人の判断の問題ではなく）起るという、支配の現実や支配者の主体を透明化させる——それは意図的ではないにしろ結果的に隠蔽することにもなる——柳の論理は、彼自身「教化」のつもりはなかったとしても、それらを「貴方がたも私と共にそれを信じてほしい。人間そのもの、本質を信じる事によつて、再び希望を私と共に

に魅らせてほしい」と「朝鮮」の側にも要請してしまった時、結局こうした文化政治の正当性を保証し、「朝鮮」側のラディカルな政治闘争を抑えつけるものとして機能してしまつたことは想像に難くない。実際「民族的な独立の意志を弱化させ、完全な民族の解放とはほど遠い、植民地化の自治に満足するように民衆を誤導した」(崔沃子「日帝下記者の運動の展開」一九七七・秋「創作と批評」といわれる「東亜日報」や、柳自身が総督府の「御用新聞」と認める「京城日報」に、これらの論理が見られる「想」や「友」を初めとする柳の言説は、次々とリアルタイムで翻訳・紹介されてゆく。

そして「朝鮮」の芸術への関心に端を発した、柳の日本における民芸運動に関しても、その芸術Ⅱ民芸品に対するスタンスは基本的には変らない。確かに民芸の中に新たな美のありようを発見し提示したことはある程度評価されるべきだろうが、だがそれを理解するために必要なのは、やはり「直観」という身体的な「知」の領域なのであった。結局「民衆は彼等自らに於ては創意を有たない。併し一度自然と結合する時、驚くべき創造が彼等の手に握られてくる。彼等は彼等の小に於て器を作るのではなく、自然の大自然が彼等に器を作らせてゐるのである」(「工芸の道」昭和2・3「正しき工芸」というように、その美が生れるのは「自然」の「大」きな意志によるのだとして、柳は創作主体としての工人の意志をやはり認めない。当然このような民芸観には「一個人の直観がそのまま人類共通の直観」と言い得るだろうか)「民芸理論の中に残つたのは、無意識・無心・無作為のデクノボーのような放心状態の工人・民衆の姿であつ

た」という批判も出てくるが、それらの一因にはやはり欧米思想から学んだ身体的な「知」の領域への無条件の信頼、主体の透明化された人間像の過剰な理想化・目的化などが見出せるだろう。

このように柳の初期の「科学学習」——当時の欧米の「モデルネ」運動受容が持つた意味は大きい。後年の柳の東洋の文化に対する評価の根底には、既に指摘されてきた「自然」「素朴」といった「非文明」性を見出し喜ぶ視線(ただそれもまた欧米のこうした思想の受容から起つたともいえるのであり、また東洋に限らず西洋のブレイクや後期印象派などにも用いられるものでもある)がそこに働いているということだけでなく、その視線の根拠である主体の透明化までもが、その恣意性も含めた受容により起つているという、まさにその点においてオリエンタリズムなのである。ただここで考えねばならないのは、こうした当時の欧米思想の影響を受けたのは、細かい差異はあるにしろ、何も柳一人に限らないことである。

直観や本能など自らの内なる「自然」でもある、身体的な「知」の領域に基づく活動により、大きな「意志」に近づき身を委ねるといふ、主体を透明化させる論理は、実のところ大枠では一人一人の個性の可能性を重視する(だが結局それが大きな「意志」との一体化への憧れと同義になってしまう傾向のある)、「白樺」派同人の多くが共有していたものである。その「白樺」的論理が同人の間で確立し共有されてゆく際の理論的支柱として、柳の欧米思想受容の果たした役割は大きかったと思われる。(26) また「白樺」派の他でも、ベルグソンやニーチェの影響ということでいえば、それはほぼ文壇及び思想界

全体に互るものである。中でも特に柳同様当時の欧米思想の影響を受けてつ、それを禪的な発想の下に捉え返していった者としては、ジエームズやベルグソンの影響を受けつともそこから独自の「純粹経験」観を提示した西田幾多郎や、そうした西田の「モデルネ」運動受容の橋渡し役でもあり、自らもスウェーデンボルグなどの神秘家やジエームズなどの心理学との比較対照から禪を分析した鈴木大拙などが挙げられる。いうまでもなく彼等と柳との間には受容における様々な差異があるのだが、彼等が「モデルネ」の思想と禪を結び付けて人間の実存を捉えようとする中で、「絶対矛盾的自己」（西田）などむしろ明確な形で主体の所在を問いつらいような人間像を、あるいは「純粹経験」（西田）や「即非の論理」の下の「靈性的自覚」（大拙——ただし彼の場合さらに「日本的靈性」まで見出しにくが）といった、やはり理性とは異なる身体的な「知」の領域における人間の普遍性を提示することになったのは、同時代の一つのパラダイムとして注目してよいように思われる。それは柳のように学問の対象としての宗教的世界観を、そのまま政治の場目的論化して持ち込むことはなかったにしろ、やはり主体を透明化させる傾向（それは他者性の喪失にも繋がる）がそこには存在するのではないか。⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾柳も含めて西田・鈴木自身は戦争に対して批判的だったとしても、このような彼等の参加し作り上げていった同時代のパラダイムの中から、後に第二次大戦を引き起こすことになる日本の他国への侵略・支配行為を正当化するイデオログたちが多く現われたのも事実である。たとえば「白樺」派の中心的人物武者小路実篤において

は、『大東亜戦争私感』（昭和17・5、河出書房）で明らかのように、「人類の意志」（それは武者小路の中で「自然の意志」の一部とされる）は日本の侵略・支配行為を正当化するロジックとなっていた。また西田の関連でいえば、戦時中にその弟子の多くがファシズムに与してしまつたことはよく知られるところだが、⁽²⁸⁾文学者でいえば、直接の弟子ではないにしろ西田の思想を恣意的に受容し、「直観」に基づき戦中「日本主義」を標榜するまでになった、同じく「白樺」派の作家倉田百三の例などが挙げられる。⁽³⁰⁾

彼等が誤つた道に進んだ根底にあったのは、自らの身体的な「知」の領域の可能性を、それに従うことこそ人間の「自然」「本来」などとといった形で無条件に特権化し、そのまま政治的な現場にまで持ち込んでしまふ、それらへの安易で過剰なまでの期待であり目的論化であつた。その意味で、日本の帝国主義の生成という視点においても、日本における欧米「モデルネ」運動——特にその中で新たな可能性を求めて展開した、身体的な「知」の領域への探究——の受容について、あるいはその受容において強く影響を及ぼした当時の日本の宗教熱の中で起つていたことについて、柳に限らず改めて検討してゆることが、様々な国際的危機と現代が隣合わせにある限り、重要な課題として残されているのではなからうか。

注(一) 鶴見俊輔は「柳宗悦」（一九七六・一〇、平凡社）で、「科学と人生」を「科学学習ノート」と表現している。ただ本論ではその後の柳の言説と「科学と人生」を一つの思想過程として見ているため、それ

- らに対してもこの言葉を用いることとする。
- (2) 本論における柳の言説は『柳宗悦全集』(一九八一・八(第一巻)、筑摩書房)による。
- (3) 英国心霊現象研究会(S・P・R)は、テレパシーや催眠術、霊媒による心霊現象、幽霊屋敷等を科学的に検討することを目的として、一八八二年ロンドンに創立された。詳しくは「柳廣孝」(ごっくりさん)と「千里眼」(一九九四・八、講談社)等参照。
- (4) 原題は前者が「After Death-What?」、後者が「The Survival of Man」。本論では前者は「死後の生命」(中村古映訳、一九二六・一〇、内田老鶴圃)、後者は「死後の生存」(高橋五郎訳、一九一七・四、女黄社)を参照。また当時心霊学は新たな科学の分野として期待されており、特に「新らしき科学」が出た明治43年は千里眼騒動最中で、新聞に「新らしき科学」という言葉が繰返し現われた時期であった(前注「柳書等参照」)。
- (5) «モデルネ»という表現は、上山安敏「神話と科学 ヨーロッパ知識社会 世紀末〜20世紀」(一九八四・五、岩波書店)による。
- (6) F・L・パウマー「近現代ヨーロッパの思想——その全体像」(一九九二・七、大修館書店)。
- (7) 柳は「新らしき科学」を書いたあたりではまだベルグソンには触れていず、この時点ではむしろジェームズが強い影響を与えていたと思われる(中見真理「柳宗悦とその時代」(一)「清泉女子大学人文科学研究所紀要」一九九六・四参照)。同氏「柳宗悦とその時代」(三)(同紀要一九九八・四)の注(77)ではジェームズに関する柳の蔵書に触れている。またベルグソンに関しては日本民藝館所蔵の目録によれば、最終的に「時間と自由」「物質と記憶」「形而上学入門」「創造的進化」の英訳本を蔵書していたとされる。
- (8) 大正二年三月四日付中島兼子宛書簡より。
- (9) 本論では「The Nature of Man」に関しては八杉龍一訳「人の生と死——メチニコフの人性論」(抄訳、一九九一・三、新水社)と、中瀬古六郎・吉村大次郎共訳「人性論」(全訳、一九一〇・一一、大日本協会)を参照。「The Prolongation of Life—Optimistic Studies」の方は柳の巻末に示した英訳本に当たった。
- (10) こうした本能と意志の流動化は柳に限らず、当時のニーチェやベルグソン受容の中ではよく見られる傾向である(たとえば広瀬哲士「生の進化」、「三田文学」大正元・1等)。確かにニーチェやベルグソンの思想自体の中にも、そうした流動化が存在するのだが、ただそれらは飽くまで一つの認識・存在論的可能性として、すなわち同時代の科学実証主義あるいは合理主義の人間・世界観に対するアンチテーゼとして提出されたのであり、またその状況の中でこそ有効に機能したのであった。が、日本で受容される際には多くの場合その背景は見失われてしまい、認識・存在論的可能性として提出された彼等の思想は、安易にそのまま実践論として過剰な道徳的正当性まで帯びて目的論化し、流通してしまったのだった。
- (11) 「メチニコフの科学的人生観」では、最終章において「生物史上の事実よりして」「個性の発展」と「社会生活の進化」とが一致するとし、「人間の生命が充実を来す時、悪は自ら消滅せねばならない」という。そこでは生物学的「個体の犠牲」を「社会学」「社会主義」というような「個人の犠牲」という事象と等価に置くような、生物学的視線による人間社会の単純化が見られ、具体的な社会はそこに存在しない。また実はメチニコフ自身はむしろ「真の存在目的に向かって進歩していくにつれ、人びとと個人の自由をいちじるし程度に放棄しなればならないだろう」といつており(以上注9の八杉訳より)、このあたり柳の(恐らく「白樺」の共通見解を意識しての)恣意的解釈が入っているかと思われる。明治四二年八月二日付志賀直哉宛書簡には「メチニコフの考へに従へば、吾々の今迄想像して居る事が根本的に駄目になる事が多い」と、柳はもらしている。
- (12) ただし「透明化」といっても、それはもちろん完全な「透明」ではありえない。自らの主体を隠蔽、あるいはそれと向き合うことを回避

しようとするまでの意図はないにしろ、大きな「意志」の下に自ら主体の個別性を溶解させようとしており、見方を変えればそれは主体を「透明化」させようとしているともいえるため、その主体の欲望を「主体を透明化させるための論理」と題名で表現した。

- (13) たとえば桑原俊郎『精神靈動 第一編 催眠術』（明治36・9 開発社）、高橋五郎『新哲学の曙光』（明治43・11 前川文栄閣）等。特に後者は「新らしき科学」とほぼ同時期に出ており、当時話題となっていたラジウム放射能の発見を霊の存在証明に使う等、「新らしき科学」との共通点も多い。こうした当時の日本の心靈学受容は「柳氏前掲書（注3）他、同氏『催眠術の日本近代』（一九九七・一一 青弓社）等参照。

- (14) 「創造的進化」（松浪信三郎他訳『ベルグソン全集』第四巻、一九九三・一、白水社）

- (15) 「多元的宇宙」（吉田夏彦訳『ウイリアム・ジェームズ著作集』第六巻、一九六一・五、日本教文館）

- (16) しかもロτζジの書においても、そうした大きな「意志」の想定を自らの見解として提出するのを、極力避けているようにも見える。むしろこの柳の選択に直接的に影響を及ぼし得た者を強いて挙げるならば、メーテルリンク（柳は既に明治四一年頃に読んでいた）、あるいは本論2の冒頭で挙げた引用文末尾の、汎神論的発想を提示した人物として出てきた「ロツジ」R・ロツツエ等のドイツ観念論哲学者たち、さらには先の「近世に於ける基督神学の特徴」で取材した「自由神学者」たちを見出すべきかもしれない。

- (17) 「明治大正見聞史」（一九七八・一〇、ちくま文庫）より。また以下の当時の宗教熱に関しては筒井清忠「近代日本の教養主義と修養主義——その成立過程の考察——」（『思想』一九九二・二）等参照。

- (18) 『柳宗悦全集』第一巻「解説」参照。また中見前掲書（一）（注7）でもこうした当時の雰囲気と柳の思想形成との関連から、彼を「日露戦後世代」と位置づける。先に見た柳の「モデルネ」の〈科

学〉への接近の起点にある伝統的「学術」への懐疑・反発も、こうした同時代の風潮を反映したものと見ることも出来るよう。

- (19) 今まであまり取りあげられてこなかったが、柳のこうした精神的出自においては、生方も当時の宗教熱の中心人物として挙げている、後期高山樗牛の影響が強かったと私は考える。末木文美士氏によれば、この時期の「樗牛の個人主義（中略）単純に個人主義と呼ぶことは困難である。むしろ個人をも超える絶対的真理の発見」がそこに窺われるという（「個」の自立は可能か——高山樗牛の「文章」二〇〇一・一一）。引用した「聖なる勇士」も含め柳最初期の文章には、たとえば「吾が疑ひ」（『学習院輔仁会雑誌』明治39・3）では自らの思想を言い表すものとして、樗牛の「吾が好む文章」（『太陽』明治35・2）や「偽詩人とは何ぞ」（『時代瞥見』明治31・12、博文館）の言葉が引用されていたり、また「革命の画家」（注9）でも樗牛の「美的生活を論ず」（『太陽』明治34・8）の表現を用いて後期印象派を解釈している部分があったりし、いずれもその思想的影響を見て取ることが出来る（もちろん樗牛の場合そこから〈科学〉に向かうことはないが）。また樗牛の他にも考えられるところでは柳の学習院時代の教師である鈴木大拙の影響、あるいは「白樺」同人間でのドイツ語文獻を通じて得たドイツ観念論的世界観の共有等、様々な要素が絡まり合っていたと思われる。

- (20) 当時の国名からすれば「韓国」（または「大韓（帝國）」）とすべきだろうが、本論では柳も含めて日本において一般的に使われていた「朝鮮」という呼び名をあえて用いることとする。

- (21) 柳宗悦の言説に対しての批判は、そこに日本の「植民地史観」見出した有名な崔夏林「柳の韓国美術観」（『展望』一九七六・七）等を初めとして、既に数多く（特に韓国側から）見られる（『柳宗悦全集』第6巻解説並びに高崎宗司『『妄言』の原形』一九九六・五、木犀社等参照）。近年では柄谷行人「美学の効用——『オリエンタリズム』以後」（『批評空間』Ⅱ一九九七・七）、朴裕河「文化」の政治学——

柳宗悦の近代韓国自己構成をめぐる——」(『日本近代文学』二〇〇一・五)等。

(22) ここでの「科学」は、柳がかつて学んだ「科学」がむしろ否定していた「在来の科学」を指しているのだろう。事実柳は別の場所でも「一國の心理を理解しようと思ふならば、芸術を理解するにしくはない。美術史家は必然的に心理学者である。(中略)私も出来得る事なら此一篇に於て、心を洞察し得るか、る心理学者でありたいのである」という(『朝鮮の美術』、「新潮」大正11・1)。ここにも柳の「朝鮮」に関する言説と初期「科学学習」との繋がりをみる事が出来よう。

(23) 「悲哀の美」とは「事大を余儀なくされた」と柳がいう「朝鮮の歴史」を踏まえた彼の「朝鮮」芸術観(『朝鮮の美術』——前注参照等)。これに対し注21で挙げた、特に韓国の側からの批判が相次いだ。詳しくは『柳宗悦全集』第六卷解説や高崎氏前掲書(注21)参照。

(24) 「東亜日報」には「想」が大正9・4・12と18まで、続いて「友」が19と20まで、「朝鮮民族と芸術」(講演)が翌年6・5と6まで掲載される。「京城日報」に関しては、大正9・2・3に柳の「朝鮮」訪問を「芸術上からの内鮮の融和 柳夫妻の渡鮮」と報道している。以上の文化政治に関する部分は、高崎前掲書(注21)等参照。

(25) 以上出川直樹「人間復興の工芸——民芸を超えて」(一九九七・二、平凡社ライブラリー)より。

(26) たとえば「編輯記事」(『白樺』明治43・7)では柳の家に同人達が集まり、後に「新らしき科学」に纏められるロンプロゾやロツジの心霊学の話や柳から聞いていたことが書かれていたりする。このように「白樺」派同人たちは大抵欧米の動向に敏感な武者小路が柳の家に集まり、彼らからその思想動向を知り、自らのスタンスに反映させていった。

(27) 小坂国雄「西田哲学の研究」(一九九一・一、ミネルヴァ書房)はジェームズと西田を比較して「ジェームズにとっては、個人的意識を

超えた普遍的意識の存在を想定するのは、純粹経験に加えた独断にすぎないが、西田にとつては、むしろ意識をしいて個人に限るのにはかえって純粹経験に加えた独断にすぎない」と、西田の「純粹経験説の普遍主義的・一元論的傾向」を見出ししている。こうした西田の傾向の歴史的要義をさらに問うてゆく必要があるだろう。

(28) 柳はともかく他の二人の戦争に対するスタンスについては見解の割れるところだろうが、ここでは仮にこのようにしておく。何れにしてもここで問題にしたいのは、彼らの提出した主体を透明化させる論理がいかに利用され得てしまうものであったか(あるいは実際利用されてしまったか)ということである。

(29) 上山春平「日本の土着思想」(一九六五・九、弘文堂)、石井公成「大東亜共栄圏に至る華嚴哲学」(『思想』二〇〇二・一一)等参照。

(30) 百川敬仁「日本主義者・倉田百三」(鈴木貞美編『大正生命主義と現代』一九九五・三、河出書房新社所収)参照。

われわれの内なる《アメリカ》

——『痴人の愛』と『排日移民法』言説——

五味 渕 典 嗣

はじめに——問題の所在

〈文明の衝突〉という粗雑な議論は、その単純さゆえに、枠組みとしての有効性を検討されることがないままに標語として流通する危険性を持つてしまっていて、合州国大統領が口にし、マスメディアが圧倒的な言説の量によって追認した、アメリカかテロリストかの二者択一という、これまた犯罪的に粗雑な切り分けと節合されたとき、必然的な反動形成として、反米・排米の言説を周囲に産み落とす。この背景には、資本主義の世界化をアメリカ化と短絡する、もう一つの粗雑な発想が影を落としているのだから、そうやって析出された表象としての《アメリカ》に、いたずらに嫌悪や敵意をむきだしにすることは、かえって、へいま・ここくを見誤らせる危険性なしとしない。そこでわたしは、まずは歴史に問いたずねてみようと考えたのだ。猪口邦子は、「二〇世紀の歴史はアメリカの覇権の生成、生長、確立、成熟、揺らぎの全過程を内包

し、日本の二〇世紀史は、その力学に不可逆的に組み込まれ、対応し、また翻弄されてきた感がある」と、いみじくも述べている。⁽¹⁾とすれば、極東の帝国における《アメリカ》表象について、改めて、その「生成、生長、確立、成熟、揺らぎ」を問い直すことにも、それなりの意味はあるはずだ。

日米戦争以前の《アメリカ》表象が主語Ⅱ主題になるとき、必ずと言っていいほど言及されるのが、『痴人の愛』(大阪朝日新聞) 24・3・20〜6・14、『女性』24・11・25・7である。⁽²⁾なるほど、次の一節を見れば、『痴人の愛』と《アメリカ》とが密接にかかわることは、さしあたって自明であろう。

ここで断っておきますが、私の家には日本人のコックやアマは一人もいません。奉公人は男も女も、みんな支那人ばかりなのです。日本人は気がねがあると云うナオミの意見で、だんだんそうなってしまうのです。〔略〕今日になって、唯一つ、

私が後悔していることは、何でも彼でも「西洋々々」で、彼女を余りハイカラに育ててしまったことです。そうしなかったら、私はもう少し、彼女の我が儘を抑えることが出来たでしょう。それに日本の「西洋流」は、寧ろ「亜米利加流」なので、レディーに対する礼儀作法が、下らない事に迄やかましく、ナオミがそれを一々何処からか覚えて来て、私に実行させるのには、全く閉口してしまいます。

部屋の中央に据えた天蓋つきのベッドに横たわり、輸入葉巻を優雅にくゆらせながら、伝説的なファッション雑誌「ヴォーグ」を手に、時にはうら若き「支那人のボーイ」たちを寝室に招き入れたりもする彼女の、「アマ」に手伝わせた入浴——現行本文では「支那人」であることが消去されている——を含めた一連の場面が、セシル・B・デミル映画の模倣¹パロディであることは、すでに斎藤淳の詳細な調査がある。実際、『痴人の愛』に『アメリカ』の影を説むことは、早くから行われていて、橋本芳一郎は、関東大震災後の「物質謳歌のアメリカニズムの模倣」が生んだ「旧道德の崩壊」に作の主題を見たし、中村三代司は、「アメリカの大衆文化の表層的享受者としての（夫婦）の成れの果て」が描かれたと言う。吉見俊哉は、ナオミの身体へと象徴化された「モダンガールの商品性」が「西洋へのオクシデンタリズムとその現代的展開としてのアメリカニズム」に「媒介され」て、「日本人の男性性に優越的な立場を獲得する」寓意的な物語としてこの作を読むだろう。しかし、いずれ

の見解でも、一九二〇年代の日本帝国で生じた文化的な変容を、『アメリカ／ニズム』の一語で位置づける用例として「痴人の愛」作中の断片的な文言が取り出されているという感が否めない。それらの先行研究では同時代に語られていた『アメリカ』表象とのかかわりが、具体的に検討されてきたとは言いがたいのである。

そこで注目したいのが、「亜米利加」の流儀を身につけ、映画の登場人物よろしく豪華な消費生活を満喫するナオミに、あからさまな人種主義的発想が刻印されている、という作中の事実である。というのも、新聞小説として『痴人の愛』が連載されていた時期、アメリカ合州国では、国籍取得権を持たないアジア系移民²「帰化不能外国人」としての日本人移民を排除する条項を含んだ、一九二四年移民法（以下、当時にならって「排日移民法」と呼ぶ）をめぐる論議が大詰めを迎えていた。当初、三月の時点では日本人移民排斥条項の書き込みにも慎重だった上院もやがて態度を硬化、五月一六日に上下両院が法案を承認、二六日に大統領が署名、七月一日から発効という異例の早さで、排日条項を含む新移民法案が成立している。六月の半ばまでは新聞紙上に存在していた『痴人の愛』の言葉たちは、『アメリカ』の動向を論じ、『アメリカ』の言動や振る舞いを主語³に主題化した語り⁴と隣接し、文字通り表裏をなして、存在していたのである。

以下、本稿では、『痴人の愛』と、同時代の『アメリカ』表象とが織り上げていく、興味深い模倣と反復の諸相を、素描してみたいと思う。よって、いくつかの異同が知られている『痴人の愛』の本

文は、『大阪朝日新聞』『女性』に掲げられた初出形を採用することを、蛇足ながら付け加えておく。

「西洋」から遠く離れて

〈アメリカン・スウィートハート〉と形容された女優との隣接關係に置かれつつ物語世界に登場する「奈緒美」という女性は、当初から〈アメリカ〉と親和的だったと言うことはできる。とはいっても、その〈アメリカ〉は、当初から否定的な含意を託されていたわけではどうやらない。例えば、ナオミの英語教師は「アメリカ人の老嬢」で、河合譲治は、発音重視の彼女の教育方針に強い不満を抱いている。けれどもそれは、過去分詞や受動態や仮定法など、彼が慣れ親しんだ受験英語的な英文法が等閑視されたことへの不満であり、「レディー」に相応しい教養の習得に、彼女の国籍や言語的な背景が否定的に作用するとは、まったく考えられてはいない。当時、アメリカ帰りの森本厚吉が主張していた「文化生活・生活改善運動」を思わせる、所謂「文化住宅」での「シンプル・ライフ」の理想についても、同様のことが言えるだろう。だから、まず大事なことは、『痴人の愛』の中の〈アメリカ〉が、いかなる文脈において、固有の分節化の能力を担う記号として自律したかを問いつていくことである。そのためにも、〈アメリカ〉がそこから分離・独立するところの、概念としての「西洋」に、簡単な検討を加えておきたいと思う。『痴人の愛』の冒頭部については、すでに小森陽一の詳細な分析がある。ここでは、小森の分析を踏まえ、本稿にとつて必

要な問題点を抽出しておく。

まず確認したいのは、『痴人の愛』の導入部が、「夫婦」という単位を主語に主題としているという、ごく当たり前の事実である。何を・どのように・何のために書くのかを明確に規定したこの語りは、進歩主義的な枠組みに依拠して、「私達夫婦」の異例性を時間の軸へと転位させ、先進性として位置づけ直そうとする。「内地人と外人とが盛んに交際する」「いろんな主義やら思想やらが入り込んで来る」「男は勿論女もどしどしハイカラになる」という、「時勢」にかかる三つの節が、その転位をさらに補完している。しかも、当時は紛れもない実定性としてあつたはずの「外地」を排除した上で規定される「国際」性とは、ある特定の歴史に地政学的な記憶を刻む「ハイカラ」という語が用いられていることから、『痴人の愛』で言うところの「西洋」が、その内実をこく曖昧に占有することは明白である。そして、小森も指摘する通り、「女」妻の従属化・下位への追い落としを遂行してもいるこの言表は、時代が進み、「西洋」化が進むほど、「私達夫婦」のような関係が不可避免的に蔓延するであろう、という予言的な語りとして、自らを提示するはずだ。

進歩主義的な語りの枠組みは、当然に、この「夫婦」の位置性の問題を提起する。ヴァルター・ベンヤミンは、礼拝価値に神聖さを生み出す「アウラ」を、「どれほど近くにあれ、ある遠さが一回的に現れている」ものと規定したが、確かに、手の届かぬ彼方にあるればあるほど、目指す対象との物理的／心理的な距離が大きいは

ど、主体の情熱は強度を増すだろう。だから、「西洋」への憧れを隠さないこの物語の主人公は、かえって、「西洋」を遠ざける。例えば彼は、いったんは「体格は頑丈だし、品行は方正だし」「男前も普通である」という自画像を描いていながら、いざ実際に「西洋の女」を前にすると、「五尺二寸の小男で、色が黒くて、歯並びが悪くて」などと、すすんで「西洋」から遠ざかるのである。そして、このような「西洋」に対する距離の導入は捏造がなされるために、〈近づくと〉をめぐる権力闘争が準備されるのだ。事実、「痴人の愛」にとつて「西洋」は、一元化された序列の頂点に位置するもので、だからこそ、ナオミを紹介する言葉は、名前と顔立ちの「ハイカラ」さを、知性と階層の問題へと接続させていくわけだ。「西洋」を究極の目標と設定した一元的な序列の中で、相対的な優劣を競い合うという発想は、日高佳紀の言うように、いかにも受験エリートの⁽⁹⁾ではある。だが、ここで重要なことは、この構造が、「妻」を従属的な位置にくくり込んだ「私達夫婦」の中で再生産されていることである。「西洋」を目指す「私達夫婦」の想像上の共同性は、夫が妻を一方的に導く不斷の教育実践によって担保されている、ということになる。

もちろん、ここで目指されている「西洋」とは、ごく曖昧な概念でしかない。目標の輪郭が明確でない以上、そこに至るための手段も明瞭さを欠いている。しかし、ここでの問題はあくまで、一元的な序列の再生産と、その枠組みに依存する「夫婦」の共同性の維持なのであって、そんな「私」の中の幻想の共同体がわずかに維持さ

れていた特別な時空を、譲治が「お伽噺の家」と懐かしげに呼びならわしていたことは、すでに多くの言及がある。けれども、「私達夫婦」が本格的に〈社会〉に出、ナオミが他者と継続的なかわりを持ち始めた瞬間に、予想される通りに、夫にとつての幻想の共同体は、ほころびを露呈する。終局的な亀裂は、まさに「私達夫婦」の「西洋」への近接が、具体的に問われるその場において、訪れたのだった。

ダンス・ホールと人種主義

それは第十章、銀座のダンス・ホール「カフェエ・エルドラド」の場面である。ナオミが、一人の女性の苦心の結果を「西洋人臭く見せようとしたって、あの御面相じゃ無理だよ。どだい顔の造作が、ニッポンもニッポンも、純ニッポンと来てるんだから」「要するに猿の悲しき努力よ」と、冷ややかに切り捨てたシーンである。

ナオミは為る事成す事が活漕の域を通り越して、乱暴過ぎます。口の利き方もつんけんして女としての優しみに欠け、ややともすると下品になります。要するに彼女は野生の獣で、勿論そこにカルメン型の彼女の魅力があるわけではありませんが、此れに比べると綺羅子の方は、物の言いよう、眼の使いよう、頸のひねりよう、手の挙げよう、凡べてが洗練されていて、近代的な智慧と化粧とで、注意深く、神経質に、人工の極致を尽して研きかけられた貴重品の感がありました。〔略〕ナオミ

がメリー・ピクフォードで、ヤンキー・ガールであるとするなら、此方はどうしても伊太利カ仏蘭西あたりの、しとやかなうちに仄かなる媚びを湛えた幽艶な美人です。(十)

吉見俊哉は、「銀座で上演されていく出来事や振る舞いの意味」は「線形化された時間性の彼方へと先送りされる観念」としての「外国Ⅱ未来」という「番級」から備給されている、と論じていた。⁽¹⁰⁾ その意味でいえば、このダンス・ホールは、まさに銀座の銀座性が最も集約的に表象されている場所といつてよく、舞台を取り巻く人々は、「こう云う所でなければ見られない、一種異様な、半ば敵意を含んだような、半ば軽蔑したような胡散な眼つき」を向けあつて、「外国Ⅱ未来」という「番級」への近接性を競いあう。だからこゝは、「私達夫婦」の「社会」的な序列が真に問われる象徴的な空間に他ならず、そんな場所に、「西洋」の植民地主義的な想像力が描き出したエキゾティシズムの産物としての「黄金郷^{エルドorado}」という名が冠せられているのは、皮肉がききすぎているような気がしなくもない。が、いずれにせよ大事なことは、ここで「外国Ⅱ未来」へと連なるうとする人々を序列化する際に、人種主義の枠組みが全面的に採用されている、ということだろう。むしろ、比較の「舞台^{ステージ}」に乗せられる者たちは、同じナショナルリティに属するであろう人間たちなのであつてみれば、ことはあくまで比喩の問題である。けれど、外貌や服装や持ち物や身体技法など、人間のあらゆる可視的な側面から存在論的な優劣を比較・計測しようとするとき、そうした事態の説

明に最も適した語りとして、人種主義の比喩が導入されたことは、「痴人の愛」との「アメリカ」を問う本稿にとって、決定的な意味を持つ。

まず見るべきは、「西洋」からの「アメリカ」の切り分けられ方である。「活洗」だが「乱暴」で「下品」で「野生」的な「ヤンキー・ガール」たるナオミと、「慎しやかで、伶俐そうな」眸を持った、「洗練」された品格を具備した「伊太利カ仏蘭西」あたりの「美人」に比される、帝劇女優・春野綺羅子。二人のこうしたイメージは、それぞれと讓治とがダンスを踊る場面でさらに強化されるわけだが、注意すべきことに、ナオミをこのように意味づけることは、彼女の贅沢を指弾する、直前の場面ですでに語られていた。しかし、その段階ではまだ、それらの属性と「アメリカ」という比喩とは有契的に接続されてはいない。「アメリカ」が析出されるのは、あくまで「西洋」が差異化Ⅱ微分化される、その瞬間なのである。もう一つ重要なのは、「猿」「化け物」と言われ、「人間」とは認められなかった人物が、「ニッポンもニッポンも、純ニッポン」だと揶揄的に表現されていることだろう。「純日本人式」の「瓜実顔」であるがゆえに、「自分の顔があまり日本人過ぎるのをこの上もなく不幸」に感じてしまったがゆえに、さまざまに施された工夫の数々が、逆に、「純」粹な「ニッポン」性の、「西洋」への接続の可能性を際立たせてしまう。

決して「西洋」にはなりえない「ニッポン」が主題化され、その「西洋」も不完全・中途半端な「西洋」としての「アメリカ」と、

そうではない（ヨーロッパ）とに差異化 \parallel 微分化されていく。だがわたしは、この物語の中で、他ならぬこの場面で（アメリカ）が分離・独立し、交換不可能な記号として産出されたのは必然だったと考える。なぜならば、「ニッポン」人たちの「西洋」人への同化不可能性を説き、「人間」の埒外へとあくまで追いやろうとする運動が、太平洋の対岸で未曾有の盛り上がりを見せていると、当時の新聞記事が、教えてくれているからである。

「紳士」であれという命令

麻田貞雄は、〈排日移民法〉発効の日（一九二四年七月一日）が、幣原喜重郎の外務大臣としての最初の議会演説の日にあたってのこと、象徴的な意味合いを見ている。だが、〈排日移民法〉言説に特徴的なのだが、「日本人」を「黒色人種」以上に危険で、〈われわれ〉とは同化不可能な存在だとみなし（排日は当然のみ 排日代表者上院で陳述）²⁴・3・13、「日本人を人間以下に取扱わんとする」合州国における排日運動の高まり（対米外交と排日問題）²⁴・4・6に對し、反米 \parallel 排米的な言説をむやみに高唱せず²⁴・4・6に對し、むしろ、そんな感情の激発からは距離を置こうとする論調が目立つのである。

思うに、この事態には、論議を表象する際の、記号の立てられ方が大きく関与している。というのも、それ以前に移民問題にかんして日米両政府が取り交わしていた約定が他ならぬ（日米紳士協約）という名称で、一九二四年四月段階までその文言が公表されていない

かったこともあって、第一にこの問題は、日米両国のいずれがより「紳士」的（だった）か、というレベルで語られたのだ。もちろん、「忍ぶ」ことと「屈する」ことは違うので、「忍びがたきを忍ぶ」ところに男性の意気地が閃く（米貨排斥論）²⁴・6・4とみずからに言い聞かせ、より「紳士」的に振る舞ったとされるのは、日本の方である。そして、反照的に措定される（アメリカ）は、合州国／民を女権主義的な・女性優位の国／民としてジェンダー化する既成の言説系と節合されることで、一時の感情に左右される・偏見に凝り固まった存在へとかたちを整えていくだろう。

「米国と衝動政治」（大朝）²⁴・4・23」という記事は、「米国上院」が「従来の紳士的・保守的態度を弊履の如くに捨て」、「眼中又国家なく、国交なく、正義人道なく、平和なき態度を執ったのは、全く衝動にのみ依って動いたもの」であり、「人種の偏見に立脚せる政治的衝動を満足せしめ」ているのは、（アメリカ）で「婦人が政治に勢力を占める所以」を物語る、と断じている。しかし、どちらがより「紳士」的かという問いが、互いで問われるだけならば、結局は水掛け論に終わってしまう。だから、「どちらが紳士でどちらが似而非紳士であるか、世界の列国の公平な批判を受けようではないか」（米国の排日益悪化）²⁴・4・16と呼びかけがなされ、「公平」さを担保する「世界列国」として、英・仏・独・伊など、ヨーロッパ各国の世論の動向・新聞の記事が逐一報じられることになる。つまり、地政学的な概念としての「西洋」が、理性的・肯定的な（ヨーロッパ）と、そうではない（アメリカ）とに差

異化^{II}微分化されているわけで、まずはこの点に、「痴人の愛」の作る構図との類似性を見て取れるのだが、むしろ、これで終わりはしない。

こうした語りがくり広げられた背景には、〈排日移民法〉自体、連邦議会での論議の展開や、大統領拒否権の発動によって、転覆される可能性が残されていた、という事情がある。だが、たとえそうだとしても、とくに『大阪朝日新聞』のような、(自称)オビニオン紙における〈アメリカ〉批判は、正義や人道をうたった道義的なレベルにとどまって、つまるところ、一時の衝動に左右され・非理性的に振る舞った相手の〈覚醒〉に期待するだけなのである。これはいつたい、どういうことなのか。

最初に指摘すべきこととして、合州国において「日本人」の「帰化」不能性が語られれば語られるほど、「君主の徳に感化されてつき従う」(『新明解国語辞典 第五版』)という辞書的な意味において、他の国民には「帰化」できない(「われわれ」^{II}「日本人」)の人種的な独自性が担保されることとなり、ナシヨナリストたちの自尊心が心地よくすぐられる、という構図がある。そして、それに関連するのだが、人種差別問題で〈アメリカ〉を声高に非難することは、逆に、いわゆる〈内地〉での、朝鮮人や中国人の処遇の問題を浮上させることになる。安部磯雄が、「異人種の共存」は到底不可能なのだから、日本は移民の送り出しをやめ、朝鮮人や中国人は故地に送り返してしまえ、という議論を組み立ててしまう(「異人種の共同生活は結局両損」『中央公論』24・8)のは、そのためだ。さらに言え

ば、合州国への何か具体的な抗議の手段がありうるかと考えると、中国で日本帝国が直面していた、商品の不買運動^{ボイコット}が思い浮かぶが、それは不可能だ、と同時代の論者たちは教えてくれる。恐らく日本政府の差し金だと思いが、〈排日移民法〉発効の前に、「米国」は日本の輸出入総額の1/3を占める、最大の貿易相手国だという統計が大きく報じられている(「大朝」24・6・24)。「日本の輸出貿易」大部分を占める「生糸の販路は殆ど一の米国に限られ」ている状況下で、そんなことができるのか、と書くのは堀江婦一である(「対米移民問題管見」『改造』24・5)。「大国民たる慎重な態度」(『中央公論』24・8)の渡邊鉄藏に言わせれば、それはあたかも、「敵の小指を切って、自らの両手、両足を切られるような愚」行に他ならない。「われわれ」は、〈アメリカ〉なしにやっているとはいけませんが、どうやら〈アメリカ〉は、そうではないのである。

以上をまとめると、〈排日移民法〉をめぐる議論では、〈アメリカ〉を、非理性的で感情的な存在とみなし、女性ジェンダー化する語りが前景化する一方で、その〈アメリカ〉に対しては、強硬な批判・具体的な抗議の行動は抑圧される、という二重の構図が見取れる。そこで〈われわれ〉は男性的な存在と規定されるが、そのとき、自制的な「紳士」であれという要請は、先の二つの命題を矛盾なく並立させるために、必須のものなのだ。その証拠に、この枠組みは最後まで貫徹されるので、〈排日移民法〉発効当日の『大阪朝日』社説には、「米国民を反省せしめる唯一の道」とは、「今日まで我國民が探つて来た紳士的態度を持續」して、「国力の充美」(「國民

力の拡充」こそが重要だ、とする一節を読むことができる（排日法実施「大朝」²⁴・7・1）のだけれど、この言説の収まる文脈には、もう一つ、別の語りの系が節合されることになるだろう。

自己への配慮

「国力」「国民力」という、至つて抽象的な語Ⅱ概念は、長期不況の続く関東大震災後の経済情勢の中で、たびたび口にされてきた。その最も端的な例は、「文化ノ紹復国力ノ振興」のため、「浮華放縱ヲ斥ケテ質実剛健ニ趣キ輕佻詭激」を改めよと命じる、摂政宮裕仁署名の作文（「国民精神作興の詔書」²⁴・11・10）であろうが、このような、関東大震災後のいわゆる「天譴論」に連なる諸言説と、「アメリカ」への敵意を内攻させた屈折した語りとが接続されたとき、次のような言説が生産される。（「われわれ」が、「アメリカ」に對抗できないのは、彼我の「国力」がまったく違っているからだ。だから、——と「国力充実の急務」²⁴・4・19）は続ける——「今我國民の生活様式」を眺めると、「放縱無打算の生活を為して居る向」が少なくない、中には「収入に伴わざる贅沢な生活を為す事が、昨今流行の文化生活とやら」だとする者さえいるようだ。「我國民は可及的速やかに、「奢侈贅沢の悪夢」から覚めて、「臥薪嘗胆の緊張生活に復帰」し、「以て国力の充実を計」ること、第一に考えるべきなのだ。

つい一〇年ほど前の未曾有の大好況期を想起しつつ、国家経済のマクロなレベルの問題が、国民ひとりひとりの心構えの問題にずら

されて、日常「生活」を問い直せ、と語られる。だが、どこからが「奢侈」「贅沢」かを計る基準などないのだから、「生活」へと向けられた視線は、限りなく自己自身への配慮と検閲へと転化するだろう。人々を富者と貧者へと分断する資本に向けられた、漠とした違和・嫌悪・厭倦が、「われわれ」Ⅱ「国民」すべての問題へと一般化されることで、ありうべき葛藤や対立は隠蔽されて、消費行為それ自体が、道義的な批判にさらされる。しかも重要なのは、この消費批判が、「昨今流行の文化生活」という文言と共に共起している、ということである。周知の通り、「文化生活」運動を主導した森本厚吉とは、限られた現金収入の中でいかに合理的にやりくりをするかを考えた人物であり、彼は、支出の節約や虚礼の廃止によって出来たいくばくかの金銭的な余裕を、文化的な方面へと差し向けるよう勧めていたのだった。しかし、そんな文脈は一顧だにされず、「アメリカ」を意味づける別の言説が、ここに、接続されてしまう。

現在我が国の一般文化が進みつ、ある傾向から見ても、ブレイキを適当に加えた排米思想は、薬になるとも毒にはならぬように思われる。蓋し近時概して我が都鄙の新風俗、新流行は、余りにも米国流儀であった。外面の形式ばかりを模倣した鼻持ちのならぬ浮薄輕佻の悪風は主として米国式である。而して形式は内容を伴い、彼の米国流儀を代表する物質文明、黄金万能主義、機會主義に爛れた所謂輕薄才子（米國語で云えば *Fop*）の物の考え方までが輸入されないと限らない。野鄙な

米国式ダンス会の流行、それに伴う弊害などを思うと、姑らく米国文化の魅力から離れ、静かに自省して、国民発奮の機会を作り其の禍^二がるべく去華就美の方法を講ずるのも、時局匡救の一方策たるを失わぬ。(「反米感情の亢進」『大朝』24・6・26)

モノにあふれた豊かな国。歴史や伝統を欠くが、それだけに、貨幣さえあれば何でも手に入る国。(「アメリカ」を、消費資本主義の爛熟した、拜金主義・物質主義の国/民と位置づける言説群が、自制「ブレーキ」を加えた「排米思想」へと成形されたときに浮上するのは、典型的な「アメリカ」化批判の語りである。(「アメリカ」は、「われわれ」を墮落させる。困ったことに、「われわれ」の中にも「アメリカ」は、内在してしまっている。すなわち、いまや「アメリカ」は、近代資本主義の負の側面を換喩的に表す記号として、再^二指定されているのである。だが、だとすれば「われわれ」は、「アメリカ」を切断できるのだろうか。

人種主義のイデオロギーに染まる(「アメリカ」への憤りと、その直截な表出の自制と自己省察。以上のように「排日移民法」言説の主題系をまとめてみると、『痴人の愛』の読者は、物語が同じ展開を見せ始めていることに気づかずにはおれない。実際、ナオミと「アメリカ」表象との類似性は際立っている。(「排日移民法」をめぐる議会と国務省との綱引きを「例のあくどいヤンキー式の背景」の「排日フィルム」のようだと思わず記事の書き手は、「ヤンキー」とは「自分が世界の鼻摘みとなっている」ことに無自覚な、

「金を持った不法者」だと切り捨てるのだが(日本の面目のために)「大朝」24・4・17)、さきの銀座でのダンス・パーティーの後、まるで、予定された道筋をなぞるように「自ら嘲るような心持ち」で「自分の心」に問い質す河合譲治は、「虚栄心と己惚れの集団の代表者」で、「自分一人で偉がって、無闇に他人の悪口を云って、ハタで見えて一番鼻ツ摘みだった」人物として、ナオミを指弾するだろう。「野鄙な米国式ダンス会」に出かけては、「ニッポン」人を「猿」と呼び、「ヨーロッパ」的な洗練に比べれば不徹底かつ中途半端で、「乱暴」で「下品」だとされるナオミは、譲治の四〇〇円もの月収と独身時代の貯金とを、いとも簡単かつ無軌道に消費する浪費家でもあったのだから、この類似はほとんど完璧なのだ。そうだとすれば、「われわれ」と「アメリカ」の関係性が反復されることも、眼に見えているのであって、帰途、わざわざ電車の「反対の側に腰かけて」、なぜ自分は「この女」に惚れているのかと「自分の前に居るナオミと云うもの」をいつになく冷酷に対象化する河合譲治は、「私達夫婦」という関係から、彼女を切断することだけは絶対にしない。なぜならば、彼女は、自分という存在の一部だからである。それが「われわれ」の中にあるということは、すでに「われわれ」の一部となったということだ。彼女の「西洋人臭さ」を担保するという意味でナオミのアイデンティティとも言うべきその「鼻」は、「私の体の一部も同じこと」で、「決して他人の物のようには思えない」から、余計に憎らしいのだと譲治は語る。食べてしまってからその「不味さ」に気づく俗悪な食物のように、ナオミ

は、すでに自身に内在してしまっている、というわけだ。

否定され、排除されるべきなのだが、すでに自己の内側に取り込まれてしまったもの。以上に述べ来たつたように、「痴人の愛」の展開と「排日移民法」の言説系は無視しえない類似性・類縁性を演じつつある。銀座のダンス・パーティの場面以後、「痴人の愛」のストーリーは、夫から見た「私達夫婦」の切断と再統合にかかわる紆余曲折が主筋となっていくわけだが、ナオミとの距離を語る讓治の言葉は、ほとんど、「排日移民法」の議論の中で、多くの男性知識人「紳士」たちが口にした論理の敷き写しである。その「誤り」はわかっているけれど、それなしではいられず、執着せずにいられないもの。みずからの夢想した理想の共同性「結婚」が実現しえないとわかつて、なお「私」とナオミの不可分性を語り続けようとするこの夫の語りにとつて、「排日移民法」言説との参照関係は、決定的に重要なのである。

模倣と反復

一九二四年の『大阪朝日新聞』紙上では、大がかりな模倣「反復」が、律儀なまでに遂行されていたのだ。渡部直己は、物語内容のレベルで、ナオミをもつぱら「擬態」する存在だと読んだけれども、同じことは、「痴人の愛」という作自体についても、言えることなのだ⁽¹³⁾。斎藤淳は、「様々な物語を招聘し、露骨な模倣を装いながら、きわどい所で逸脱し、倒錯する」「その露骨なる、模倣と逸脱、模倣と倒錯の反復こそが、『痴人の愛』というテクストの

運動性にほかならない」と的確に指摘しているが、物語内容のレベルで、夫「河合讓治」とつて、妻「ナオミ」が、「夫婦」と言う名を開始したことが明確になる過程は、言説のレベルでは、憧れの場としての「西洋」の中から否定的な形象として、「アメリカ」が分離「独立し」、差異化されて、「図」として浮上する過程と重ねられている。そして、その「アメリカ」表象は、新聞小説としての「痴人の愛」を文字どおりに取り囲んでいた、「排日移民法」をめぐる言説系のと、酷似している。

こうした事態を要約し、意味づけ、理解可能にする論理を、わたしは、いくつか手にしてしまっている。そもそも「ノベル」は大衆新聞の三面記事と近接する場所から始まったとかいう、ジャンルの記憶を想起してもよい。媒体としての新聞から、連載小説だけを特権的に切り取ることは、悪しき文学主義の残響なのだから、他のものもろの記事たちと同じ位相で読むべきだという発想も、十分成立する。特に新聞の場合、一回一六〇〇字弱という分量の少なさが、日ごと配信される物語内容の統辞論的な流れよりも、同じ日の紙面に並ぶ他の諸記事との範列論的な連携を、際立たせてしまうからである。しかし、だとしても、『痴人の愛』(あるいは、その書き手)が、それなりの批評的な意図や目論みをもって、同時代の言説を批判的に取り込んでみせたと性急に結論づけることは、果たして可能なのだろうか。先の斎藤の議論を踏まえて言えば、『痴人の愛』が「様々な物語」を「招聘」しているとして、では、その「逸脱」や

「倒錯」を計測する基準はどこにあると言うのか。いいかえれば、作の「様々な物語」からズレているということと、「逸脱」「倒錯」という語で名指してよいものか。ひとは常に言葉に取り巻かれていて、ひとの言葉を意識しない言表など、どこにもないはずである。

このような問いを立てるのには、もちろんそれなりに理由があったことである。「痴人の愛」が新聞紙上から追いやられ、いよいよ「排日移民法」が発効せんとするその時期に、別のメディアを舞台に、以下のような問題提起がなされているからなのだ。

洪川玄耳「何を恐る、か日本」(『中央公論』24・7)は、「自主の念」の乏しい、「依頼心」の強い、「有れば有るに任せ、無ければ遣繰りをして奢侈」をしたがる「遊惰」「放恣」な輩を指弾する。彼によれば、悪いのは学校の英語教育である。教育システムの中で「英語が一番重要」となっているから、「英語の出来る者はエラク思われ」「英語国の人も事物も尊まれ親しまれ」、憧憬の視線を向けられて、「其の崇拜する国の生活を模倣せんが為め」に、「不必要な英語国の品、特に米國品の輸入を誘発」してしまうのだ――。英語を用いるのは「米國」人だけではないし、「奢侈」品は外国製品だけに限らない。周知のように、敗戦前の日本の英語教育は、専らイギリス語が基本だったはずである。だが、この洪川のような議論は、決して孤立していない。何しろ、(「排日移民法」)の発効直前に誕生した新内閣の政策課題は「奢侈」品への課税強化であって、それが「対米報復」である可能性を云々される位なのだ(「奢侈関税

法と米國」『大朝』24・7・19)、この他にも、「米國語」のあふれるこ

の国は、「アメリカの植民地」のようだと、煽り立てる福永恭助(「米國語を追払え」『東京朝日』24・6・18)以下、戸川秋骨や杉村楚人冠らが、同種の問題意識を表明していくだろう。ともあれ、「米

國の横暴より尚お恐るべきものが我國に瀰漫している」と説く洪川の論理で推すと、ひとは「外国語」を学べなくなるが、要するに言いたいことは、悪いことはすべて「外」から来た、ということだけだ。しかし、この論理は、見かけほど突拍子のないものではない。

〈外〉から注入されたものとして〈アメリカ〉との接点を問い返し始めれば、学校で学ぶ英語が発見してしまうのは、理の当然だからである。「英語」の学習が、「英語國」ことに「米國」に対する無媒介的な崇拜を生み、「見得」ばかりを気にする、「浮華」「奢侈」な人格を作ってしまう。だがしかし、まるでこれでは、「痴人の愛」の物語の粗雑な要約のようではないか。もっと正確に言えば、「英語」教育から始まる「ナオミ」の個人史を、事後的に振り返って意味づけたときにできあがるストーリーとは、そのようなものであるはずだ。ということはつまり、「痴人の愛」が、〈アメリカ〉を主題化する言説を模倣し反復しているだけにとどまらず、〈アメリカ〉を語る言説の側も、「痴人の愛」の物語に似てしまっている。〈アメリカ〉の浸透と内面化の原因を英語教育に見る洪川たちが、「痴人の愛」を「読んで」いたかはわからない。ちなみに言えば、「痴人の愛」のダンス・パーティの場面(第十章)は、初出紙『大阪朝日新聞』の五月六日付から五日間にわたって掲載されている。

譲治による英語教育の場面（第六章）は四月一日から、「シユレムスカヤ夫人」とナオミとが比較されて語るくだりは、四月二八日からの内容である。〈排日移民法〉言説の問題構成に英語教育批判が接続されるのは、少なくとも六月以降のことだから、この件にかんじて、『痴人の愛』が（アメリカ）を語る語りを参照、引用することは、原理的に不可能なのである。すると、これは単なる偶然の出発点として、片付けてよいものか。

〈排日移民法〉について報じる、散漫で、断片的な言葉たちは、多くは固有名詞の署名を持たないため、媒体としての新聞や雑誌同様に、すぐに古びて忘れられ、捨て去られていくだろう。だが、『痴人の愛』の言葉は、その曖昧で不実な環境を、みずからの現場として積極的に選び取る。『痴人の愛』は、自身を文字通りに取り囲んでいた（アメリカ）を語る語りを、徹底的に模倣し反復し、それらの言説が依拠する文脈を前景化させるだけでなく、その論理が行き着くだろう先までも、予示的に露呈させてしまっている。一方が他方を参照・引用するだけでは終わらずに、互いが互いを模倣しはじめ、それぞれの言説の展開の中に埋め込まれていく。様々なプレテクストや、同時代のコードが呼び集められて、模倣と反復が繰り返される『痴人の愛』という現場では、どちらがどちらをまねているのかわからなくなるほどに、言葉どうしが浸透しあって、あらゆるものが似てしまう。本稿でわたしが明らかにできたことは、その中の、ほんのわずかな、一部分に過ぎない。

〈近未来〉小説としての『痴人の愛』

『痴人の愛』の読者は、ナオミと慶應マンドリン部の学生たちが、人種主義丸出しの歌を歌いながら鎌倉の海岸を闊歩する場面で、最も「臂振り」に秀でている人物から、「上野の平和博覧会」の「万国館」という言葉を、聞き取ることができる。この言及は、一九二二年に上野公園で開催され、のべ一〇〇万人を集客したという、〈平和記念東京博覧会〉のことを指すと思われる。このとき、ナオミと譲治とは出会ってから五年目（ナオミ一九歳・譲治三二歳）を迎えているから、逆算すると、『痴人の愛』の物語の時間は、一九一八（大正七）から一九二六（大正一五）の八年間ということになる。だから、金子明雄が『痴人の愛』の世界を「あらかじめ現実的な着地点を奪われた、絵空事としての絵空事」といい、田口律男が、ナオミと譲治の横浜での暮らしぶりを「どこの国の流儀ともしれない不可思議な無国籍的生活態度」と論じるのはけだし当然であって、少なくとも、発表当初、『痴人の愛』は〈近未来〉を描いた小説なのだった。¹⁷では最後に、その〈近未来〉の風景を、もう一度確認しよう。（アメリカ）化の最終的な帰結として提示されたその場面が、グロリア・スワンソンをヒロインに据えた、セシル・B・デミル映画のパロディであったことは、すでに指摘しておいた。とすれば、いったい、どういうことになるのか。

ドナルド・アルブレヒトは、デミルが、『男性と女性』（一九一九）をはじめとするみずからの映画のために、「合州国中の配管工

事業者による最新のデザインから、石鹸の広告に出るスターの卵たちのためのセットにいたるまで、あらゆるもののモデルを準備した」というエピソードを伝えている。行為としての入浴を、日常のありふれた「コマから、「愛らしい儀式」の場へと変換する「新奇」で「贅沢」なバスルーム。それは、しかし、アメリカには存在しない。あくまでそれは、デミルに言わせれば「近代的なアメリカのバスルーム」の「健全な発達」に寄与するために、そして実際のところは、物語に性的な彩りを与える細部として持ち込まれた、すぐれて虚構的な風景なのである。しかもそれは映画のセットである。つまり、裏に廻れば骨組みが露出ししているだろう、映像の中でしか存在を主張できないセットなのである。⁽¹⁸⁾デミル映画と『痴人の愛』との間には、真正に神聖なオリジナルとコピーという位階が成立しない。あえて言えば、オリジナルを欠いた、コピーとそのコピーとの関係、ドゥルーズの意味でのシミュラクルなのである。

《アメリカ》とアメリカとの間に横たわる、共約不可能な差異。わたしは、この命題を転倒させよう。すなわち、それらが《アメリカ》と表象されることに意味があるのではないかと。確かに、合州国製品は巷間にあふれているし、合州国市民の思考や表現や発明品も、次々と移入されてくるだろう。しかし、そのことと、「奢侈」「浮華」「放恣」といった、特定の文化的・社会的な問題を《アメリカ》という表象に節合し・析出することは、まったく違うことだからである。だから、改めて『痴人の愛』の読者は、想起するべきな

のだ。『痴人の愛』の《アメリカ》が、「西洋」化し「近代」化プロジェクトの挫折と失敗の露呈が導き入れた表象であり、そのプロジェクトの挫折を認めたくない人物が飛びついた表象なのだった、ということ。

あまりに模倣が過ぎるとかえって似なくなるといふことか、同時代には、『痴人の愛』と《アメリカ》表象とを関連づけた読み手はいなかったらしい。数少ない同時代評でも、社会的な話題性という軸のみに作の評価が一元化されて、ナオミと讓治のセクシュアリティが特権化されるだけである。しかし、《近未来》小説としての『痴人の愛』の予見性について語りたい欲望を、わたしは押さえることが出来ない。ナオミの形象が、《モダン・ガール》の神話的な起源として発見されていくことがまず一つ。関東大震災を契機に、阪急沿線の新興住宅地に腰を落ち着けた『痴人の愛』の書き手の出会った都市が、やがて、若き批評家によって「日本のアメリカ」と名指されていくことも見逃せない。⁽²⁰⁾そして何より、『痴人の愛』が具体化してみせた、《われわれ》の《アメリカ》に対する逆説的な依存し共犯関係は、《敗北を抱きしめ》たのちの、《アメリカの影》を引きずる、敗戦後し冷戦構造的な枠組みの方と親和的である。吉見俊哉は、「第一次大戦までに日本の資本主義は急速な発展を見せ、自らをアメリカを中心として再編されつつあった世界システムの半中心として位置づけ」た敗戦前の日本帝国は、「この支配と従属の二重性のなかで、アメリカニズムを自国化していった」と書いて⁽²²⁾いるが、これでは事態の過度な単純化である。第一次大戦

後のアメリカ合州国が政治Ⅱ経済的な存在感をいや増していたのは確かだとしても、当時の先進資本主義諸国は、戦争後の課題として国際金本位制への復帰を目的していたわけだし、孤立主義的な傾向を強めていた当時の合州国は、そもそも「中心」として振る舞おうとしなかったと見るのが妥当である。だから『痴人の愛』は、表象レベルで、同時代の日本とアメリカの関係を反映しているから、重要なのではない。同時代の言説から出発しながらも、まだ見ぬ、しかし、やがて実現するであろう日米関係の表象を予見的に描いてしまっていることが、ここで特筆されるべきなのだ。

興味深いことに、年代が下り・改稿が重ねられていくにつれ、まるで、みずからの予言の成就を見極めるかのように、『痴人の愛』の最終章から、言葉としての／表象としての、(『アメリカ』は、少しづつその姿を後景化させていく。一九三二年の改造社全集版では、ナオミの世話を焼く「アマ」や「ボーイ」が「支那人」だという記述が消えている。そして、敗戦後Ⅱ一九四六年の改稿で、(『アメリカ』という言葉は、『痴人の愛』の最終章からは、完全にその姿を消してしまつた。

注(1) 猪口邦子「第1次世界大戦と日本」(『20世紀の歴史』第14巻 第1

次世界大戦「下」平凡社、一九九〇)

(2) 『痴人の愛』の初出は『大阪朝日新聞』だが、連載第八七回

(6・14) ナオミを敬慕し、大森の家に戻った譲治が浜田を発見する場面)で唐突に終了、6・16付け朝刊に「休載の已むなき事情」を生じた旨の広告が掲載されている。のち、連載は「女性」(プラトン

社)で再開されるが、その際、谷崎は「或る事情のためまだ完結にならないうちに、休載するの已むなきに至つた」と書いている。こうした事情からか、初出本文では、『大阪朝日』連載分・「女性」連載分それぞれ「1」章として書き起こされている。本稿では便宜的に、現行本文での章立てを用いている。

(3) 斎藤淳「痴人の愛」——デミル映画の痕跡——(『立教大学日本文学』一九九一・三)

(4) 橋本芳一郎「痴人の愛(谷崎潤一郎)」(『解釈と鑑賞』一九六六・一〇)

(5) 中村三代司「夫婦小説」としての『痴人の愛』(『日本文学』一九九七・五)

(6) 吉見俊哉「帝都東京とモダニティの文化政治」(『近代日本の文化史』6 拡大するモダニティ)岩波書店、二〇〇〇)。他にも吉見は、多くの場所で同種の議論を展開している。

(7) 例えば、小森「実践としてのテクスト分析『痴人の愛』の論理」

(小林康夫・船曳建夫編『知の論理』東京大学出版会、一九九五)

(8) ヴァルター・ベンヤミン(浅井・久保訳)「複製技術時代の芸術作品」(『ベンヤミン・コレクション』近代の意味)ちくま学芸文庫、一九九五)

(9) 日高佳紀「痴人の愛」における「教育」の位相(『日本文学』一九九七・一五)

(10) 吉見俊哉「都市のドラマトルギー」(弘文堂、一九八七)。吉見の議論は、小森陽一「都市の中の身体/身体の中の都市」(佐藤泰正編『文学における都市』笠間書院、一九八八)・平野芳信「痴人の愛」

論(二)——恋愛のシミュレーション——(山梨英和短期大学紀要)一九九三・一)などですでに援用されている。

(11) 麻田貞雄「人種と文化の相剋——移民問題と日米関係」(東京大学出版会、一九九三)

(12) 「天譴論」については、後藤嘉宏「関東大震災後の天譴論の二側

- 面)〔メディア史研究〕一九九六・五)を参照した。
- (13) 渡部直己「擬態の誘惑 谷崎潤一郎論」(新潮社、一九九二)
- (14) 斎藤、前掲論文
- (15) 戸川秋骨「看板の英語と中学の英語」(『東京朝日』'24・7・6)
「首括り網渡り」(『文藝春秋』'24・9)、杉村楚人冠「英語追放論」
〔『東京朝日』'24・6・22〕「国語にかえれ」(『文藝春秋』'25・6)な
ど。
- (16) 金子明雄「ジェンダーとメディア」(『ジェンダーの日本近代文学』
翰林書房、一九九八)
- (17) 田口律男「谷崎潤一郎「痴人の愛」を読む——一九二〇年代・都
市・文学(一)——」(『近代文学試論』一九八六・一二)
- (18) ドナルド・アルブレヒト(萩正勝訳)『デザインング・ドリームス』
(鹿島出版会、一九九五)
- (19) 例えば、橋爪健「紙上放送室 ナラミスム」(『読売新聞』'25・10・
3)は、「文壇人」は、従来通りの「谷崎主義の反復」ではないこ
の作に「平静」を保っているが、「所謂新時代の青年男女間にナラミ
ズムの言葉がいかに喧伝されつ、ある」と書いている。
- (20) 榎田満文「谷崎文学とモダン・ガール」(『武蔵野女子大学紀要』一
九八九・一二)
- (21) 大宅壮一「大阪は日本の米国だ」(『モダン層とモダン相』大鳳閣、
一九三〇)
- (22) 吉見俊哉「アメリカナイゼーションと文化の政治学」(『岩波講座現
代社会学Ⅰ 現代社会の社会学』岩波書店、一九九七)

※ 引用にあたっては、漢字および歴史的仮名遣いは、すべて新漢字、通行
の仮名遣いに改めている。

「書く」行為の背後にあるもの

——宮沢賢治と中原中也——

加 藤 邦 彦

一、

中原中也の詩篇が掲載されている雑誌を通観してみると、わたしたちはある奇妙な事態にとまどわざるをえない。それは、同じ詩篇が何度も雑誌発表されているからだ。その数は、既発表の作品が別の雑誌に再掲された文学者の中でも群を抜いており、『山羊の歌』（文圃堂書店、一九三四年二月）に収録されている全四篇のうち、約半数にあたる二一篇が二度以上雑誌発表されている。しかも、これらのうち、「サーカス」「秋の一日」「凄じき黄昏」の三篇は、再発表のみならず再々発表まで行われているのである。

堀内達夫は、中原のこのような雑誌発表のスタイルについて、次のように述べている。

中也の再発表という行為は、同人誌の閉鎖的な場からより社会的な場での正当な評価への願いのあらわれでもあるが、はっきりり言って『山羊の歌』刊行の社会的支援を受けんがためという

意図がくみとれる。いはば、叩頭して出版社をくどくより、広く文学の世界で評価を受けようという戦略である。⁽²⁾

堀内の指摘するように、中原がすでに発表していた詩篇を再発表した背景には、『山羊の歌』の出版事情が深く関係しているにちがいない。自費出版の予定だった『山羊の歌』は、本文印刷が終了した段階で資金が尽き、その後の製本・出版を引き受けてくれる版元もみつからないまま、一九三四年を迎えた時点で一年以上が経過していた。雑誌への再発表が行われたのは、主としてこのころである。それと並行して、中原はさまざまな出版社と詩集出版交渉を行っている。堀内によれば、詩篇の再発表はその交渉を有利に進めるための戦略だった。実際、『山羊の歌』収録詩篇の再発表は、「日本歌人」一九三五年一月号への「黄昏」掲載を最後に行われていない。つまり、『山羊の歌』が刊行された時点で、「社会的支援を受けんがためという意図」は達せられたというわけである。

だが、そうした伝記的事実よりもむしろ、同じ詩篇が何度も雑誌

発表されることによって、ひとつの作品に複数の本文が成立した、ということにこそわたくしたちは注目すべきだろう。雑誌掲載された詩篇を『山羊の歌』の本文と比較してみると、「再発表の数篇に若干のカナの漢字直しやリズムミカルな句読点の使用がみられる」どころか、ほとんどの詩篇に『山羊の歌』との異同を認めることができる。すなわち、すでに『山羊の歌』の本文が印刷されていたにもかかわらず、中原は再発表に際して作品に手を加えていたのである。換言すれば、『山羊の歌』に収められているうちの約半数もの詩篇は、詩集本文が最終的な決定稿ではなかったのだ。⁽⁴⁾

中原が『山羊の歌』の本文印刷が終了した後にも、しかも多くの文学者にみられる雑誌発表された作品の単行本所収時や、アンソロジーや全集などへの再収録時ではなく、雑誌への再発表という形で、詩集に収録された詩篇を改稿していたこと。自らの作品に対するこのような行為は、宮沢賢治のテクストをわたくしたちに連想させはしないだろうか。

私にはこれら彼の作品が、大正十三年頃、つまり「春と修羅」が出た頃に認められなかつたといふことは、むしろ不思議である。私がこの本を初めて知つたのは大正十四年の暮であつたかその翌年の初めであつたか、とまれ寒い頃であつた。由来この書は私の愛読書となつた。何冊か買つて、友人の所へ持つて行つたのであつた。

「宮沢賢治全集」(「宮沢賢治研究」一九三五年四月)と題された右の文章にも示されているように、賢治は中原に多大な影響を与えた文

学者のひとりである。また、そのことは中原の作品に『春と修羅』(関根書店、一九二四年四月)から借用されたと思われる詩句が散見することにもうかがうことができる。

両者の関係については、すでに多くの先行研究がある。しかしここでは、中原における賢治の影響を検討することや、両者の作品を比較するのが目的ではない。ここで問題にしたいのは、賢治のテクストのあり方そのものである。そして、そのことを問うことは、近代作家の「書く」行為について改めて考えることにもなるのではない。賢治のテクストを前景化しつつ、賢治と同じように作品の改稿を繰り返した同時代の詩人である中原中也を重ね合わせることによつて、近代作家の「書く」行為、およびその背後から浮かび上がってくる近代詩の諸問題について考えたい。

二、

賢治こそ自らのテクストにもつともこだわり続けた近代作家であることは、あの宇宙的な草稿の数々を想起せずとも、『春と修羅』に三冊もの「手入本」が存在していることが端的に物語っている。こうした(「近代」の出版形態に対するレジスタンス⁽⁵⁾)ともいわれる行為が示しているのは、印刷された活字テクストが必ずしも決定稿とは限らない、ということだ。しかも、『春と修羅』初版本には二段組の「正誤表」一頁分が折り込まれていた。つまり、刊行された時点で『春と修羅』は、印刷された活字の変更をすでに余儀なくされていたのである。

賢治にとって、『春と修羅』の本文は印刷後も改変可能なものであった。たとえ活字化されたテキストであっても、それは常に改変される可能性を有していたのである。そうである以上、賢治のテキストはいつまでも未完成であり続けなくてはならない。また、賢治の残したすべてのテキストは今なお未完のままであるともいえる。入沢康夫の言葉を借りれば、「賢治の作品は、作者の死後も、やはり生動を止めていない」のだ。

しかしその一方で、こうした発想そのものが「校本宮澤賢治全集」(筑摩書房、一九七三年五月—一九七七年一〇月)によって生み出された「神話」というべきものであることも忘れるわけにはいかない。もちろん、新校本全集の凡例にあるように、「宮沢賢治の作品の草稿には、多くの場合、幾重にもわたる手入れ・書直し・改作等のあとが見られるが、それらによってたどり得る各々の段階の形態は、単なる「完成への過渡的形態」にとどまらない意義を有している」ことは確かだろう。また、「永久の未完成これ完成である」(「農民芸術概論綱要」)と記したのは、ほかならぬ賢治自身である。だが、「各々の段階の形態」を重視するあまりに、落書きや抹消された語句、時には消しゴムによる抹消稿さえ活字化してしまう校本全集が、賢治を考える上では常に「過渡的形態」における推敲が問題となり、その時々々の「完成」がしばしば無視される、という傾向を招いてしまった感は否めない。

たとえば、原子朗は「賢治の詩歌の魅力、というとき、賢治のテキストがたえず変動し、めまぐるしく転成されてゆく過程に、読者

が、積極的にというより主体的につきあい、その過程を共有する、ということにかかってくる」と述べている。こうした「テキストの創成課程に読者が参加し、それこそ読者が積極的に作者性を共有している」ことに、賢治について考える魅力の一端があるのは間違いない。しかし、賢治の魅力が作者性の共有にしかないのであれば、校本全集以前のすべての読者を、そして十字屋書店版全集の「樹園異稿」を「感動して読み」、「独乙語冠詞なみに暗記してしまった」という論者自身の感受性をも否定することにはなりはしないだろうか。また、中村稔がいうように、「作品の一部から発想を別に展開していくというかたち」で推敲が行われた作品の中には、「先駆形が作品としてはるかにすぐれている」ものも明らかに存在している。

とすれば、「賢治の詩歌の魅力」は「テキストがたえず変動し、めまぐるしく転成されてゆく過程」、すなわち「幾重にもわたる手入れ・書直し・改作等のあと」ばかりに限定される必要はない。むしろ、その時々々の「完成」にこそ、賢治の作品がわたくしたちを魅了してやまない何かがあるのでないだろうか。

そもそもわたしたちは、その時々々の「完成」が魅力的だからこそ、その表現が生成される瞬間、「幾重にもわたる手入れ・書直し・改作等のあと」がどのような結果をもたらすか、というところに眼を向けたくなるのだろう。「幾重にもわたる手入れ・書直し・改作等のあと」そのものに賢治の魅力がある、というのでは、評価の軸が転倒してしまっている。その時々々の「完成」なくしては、わた

くしたちが賢治の作品に心を奪われることもなかったはずである。にもかかわらず、そのことを無視して「幾重にもわたる手入れ・書直し・改作等のもと」を極端に重視してしまうと、異稿研究、あるいは草稿研究の意義をわたくしたちは見失いかねない。

また、「幾重にもわたる手入れ・書直し・改作等のもと」の過度の重視は、「永久の未完成これ完成である」という賢治の言葉を自明なものとし、賢治がなぜ作品を改稿しなければならなかったのか、という誰もが持つ素朴な疑問をわたくしたちにしばしば忘れさせてしまう。だが、たとえ賢治が改稿にこだわり続けた作家だったとしても、改稿のために改稿を行ったわけではないはずだ。賢治が自分の作品を何度も改稿したという結果を、作品を改稿した目的と捉えるべきではない。たとえば、「(一九三二、九、七)」という制作日付を持つ「電線工夫」。「春と修羅」初版本と、宮沢家本の本文を次に示す。

でんしんばしらの気まぐれ碍子の修繕者
雲とあめとの下のあなたに忠告いたします

それではあんまりアラビアンナイト型です

からだをそんなに黒くかつきり鍵にまげ

外套の裾もぬれてあやしく垂れ

ひどく手先を動かすでもないその修繕は

あんまりアラビアンナイト型です

あいつは悪魔のためにあの上に

つけられたのだと云はれたとき

どうあなたは辯解をするつもりです

(以上、初版本)

でんしんばしらの気まぐれ碍子の修繕者
雲とあめとのそのまつ下のあなたに忠告いたします
それではまるでアラビヤ夜話のかたちです

からだをそんなに黒くかつきり鍵にまげ

雨着の裾もぬれてあやしく垂れさがり

ひどく手先を動かすでもないその修繕は

アラビヤ夜話のあんまりひどい写しです

あいつは黒い盗賊団か、

悪魔のためにあすこのとくに

つけられたのだと云はれても

どうまああなたは辯解できるおつもりですか

(以上、宮沢家本)

「アラビアンナイト」「アラビヤ夜話」以外の手入れについては、作品の主題に関わる大きな改稿の跡はみられない。改稿の主眼は、音数を整えることに置かれている。たとえば第二行目は、「雲とあめとの」七音、「下の」三音、「あなたに忠告」八音、「いたします」五音から、「雲とあめとの」七音、「そのまつ下の」七音、「あなたに忠告」八音、「いたします」五音へと改変された。その

た文字が活字化され、印刷されなくてはならない。「書く」行為がいかにも特異であっても、近代においては、活字化され、印刷されない数は、書かれていないに等しいのだ。賢治は近代の枠内に収まらない数々の作品を残した。だがその作品を理解するものは同時代に少なく、草稿の多くが未発表のまま残された。結果的に右のような制度から遠い距離に身を置くこととなった賢治は、肯定的にも否定的にも、近代的な作家ではなかったといえよう。

そのような意味では、賢治の場合に限らず、近代の中で発展してきた全集という書物の役割は大きい。活字化される機会がなく、反故同然だった作家の草稿すべてを近代文学流通制度の中に組み込んでしまうのが、まさしく全集という書物なのだから。だがそこでは、文字として残らなかったもの、音や声は消え失せてしまう。だからといって、活字化されたもの、書かれた文字しか問題にできないとすれば、わたくしたちは近代の仕掛けた罫に取り込まれてしまっているのかもしれない。

賢治がなぜ作品を改稿しなければならなかったのか。その理由は、文字として残らなかったもの、その時々々の「完成」の背後に流れている音声に耳を傾けたとき、初めてみてくれると思われる。

三、

賢治作品にみられる音数律への志向性。そのことを考える際、賢治がいわゆる「文語詩」の清書に最晩年を費やしたことは重要である。「文語詩」の多くが定型で書かれていること、すなわちある一

定の規則性を有していることは、いうまでもない。賢治は「文語詩」の制作にあたり、自らのかつての作品に題材を求めた。つまり、過去に書いた口語自由詩を改稿し、清書したのが、最晩年に記された「文語詩」である。

その「文語詩」をまとめた詩篇群のひとつ、「文語詩稿 五十篇」の表紙に、賢治は次のように書いていた。

本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれども現在は現在の推敲を以て定稿とす。

かつて「永久の未完成これ完成である」と宣言した賢治は、「文語詩」の清書にあたって、初めて「定稿」という意識を持つに至った。ここには「文語詩」に対する賢治の自負をみることができるだろう。⁽²⁰⁾ また、賢治がこの詩篇群に自信を持っていたことは、妹クニに「なつても駄目でも、これがあるもや」と語ったというエピソードからもうかがわれる。⁽²¹⁾

だが、こうした作者自身の自負とは裏腹に、賢治の「文語詩」をただちに評価することは、わたくしたちには難しい。近年、賢治の「文語詩」への関心は大いに高まっているが、大塚常樹がいうように「文語詩の分析のほとんどが、元になった口語詩や短歌等の表現や内容から推理し、解釈しているという事実は、賢治の文語詩がそれ単独では存在し得ない（読者とのコミュニケーションが充分に成り立たない）テキストであることを図らずも露呈してしまっているだろう。⁽²²⁾

作品としては評価したいこのような「文語詩」に、賢治がなぜ

それほどまでに自信を持っていたのか。それは、賢治の「定稿」という意識が、定型詩を書くことによって初めて芽生えたことと無関係ではないと思われる。

賢治が「文語詩」を推敲、清書していたのと同じころ、定型詩を多く残した詩人に、中原中也がいる。北川冬彦は、中原が「歷程」主催の詩の朗読会で「サーカス」を朗読したときの談話を、次のように伝えている。

彼が定型で詩を書くことについては、散文で書くときと永遠と格闘するやうなもので、いつまでたつても、詩が完成しないのであ、やつてゐるのですと云つてゐた。⁽²³⁾

ここには、かつての賢治と正反対の方法で「書く」行為を追求した詩人がいる。先に述べたように、中原もまた賢治と同じく、改稿を繰り返した文学者であった。改稿とは、作品をよりよくするため、ここにこそ行われるものだろう。しかし、どんなに推敲しても、その時々「完成」に到達するだけで、「永遠」のそれには至らないという「書く」行為のジレンマが、ここにはある。中原は「定型」を採用することによって、一歩でも「完成」へと近づこうとした。それに対して、「永久の未完成これ完成である」という逆転した発想でそのことに立ち向かおうとしたのが、かつての賢治である。

その賢治が最晩年に「文語詩」の制作に打ち込んだこと。このよな「文語定型」への接近は、中村稔がいうように「伝統的な形式のもつ堅固さと、形式と不可分に結びついている心情に傾斜しがち」な「私たちがふみこみがちな陥穽」⁽²⁴⁾であるにはちがいない。中

村は「宮沢賢治の天才をもつてこの陥穽におちいることを免れえなかつた」⁽²⁵⁾とも述べている。ただし、それは「伝統に反逆し、伝統的な美学と断絶する」ことを試みた「現代詩の作者たち」からみた見方であり、自身もまたすぐれた現代詩人である中村だからこそいうことであるように思われる。

だが同時代的な立場からみれば、近代詩において、「伝統」というものは果たして自明なものとして存在していたのだろうか。むしろ、近代詩の作者たちには「伝統」がないことの焦燥、不安からくる「形式」への強い希求があつた、といえるのではないか。中原は「詩と其の伝統」(『文学界』一九三四年七月)で、次のように述べている。

扱、日本の詩の伝統はと見ると、(茲では明治初年井上博士に依つて新体詩と銘名された、泰西の詩を見てから後の詩のことを云ふ)余り豊富だと云ふことが出来ない。(中略)

わが詩の伝統は未だ微々たるものである。而して「伝統がない」、謂はば「型がない」とか「見本がない」とかいふやうなこと程、詩人にとつて辛いことではないのである。詩人が辛いばかりではない。読者も亦辛いのである。——とまれ無形の期待などといふものはない。期待がこれと口に云へない場合にも期待がある限り期待が期待してゐるならかの、「型」、といふものはあるのである。つまり予想出来るその型がないので、大衆の方では詩人に期待しようがものはないのである。するとなると、今度はそのことは詩人にとつて辛いのである。(傍点原文)

「泰西の詩を見てから後の」近代詩に「伝統」、あるいは「型」や「見本」がないこと。「詩人」にも「読者」にも「予想出来るその型」がないため、新たな詩をいくら制作しても、既成の作品をどれほど推敲しても、いつまで経つても「完成」には至らない。「書く」行為のジレンマは、「伝統」がないことから生じていたともいえる。

賢治が最晩年に残した「文語詩」や、彼の作品にみられる音数律への志向性を、中原中也を重ね合わせて考えてみると、賢治の「書く」行為には「伝統」のない近代詩の作者としての心情が示されているだろう。つまり、「伝統」がないという不安感から発生する「なんらかの「型」」の要望が、賢治に既成作品の改稿をうながしたのでないだろうか。また、その「型」への強い希求が、最晩年の彼に「文語詩」を書かせたのではないか。その結果が音数律への志向性という形で現われているように思われる。賢治の「文語詩」に対する自負は、このような「伝統的な形式」への接近によって初めて芽生えたのである。

「宮沢賢治が草稿に重ねた推敲の営みは、ほとんど通常の推敲の概念を打ちくたくほどのものであった⁽²⁷⁾とすれば、その対極に位置するものが「文語詩」であるようにわたくしたちにはみえる。賢治の「書く」行為が従来の作品概念を解体するようなものであったのに対して、「伝統的な形式」への接近によって「完成」という従来の作品概念に依拠してしまっているのが、賢治の「文語詩」であるからだ。その意味では、最晩年の「文語詩」への傾斜は、賢治の詩

情の衰退をわたくしたちに予感させるものであろう。

だが、ここにこそ、近代詩人たちの抱えていた深刻な問題が示されているのではないだろうか。中原が詩に「なんらかの「型」」を求めたことも、最晩年の賢治が「文語詩」に没頭したことも、「伝統」のない近代詩の中で、彼らが詩というものを、あるいは詩作という行為を追求していったときに到達した、ひとつの形なのである。ここには、「伝統」のないことに迫り込まれていく近代詩人たちの姿をみる事ができる。もちろん、先に引用した「詩と其の伝統」に「茲で「型」といつてゐるのは決して詩の定形を云つてゐるのではないから断つて置く」と記されているように、中原のいう「なんらかの「型」」がたんに定型のことを指しているわけではない。また、中原と賢治の本質的な差違はそこにこそあるとも考えられる。しかし、詩語が十分に確立していなかった近代詩において、「書く」行為を突きつめていったときに到達したという点では、どちらも同じ発想なのである。このことは、晩年の萩原朔太郎が、かつての自らの詩作を否定するかのように『氷島』（第一書房、一九三四年六月）所収の詩篇群を制作したことも関連するだろう。だとすれば、賢治の最晩年の「文語詩」は、このような文脈の中で、近代詩全体の問題として再検討されなくてはならない。

四、

中原中也と宮沢賢治を重ね合わせて考える場合、中原が賢治にもっとも早くから注目していたひとりであることを忘れるわけには

いかない。わたくしたちは中原の賢治評に、同時代における賢治受容がどのようなものであったか、その一例をみる事ができる。校本全集によつて明らかとなる「幾重にもわたる手入れ・書直し・改作等のあと」はいうまでもなく、賢治の生前未発表作品にすら触れたはずのない同時代の読者である中原が、賢治の時々の「完成」の形をどのように読み、そこから何を感じ取ったか。

『宮沢賢治全集』第三巻（文圃堂書店、一九三四年一〇月）が刊行された直後、先にも引用した「宮沢賢治全集」という文章で、中原は賢治を次のように評している。

彼が認められること余りに遅かつたのは、広告不充分のためであらうか。彼が東京に住んでゐなかつたためであらうか。詩人として以外に、職業、つまり教職にあつたためであらうか。所謂文壇交遊がなかつたためであらうか。それともそれ等の事情の取合せに因つてであらうか。多分その何れかであり又、何れかの取合せの故でもあらう。要するに不思議な運命のそれ自体単純にして、それを織成す無限に複雑な因子の離合の間に、今や我々に既に分つたことは、宮沢賢治は死後間もなく認められるに至つたといふことである。

認められること余りに遅かつたためには、もつと作品の實質に關係ある、謂はば有機的理由ありとする人々があるであらうが、恐らくそれは間違つてゐる。是等の作品が、一般に愛されるべくそれ程難解なものとは思へぬ。のみならず、此処には、我が民謡の精神は実になみ／＼としてゐて、これは、詩書

を手にする程の人には最も直ちに、感じられる底のものである。此処に見られる感性は、古来「寒月」だの「寒鴉」だの「峯上の松」だのと云つて来た、純粹に我々のものである。

引用の前半は、自らの心境を賢治に重ね合わせているかのようだ。『山羊の歌』が文圃堂書店から出版されることが決定したのは、ちょうどこの文章が書かれたころ。版元がなかなか決まらず、中原が奔走していた最後の時期である。おそらく、自分が詩人として「認められること余りに遅い」のをもつとも不審に思っていたのが、当時の中原だった。

後半部分で注目されるのは、『春と修羅』という「詩書」を手にする誰もが「我が民謡の精神」を感じるだろう、という記述である。中原は、右と同時期の制作と推定される「宮沢賢治全集刊行に際して」(「作品」一九三五年一月)という文章でも、「此の我々の感性に近いもの、寧ろ民謡でさへある殉情詩が、この殉情的な国で、今迄読まれなかつたなどといふことは不思議だと、今度此の全集の第一巻が出た後では、諸君も必ずやさうお思ひになることと思ひます」と述べている。「抒情詩」ではなく「殉情詩」。それが「民謡でさへある」ということ。「殉情」という言葉の背後には、いうまでもなく佐藤春夫『殉情詩集』(新潮社、一九二二年七月)が潜んでいる。また「殉情」は、その前月に刊行された日夏耿之介『黒衣聖母』(アルス、一九二二年六月)にも用例がある。²⁸⁾生前未発表の草稿「無題」には、賢治を含むこの三名を中原が高く評価していたことが示されている。²⁹⁾

大正中期以降、様々な主義が生れはしたが、要するに何れも是も、印象派乃至は断片印象派とも云ふべきに終始してゐるのである。その間にあつて、冬草の根の如く、我が国民詩心の地下茎の如くにして其のところで芽を出した、謂はば名人肌の詩人は以下の通りであり、私事敬意を表して置きたいと思ふのである。石川啄木、佐藤春夫、日夏耿之介（但し此の詩人の第二集黒衣聖母以下の詩は、語の感性的類推であり、即ち類推であつて発想ではないのである）福士幸次郎、室生犀星、平戸廉吉、初期の高橋新吉、宮沢賢治。

中原が「国民詩心」を評価の対象にしている点は、興味深い。中原は「春と修羅」について、右の「（無題）」に「この詩集が今後よく読まれれば、「かんながらことあげせぬ国」の精神も、「ことだまのさきはふ国」の精神も、毎日のラヂオの修養講話より、よつほど内部的に養成されることとなるのであらう」とも記している。賢治に対するこのような評価は、中原における政治性や社会性の問題にも発展していくだろう。

しかし、右でいわれている「国民詩心」をそのような文脈で捉えることは、とりあえず留保したい。それは、中原が賢治の「心象スケッチ」を「我々の感性に近いもの、寧ろ民謡でさへある殉情詩」と評していることも関係しているように思われるからだ。ここで語られている「国民詩心」とは、日本人である限り誰もが共有しうる感情、とでも理解するのが適當だろう。³⁰つまり中原にとって、賢治の「心象スケッチ」は「我々の感性に近い」ところか、「我々の

感性」そのものだったのである。それを読んで何らかのイメージが喚起されるというよりは、自分の感性が寸分違わずそこに重なるのだ。だからこそ、中原は「宮沢賢治の詩」（レツェンゾ）一九三五年六月）という文章で、賢治のことを次のように評したのではないだろうか。

彼は幸福に書き付けました、とにかく印象の生滅するまゝ、に自分の命が経験したことその何の部分でだつてこぼしてはならないとばかり。それには概念を出来るだけ遠ざけて、なるべく生の印象、新鮮な現識を、それが頭に浮ぶまゝ、を、——つまり書いてゐる時その時の命の流れをも、むげに退けてはならないのでした。

彼は想起される印象を、刻々新しい概念に、翻訳しつつあつたのです。彼にとつて印象といふものは、或ひは現識といふものは、勘考さるべきものでも断味さるべきものでもない、そんなことをしてはあられない程、現識は現識のまゝで、惚れ惚れとさせるものであつたのです。それで彼は、その現識を、出来るだけ直接に表白出来さへすればよかつたのです。

右の記述は、例の「名辞以前」を想起させるだろう。中原は、生前未発表の「宮沢賢治の世界」にも、「宮沢賢治が、もし芸術論を書いたとしたら、述べたであらう所の事を、かにかくにノート風に、左に書付けてみたいと思ふ」とした上で、「名辞以前」について書かれている「芸術論覚え書」の冒頭と同じ一節を記していた。中原は、自分の詩の主眼に通じるものを賢治にみていたのである。

中原にとつてもっとも大切だったのは「印象の生滅するまゝ、」に書くこと、すなわち「現識を、出来るだけ直接に表白」することだった。⁽³¹⁾ 中原が賢治のどのような点に「現識を、出来るだけ直接に表白」していると感じたかは、定かでない。しかし、「現識」という中原の詩論のキーワードのひとつが用いられていることから、中原が賢治の作品に親近感以上のものを持つていたのは確実だ。そして、賢治の作品から感じたそのような印象を、中原は「国民詩心」を根底に据えた「民謡でさへある殉情詩」と評したのではないか。

「民謡」とは、節をつけて歌われる、まさしく語義通りの「歌」にはかならない。「歌」すなわちメロデーに合わせて歌われるものである以上、そこには曲の拍子に合う、ある一定の等拍リズムが存在する。

たとえば、先にも触れた「青い槍の葉」。基本的に七七五調で構成されているこの作品は、『春と修羅』への収録以前に、国柱会の機関紙「天業民報」に発表されている。そこでは、「(English sketch modified)」の代わりに「挿秧歌」という副題が付されていた。「秧歌」とは、もともと中国の農村で田植えのときに歌われた歌のこと。菅谷規矩雄も指摘しているように、「挿秧歌」というコードを与えられた初出時の「青い槍の葉」は、「民謡」以外の何物でもなかったのである。⁽³²⁾

北川透は、「民謡」という中原の賢治評に注目し、次のように述べている。

これが奇異に映るのは、当時に比べ、いまのわたしたちにとつ

て、〈民謡〉ということばと詩の概念とが、あまりに切れているからかも知れない。しかし、大正から昭和の初めの時代において、つまり、モダニズム詩以前、〈民謡〉は詩とそんなに自明に切れていなかったのではないか。両者の基盤を成す文語、定型（七五調）、行分け、音楽中心詩観が根本的な疑義にさらされるのは、モダニズム詩以後である。その基盤の上で、中也はさらっと〈民謡でさへある殉情詩〉と言つてのける。⁽³³⁾

右の指摘にあるように、「民謡」が「詩とそんなに自明に切れていなかった」ころ、すなわち賢治の同時代の読者である中原は、「民謡」に通じる賢治作品の形式的な特徴を見抜いていたにちがいない。中原の作品にも、萩原朔太郎が中原における「俚謡調、民謡調、童謡調の新しい取り入れ方」⁽³⁴⁾を好意的に論じているように、「民謡」に通じる形式的な特徴が認められる。そのような中原が賢治の作品に「民謡」を読み取つても、不思議ではない。おそらく中原は、表現面ばかりでなく、形式面でも自分の詩の志向に重なるものを賢治の作品にみていたのである。

中原が賢治の作品を「民謡でさへある殉情詩」として評価したのは、賢治の「心象スケッチ」が、表現面では自分の感性にきわめて近いものであり、それに加えて、形式面では音数律に対する志向性がみられることを感じていたからではなかったか。

五、

中原は、「宮沢賢治研究」第一号の「宮沢賢治全集第三巻に関する

る諸家の回答」と題されたアンケートに、「童話は大層面白く読みました。尤も小生は詩集「春と修羅」の方が一層好きではあります」と答えている。その中原が「春と修羅」の中でもっとも好んで愛読したと思われるのが、「(mental sketch modified)」の副題を持つ「原体剣舞連」である。「生しののめ」「気圏」「瀨気」「まつくらくら」「この夜さひとよ」「打つも果てるも火花のいのち」というように、中原が自らの文章に用いている語句が、とりわけこの一篇に集中しているからだ³⁶。

中原がこの作品からどのようなイメージを感じ取ったか、はつきりとはわからない。だが中原が、意識的にであれ無意識的にであれ、その中の語句を自らの文章にも用いてしまうほど「原体剣舞連」を繰り返して読んでいたことは間違いないだろう。

ところで、ここで注目したいのは「生しののめ」という語である。この語を含む「生しののめの草いろの火を」という一行は、宮沢家本では「ふくよかにかさやく頬を」と改変されているが、初版本を愛読した中原には無関係だ。中原がこの語について言及しているのは、「宮沢賢治の詩」である。

彼の精神は、感性の新鮮に泣いたのですし、いよいよ泣かうとしたのです。つまり彼自身の成句を以つてすれば、「聖しののめ」に泣いたのです。

「生しののめ」と「聖しののめ」の差異。このことについては、「中也における賢治問題」⁽³⁷⁾という入沢康夫の指摘以来、中原の賢治受容を考える上でこれまでしばしば問題となってきた。入沢は「こ

れは中也の意図的な書き替えというより、今一度その箇所当たってみる手間をはぶき、記憶にたよって書いた結果の誤りと見るべきものではあろうが、記憶がいなら記憶がいそのものとして、大変に面白いと思う」とした上で、「生」を「聖」と覚え込んでしまうことによつて、中也が、「生しののめ草いろの火を」という詩句にこめられている肉感性と聖性の相克というか邂逅というか、賢治童話で言えば「若い木霊」などに端的に露呈をみせているような、そうした感覚(中略)を、ものの見事に、そのものずばりの語で把握している」と述べている。これを受けて北川透は、「中也が賢治に見た《聖しののめ》は、たとえば《へしののめ》⁽³⁹⁾を聖なるものとして把握する、新鮮な感性の装置だったのではないのか」と指摘する。いずれも傾聴すべき意見だが、ここでは見方を変え、このような書き誤りが生じてしまった経緯について考えてみたい。

この書き誤りは、中原が「原体剣舞連」を声に出して読んでいたことを示唆しているだろう。おそらく中原は、「セイ」という音だけを記憶していたのである。眼で読むのではなく、声に出して読むことによつて、文字でなく音を自らの身体に記憶していたのだ。だからこそ、中原は「生」を「聖」と書き誤ってしまったのではないだろうか。生前の中原と付き合いがあつた檀一雄は、『小説太宰治』の中で、あたかも流行歌を歌うように賢治の「夜の湿気と風がさびしくいりまじり」を口ずさみながら歩く中原の姿を描いている⁽⁴⁰⁾。実話かどうかは定かでないが、中原が賢治の詩を暗記しており、しばしばそれを口ずさんでいたこと、そのような中原の姿を檀

が記憶していたことは確かであろうと思われる。

もちろん、こうした書き誤りは、一般にもよくあることにはちがいない。しかし、先に述べたように、中原が「原体剣舞連」を繰り返し読んでいたことを考えると、このような「記憶ちがい」が生じたしまった理由に眼を向けることは、決して無駄ではないと思われる。北川透は、中原の「サーカス」が「中世の《民謡の精神》の発露である、とも読める」とした上で、中原における賢治の影響について「そこに影響があるとしても、影響を云々することがばかばかしいほど、その発露の仕方が違っていると、中世のユニークさがある」と述べている。この指摘をふまえていえば、中原が賢治の作品からどのような影響を受けたか、ということよりもむしろ、賢治からの影響を中原がどのように消化していったか、という過程をみることにこそ重要であろう。そして、中原の詩情の発露と、賢治のそれとが「影響を云々することがばかばかしい」ほど異なっているのは、賢治のフレーズが声を通じて中原の身体に刻印された結果、中原の内面から、あたかも最初から彼自身の内部にあったかのように発せられているからではないか。また、その内面化の過程で、中原は自分の詩観を、まるで賢治自身がそのように考えていたかのように、賢治の作品に当てはめていったのではないだろうか。

中原は賢治の作品を声に出して読むことで、音として自らの身体に記憶した。おそらく中原は、思わず声に出してしまいたくなる何かを賢治の作品にみたにちがいない。その何かこそ、「(mental sketch modified)」などに示されていた、賢治作品に認められる音

数律への志向性だったと考えられる。

このような賢治受容は、坪井秀人がいうように、やがて「詩における音声中心主義への回帰」と重なり、「国体モラルへの屈服と手を携えて、宮沢賢治の詩をも《不謬》な神話の中に押し上げていく」ことなるだろう。賢治作品にみられる音数律への志向性と、⁽⁴²⁾それを中原が読み取ったことは、近代という時代においては、常にこうした危うさを孕んでいた。しかも中原が『春と修羅』について、「この詩集が今後よく読まれれば、「かんながらことあげせぬ国」の精神も、「ことだまのさきはふ国」の精神も、毎日のラヂオの修養講話より、よつほど内部的に養成されることとなるのであらう」と記していたことは、すでに述べた。ただ、中原が語っているのは、活字化された作品を読んだ上での感想であり、朗読運動を利用して、国家体制に賢治を含めた近代詩が組み込まれていく過程の間には断絶があるだろう。朗読されたとき、詩は活字化されたものとは異なる詩想を表現する。そのことと、中原のように活字化された賢治の言葉に思わず声に出してしまいたくなる何かをみることは、どう関連するか、あるいは関連しないのか。そのことを検討する際、中原が同人として加わり、創刊号に没後まもない賢治の作品を掲載した「歷程」への注目がひとつの手がかりになるのではないかと、現時点では考えている。「歷程」同人たちは朗読運動を積極的に推進した。⁽⁴³⁾先にも触れたように、中原は同人会で作品朗読を頻繁に行ったひとりであり、賢治の作品もまた同人たちによつてしばしば朗読されている。個人的な行為であるはずの朗読が集団的な場

で行われるとき、朗読によって顕在化した「書く」行為の背後にあるものは、活字では表現されえない連帯感と高揚感を聴衆たちにもたらずだろ。一方で、ラジオメディアが果たした役割もみのがすことはできない。この点については今後の課題としたい。

注(1) 「妹よ」など、中原の手が加わっていないと思われる再発表については除外した。また「無題」は、初出では第三節しか発表されていないが、再発表として数えた。

- (2) 堀内達夫「『山羊の歌』をめぐる」、『ユリイカ』第二巻第一〇号、青土社、一九七〇年九月、一四頁。
- (3) 同右、同頁。
- (4) その一例として、「山羊の歌」所収の「帰郷」について考えたことがある。拙稿「歌曲・朗読・ラジオ放送——中原中也像の形成に即して——」、「早稲田大学大学院文学研究科紀要」第四六輯第三分冊、早稲田大学大学院文学研究科、二〇〇一年二月参照。
- (5) 高橋世織「手」と「手稿」のあいだ——宮沢賢治というテクスト行為」、「文学」第二巻第二号、岩波書店、一九九二年四月、一〇頁。
- (6) 入沢康夫「近況報告 賢治全集のジレンマ」、「宮沢賢治 プリオシオン海岸からの報告」筑摩書房、一九九一年七月、一三三頁。
- (7) 原子朗「宮沢賢治——詩歌の魅力」、「国文学 解釈と鑑賞」第六〇巻第九号、至文堂、一九九五年五月、二二頁。
- (8) 同右、一四頁。
- (9) 同右、一〇頁。
- (10) 中村稔「宮沢賢治ふたたび」思潮社、一九九四年四月、五八頁。
- (11) 大塚常樹は「座談会 宮沢賢治研究の諸問題」において、「初期形を作品として認めないのかどうか」「それぞれを一つの完成された作品として評価してはいけないのか」という問題提起を行っている。

「国文学 解釈と鑑賞」第五六巻第六号、至文堂、一九九一年六月、三八頁。

(12) 菅谷規矩雄「詩的リズム—音律に関するノート」大和書房、一九七五年六月、二〇〇頁。

(13) 杉浦静「心象スケッチという方法」宮沢賢治 明滅する春と修羅——心象スケッチという通路」蒼丘書林、一九九三年一月、二九頁。

(14) 同右、二九—三〇頁。

(15) 宮沢清六「兄のトランク」筑摩書房、一九八七年九月、三八頁参照。

(16) 飛田三郎「肥料設計と羅須地人協会（開書）」、「宮沢賢治研究」II、筑摩書房、一九八二年二月新装版、二八三頁参照。

(17) 天沢退二郎「宮沢賢治の彼方へ」筑摩書房、一九九三年一月、五七—五八頁参照。

(18) 島村輝は「北守将軍と三人兄弟の医者」の推戴について、「おそらくは何度も実際にへ声へに出して読みながら、あるいはまた自分のことばの痕跡をへ声へで追いつつ頭の中でそれをへ声へとして響かせながら、賢治はじぶんのことばにリズムを与えていったのである」と指摘している。「へ声」の在り処 賢治とへ声へとへ手へをつなぐもの「臨界の近代日本文学」世織書房、一九九九年五月、二四七頁。

(19) 高橋世織、前掲文(6)、四頁。

(20) 田口昭典「ひとひははかなくことばをください」鑑賞、「宮沢賢治文語詩の森」柏書房、一九九九年六月、二六五頁参照。

(21) 小沢俊郎「編集室から」、「校本宮澤賢治全集第五巻月報」筑摩書房、一九七四年六月、七頁参照。

(22) 大塚常樹「卑屈の友らを見よとほろしく」鑑賞、「宮沢賢治文語詩の森」第二集、柏書房、二〇〇〇年九月、二二〇頁。

(23) 北川冬彦「詩の朗読会前後」、「椎の木」第四年第一号、椎の木社、一九三五年二月、三八頁。

- (24) 中村稔、前掲書(10)、一〇八頁。
 (25) 同右、同頁。
 (26) 同右、同頁。
 (27) 栗原敦「心象スケッチ」の行方——「花鳥図譜」構想まで」、『宮沢賢治——透明な軌道の上から』新宿書房、一九九二年八月、三〇五頁。
 (28) 中原と春夫の関係については、拙稿「愛唱歌の系譜——中原中也と佐藤春夫——」、「繻」第一集、「繻」の会、一九九九年三月を参照。
 (29) 中村三代司「佐藤春夫「殉情詩集」——成立過程における編集意図を中心に——」、「日本文学研究資料新集」第三卷「佐藤春夫と室生犀星 詩と小説の間」有精堂出版、一九九二年一月、九二頁参照。
 (30) もちろん、ここに中原の政治性をみることも可能である。
 (31) 中原は、自分の感情を直接的に表出することを詩の第一義とし、そのような詩を比喩的に「歌」と呼んだ。拙稿「歌」の内実——中原中也と音楽に関する一つの視角」、「文藝と批評」第九卷第一号、文藝と批評の会、二〇〇〇年五月参照。
 (32) 「現識」については、大岡昇平「宮沢賢治と中原中也」、「現識」補遺(「大岡昇平全集」第一八卷、筑摩書房、一九九五年一月)、吉竹博「中原中也と西田幾多郎」(「中原中也 生と身体感覚」新曜社、一九九六年三月)などを参照。
 (33) 菅谷規矩雄、前掲書(12)、二二七頁参照。
 (34) 北川透「宮沢賢治と中原中也——二つのプリズム——」、「宮沢賢治を読む」笠間書院、二〇〇二年五月、九二頁。
 (35) 萩原朔太郎「詩壇の現状」、「蠟人形」第九卷第一号、蠟人形社、一九三八年一月、六頁。
 (36) 生野幸吉「中原中也詩鑑賞 誘蛾燈詠歌」(「国文学 解釈と教材の研究」第二卷第一三号、学燈社、一九七四年一〇月)、北川透、前掲文(34)などを参照。
 (37) 入沢康夫「生」と「聖」 中也における賢治問題」、前掲書

(6)、二七九頁。

(38) 同右、二八三頁。

(39) 北川透、前掲文(34)、一〇一頁。

(40) 檀一雄「小説大宰治」六興出版社、一九四九年二月、四六頁参照。

(41) 北川透、前掲文(34)、九四頁。

(42) 坪井秀人「賢治神話と「書く」こと——「春と修羅」の受容——」、「声の祝祭」名古屋大学出版会、一九九七年八月、一一二頁。

(43) 同右、一一一—一二二頁参照。

※ 宮沢賢治の文章は筑摩書房版「新校本宮澤賢治全集」を、中原中也の文章は角川書店版「中原中也全集」および「新編中原中也全集」を本文とした。引用に際し、一部を除いて旧字は新字に改め、ルビは省略した。なお、本稿は早稲田大学特定課題研究助成費2002A-8222の成果である。

昭和十年前後の私小説言説をめぐって

——文学(者)における社会性を視座として——

松 本 和 也

I

大正九年頃、「私小説」という言葉は「文壇用語として登録を済まし」たとされるが、その後も私小説なるものは、文学史において否定的な評価を浴びつつも、脈々と書かれ論じ続けられてきた。そして、ここ二十年の議論をみてもなお「日本の特性」や「近代的自我」といった術語が私小説という言葉を覆ってきた。例えば、私小説作家を論じる松本道介が「近代的自我」という主題をたて、私小説なるものの「私」を分析する饗庭孝男が「日本の心性」に行き着き、キルシュネライトが私小説なるものを「きわめて日本的な文学ジャンル」と呼んでしまうような事態がそれである。ただし、表層の評言にもまして注意すべきは、右の議論において私小説なるものの自明性が全く疑われていない点であろう。こうした態度に対して鈴木貞美は、「私小説」を「私小説」として問題にし、論ずること自体が、ある誤りを犯すことになるのではなからうか」と

疑義を呈し、「私小説主流論」が私小説なるものに関わる時代状況や個別性を隠蔽してきたと指摘する。つまり、多様かつ曖昧な私小説という言葉は、八十年余に渡り同一の意味内容によって現象してきたのではなく、これまで周期的・集散的に論じられてきた私小説論を核として、その時々⁽⁴⁾の歴史的な言説編成の渦中で、実に多様に用いられてきたはずなのだ。だとすれば我々は、それら総体を一様に私小説という言葉で表象することで、無意識裡に多くのことを見過ごし、あるいは何らかのイデオロギーに荷担してきたのかもしれない。近年では、鈴木貞美が「私小説」という語は、明確にこれと特定できる記号内容をもたない、強力で流動的な記号表現として広く流通し、影響力の大きいひとつの批評言説を生み出した」として、それを「私小説言説」と名付けることで、私小説研究という領域に留まらない有効な問題構成を提示した。さらに、私小説とは「ひとつの読みのモードとして定義するのが最も妥当」で、それは「ひとつの文学的、イデオロギー的なパラダイム」だと指摘して

いる。⁽⁵⁾このような、私小説という言葉の持つ制度性・政治性に対する批判的な視線は、近年では、私小説という言葉の誕生以前にあったとされる《「自己」表象テクスト》を論じる日比嘉高⁽⁶⁾などにも共有されている。

こうした研究成果を踏まえつつ、本稿では昭和十年前後に展開される《第二次私小説議論⁽⁷⁾》を、私小説言説という問題構成から分析する。昭和十年前後は文芸復興期とも称され、プロレタリア文学の壊滅、大衆文学の興隆といった動きと併せて、転向作家・行動主義・浪漫主義・不安の文学・純粹小説論・文学賞等の諸問題が議論されていくのだが、その一つが件の私小説⁽⁸⁾である。また、昭和十年前後とは、満州事変(昭6)、佐野・鍋山の転向声明(昭8)を経て非常時の色合いが濃くなる時期でもあり、日本という国民国家の再編期とも重なる⁽⁹⁾。そこで本稿では、同時代の言説編成を分析することで、「作者の主観」に託された真実(性)を担保とした純文学の代表とも目され、「日本の特性」や「近代的自我」など色彩られ表象されてきた私小説という言葉の裏に隠蔽されてきたものに照明を当て、その機能を明るみに出すことを目指す。

II

まずは、昭和十年前後の私小説言説を具体的に検討してみよう。早くは、瀬沼茂樹「心境小説の転向」(「セルバン」昭8・7)に、《近頃また心境小説流行の聲があちこちから聞えてくる》とあり、そこでは心境小説が《個人的生活意識に立脚する求心的な抒情小

説》と把握された上で、その存在理由が疑問視されている。同年、小林秀雄は「私小説について」(「文学界」昭8・10)で《私小説、心境小説の問題》を手近にある大切な問題と位置づけ、河上徹太郎は「文芸時評」(「文芸」昭8・12)で実作を扱いながら私小説を論じ始めていく。これらを皮切りに、雑誌特集として「私小説に就て」(「文芸通信」昭10・7)、「私小説の将来性」(「早稲田文学」昭10・9)、「私小説とテーマ小説」(「新潮」昭10・10)、「純文学と私小説に就いて」(「新潮」昭12・3)等が生まれ、また小林秀雄・中村光夫らの批評家がまとまった議論を展開し、匿名批評や六号記事も含めて、文芸復興期には私小説言説が盛んに産出されていくことになる。

その背景として、勝山功はプロレタリア文学を壊滅に追い込んだ非常時の重圧感やそれへの抵抗、文学的手法としてのリアリズム問題の再燃、加えて多くの転向小説が私小説として書かれたことを、鈴木登美は《マルクス主義の導入と思想的影響力》と《自伝的小説の紹介と翻訳》とを指摘しているが、ここでは改めて中村光夫「私小説について——文芸時評——」(「文学界」昭10・9)を参照することで、昭和十年前後に私小説なるものが問題化される文脈を確認しておきたい。ここで中村の議論をとりあげるのは、それが横光利一「純粹小説論」(「改造」昭10・4)や小林秀雄「私小説論」(「経済往来」昭10・5・8)といった影響力を持つ議論の後に発表されたものであり、かつ中村には《問題にすべきは「支配的な言説」ディスクール》の分析⁽¹⁰⁾に批判でなければならぬという姿勢⁽¹¹⁾が看取され、本稿の問題構成にとっても重要な意味を持つためである。

中村は《我国の文学が私小説運動によつて代表されるその伝統的
 性格の根幹を反省し始めたのは、恐らく今後の日本文学の新しい展
 開を規定するもつとも重要な契機をほらむ》という見通しのもと、
 《日本特有の私小説》（亀井勝一郎）こそを問題化すべきだとし、
 《その根本的性格、形骸と化したその伝統の力強さ、併せてその伝
 統を如何にして逃れ、これを変革すべきかを明瞭に意識することが
 重要》だと自論のモチーフを語る。そして《今日我国の私小説問題
 の提出する複雑な相貌》が、《江戸時代からもたらされた強力な封
 建文学の伝統と、明治の社会事情と、更に作家の觀念を支配した外
 国文学》の《三者の微妙な調和の上に我国の私小説》が《成熟して
 行つた》ことに由来すると指摘し、田山花袋「蒲団」とコンスタン
 「アドルフ」の具体的な比較・分析に向かう。《花袋が、彼個人の
 明瞭な像をもつてゐたに反し、コンスタンは社会生活に自己の姿を
 見失つた所から始めた》として、個人／社会が論点として前景化さ
 れ、《ヨーロッパの私小説を貫く根本の性格》においては《私》と
 は「社会化された私」だとして自己と社会との双方向的な回路が
 析出される。一方、日本では《文学は社会から隔離されて、独自の
 発達をとげて行》き、《私小説と社会との背離》によつて《非社会
 性、無思想性》を帯びていく。そして次第に浄化されゆく私小説の
 表現が、《題材の狭隘化、社会性の喪失といふ代償》によつて成立
 していたことを指摘し、日本の自然主義が《技法上の変革》によつ
 て異常なほどに進歩したにもかかわらず、それは《文学と社会との
 封建的調和の上に咲いた温室の花》にすぎず、《社会をはなれた伝

統の技法的浄化に尚社会と調和して行く道を見出し得た》のだと概
 括する。

こうして《文学が極度に洗練を施され、同時に社会から全くはな
 れ終つたとき、突然プロレタリア文学が輸入され》るのだが、中村
 はプロレタリア文学者が《在来の「ブルジョア文学」を否定し、文
 学よりも社会を信ずることによつて、文学に強力な社会の像を導入
 し、数百年來の我国の封建文学の伝統に最初に破れ目を造》り、
 《私小説の形式》を《破壊した》点に一定の評価を与えながら、そ
 れが《私小説の伝統》に拠つて成立していた点を衝き、結果的に
 《私小説の形式は少なくとも文学の主流から滅びたが、その精神は形
 骸と化したまゝ、なほ執拗に現代文学の上に生き残つて》おり、そ
 れこそが《今日の文学に無意味な混乱をのみ惹起してゐる》とし
 て、昭和十年前後の文学シーンを描き出してみせるのだ。

右に中村が示した社会（性）というポイントに加え、《私小説の
 是非如何といふことよりもむしろ、何故このやうな議論が湧き返つ
 てきたかといふことに重大な問題がある》との指摘を念頭にお
 きつつ、同時代の私小説言説をみていこう。例えば《十年前の
 「私」と、今日の「私」との間》に変化がないと指摘するXYZ
 「スポーツ・ライト」〔新潮〕昭10・9〕では、《相変らずの「私」
 が、「私」に則した安易な態度で、身辺雑事の「私小説」を書いて
 ゐる》点が否定的に論じられる。河上徹太郎もまた「テーマの発生
 について」〔新潮〕昭10・10〕で、《大正末期の心境小説と本格小説
 との議論以來現在の此の問題が殆んど発展しないで蒸し返されてゐ

る」と同様の見解を示す。しかし重要なのは、こうした言説にすら十年間に〈私〉の〈進展・拡大・深化〉(XYZ)が想定されている点であり、この時期には〈私小説は時代と共に発展しなければならぬ⁽¹³⁾〉というように、時代(性)を閏数とした質的変容が特徴とされる。

今日は文人的趣味としての私小説でなく、時代的流れにおける自己発見の形式としての私小説が要求されてゐる(以下略)

阿羅「速射砲 私小説の概念」(報知新聞)昭10・9・19)

ほぼ同様のことを、亀井勝一郎は〈自然主義以来の私小説を撃破せんとするものは、私小説の名によつて実は廣大無辺の社会小説を夢みてゐる。「私」は「社会的私」である。ここに問題のあたらしさがある〉⁽¹⁴⁾と論じ、平松幹夫は「私小説」から「私」を引き出して客観的社会的批判の対象として論ずるやうになつたところに、問題の新しい意味が存在する⁽¹⁵⁾と指摘する。こうして私小説の〈私〉を前景化して、そこに前世代とは異なる時代・社会(性)を取り込むところにこそ、昭和十年前後の私小説問題の新しいさがあるのだ。従つて、旧来型の私小説(の側面)は、厳しい批判に曝されていく。十返一は一九三〇年代の世界情勢を参照しつつ、〈社会のもつ様相から眼を反らせ、絶対的非社会性と純粹を錯覚した純文学の作家たちは、漸く来るべき停滞に來た⁽¹⁶⁾〉と批判を展開する。具体的には、〈私小説〉なるもの、既成的精神⁽¹⁷⁾や、〈私や主観の狭さ、ちひささ、浅さ、偏倚的な局限性⁽¹⁸⁾〉等が論難されていく。こうした局面でもまた、〈思考の範囲の如きも「時代」や「社会」に呼びかけ

るやうな積極性を持たないで、狭い象牙の塔に閉ぢ籠つてゐる⁽¹⁹⁾〉という中村武羅夫や、〈作者達が日本の社会生活の重要現象と取組む氣力がなくて自分一個の身辺記録の限界を踏み出し得ぬ⁽²⁰⁾〉という森山啓の言説に示されるように、私小説批判の基準として、やはり時代・社会(性)が想定されている。もつとも、川崎長太郎は〈私小説の価値は直接その作者の人間としての値打ちの反映である⁽²¹⁾〉としてその価値を憚らないし、私小説を通じて作者を知る興味が読書慣習として指摘⁽²²⁾され、さらには〈私小説を書けば一応の小説になるといふ約束がたまらない⁽²³⁾〉という支配的な制度への言及もみられる。

以上の議論に明らかのように、この時期既に私小説という言葉の意味内容は統一し得ない程に拡散しながら、それでいて実作に関しては、緩やかな範疇の中でその定義が更新されていきもする。尾崎士郎は「私小説」の発展は形式の発展ではなくて実在する内容としての「私」の発展⁽²⁴⁾だとして、形式を留保しながら内容としての〈私〉を否定しその〈発展〉を目指す。徳永直も〈いはゆる「私小説的形式」⁽²⁵⁾とよばれるものと、「私小説的なもの」⁽²⁶⁾を峻別し、後者を否定しながら前者を護り、矢崎弾にしても〈否定したのは私小説の形式でなく、作品における主観描写の増長⁽²⁶⁾〉と指摘する。つまり、評言こそ連え、私小説の全否定を留保しては形式を擁護し、内容としての〈私〉の在り方を批判する点で三者の言説構造は同質性を持つており、こうした議論の枠組みの中では、旧来の〈私〉を超越することで、私小説の再生が想定二期待されていたはずである。

ならば、昭和十年前後の私小説批判の渦中に賭けられた、私小説

の「私」とはどのようなものだろうか。それはさしあたり単純に、右にみてきた私小説批判を裏返せばよい。つまり、「文学に社会性がしきりに求められ」、〈私小説でさへ、社会的私でなければならぬと云ふのが定り文句〉⁽²⁷⁾であるような状況の中で、社会(性)とその条件をなす時代(性)を取り込んだ「私」、である。私小説作家を自任する二人の作家が示すのもまた、そのような方向性である。〈私小説でなければ、小説としての意味がない〉とまでいう徳田秋聲は「私小説に生命がないとしたら、それは其の作家が時代の社会的な琴線に乗つてゐないから」と述べるのだし、「私小説」はもはや形式の問題ではない⁽²⁸⁾とする尾崎士郎も「個人の経歴が表現の上に客観的統制を保つ余裕のないほど切実にあたらしい」といふのは主観的な認識ではない。社会的現実⁽²⁹⁾に斬りこんであるか否かといふことだけが私小説の存在を決定する⁽²⁹⁾と述べており、ここでもやはり「私」と時代・社会(性)との切り結びが重視されている。こうした動向を裏付けるかのように、亀井勝一郎は「現在のプロ文学の「私小説的傾向」に期待する唯一のものは敗れた「私」に対する復讐をとほして、再び「社会性」をわがものにする戦闘的自意識の拡大⁽³⁰⁾」だと述べ、逸見広は「近頃社会の中に己を見出す私小説」の行方に「プロレタリア文学に新しい私小説が生れる可能性⁽³¹⁾」を見出し、かつて敵同士であったはずのプロレタリア文学と私小説とが、時代・社会(性)という交錯点において近さとして語られていく。

ここでもう一步踏み込んで、小林秀雄のいう「社会化した私」⁽³²⁾

を代表として提示された、「私」と社会(性)との回路の様相を検討しておきたい。〈告白する自分達の身辺的生活が、どの程度にまで、社会的な意味を持つてゐるか〉という一点に「今後の私小説発展の興味が賭けられてゐる」⁽³³⁾と述べる舟橋聖一に對し、平松幹夫は「作家が「私」の中にどれ程完全に社会の生ける姿を浸透し得るか、作家の心象が如何に複雑に多面的に社会的映像を捉へてこれを純化し得るのかの問題にかゝつてゐる」と述べ、著しい相同性をみせる。これらの議論に共有されているのは、個人を「社会性」の一つの通り道、出口⁽³⁴⁾だと捉えて回路を仮構し、「個の扱ひ方に依つて現はれたり隠れたりする」ものとして社会(性)を捉える構図である。つまり、「私」の生活を基軸としながら、そこに社会(性)を導入する、あるいはそこに読みとり得る社会(性)を書き込む、というのがこの時期に想定された最大公約数的「私」社会⁽³⁵⁾の回路なのだ。従つて以下の言説は、こうしたコードを踏まえて読むべきであらう。

生活と文学との統一のために喘ぐことは、たうぜん社会と及び自己との戦ひを意味する。「略」その戦ひの『報告』であれば、一切の私小説はまた同時に社会小説であらう。

青野季吉「文芸時評(一)生活と文学と 私小説
即ち社会小説へ」(『報知新聞』昭11・4・28)

しかし気をつけなければならないのは、「報告」というスタイルを介しての、私小説||社会小説、という等式の行方である。

『私小説の形を借りた社会小説』と云ふ目標は必ずしも間違つ

てゐないかも知れない。だが作品の主人公である「私」が外部現実を撫で廻してゐるだけでは、『私』が如何に広く社会を見、如何に巧みに問題を握んだところで何にもならない。それは悪い意味の報告文学に過ぎないだらう。

谷崎精二「社会的自己の問題」〔早稲田文学〕昭10・9)

つまり、素朴な社会(性)ならば容易に私小説という形式に盛ることがができる。ただし、主体的動機もなく(私)を立て、社会(性)を単に題材と翻訳するならば、それは(悪い意味の報告文学)の域を出ることなく、容易に国策文学へと連なっていくだらう。

こうした見通しに立った時改めて検討すべきは、車引耕介「壁評論 私小説論の混沌」〔読売新聞〕昭10・10・1)が指摘する、(狭隘な私を破つて、社会化された私に……と云ふやうなことが、平気で唱へられてゐるやうだが、社会化された私とは、いつたい何だらう)という問いである。従つて次節では、同時代の文学シーンにおける社会(性)なる概念とその文学との関係を分析するが、ひとまず本節で検討してきた昭和十年前後の私小説言説の様相を整理しておこう。この時期の私小説言説においては、私小説なるものへの賛／否よりもむしろ、その殆どが立場の如何を問わずに時代・社会(性)への志向を強迫観念的に漲らせていたことが重要である。現在もおお特権的に議論される批評——例えば小林秀雄「私小説論」にしても、確かに吉田司雄のいうように(「社会化した私」をめぐる解釈を讀みの中心から退け、新たに読み直されるべき)⁽³⁶⁾ではある

のだらうが、吉田が批判する「私小説論」研究史における(「社会化した私」)への過剰な意味づけとは異なる、同時代の私小説言説(さらには文学の社会性をめぐる言説・Ⅲ参照)に時代・社会(性)といった言葉が氾濫する状況を文脈として、「私小説論」は書き手や論文自体のモチーフとは異なる仕方で作作用して行くのだ。従つて同時代的には、従来の研究史で中心化されてきた作者名よりもむしろ、(「社会化した「私」」(さらには「私」社会)の回路)といった表層の評言こそが言説編成の渦中で前景化されていく。総じて、大正期には本格小説と相補的な関係にあつた私小説なるものとは、昭和十年前後には社会小説やプロレタリア文学にイメージされるような、時代・社会(性)を有した小説と切り離せない位相にあつたのだ。そして、こうした私小説言説の志向性こそが、表舞台に氾濫する私小説という言葉の水面下で、文学の再編成を方向づけていくのだ。

Ⅲ

昭和十年前後には、直接私小説に言及せずとも、(文学と、社会的事相の連関の今日のごとく鋭敏になりつ、ある時代は曾つてなかつた)⁽³⁸⁾と評される状況を背景として、(社会状況からの文学の乖離)⁽³⁹⁾が問題化されていくことになる。もっとも以下に論じられる多様かつ曖昧な社会という言葉は、個別の文脈から産出されたものだが、昭和十年前後の言説編成においては、社会という表層の評言が、あたかも意味内容を通底させているかのような連携をみせていく。

XYZ「スポット・ライト」〔新潮〕昭10・1)では、(文学の社

会性」を「プロレタリア文学以前」の問題でありながら「今日に於いても、大多数の人々の、最も中心的な要求」と位置づけ、「純文学が〔略〕時代の動きとか、社会機構といふやうなことに關しては、まったく無関心」だと批判した上で、今後の展望が示される。

文学の根柢が、個人性や、個人の心理や、個人生活から、もつと掘りを持って、時代性とか、社会問題などを、もつと強く反映せずにはあられなくなつて行くだらう。

ここでは、時代を関数とした社会（性）への志向が私小説的なものへの反指定として対置され、私小説言説にも散見された時代・社会（性）が議論の中心概念とされている。しかもこうした議論は、「およそ社会の存在があり、個人がそのなかに配置されてゐることが確かならば、個人を問題としてゆくにしても、彼の背景の社会を抜きにしては到底これを具体的に描き出すことは不可能である」以上、「たとひこれを主題に選ばない場合でも、作者が社会に対して一定の態度なり認識をもつことは要求されてよ」く、「作家が社会意識を有つことは決して不自然でなく、寧ろ彼の睿智を証明する」といった語られ方でヘゲモニーをとりつつあり、裏返すならば文学者にとって社会性の欠如（あるいはその指摘）はコンプレックスとして意識されざるを得なくなつていく。この時、社会（性）という概念は「当今容易ならぬ魔力を持つた合言葉」と化し、「誰でも社会的関心が無いといはれるのを大変な恥と心得」、「文士の資格を疑はれる最大の條件」となりゆく。そしてこれらは「現下の畸形な社会状勢」と「在来の心境の文学の打開的要求」の帰結だとされる。⁽⁴¹⁾

右の引用に明らかな「文学に社会性を求める声」や「文学に思想性を求める声」の興隆は、前節でもみた「私小説の再検討と、その揚棄につづいた当然の現象」とひとまずはいえようが、青野季吉は「私小説文学にたいする反動現象以上のものが含蓄されてゐる」と指摘する。大森義太郎は、「純文学から通俗小説の方へといふ傾向」として「社会的題材」を選択する志向性と、「ファッシズム」への対応とをあげるが、これら私小説的「狹隘さ」に抗する二つの方向性に関しては、「社会性といふ言葉が、二つの異つた意味を持つてゐる事に、注意」を喚起する尺心虫「蝸牛の視角 社会性の意味」（『東京日日新聞』昭11・5・6）が示唆的である。

左翼的、または進歩的な作家や批評家が、社会性を要求する場合には、文芸に一つの社会的、階級的なイデオロギーを持たせたいといふ意味を含んでゐる。「略」その他の作家達、例へば職業的小説家が、文芸に社会性を要求する場合には、それは主として、文芸の構成的要素を、社会的に広範な領域から取つて来るといふ意味に過ぎないのである。

社会性という言葉や、前者の用法にとるならプロレタリア文学との連続性のもとに、「私」に根を据えた上で社会（性）への回路が模索され、後者にとるならばプロレタリア文学からの変質・切断によつて通俗小説も含めつつ単に社会性を帯びた題材が志向されていくことになる。しかし、この二つの道を作家が自由に選べるわけではないのが昭和十年前後の時代性でもあり、島木健作は「文学者の社会的地位」（『文芸通信』昭11・1）という特集に寄せた「階級の

こ、ろ」において、《創作すること以外の活動がプロ作家として生長するために必要》だとした上で、次のように述べている。

ところがプロ作家の場合には〔略〕政治的な制約をうけて書齋にカン詰めにされてその活動が実際にできない現状にある。

つまり、昭和初年代的な社会性の回復は、現実問題として閉ざされていく。ならば、《私》という回路を通じ、《活動》の政治性と《私》の双方を損なうことなく社会を捉えることは可能だろうか。

現代の良心的な作家の悩みは「確然」たる社会意識の上に自己を支へようとしても、どうにもその社会意識をつかむ手がかりがなく、雑然紛然たる社会の表情のまへに立ちすくんで仕舞はざるを得ない所に在る。〔略〕そこには、この国の文学者と社会の関係における、根本的な問題が潜んでゐる筈だ。

車引耕介「壁評論 作家と社会意識の難問」

〔読光新聞〕昭11・4・1

右にいう《根本的な問題》とは、端的には中村光夫が指摘したような私小説の成立・発展とその根強い伝統を指し（Ⅱ参照）、ならば、昭和十年前後の文学シーンには、私小説の亡霊が彷徨いながら、小説表現に対して桎梏として機能し続けているのだといえよう。その時作家は、文学に対する社会性への要求にどのように対応することができらうか。自ら「消極的」〔文芸通信〕昭11・1と題したエッセイの中で《文学者の対社会的な態度》を《書齋に閑座してゐる間の心構へ》に見出そうとする佐藤春夫に倣うべきなのか。あるいは《外部的圧力に抗して、その圧力をもつていよいよ文

学者としての意識を掘り下げる》⁽⁴⁶⁾べきだとする原実や、《文学者が、私小説環境でなく、社会に生き、社会と取組み、社会と戦ふ姿を、精神を文学に表現せよといふ要求》⁽⁴⁷⁾として受けとめる青野季吉のように、作家の方法・態度を問題化すべきなのだろうか。もつとも、ここでもなお社会（性）という言葉の内実は曖昧だが、同時期に社会（性）について論じられた実作をみることで議論を具体化していこう。

昭和十年末の『中央公論』（昭10・12）は、《思ひ切つて新人傑作集として全紙面を新人の手に委ねた〔略〕本年掉尾の文学界に必らずや大きな波紋を与へるであらう》（編輯後記）という自負のもとに、高見順「私生児」・大鹿卓「火柴」・外村繁「血と地」・大谷藤子「血縁」の四作を創作欄に掲載する。同特集は新人の作風を示したものととして各時評で注目を浴びるが、四作とも肉親や血族といった自己の身边に題材を求め、容易に私小説という言葉に回収可能なものであった点に、武田麟太郎・杉山平助・神近市子が揃つて関心を寄せている。武田は社会性が志向されていたプロレタリア文学との《相違》に戸惑いながらも、《小説における個人と社会との立派な統一》を遠望しつつ、現状をその過渡期として楽観的な期待を示す。一方、神近市子は新人作家が《少しの社会性をも含んでゐ》ない作品を書くことの誤りを指摘し、プロレタリア文学において《作品に社会性を与へやうとした努力》の正しさを主張する。杉山は、《感傷的なデカダンス》にかるうじて時代性を読みとるが、作品自体への物足りなさを隠し切れないでいる。この杉山の不満は、おそ

らく「自分に對して稍弱味を見せ、甘くなるやうに見え」、(己)對する必然の要求から出た制作精神の莊嚴さは、どの作品からも感じられなかつた」という評言と同じものを指すとみてよいだらう。

総じて、昭和十年前後において新人作家の示した小説は、社会性というよりは身辺の問題・題材へと逆行しながら、しかもマルクス主義を経た世代の作家にとつては、もはやかつてのよ様な「私」という表現基盤を信じ切ることでもできない。このことと、社会性に富む題材を見事に料理した「蒼氓」で芥川賞を射止めた石川達三が文壇で好評を博すこととは表裏一体であり、小説に對する社会性という評価軸(要請)はこの時期既に強力に作動し始めているとみてよい。こうした昭和十年前後の言説編成において、「私」の回復が困難な作家には、時局的な題材によって社会(性)にコミットすることが隘路として残されているだけなのだ。そして、この時期に再編成されていくこうしたパラダイムの生成・強化の一翼を担ったのは、時代・社会(性)を志向し続けた私小説言説に他ならない。

ところで、昭和十年前後には、雑誌特集の多さが如実に示すように、実作を離れたところでも文学(者)の社会性が盛んに論じられていく。谷川徹三「文学と社会性」(『文芸春秋』昭11・3)は、この時期の社会性が「かつてのプロレタリア文学運動に於ける社会性階級性の強調」ではなく「穩健着実な意味」を持つことを指摘し、そこに「文学者の社会的地位の向上なり獲得」との関連性を見出している。身軽織助「学芸サロン 文学者戒心の一年」(『中外商業新報』昭10・12・29)においても、「今年の文学界の重要な傾向の一つ」と

して「文学と社会との間にいろんな紐帯が設けられることによつて、多少でも一般社会の注目をひくやうになつた」との指摘がある。具体的な「紐帯」としては、芥川賞、文芸懇話会賞、著作権審議委員会への文学者の選出、ペン・クラブへの参加、純文学作家の新聞小説進出、等があげられた後、文学が「政治的な網の目」に組み込まれていくことへの危惧が語られている。もちろん、菊池寛のように、文芸懇話会や著作権審議会の委員に文学者が加わつたことを以て「政府当局の考へ方の進歩」とし、「文学者の地位が、ひき上げられやうとしてゐる」と捉える向きもある。いずれにせよ、この問題が文芸懇話会を一つの争点として浮上してきたことは確か

で、懇話会賞が松本学の意向により島木健作に贈られなかつた「島木問題」や、松本学との交友を「向うは歴々の高官であり、こちらは一介の文芸家に過ぎない」という一節を交えつつ描いた近松秋江の小説「斎藤実盛の如く」(『文芸』昭10・10)は、大勢として懇話会への批判を噴出させた。そうした中、文学が政治に呑み込まれていきつつある状況に正面から立ち向かつたのは武田麟太郎である。「文芸時評(一)「文学者の地位」」(『東京日日新聞』昭10・11・23)において、「日本評論」の「特集II文学者の地位」、「斎藤実盛の如く」、文芸懇話会に触れる武田は、「文学者が為政者の庇護のもとに晏如として作家活動をなすか、その活動を強権的統制に服するか否かにある」と問題を整理した上で、「すでにいやしくも文学者である以上、われ／＼の答案と態度は決定されてゐるはずである」と断言し、「人民文庫」の創刊に向かつていく。しかし、昭和十年代を

見通す視座に立った時慎重な検討を要するのは、その武田でさえ後に『文芸懇話会』に執筆する(昭12・2)に至るだけでなく、主体を構成する諸条件の帰結とはいえ、「大東亜共栄圏」を補完するような役回りを演じてしまうことになるという歴史の行方である。もともと武田に限らず、帝國文芸院へと連なっていく文芸懇話会は、初発期に強い反発を買いながらも、戦時下という時代性の中で、着実に文学を現実の政治問題へと接続し、より具体的には国策文学へと導いていったのであり、特定の作家を裁断するのはここでの目的ではない。ただ、プロレタリア文学的な時代・社会(性)を志向していた作家でさえ、その志向性ゆえに当初のスタンスを反転せざるを得なくなっていくその基底において、言説編成を方向づけた昭和十年前後の私小説言説が作用していたのではなかったか。

昭和十年前後に議論される文学(者)の社会性とは、当初は実作にいかん時代・社会(性)を盛り込むかという議論に端を発するが、それは現実の様々な問題とも交錯し、文学と政治という難問への通路でもあった。そしてこうした動きは必ずしも外部からの圧力の帰結としてではなく、一見純文学的な、あるいはリアリズムの問題として提起されたかみえる私小説言説の内包する時代・社会(性)への志向によって、文学内部から召喚された事態でもあった。

IV

昭和十年前後に盛んに論じられる私小説、そして文学(者)の社

会性をめぐる言説は、そこに関わる大文字／小文字の政治(性)との交渉を通じて文学を再編成していく。昭和十一年の問題作を論じる間宮茂輔は、『現在呼ばれてゐる社会文学』を『批判の角度を持たない目(即ち思想的観点のない目)が、現実社会を在りの儘に見、且つ描いた文学』と定義し、『一定の歴史的意義(即ち時代性)を持った(プロレタリア文学)』を真の社会小説として想定しながら岸澤光治良の仕事を批判し、村山知義の「或るコロニーの歴史」に賛辞を送っている。右に示されるように、昭和十年前後に用いられる時代・社会(性)という言葉は、昭和初年代に持ち得た意味を失い、むしろその政治性を反転したようなかたちで小説表現に取り入れられていく。以下の無署名「文壇寸評」(『改造』昭11・8)は、いわゆる社会小説が次第に主流を成していく現状への批判である。

現代の作家はむしろ通俗的認識としての社会的関心に囚はれすぎてゐるのではあるまいか。(略)決して現実の危険に身をさらすことのない「社会的関心」ほど愚劣なものがあらうか。

ここで想定されている《現実の危険》とはプロレタリア文学運動において志向された社会性の実践だと思われるが、翌十二年には、全く別種の《現実》が文学領域に限らず、日本を覆うことになる。

昭和十二年七月七日、蘆溝橋事件を契機に日中戦争が本格化し、報告文学というスタイルによつてまずは現地報告が、続いて戦争文学が隆盛をみ、それを受けてペン部隊が編成されていく。この時期の文学シーンについては、同時代に板垣直子が『事变下の文学』(第一書房、昭16)に整理しているが、本稿の論旨から注目したいの

は「第一章 戦争文学」中の「2支那事変による戦争文学（ルポルタージュから小説への過程）」で「戦争文学の最も輝やかしい一つの星」と評された火野葦平「麦と兵隊」（『改造』昭13・8）である。

「麦と兵隊」は、「前書」に「一兵隊である私が軍報道部員として、歴史的な大殲滅戦であつたと謂はれる徐州会戦に従軍した時の日記」と自注されるように日付を持つ断片から構成され、加えて初出誌には現地での写真・地図・諷刺絵等もレイアウトされ、同時代的には報告文学の画期でもあつた。花田俊典はその「魅力」を、「兵士個人の心理描写まで含めた——戦闘場面の迫真性」と「戦地における下級兵士たちの平凡な日々の言動」の描出にみているが、この評価も私小説言説の延長線上に位置づけることができるだろう。また、「麦と兵隊」は、昭和十年に「真の私小説とも云ふべきものは個の中に全が反映し、また全の中に鋭く個の描かれた私小説でなくては全く意味がない」とその不可能性を断じ、社会小説に期待をかけた久野豊彦の見通しを見事なまでに裏切つた小説としても位置づけられる。では、「私」を保持したまま社会（性）と折り合いをつける難路を、「麦と兵隊」はどのようにして乗り越えたのだろうか。

この時示唆的なのは、火野葦平・兵隊三部作を「戦争」の語（り）という観点から分析した成田龍一の議論である。成田は、「麦と兵隊」を「戦場Ⅱ戦争における一九三〇年代の思考」と呼ぶべき（個の体験に執着し、そのことをつうじて個的体験を一般的体験へと昇華し、個Ⅱ一般として意味をとらえ直していく思考）を構造化させた小説と捉え、その際、戦争を構成する現実に対して「帝国

のまなざし」と称される（問いの不在と判断力の停止）を以て処したというが、この方法こそが「麦と兵隊」の「私」を表現可能にしたと思われる。総じて「麦と兵隊」とは、実体験に基づく個人的な内面の表象として受容されやすい日記という装置（形式）によって「私」性を確保しながら、戦場の現地報告という題材によって時代・社会（性）を取り込んだ、その意味で昭和十年前後の私小説言説の「期待の地平」（ヤウス）に見事に応えた小説表現でもあつたのだ。その時両者は相補的な関係にあり、「麦と兵隊」を浮上させたのは私小説言説が準備した受容の場であると同時に、私小説言説は「麦と兵隊」によってディスクールとしての有効性を確保していくだろう。

このような小説表現の先駆としては、昭和十年の石川達三「蒼氓」が想起される。「蒼氓」は、ブラジル移民問題という題材を、移民体験を持つ石川達三が、主観的政治的判断を回避して傍観者として（しかし直接体験を担保として）書いたものである。この小説を世に送り出した菊池寛は「話の屠籠」（『文芸春秋』昭10・9）で「この頃の新進作家の題材が、結局自分自身の生活から得たやうな千遍一律のものである」点を批判し、「蒼氓」を「一団の無智な移民を描いて、しかもそこに時代の影響を見せ、手法も健実で、相当の力作」だと評していた。ここに既に高見順や太宰治が排され、題材に託された社会性がヘゲモニーを握っていく徴候が伺えよう。⁶³

昭和十二年以降の文学シーンについては、私小説の行方を中心に論じた亀井秀雄によって「社会化された私」のアイロニカルな作

品に満ちている」と概評され、要諦は以下のように指摘される。⁽⁶⁴⁾

私的な一切のものが公的な意味を持ち、公的な立場から眺められ描かれた作品、時局の生々しい局面に文学者が積極的に参加し、素材として描き出した所謂肩書文学、確かに文学は「社会化され」たのであり、この場合、「社会化された私」はそのまま「私」の放棄、消尽につながっている。

亀井が指摘するように、昭和十年前後の私小説言説が共有していた時代・社会(性)への志向は、昭和十年代の小説表現において次々に実践されていくだろう。それでもなお、昭和十年代を通じて私小説なる概念は繰り返し問題化されていくが、本稿の論旨からして、例えば芸術派/素材派といった二項対立的な図式に拠る理解は意味をなさない。なぜなら、そうした固定的な文学史記述の基盤とは(レジスタンス文学への「神話」)⁽⁶⁵⁾に過ぎないのだし、既述のように、芸術派を代表すると思しき私小説なるものが時代・社会(性)を志向していた以上、素材派との差異化は無意味である。

だからといって、昭和十年代の文学シーンを日中戦争という大文字の政治へ一元的に還元することは、単なる思考停止でしかない。昭和十二年以降のシフト・チェンジは、プロレタリア文学が壊滅した昭和十年前後の私小説言説によって準備されていたのであり、なおその起因を探るなら明治四十年前後の自然主義文学にまで遡行することになる。中村光夫が指摘するように(Ⅱ参照)、社会から自律した文学領域とは明治四十年前後に成型されたものであるし、昭和十年前後の私小説なるものがその文学的価値として想定している

「作者の主観」に託された真実(性)もまた同時期に生成されてきたものだったはずだ。要するに、昭和十年代の文学シーンとは、時代・社会(性)をめぐる日本近代文学の皮肉な帰結でもあったのだ。

本稿の議論を経てきた今、私小説なるものを自明の前提として「日本の特性」や「近代的自我」といった評言で記述してきた文学史の再考、真実(性)を担保しながら純文学の代表とされてきた私小説なるものの政治性や、それが機能する歴史的な場の分析、さらにはそこに小説表現を組み込んだるの議論が今後の課題となろう。

注(1) 小笠原克「大正期における「私」小説の論について」話題提供者久米正雄まで(『国語国文研究』昭33・5)。なお、併せて、小笠原

克「大正末期の私小説論とその終焉」(『国語国文研究』昭34・2)、中村友「大正期私小説論にまつわる覚書(一)」(『学苑』昭52・1)、宗像和重「大正九(一九二〇)年の「私小説」論——その発端をめぐって——」(『学術研究』昭58・12)、山本芳明「心境小説」の発生——正宗白鳥復権の背景を読む——(『文学者はつくられる』ひつじ書房、平12)も参照。

(2) 研究動向は、石阪幹将「私小説」論(『昭和文学研究』昭56・

6)、梅澤亜由美「私小説」(『昭和文学研究』平13・3)に詳しい。
 (3) 松本道介「近代自我の解体」(勉誠社、平7)、響庭孝男「喚起する織物 私小説と日本の心性」(小沢書店、昭60)、イルメラ・日地谷「キルシュネライト/三島憲一他訳「私小説 自己暴露の儀式」(平凡社、平4)

(4) 鈴木貞美「私小説」という問題——文芸表現史のための覚書——(『日本近代文学』平2・10)

- (5) 鈴木登美ノ大内和子・雲和子訳「語られた自己」日本近代の私小説
言説」(岩波書店、平12)
- (6) 日比嘉高「自己表象」の文学史——自分を書く小説の登場——
(翰林書房、平14) 参照
- (7) 瀬沼茂樹「私小説論の系譜」(国文学) 昭37・12)
- (8) 安田敏明「(国語)と(方言)のあいだ——言語構築の政治学」(人文書院、平11)、成田龍一「歴史学のスタイル——史学史とその周辺」(校倉書房、平13) 他参照
- (9) 勝山功「大正・私小説研究」(明治書院、昭55)
- (10) 注(5)に同じ
- (11) 蓮實重彦「中村光夫の「転向」」(海燕) 平5・12)
- (12) 不拔生「大波小波 主観的情熱 今日私小説論の時代的な意味」
(都新聞) 昭10・7・3)
- (13) 無署名「文壇寸評」(改造) 昭10・6)
- (14) 亀井勝一郎「私小説についての感想」(新潮) 昭10・8)
- (15) 平松幹夫「私小説の発展 文学とチャイナリズムの交流④」(時事新報) 昭10・8・8)
- (16) 十返一「私小説第三期の性格——「M・子への遺書」と「紋章」——」(三田文学) 昭9・8)
- (17) M「速射砲 私小説是非」(報知新聞) 昭10・5・20)
- (18) 呂連子「赤外線 私小説と世界観」(東京朝日新聞) 昭10・6・12)
- (19) 中村武羅夫「純文学の敵は★僕が思ふのに」(文芸) 昭10・1)
- (20) 森山啓「文学上の「私」について」(早稲田文学) 昭10・9)
- (21) 川崎長太郎「私小説私見(中)」(国民新聞) 昭10・11・16)
- (22) 森田草平「文芸時評」③ 身辺小説の興味」(東京朝日新聞) 昭10・5・3)、小山東一「文芸時評」(2) 日本文学の特質が私小説の生長を期待させる」(中外商業新報) 昭10・11・30) 参照
- (23) 小山東一「文芸時評」(1) 文学存在の支柱」(中外商業新報) 昭10・5・24)
- (24) 尾崎士郎「文芸時評」(新潮) 昭10・6)
- (25) 徳永直「所謂「私小説」形式弁護のために」(早稲田文学) 昭10・9)
- (26) 矢崎弾「私小説は発展させねばならぬ。然し……」(早稲田文学) 昭10・9)
- (27) 玉藻刘彦「豆戦艦 十月の雑誌」(東京朝日新聞) 昭10・10・12)
- (28) 徳田秋聲「私小説は認 阿部氏に対する答へ」(読売新聞) 昭10・5・26)
- (29) 尾崎士郎「文芸時評」(新潮) 昭10・8)
- (30) 注(14)に同じ
- (31) 逸見広「消極的隆盛」(早稲田文学) 昭10・9)
- (32) 小林秀雄「私小説論」(経済往来) 昭10・5)
- (33) 舟橋聖一「私小説とテーマ小説に就いて」(新潮) 昭10・10)
- (34) 注(15)に同じ
- (35) 座談会「文学者の社会的関心と作品に現れた社会性」(新潮) 昭11・5)における岡邦雄の発言。
- (36) 吉田司雄「小林秀雄「私小説論」の問題」(文芸と批評) 昭63・10)
- (37) 山本芳明「心境小説と徳田秋声」(文学) 平13・7)
- (38) 無署名「文芸春秋」(文芸春秋) 昭10・11)
- (39) 青野季吉「社会状況からの文学の乖離について」(新潮) 昭9・10)
- (40) 新明正道「現代作家の社会意識」(中央公論) 昭11・4)
- (41) 河上徹太郎「文学者の知性と社会的関心——文壇明暗説」(時事新報) 昭11・8・23)
- (42) 車引耕介「壁評論 社会性の薄い社会性論」(読売新聞) 昭11・3・1)
- (43) 青野季吉「文学における社会性」上」(読売新聞) 昭11・3・12)

- (44) 大森義太郎「文学者の社会的関心」〔文学界〕昭11・7)
- (45) 通俗性と社会性の即応に関して大森義太郎「文学と社会の間」(一、五)〔東京日日新聞〕昭11・4・29・5・3) 参照
- (46) 原実「社会時評——時局数言——」〔三田文学〕昭11・7)
- (47) 青野季吉「新しい要求の意義 文学に於ける社会性」〔中〕〔読売新聞〕昭11・3・13)
- (48) 武田麟太郎「文芸時評」(三) 血の問題」〔東京日日新聞〕昭10・11・26)、杉山平助「文芸時評」(3) 新人について 「中央公論」の四篇」〔東京朝日新聞〕昭10・11・30)、神近市子「文学の社会性」〔「ポロ」の武器では打てない〕〔読売新聞〕昭10・12・7)
- (49) 河上徹太郎「文芸時評」〔新潮〕昭11・1)
- (50) 海野武二「十二月創作評 不可解な新人達——「中央公論」の巻(下)——」〔時事新報〕昭10・11・30)
- (51) 川村湊「異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——」(岩波新書、平2)、並びに、拙稿「石川達三「蒼氓」の射程——」題材の一九三〇年代一面——」〔立教大学日本文学〕平14・12) 参照
- (52) 鳥木健作が発禁を受ける昭和十二年、太宰治もまた言説空間から排除されていく。拙稿「青年論をめぐるへ太宰治」の昭和十年前後」〔日本近代文学〕平14・5) 参照。
- (53) 「文学者の地位」〔日本評論〕昭10・12)、「文学者の社会的地位」〔文芸通信〕昭11・1)、リレー評論「文学者の社会的関心」〔文学界〕昭11・7)、座談会「文学者の社会的地位と経済生活」〔新潮〕昭11・3)、座談会「文学者の社会的関心と作品に現れた社会性」(同昭11・5) など。
- (54) 菊池寛「文学と為政者」〔日本評論〕昭10・12)
- (55) 詳しくは、榎本隆司「いわゆる「島木問題」——文芸懇話会始末のうち——」〔学術研究〕昭62・12) 参照。
- (56) 久米正雄「二階堂放話」〔文芸春秋〕昭10・10)、海野武二「十月の創作評 不幸な種類の作家——「文芸」の巻——」〔時事新報〕昭10・9・23) 他参照
- (57) 権錫永「帝国主義と「ヒューマニズム」——プロレタリア文学作家を中心に——」〔思想〕平9・12) 参照
- (58) 榎本隆司「文芸懇話会 I・II・III」〔学術研究〕平2・12、平3・12、平5・12) 他参照
- (59) 間宮茂輔「一九三六年問題作再批判⑤社会性に就て」〔中外商業新報〕昭11・12・23)
- (60) 花田俊典「火野葦平、戦争文学の誕生」〔昭和文学研究〕平14・3)
- (61) 久野豊彦「社会小説出よ(上)」〔読売新聞〕昭10・12・20)
- (62) 成田龍一「歴史」はいかに語られるか 一九三〇年代「国民の物語」批判〔日本放送出版協会、平13)
- (63) 注〔51〕に同じ
- (64) 亀井秀雄「戦争下の私小説問題——その「抵抗」の姿——」〔位置〕昭38・10、引用は「昭和の文学」有精堂、昭56)。なお、併せて曾根博義「戦争下の伊藤整の評論——私小説観の変遷を中心に——」〔語文〕昭60・6) も参照。
- (65) 安藤宏「太宰治・戦中から戦後へ」〔国語と国文学〕平1・5) 付記 引用に付した傍線及び〔略〕記号による省略は全て引用者による。

プロレタリアの娘・豊田正子

——一九五〇年前後の〈書く〉場をめぐる——

中 谷 い ず み

1、はじめに

豊田正子の名前が一躍ブームとなったのは、『綴方教室』がベストセラーとなった一九三八年のことである。⁽¹⁾舞台化、映画化され、時代の寵児となった豊田正子の綴方は『婦人公論』に連載され、一九三九年にはそれらの綴方をまとめた『続綴方教室』が、そして一九四一年には綴方集『粘土のお面』が刊行されていく。⁽²⁾この時期に生じた『綴方教室』ブームは、文学や演劇など既存のジャンルに對抗し得ると見なされた「純真」「素朴」「真実」という価値を身にもとう〈豊田正子〉という記号を作り上げていく。⁽³⁾一方、こうした状況は、著書の数や知名度という点からは明らかにジャーナリズム上の〈書き手〉である豊田を、〈素人〉の〈書き手〉という位置に留まらせることとなる。これは、著作の水準を保証し、価値を付与する〈指導者〉、即ち小学校時代の担任であり『綴方教室』の著者でもあった大木頭一郎の存在によって可能になったといつてよい。成

田龍一は豊田の綴方が大木の作った物語に回収されていくことを述べた上で、「豊田自身が、こうした大木のつくりあげた自らの物語によりそっていった」しまった点を指摘している。⁽⁴⁾「体は洪江の親たちから貰ったが、頭の中は僕の子だ」という大木の言葉に「乳離れしても私はやっぱり大木先生の子だ。大木先生に褒められるやうな生き方をするんだ」と応じる豊田は、人格形成の導き手である大木を「父」と見なすことで、「父」への同一化を目指す「娘」という役割を引き受けていく。⁽⁵⁾こうした大木との関係性は、〈素人〉としてメディアに著述を発表し続けるという豊田の特異なスタンスを可能にするものでもあった。そして、このようなあり方は、ブームが去った後もメディアの周辺に留まり続けた豊田正子を見ていく上で、欠くことのできない要素の一つでもある。

一九四三年の大木頭一郎逝去後も、大木宅に養女として住まっていた豊田は、養母との生活を支えるべく働きに出ながら「思ひ出の大木先生」(一九四五年八月 大成出版)、『続思ひ出の大木先生」(一九

四六年九月 柏書店)を刊行する。これらの事実は、豊田正子が著作を刊行し得る程度に『綴方教室』という遺産がこの時点でまだまだ有効であったことを示している。その後、『綴方教室』を通して知り合い、出征後は「恋人を待つ気持で待」ち続けていた帝大出の青年と一九四七年頃に結婚、同時期に共産党へ入党する。しかし二年ほどで離婚した豊田は、一九五〇年前後に知り合った江馬修と実質上の結婚生活を始める。この間、豊田は新日本文学会周辺の雑誌に僅かながらも作品を発表するなど、執筆活動を継続していた。豊田正子二八歳、江馬修六〇歳という三〇歳以上も年の離れた夫婦生活は、江馬が別の愛人のもとへ走るまでの約二〇年間続いていくこととなる。

本稿では、『綴方教室』という遺産の有効性が薄れ、発表媒体を得られなくなった時期、即ち一九五〇年前後の豊田正子に注目してみる。(綴方)から出発した豊田が形成していく(書き手)としてのアイデンティティに注目し、置かれていたメディア状況や作品、あるいは豊田正子を再発見した鶴見俊輔の発言などを通して考察を試みることにしたい。それは同時に、「文学」の周辺で起こっていた(書く)ことをめぐる問題を浮上させることにもなるだろう。

2. “勤労者文学”とプロレタリアの娘

豊田正子是一九五一年八月の『人民文学』で次のように述べている。

何を、どう書いたらよいかわからなくなつて、もう書くこ

とはおしまいだと思つていた私に、新しい正しい方向をあたえてくれたのは党でした。プロレタリアの娘として、大地にしっかりと足をつけると、勇気をあたえてくれたのは党でした。⁽⁷⁾

『綴方教室』による遺産の有効性を失い、「書くことはおしまいだと思つていた」豊田正子は、自らを「プロレタリアの娘」と呼び、自覚することで(書き手)として「新しい正しい方向」を見出していく。「綴方教室」の豊田正子というより、プロレタリアートの娘正子を愛する」という「神経の出ている虫歯で洋かんをぎゅっと咬んでしまったような」江馬修の言葉に「まいっ」てしまったという豊田が、「綴方教室」の豊田正子に代わるアイデンティティとして「プロレタリアの娘」という呼称を積極的に引き受けていったことは明らかである。では、こうしたアイデンティティによって見出される「新しい」道とはどのようなものだろうか。

先にもふれた通り、一九五〇年前後の豊田正子は、『勤労者文学』や『文学サークル』『人民文学』など新日本文学会周辺の雑誌に作品を発表している。豊田がこれらのメディアに関わるようになった経緯としては、一九四七年前後の共産党入党が考えられ⁽⁸⁾う。しかし発表の舞台となつていた『勤労者文学』や『文学サークル』といった雑誌が、アマチュア作家の発表媒体として用意されていたという側面は否めず、豊田の作品が、これらの雑誌群の中心に位置する『新日本文学』に掲載されていないことに注意が必要である。このことは、豊田が『人民文学』(一九五〇年一月創刊)に編集委員として参加し得たのも、雑誌の主幹であつた江馬修との

個人的關係に起因するところが大きかったことを想像させる。『人民文学』は、占領下の平和革命方式に対するコミンフォルム批判をめぐって起きた日本共産党の内部分裂に伴い、党臨時中央指導部の下に『新日本文学』への対抗勢力として創刊されたものである。その意味で、この対立は「政党内部における意見の対立を文学運動にもちこんだもの」⁽¹¹⁾であり、秋山清が言うように『新日本文学』が党の方針を批判し団体としての自主性を保持しつづけたのに対し、『人民文学』は文学活動でありながらも、党への従属色を強く持つものであった。だがここでは、こうした対立の構図に目を向けるのではなく、『勤労者文学』や『文学サークル』などアマチュア作家の発表媒体という系列において『人民文学』を捉えることで、ヘアマチュア作家へと職業作家へのめぐる境界の変動について見ていくこととしよう。

『新日本文学』周辺でこの時期に増大していたヘアマチュア作家は、初期の新日本文学会による「新人待望論」に連動したものと考えられる。「民主主義文学」の成立という題目のもと「文学の専門団体」として結成された新日本文学会は「誰でも入会」できるわけではないとしながらも、一方で「作品に略歴を添へて送られれば」「審査」によっては「入会」を認めるなど「文学活動をしてゐない人」にもチャンスを残していた。⁽¹⁴⁾そこでは「新人」の誕生が「今日の急務」とされており、『新日本文学』はその「最もよい発表機関」になることを宣言していたのである。その中でいち早く「新人」として注目されたのは、一九四六年七月の同誌にデビュー

作が掲載された小澤清であった。一九四七年五月の『新日本文学』では、小澤清が「若芽」に例えられ「まだ小さくて若い」が「必ず育つ」と賞讃されている。しかし同時に、その小澤の「新らしさ」とは「たどたどし」さや「平凡」さとセットになったものであり、この「若芽」がどのように育つことを期待されているかは具体的に示されていない。つまり「新らしき文学」という言葉が逆説的に示すように、そこで必要とされている条件や求められている具体的なイメージなどは殆ど提示されぬまま、「技術」にこだわらず書くことが推進されていたのである。だが、この新人探しは長く続かなかつた。一九四八年一月の「編輯覚え書」には、『新日本文学』が「日本文学の最高水準」を担い、「普及と啓蒙」は「文学新聞」が担うという「分業体制」が、新日本文学会第三回全国大会で決定されたと書かれている。この方針転換に伴い、小澤清などを含む新人たちの「経験主義」や「見解の狭小さや、低いリアリズムへの停滞」が批判の対象とされ始め、『新日本文学』は「新人」のための「発表機関」ではなく、「文学の専門」家の「発表機関」という性格を明らかにしていく。この方針転換後、アマチュア作家の受け皿として創刊されたのが『勤労者文学』（一九四八年三月―一九四九年八月）であり、『文学時標』（一九四八年二月―同年九月）、『文学サークル』（復刊第一号一九五〇年一月―復刊第二号一九五一年二月）などの雑誌群であった。

こうして（職業作家へとヘアマチュア作家への境界線が明確にされていく中で、ヘアマチュア作家へのアイデンティティとして立ち

上がってくるのが「勤労者」であつた。現在も労働に従事する自分たちの視点を固有のものとし、(「職業作家」との差異を強調することによって「書き手」としての居場所を確保していかうとしたのである。だが、それは田所泉が指摘しているように「勤労者文学」と「文学一般」とを区別することで『勤労者文学』を事実上『文学』の上におくようなセクト主義を生み「だす側面をも持ち合わせていた。⁽¹⁹⁾このような「文学」あるいは「職業作家」という対照項の設定によって、集団としてのアイデンティティ同質性はより強固なカタチで形成されていく。だが同時に、こうした同質性の規定が異質性排除に繋がることは言うまでもない。例えば『勤労者文学選集一九四九年版』⁽²⁰⁾の最後には作者所属として会社名や職業が記されているが、ここが空白にならざるを得ない書き手もまた多く存在したはずであり、この同質性が女性にとって不利なものであつたことは間違いない。中流階級のインテリ青年との結婚生活で専業主婦となり、あるいは離婚後も気胸を患つた体の弱さゆえ、継続的に職に就くことが難しかった豊田正子のような書き手も、本来ならばここではみ出してしまつて一人であらう。またその結婚と離婚に加え、妻子があり、三〇歳以上も年が離れている作家との結婚生活は、明らかにスキャンダル性を孕んでおり、それを作品にすれば「勤労者」の同質性からはみ出してしまふ。『新日本文学』で批判された「経験主義」の傾向が作品の主流を占める中で、また更に「日常生活上の事象」を「実感的に」書くという綴方教育⁽²¹⁾に出自をもつ豊田にとって、現在の自分を題材に出来ないという弱みは決し

て軽視できないものだらう。豊田の作品系列の中で、「娘」の視点から見た家族を書いたものが圧倒的に多いのは、こうした題材が彼女にとって「勤労者」と繋がり得る唯一の回路だつたからである。その意味で「プロレタリアの娘」というアイデンティティは、「勤労者文学」という場に参加する権利を、そして「書き手」として生き残る唯一の道を豊田にもたらしてくれたのである。

そうであればこそ、前述の江馬の言葉、即ち「綴方教室」の豊田正子というより、プロレタリアートの娘正子を愛する」という言葉が、進むべき道の教示として豊田に重く響いたのであらう。しかし「新たな道」を示してくれたこのアイデンティティは、同時に、常に同一化すべき対象に向かつて成長することを要請するものでもあり、また自らを劣位な立場に置くものでもあつた。「プロレタリアの娘」として「生懸命勉強」して「仲間を代表するにふさわしい人間にな」⁽²²⁾りたいと述べる豊田は、自らを下位に置くことで、その階層的な権力構造を内面化していくのである。

3、「娘」のまなざし

ここでは、更に「娘」というアイデンティティがどのように語られていたかを見ていくために、豊田の小説に目を向けてみたい。(「綴方」というジャンルから出発した豊田の作品は、その殆どが一人称で自分や自分の周囲の人々を語つたものであり、前述の通り作品の大半は「娘」の視点から見た家族の生活を題材としたものである。ここでは、その最も長い作品として『人民文学』で計五回(一

九五〇年一月、一九五一年七月にわたって連載された「職人一家のゆくえ」を取りあげてみよう。やはりこれも『綴方教室』など豊田の綴方ではお馴染みの両親や弟妹たちを思わせる一家の生活を描いたものであり、語り手でもある「私」は豊田本人を思わせるつくりになっている。

「私」は、夕食後「経済学」に関する本の頁をばら／＼めくするような「学問のある」夫と結婚し、夫の母や兄夫婦と共に生活している。実家の富田家では、仕事熱心だが、とても賢いとは言えない父の初五郎と、富田家の万事を取り仕切る母のきわ、そして父親同様ブリキ職人になるべく見習い中の弟瀧夫とまだ小学生の妹とめ子の四人が貧困にさらされた生活を送っている。「私」は貧しい四人の生活をいつも気にかけて彼らに干渉しようとする。次の引用は、バケツ工場を開くために初五郎や瀧夫を雇い入れ、家族に住居まで提供してくれたものの、開業前に死んでしまった平井父子の通夜に行く場面である。

私は平井さんに対しては、義理どころか、親たちの生活が目茶苦茶にされたのを、腹だ、しく思っているくらいだった。しかし、行かないわけにもいかなかった。そのかわり、どんなことがあつても、当分はあの小屋におかしてもらうことを、がんばるようにすゝめよう、と私は考えた。(中略)

「どんなことしたつて、当分はこの小屋にたゞでおいでもらうようにするのね」

と、おこつたように云つた。きわは反射的にちよつとうなづ

いたゞけで、口にだしてはなんとも云わなかつた。平井さん親子の変死をきいたときから気になっていた心配ごとが一言の返事もしてもらえないのが不満だつた。私は、

「あーあ、今日は気胸で、くたげれちやつたのに……」
と思きせがましくそう云つて、うつぶんをはらした。⁽²³⁾

平井父子の突然の死で一家の帰属先がなくなることを心配する「私」は、住んでいた小屋にそのまま「たゞでおいでもらう」よう強い口調で主張する。しかし母は、その不安や怒りを共有しようと思せず、貧しい富田家を救おうとする「私」の勢いは空回りしてしまふ。こうした「私」の空回りは何度も反復されていく。次の引用はより顕著な例である。平井父子と同様、やはり瀧夫と初五郎の雇い主であった矢澤からの待遇の悪さに腹をたてた瀧夫と母が、矢澤と衝突してしまい、その相談を受けた「私」が話をつけに行く場面である。

さつきから瀧夫と何か話していた母は、片手をふりながら大声で私にいいはじめた。

「今夜のところはね、手間のことなんかいわずに、とにかく瀧がね、元通り異動を入れるつてことにしといてくれよ。また、なんだかんだ、しちめんどくさくなつても、つまんねからよ」(中略)

「それじゃ、なんのために、あたしが行くのよ」

「だからよ、さつきいつたように、異動だけ入れてくれつていつてくれりや……」

私は終わりまで聞かないうち、うるさそうに横を向いた。川岸の町の灯が、光つた黒い窓ガラスの中を、つうつつと流れて、電車は鉄橋を渡りきつた。

正当な理屈をふりかざして、矢澤の家にのりこむつもりだった私は、いつの間にか、母と弟の失敗を雇主にあやまりにゆく役目だけを持つて、錦糸町駅に降りた。⁽²⁴⁾

母と瀧夫が望んでいたのは、ただ「失敗をあやまりにゆく役目」であり、富田家のために「正当な理屈をふりかざして」のりこむつもりだった「私」の意気込みはやはり空回りせざるを得ない。「正当な理屈」、つまり状況に関係なく存在する超越的な秩序を順守していこうとする「私」の言い分は、「しちめんどくさくなつても、つまんねから」という状況に即した「母」の論理にいつもくじかれしてしまうのである。それどころか、生活していくためには嘘をついたり、他者に迷惑をかけることも厭わない「母」の狡猾さは、「娘」である「私」にも向けられることとなる。

「どうしたの？」

といいながら、切符売場に戻つた。

「これがよ、電車賃がたりないんだつてよう」

たくさんのたてじわを口のまわりに作つた母は、笑いをこらえた卑屈な表情で、瀧夫をあごでさした。瀧夫は母の言葉が終らないうち、足をならして、

「だ、だからもつと持つてこいつて、おれがいつたのにさ、

母ちゃんは……」

瀧夫も笑いをこらえている。

「だつてお前、それじゃ持つてくればよかつたに」

私は、にこりともしないで二人の顔を見くらべて、ぶんとして買物袋に手を入れた。まるでなれあいのけんかでも見ているように不愉快だつた。私は急にふきげんになつた。プラットホームに入つても、母たちと口をきく気にもなれなかつた。⁽²⁵⁾

こうして反復される「母」のやり方は常に「私」を「不愉快」にする。つまり「母」は、「私」の秩序感覚からは受け入れることの出来ない存在なのである。だが、現実には直面した時、「私」の秩序感覚は何の役にも立ちはない。女学校卒の義母がいるような中流家庭に嫁いでも、富田家に対し「一銭の金も出せ」ず、母に贈るモンペの生地を買うにもその費用について義母に嘘をつかねばならない立場にある「私」⁽²⁷⁾は、富田家が最も必要としている具体的経済的助力においては無力である。父や弟の雇用主に接する態度について母を諭しながらも「正直な話、私には今のところお米一升親たちにやるようもないのだから、いばつた顔もできない」、⁽²⁸⁾

「その証には、私の話が、話している私自身が嫌になるほど空虚であつた」などの語りに表されているように、「私」は具体的状況における自身の無力さを認識していく。そして、こうした無力さに直面した「私」は、自身が依拠する秩序自体を疑うことなく、更なる強大な秩序へとまなざしを向けることとなる。

しかし、私のしたことや、云つたことは、初五郎たちの生活をたてなおすには、なに一つ役にた、なかつた。私一人がいく

ら力んでみても、情けない職人一家のゆくえはこのようにしかならない。今後どうしたらいいのだらう、私が、しんげんにそれを考えはじめたのは、このときからだ。(中略) 荒川の家のさういごの晩を思うと、私はじつとしてはいられなかつた。それは私に最後のな、ある大きな決意をさせずにはおかせないようなものだつた。そしてその後まもなく、私は、人民の党——日本共産党への入党申込書に署名するようになった。⁽²⁹⁾

状況に左右されるのではない、普遍的な秩序ないしはルールを疑わない「私」にとつて、狡猾さを厭わない「母」のやり方は、「貧困」に起因する「情けない」態度に他ならない。「貧困」を打開することで、状況を改善し得ると見なす「私」は、秩序のよりどころとして「党」という更なる父権の権威を求めていくのである。こうして「私」と「母」のやり方は交差し得ないまま、この物語は終わりを告げる。ここに描かれていたような、外部的な権威への従属と同一化を志向する父権制下の「娘」というあり方を、階層的な権力構造を内面化することでアイデンティティを表現していく豊田自身の姿と重ねることは可能であろう。それを踏まえるならば、一九五一年という時点から共産党入党までのいきさつを語り直した「職人一家のゆくえ」は、豊田自身の中の父権の権力の構造を再認し、その起源を神話的に解き明かしていく物語なのである。父権の権力構造を内面化した豊田正子は、かつて自分が経験した、貧しい家の中の疎外された「娘」というアイデンティティによって集団的同質性を確保していくと同時に、〈書き手〉として周縁化されていくの

である。

4、変容する〈場〉

しかし一九五一年八月号を最後に、豊田正子は編集委員として関わっていた『人民文学』誌上から姿を消してしまふ。その活動期間は一九五〇年一月の創刊時から僅か一年に満たないものであつた。⁽³⁰⁾その後『人民文学』は『文学の友』(一九五四年一月—一九五五年二月)、『生活と文学』(一九五五年一月—一九五七年三月)と名前を変えた後、一九五五年の日共第六回全国協議会による共産党の統一に伴うかたちで『新日本文学』に合併されていくのだが、豊田は既にそこから姿を消していた。前章までで述べたような同質的集団における周縁化はもちろん、ジャーナリズム上においても特殊なジャンルの〈書き手〉としてのみ認められていた豊田正子は、二重に周縁化された存在に他ならない。そのような周縁的〈書き手〉である豊田が『人民文学』を離れることは、発表媒体を失うことでもあつた。こうして作品を発表することもなく、ジャーナリズム上から姿を消していた豊田正子の名前を復活させるのが、ベストセラーとなつた久野収・鶴見俊輔著『現代日本の思想』(一九五六年一月—岩波新書)収録の、鶴見俊輔「日本のプラグマティズム——生活綴り方運動——」である。鶴見はその中で、日本におけるプラグマティズムとして「生活綴り方運動」をあげ、『綴方教室』前後の豊田正子を「生活綴り方作家たち」の一人と見なした上で、そこに「日本のプロレタリア文学の発生」を見る。鶴見は一九四一年に刊

行された『粘土のお面』掲載の「あとがき」から、「正直一途のお父ちゃんの力では自分たち一家は生きられぬ、自分たち一家をささえているのは、嘘つきのお母ちゃんのチエだ」という認識に到った豊田正子の姿を見出し、置かれた状況に即して「正直の倫理を離脱」したとして、「福本イズムよりも高い唯物論的理解に達している」と評価していく。しかし鶴見が引用している『悲しき記録』というテキストに描かれた「私」は、前章で取りあげた「職人一家のゆくえ」における「私」同様、父権的権威に転移することで「母」との軋轢を繰り返す「娘」であり、鶴見の見解とは大きく異なる様相を見せているのだが、ここではその相違点に注目するのではなく、このような読みかえが行われた背景について考察を進めていくこととしたい。それは豊田正子が回収されていく文脈を追うと同時に、この時期に起きてくる「書くこと」への意味付けをめぐる問題について追うことにもなるだろう。

吉田傑俊は鶴見の「戦後思想」を「つねにマルクス主義との緊張関係において成立している」と指摘しているが、「日本のプラグマティズム——生活綴り方運動——」における鶴見の「生活綴り方運動」の称揚が、その前章として置かれた「日本の唯物論——日本共產党の思想——」の対照項としての役割を果たしていたことは明らかである。そこでは、現象から出発することで「思想のレヴェル」に達するという「生活綴り方運動」の方法が「思想のレヴェル」から「構造、さらに現象についての推論においてくる」という思索の手づき」を取る「日本の唯物論」³³とまったく逆の過程として

語られていくのである。日高六郎は、「生活記録運動」（生活綴り方運動）の「熱心な推進者たち」の「多くはマルクス主義者」たちであったと指摘しているが、「生活綴り方運動」と「日本の唯物論」を表裏の関係と見なすこの視点に注目してみると、「思想のレヴェル」に到る「思索」の方法としての「生活綴り方運動」という側面が浮上してくる。

児童を「書き手」としていた「生活綴り方」が、その対象年齢の幅を広げていくこととなったのは、無着成恭編の『山びこ学校』（一九五一年三月 青銅社）や大関松三郎著・寒川道夫編『山芋』（一九五一年二月 百合出版）が注目されて以後のことであった。プラグマティズムに即した「生活綴り方運動」の熱心な推進者、実践者となる鶴見和子は、『山びこ学校』を読んで感動していたところ、『山びこ学校』出版に尽力し、自らも『新しい綴り教室』³⁴を出版していた国分一太郎から第一回作文教育全国協議会で話をしよう依頼された。「ああ、その会へゆけば、あの無着成恭という人に会えるんだなあ」と思った³⁵と述べている。また、鶴見和子はその第一回作文全国協議会（一九五一年八月）に参加したことを契機として「子どもの人格形成の手段として生活綴り方が有効であるならば、それは、おとなの思想形成としても使うことができるだろう」と考え「東京に帰りましてすぐ、生活を綴る会という小さな集りを作った」と述べており、³⁷『山びこ学校』の評判が、鶴見等による「おとな」の「生活綴り方運動」の展開に大きく関わっていたことを示唆している。このように生活綴り方教育をモデルとした「生活綴り方運動」は、「大

人がうまれかわるため」の「生活綴方的自己教育」と見なされ、⁽³⁸⁾
 「自分たちの生活を、自分たちで書きたい、という欲求から発した」「日常の生活のまん中で」行われる「事業」として、「ものを書く」という行為が意味付けられていく。

また、一方で『山びこ学校』や『山芋』が、この時期に展開されていく「国民文学論」の文脈で受容されていたことにも注意が必要だろう。白井吉見は、『山びこ学校』を「日本の国民生活の広さと深さと複雑さ」を示したものとし、「日本の現代小説」の「実に狭くて、浅くて、単純で、いずれにせよ、特殊な一部分にすぎないといふこと」を逆照射するものとして評価している。⁽³⁹⁾つまりここでは「素人性」に立脚した「生活綴方」が「日本の国民生活の広さに相応」し得るものとして、あるいは「文壇小説」のあり方を批判し得るものとして「国民文学論」に結び付けられているのである。このような「素人」と「文壇」を前提とした「生活綴方」と「国民文学論」との接続は、例えば一九五五年に刊行された国分一太郎編「岩波講座 文学の創造と鑑賞 第三巻」に見てとることができよう。その「序」には、「文学の創造」の「初歩的・基礎的な事項を、できるだけ幅広く取扱うことを特徴」とした上で、「広い層の国民の間に、いま力づく芽ばえている自己表現の意欲と力を、その素材なよさを、失わないようにしながら」「育てていきたい」とし、「いわゆる文壇の文学の方向からではなく、おもに国民の自己表現・文学創造の初歩的欲求の方向から、書き方と考え方を究明した」と書かれている。⁽⁴⁰⁾

このように「文壇的文学」からの切断と結びつけて語られる「書くこと」の意味は、「アマチュア作家」の「書く」行為にも影響を及ぼしていく。例えば、一九五六年の『文学』に掲載された「生活記録と文学——京都では、生活記録はどう進められてきたか——」は、京都文学サークル協議会や新日本文学会京都支部、日本文学協会京都支部などの文学団体による総評京都支部へのよびかけで開設された「京都文学教室」(一九五五年四月開設)の活動を報告したもののだが、九十名の入学者の内三ヶ月で三十五名が退学したことについてふれ、「止めていった人の中には、文壇を志した人が多かった」と指摘している。⁽⁴¹⁾このことは、「文学教室」として開催された場が、「職業作家」をめざす修業とは異なる要素を含むものであったことを教えてくれる。また国分一太郎は『新日本文学』において、「ひととおり書けるようになったから」といって「文壇や文学の世界から話を聞こうと、目を向うに向けてキョロキョロするよきり」、「仲間たち」の方を向いて「じつくりと、事実をみる態度、事実から考えをつくりだす態度を養うために、文章を書かせた方がいい」として、「文壇や文学の世界」に近付こうとする態度を戒めている。⁽⁴²⁾この国分と野間宏によって一九五五年に創刊された『生活と文学』が「人民文学」の流れを汲んだものであることは先にもふれたが、⁽⁴³⁾「素人」の「書き手」による作品が誌面の大部分を占めるこの雑誌において、「小説」や「詩」と並んで多くの「生活記録」が掲載されていること、あるいは「書くこと」を「文壇的文学」から切断する方向で書かれた「文章の書き方」(国分一太郎)が連載され

ていることなどからは、(44)「アマチュア作家」を含む「素人」が集う場においても、「生活綴り方」的な「自己教育」としての「書くこと」が浸透し始めていた様子をうかがうことができる。そしてその浸透によって、「京都文学教室」における退学者たちのように、そこから退場せざるを得ない人々が出始めていたこともまた事実であろう。「生活と文学」において「生活記録」と「文学」との関係が繰り返し論じられていることや、「文学」「新日本文学」において「生活記録(綴り方)と文学」というテーマが盛んに取りあげられていることから、「自己教育」としての「書くこと」と「文壇」を志す人の「書くこと」との区画が必要とされていた状況をうかがうことができる。(45)

こうした中で「書き手」の特権性は薄れ、「書くこと」は誰もができる行為と見なされていく。臼井吉見が指摘したような、「特殊な一部分」に過ぎない「文壇文学」への異議として要請された「素人」として「書く」という行為の創出は、その役割を充分に果たしていったと言えるだろう。日高六郎は、「市民的な(父)よりの封建的な(母)のなかにむしろ根源的に革命的なエネルギーを発見しようとするような思考形式」を「生活記録運動」の傾向としている(46)が、洗練されていない「封建的な(母)」に「エネルギーを発見」とするという視線が、裏返せば「市民的な(父)」のあり方に対する批判的まなざしであったことは明らかである。鶴見俊輔が豊田正子を評価する際、「正直の倫理」に代表されるような父権的権威にではなく、「嘘つきのお母ちゃん(チエ)」の側に帰属させて語ってい

たのも、まさにこのような「生活綴り方運動」の理想的モデルとして豊田正子が発見されていたからに他ならない。この時点、即ち一九五六年の時点で、「人民文学」からも「新日本文学」からも離れ、共産党の主流からも距離を置いた立場にあった豊田は、それゆえ「何のイデオロギーの仲立ちを経ず」、(47)「書くこと」(＝「実感を辛抱よくつみかさねること」)によって「階級社会」という「問題」を自覚し得た「書き手」として「生活綴り方運動」の文脈に回収されていくのである。こうして、父権的権威への対立項になり得ると見なされた豊田正子は、藤田省三が言うように「外から感性的に与えられる諸記号から肉体的な体験を獲得する」理解によって体験を重ねながら、世界観にまで達する道程(「傍点原文」を体現した「具体的な事例」とされ、「理論外的要素を思想と理論的認識にまでたかめ、或はつなげるプロセス」について考えるための好例と見なされていくのである。(47)もちろんこのような視点は、「思想のレヴェル」から「現象」に降りてくるという帰納法的な「日本の唯物論」のあり方が見落としていた「自己成長」という演繹的方法を呈示した点で画期的なものだったに違いない。だが、豊田正子という一人の「書き手」に注目するならば、このような視点の導入も、結局彼女を「プロレタリアの娘」というアイデンティティから解放することには繋がらなかった。鶴見等によってその名前をジャーナリズム上に復活させることとなった豊田正子は、その後「書き手」としてもまた復活していく。

5、おわりに

一九五九年、豊田の新作としては約十三年⁽⁴⁸⁾ぶりに刊行された『芽ばえ』は、「日本のプラグマティズム——生活綴り方運動——」で鶴見が引用し、賞讃した『悲しき記録』をベースとした自伝的長編小説である。その「あとがき」には、『悲しき記録』が鶴見から「絶賛というほめ言葉をのべ」られたことにふれた上で、次のように書かれている。

すくなくとも私はこの広い世界にみちみちている貧しい人びと、働く人びとにかわって世に訴えたいと思ってペンを走らせたのだ。中でも母は、この作の中で特に悲しむべき役割を果たしているが、かつて『粘土のお面』（昭和十六年中央公論社出版）のあとがきの中で、「母のしてきたことがよかつたにせよ、わかつたにせよ、この母のおかげで私共は餓死せずにすんだのだ」と書いているくらいで、私は今日でもこの年老いた母を愛し、一日でも余計に生きていくことを願っている⁽⁴⁹⁾。

鶴見が、「母」に帰属するへ豊田正子へ像を語る際に用いた『粘土のお面』「あとがき」の同じ部分を引用することで、「母」への愛情を示そうとする豊田の姿は、鶴見が作り上げた像に同一化しているように見える。しかし母親の不倫や大木頭一郎による印税独占などを題材とする『芽ばえ』の執筆について、「この悲劇は決して単に我が家、我が親たちにだけ関するものではない」とし、「この広い世界にみちみちている貧しい人びと、働く人びとに

かわって世に訴えたいと思ってペンを走らせた」とする豊田の姿勢は、明らかに鶴見等が評価したようなへ豊田正子へ像からずれてしまふ。こうして出版された『芽ばえ』は、あとがきに記されたような「社会の下づみの人々に共通した貧しさ」と苦しみ」というコードとは無関係に、『綴方教室』の栄光に隠されていたスキャンダルを暴露した作品として、皮肉にもマスコミに取りあげられていくこととなる⁽⁵⁰⁾。

その後、豊田正子は「母の生涯」(「思想の科学」一九六三年二月)、『おゆき』(一九六四年七月 理論社)などで繰り返し「母」を描き続ける。江馬修との別れの後、親しく交遊していた田村秋子との間に「母」と「娘」の関係を投影し、その最期を看取るまでの悲しくも至福の時を描いた『花の別れ——田村秋子とわたし』(一九八五年七月 未来社)は、豊田の作品において初めて「母」と一体化し得た喜びが語られたものでもある。「生活綴り方運動」の理想的モデルとされ、「母」の側に帰属すると見なされた豊田は、パフォーマティブにそこへ身を投じていくことで、「母」の「娘」というアイデンティティを形成しているようにしたのである。そこに見えてくるのは、やはり「娘」という立場で書き続ける豊田正子の姿であった。

豊田正子という決してメジャーではない作家を追うことは、豊田個人の問題を浮かび上がらせると同時に、「文壇」の周辺のな場所⁽⁵¹⁾で生じていたへ書くことについて考察することでもあった。豊田がへ書き手として関わっていた『勤労者文学』と、モデルとして

豊田の名が呼び戻されることとなった「生活綴り方運動」とを同じレベルで語ることはできないが、しかし、求められる「書き手」のあり方に同一化することでアイデンティティを形成していこうとする豊田の姿勢はどちらにも共通していた。このように見ていくと、ある特定の性質をもった「書き手」ないし「書き方」が求められる場にたまたま置かれることで、求められたアイデンティティを自動的に欲望し、形成してしまおうという構造がそこに浮上してくる。しかし同時に、こうして生み出される「書き手」は、固有性を付与されることなく、周縁的な場所での無名の存在であり続けることを余儀なくされる。「書き手」を生産しながらもその個々の名前を消していくというシステムにおいて、名前を刻印することもないまま消えていった多くの書き手たちが存在していたこともまた事実であろう。その中で、たまたま名前の浮上という出来事が起こった豊田正子は、このシステムの存在を可視化し得る稀なケースであったと言わざるを得ない。それゆえ豊田正子を論じることは、周縁化され、消えていった多くの「書く」人々の問題にも繋がっているのである。

注(1) 大木顕一郎・清水幸治共著『綴方教室』(一九三七年八月 中央公論社)

(2) 豊田正子『続綴方教室』(一九三九年一月 中央公論社)、豊田正子『粘土のお面』(一九四一年一月 中央公論社)

(3) 拙稿「綴方」の形成——豊田正子「綴方教室」をめぐる——『語文』(二〇〇一年二月) 参照。

(4) 成田龍一「『現場』の語り」『歴史』はいかに語られるか(二〇〇一年四月 日本放送出版協会)

(5) 豊田正子「統思ひ出の大木先生」(一九四六年九月 柏書店)。実際の生活においても、豊田は大木顕一郎の養女として、大木家に住み込んでいた。しかし、これは「綴方教室」に関連する収入を独占するための大木の策略であり、養女としての法的手続きは行われていなかったと後に豊田は述べている(「綴方教室の頃のこと」『婦人朝日』一九五四年四月)。

(6) 豊田正子「花の別れ——田村秋子とわたし」(一九八五年七月 未来社)

(7) 「在中国の日本女性から」(豊田正子「斎藤繁子さんへの返事」)『人民文学』(一九五一年八月)

(8) 豊田正子「花の別れ——田村秋子とわたし」(前掲)

(9) 「黄金バット」『勤労者文学』(一九四七年七月)、「間に合わない平和投票」『文学サークル』復刊第二号(一九五〇年二月)。本文中でもふれるが、「人民文学」には編集委員の一人として参加し、作品の発表以外に編集後記なども担当している。

(10) それと同時に「綴方教室」が旧プロレタリア文学に接続し得るものであったという点も見逃せない。実際、一九三八年三月新築地劇団上演による「綴方教室」ブーム以前、即ち「綴方教室」が刊行された一九三七年八月から一九三八年二月までの時点でこの本に言及した稀有な例としてあげられるのが、中野重治や本間唯一などマルクス主義周辺の書き手による評価であること(中野重治「日本語の問題——『綴方教室』と言葉」『都新聞』一九三七年一月二〇日、本間唯一「綴方教室」『唯物論研究』(一九三八年二月)、また「綴方教室」刊行当初の広告に青野季吉、徳永直、下村千秋らによる推薦文が掲載されていること、そして新築地劇団による上演が決定されたことなどを考え合わせると、豊田の綴方が当初は旧プロレタリア文学的コードによって読まれていた可能性も否定できない。

- (11) 本多秋五「民主主義文学内部の分派闘争」『物語戦後文学史』(一九六六年三月 新潮社)
- (12) 秋山清「従属精神への挑戦」『文学の自己批判』(一九五六年一〇月 新興出版社)
- (13) 窪田精は、「勤労者文学」を前面に押し出そうとした徳永直とそれに批判的だった小田切秀雄との論争についてふれ、「勤労者文学」をめぐるこうした「対立」が「人民文学」にまで「尾をひいて」いたと述べている(『文学運動のなかで 戦後民主主義文学私記』一九七八年六月 光和堂)。本稿では「人民文学」がヘアマチュア作家の発表媒体として、「勤労者文学」の流れを引き継いだものであることに注目する。
- (14) 「新日本文学」(一九四六年六月)
- (15) 「編集後記」『新日本文学』(一九四六年一〇月)。その姿勢は「新らしき文学のために」(『新日本文学』一九四六年七月)など新人育成に関する特集や、それ以前は東京支部で行われていた創作コンクールを第三回から中央委員会主宰として大々的に開催し始めた(『新日本文学』一九四七年五月、六月に募集広告掲載)ことなどからもうかがえる。
- (16) 徳永直「推薦の言葉」『新日本文学』(一九四六年七月)
- (17) 矢崎弾「日記でもよい」『新日本文学』(一九四六年七月)などに見られるように、育成のための指導は「まず書いてみよう」と勧める態度が貫かれていた。
- (18) 岩上順一「新人の達成」『新日本文学』(一九四八年一月)
- (19) 田所泉「新日本文学会の二〇年」『新編「新日本文学」の運動』(二〇〇〇年一〇月 新日本文学会出版部)
- (20) 新日本文学会編「勤労者文学選集一九四九年版」(一九四八年二月 新興出版社)
- (21) 鈴木三重吉「製作指導の要点と綴方の教育的意義」『綴方読本』(一九三五年一二月 中央公論社)
- (22) 「在中国の日本女性から」(豊田正子「斎藤繁子さんへの返事」)『人民文学』(前掲)
- (23) 豊田正子「職人一家のゆくえ(五)」『人民文学』(一九五二年七月)
- (24) 豊田正子「職人一家のゆくえ(二)」『人民文学』(一九五二年二月)
- (25) 同右
- (26) 豊田正子「職人一家のゆくえ(四)」『人民文学』(一九五二年五月)
- (27) 同右
- (28) 豊田正子「職人一家のゆくえ(二)」『人民文学』(前掲)
- (29) 豊田正子「職人一家のゆくえ(五)」『人民文学』(前掲)
- (30) 姿を消した理由について、周囲の人々の反感などが言われているが(天児直美「炎の燃えつきる時 江馬修の生涯」一九八五年九月 春秋社)、詳細は不明である。
- (31) 角川文庫版「綴方教室」(一九五二年二月)の巻末に附録として掲載された綴方三篇を指す。「あとがき」によれば、この三篇は数え年十七歳の頃に書かれたものだが、内容の深刻さから未発表のまま忘れられていた。角川文庫版「綴方教室」は大木頭一郎が改稿する前の原稿の発見に伴いそれを底本として刊行されたものだが、その時一緒に発見された未発表原稿三篇に「悲しき記録」という総題が付され、初収録されたものである。
- (32) 吉田健俊「鶴見俊輔——戦後思想としての日本のプラグマティズム」『戦後日本の哲学者』(一九九五年九月 農山漁村文化協会)
- (33) 鶴見俊輔「日本の唯物論——日本共産党の思想——」『現代日本の思想』(前掲)
- (34) 日高六郎「生活記録運動——その二、三の問題点——」『講座生活綴方』(一九六三年四月 百合出版)
- (35) 国分一太郎「新しい綴方教室」(一九五一年二月 日本評論社)
- (36) 鶴見和子「生活記録運動の意味——経験の発生の場へ」『新日本文学』(一九八五年一〇月)
- (37) 同右。それより早く澤井余四郎等によって「生活記録運動」は行わ

れていたが、運動が全国的かつ体系的に展開していくのは、鶴見和子、国分一太郎等の力によるところが大きい。

- (38) 鶴見和子「生活綴方教育にまなぶ」「生活記録運動のなかで」(一九六三年一月 未来社) ※初出「図書」(一九五二年一〇月)
- (39) 白井吉見「展望」「展望」(一九五一年五月)
- (40) 「岩波講座 文学の創造と鑑賞 第三巻」(一九五五年一月)。この第三巻は「良質の、文壇的文学をふくむ新しく新しい本格的文学の創造方法をあきらかにする第四巻につづく」(序)とあるように、「本格的文学」への前段階として設定されている。
- (41) 片山悠、上野瞭他「生活記録と文学」——京都では、生活記録はどう進められてきたか——「文学」(一九五六年三月)
- (42) 国分一太郎「生活記録と文学運動」(『新日本文学』一九五五年五月)
- (43) 国分一太郎は、一九五五年七月の日共第六回全国協議会における共產党統一に伴い、党本部の非常勤文化部長となっており、また新日本文学会の常任幹事にもなっている。その意味で「人民文学」で活躍していた野間宏と組んで創刊した「生活と文学」(一九五五年一月)——一九五七年三月)は、統一への流れを汲むかたちで用意された(ヘアマチュア作家)を含む(素人)の(書き手)のための雑誌であったと考えられる。
- (44) 国分一太郎「文章の書き方」(一、四)「生活と文学」(一九五五年一月)——一九五六年四月)
- (45) 例えば「生活と文学」では、竹内好「生活記録と文学」(一九五五年一月)の他、野間宏が「生活綴方・記録と小説・文学」を計八回にわたって連載している(一九五五年一月)——一九五六年六月)。また、「新日本文学」では、前掲の国分一太郎「生活記録と文学運動」、小野十三郎「生活記録からの出発」(一九五五年五月)、「文学」では前掲の片山悠、上野瞭他「生活記録と文学」、小野十三郎「生活記録のむつかしさ」——京都における生活記録の進め方の報告を読ん

で——(一九五六年三月)、針生一郎「生活記録と文学」をめぐって(一九五六年四月)などが見られる。また一九五六年三月の「文学」には、「生活記録(綴方)と文学」という課題で募集された論文の入選作三篇が掲載され、「入選論文を読んて——特に橋本氏に答える」と題した木下順二の文章も寄せられている。

- (46) 日高六郎「生活記録運動——その二、三の問題点——」(講座生活綴方)(前掲)
- (47) 藤田省三「現代日本の思想」の思想とその批評——久野収・鶴見俊輔両氏の著書の問題性——「思想」(一九五七年三月)
- (48) 新作の単行本としては一九四六年刊行の「続思ひ出の大木先生」以来となる。
- (49) 豊田正子「芽ばえ」(一九五九年六月 理論社)
- (50) 豊田正子「あとがき」「芽ばえ」(前掲)
- (51) 豊田正子「綴方教室の私は死んだけれど」(『婦人公論』(一九五九年七月)、「汚された綴方教室」「週刊新潮」(一九五九年七月二七日)などの掲載や、故大木頭一郎の夫人である大木みや子が「豊田正子への公開状」(『週間サンケイ』一九五九年一〇月)を書くなどスキャンダラスな事実の暴露本として取りあげられた。
- (52) 豊田正子が「母」を描き続けた点については、テキストに即したより具体的な論考を必要とするだろう。特に、「花の別れ——田村秋子とわたし」にあるような田村(母)との一体化による幸福感は、殆ど寝たきりの状態になる田村と介護する「私」という関係性を踏まえて見ていく必要がある。これらについては、稿を改めて論じることとしたい。

近代文学のなかの短歌・短歌のなかの〈女〉

——女歌論議をめぐつて——

阿木津 英

一 「女歌」という用語

「女歌」という語が初めて歌学書に現れるのは、平安末期、十二世紀半ばに成立した『袋草子』であるという。ここでは普通に女の歌の意味だが、十三世紀初頭に成立した鎌倉期の歌学書『八雲御抄』や『明月記』では、女房歌人あるいは女房歌の意として使われた。⁽¹⁾しかし、歴代の主要な歌論書にはほとんど現れて来ず、わたしの乏しい探索では、賀茂真淵による「ますらをぶり・たをやめぶり」の論が出てのち、香川景樹の『新学異見』（一八二一年頃成立）中に「つよき世はつよきながらにして女歌はめめしく、さやかなる世はさやかならにして男歌はををしく」とあるのを見るくらいである。ここでは、女の作る歌の意味で使っている。「女歌」という語は、和歌における歌論用語としてはほとんど定着していなかったといつていいだろう。

明治以降、近代短歌においても、「女歌」という語が一般に通用

するようになるのは、ようやく戦後になってからのことであった。一九五一年、『短歌研究』一月号に掲載された折口信夫（釈迢空）の評論「女流の歌を閉塞したもの」をきっかけとし、五四年の中城ふみ子の登場を経て、その後の葛原妙子・近藤芳美・菱川善夫・上田三四二らによる評論言説のなかで「女歌」という用語が定着していくのである。

折口信夫は、すでに戦前から独自の意味を帯びた「女歌」という語を使用しているが、しかし、用語としてそれほど頻用しているわけではない。「女流の歌を閉塞したもの」の文中においても、「女歌」「女の歌」「女歌の伝統」「女性の短歌の伝統」「女性歌」「女流の歌」「女の人の歌」と言い換えて、一定しない。アララギ批判として歌壇を揺るがしたこの評論は、当時歌集を続々と刊行しはじめた女人短歌会（四九年結成）への援護射撃であったと思われるが、これによって、それまで歌壇でほとんど問題にされなかった女性の歌に男性歌人の目が注がれるようになり、「女歌」という語が短歌

誌上に現れるようになった。やがて、中城ふみ子のスキヤングラッな登場ののち、女性の歌をめぐって賛否の論議が戦わされつつ、「女歌」は歌論用語として定着していく。

今日、「女歌」という語は、歌壇のみならず研究分野や一般ジャーナリズムにおいても使われるようになったが、しかし、その定義は必ずしも一様ではない。歌壇ではその定義をめぐって幾たびも議論が起こり、ときに紛糾混乱した。

二 歌壇における三つの女歌論議

大きく分けて、「女歌」という語は、たんに女が作った歌とするものと、女が作ったというばかりではなく、むしろ方法とか手法・文体の問題であるとするものと、二通りの使われ方がある。

「女歌」をめぐる論議は、中城ふみ子など当時の女性の歌の評価をめぐってなされた五十年前後を第一回とすれば、七〇年初頭「女歌」の終焉をめぐってなされたものを第二回、八四年前後に逍空の「女歌」解釈をめぐってなされたものを第三回とすることができ。このおよそ十五年ごとに起こった女歌論議は、いずれもが女性の側からの「女流の歌を閉塞したもの」の再提起であり、「女歌」についての再解釈を促すものであった。また、「女歌」とは女が作った歌をさすのか、むしろ方法や手法・文体をいうのか、という問題をめぐるものでもあった。さらに、この三つの論議は、それぞれに歌壇に新しい課題をもたらし、あるいは時代の転換点を象徴するものとなったといっている。

① 中城ふみ子らの評価をめぐる五十年前後の女歌論議

一九五四年、『短歌研究』が募集した五十首詠第一回に、当時の編集長中井英夫の推輓を受けて中城ふみ子の「乳房喪失」が入选、その大胆な性愛をうたった歌と、乳癌患者で余命の限られた境遇とが、歌壇を超えた話題となった。スキヤングラッな増嶋と化した歌壇を残して本人はたちまちのうちに死んでしまったが、その歌に対する反論・反感は、女人短歌会創立メンバーの五島美代子や、そこから育ちつつあった森岡貞香や葛原妙子など難解派といわれた女性たちの歌とともに、とくに男性歌人から厳しい批判が繰り返された。

たとえば、歌壇の長老といふべき尾山篤二郎は、「たとへば貴方の息子さんの配偶に『乳房喪失』の著者の中城ふみ子のやうな人を選べ得ますか、といふことを聞きたい。私にはとても出来ない」(『女人歌の在方の問題』、『短歌研究』五四年一〇月号)と痛罵した。また、当時三十代半ばの歌人であった山本友一は、「素朴な清新さを——現代女流歌人に対する希望」(『短歌』五四年十二月号)において、無名女性の短歌には素朴な清新さを感じるが、「女流有名人」「女流人気作家」の歌には「言葉を痛めつけた括屈した語法、肉体をくねらせたやうなやらしい表現、何の事か判らない比喩、ひとりよがりの観念、何か無理に存在を主張した様な態度、周囲に対する好意のこもらない目」などなど、「マゾヒズムとも云へる潮流」があると批判した。さらに、戦後の歌人として新進気鋭の近藤芳美は、「女歌への疑問——現代女流歌人への注文」(『短歌』同)で、女

流作者たちの歌の根底に、「自己の内部的なものを、外部との関りの中に常につけ、見詰めて行く」と云つた精神營爲の欠如」を証する『いのち』への独断」「内部衝迫への盲目的な信仰」を指摘し、「もつと清潔な知性に満ち、もつと現代の共感と理解の上に立ち、それで居ながら女だけの知る悲哀を情感として静かにたたへた」女性の歌を求めた。そして、「女歌」という語を、「不潔な語感」「粘液質なことば」「歪んで奇型児めいた流行的な『女歌』と嫌悪した。

これらに対して、葛原妙子は、翌五五年の春、『女歌』といふ言葉が、暗黙のうちに、或種の女流歌人の作品を指す合言葉となつてゐるらしく、しかもそれらを一括して『不誠実な作品』といふ折紙がつけられようとしてゐる」（「再び女人の歌を閉塞するもの」、「短歌」五五年三月号）と、反論したのである。尾山篤二郎の「博学な男の叱言」はともかく、自分より年下の山本友一やことに理論的で説得力ある近藤芳美の発言は、戦後ようやく女性の歌がかたちをなしつつある現在において「再び女人の歌を閉塞」させるものであるといふのであつた。

ここで男性歌人たちのいう「女歌」は当然、女の作る歌の意である。その語の内容は、「化粧の濃い」「自虐的な」「ポーズのある」「不誠実な」「不潔な」「歪んで奇型児めいた」「独善的主観的な」「女の性と生理に根ざした」「動物じみた生理的内部衝迫を過信する」ものであつた。男性歌人たちは、中城ふみ子をはじめとする五島美代子・森岡貞香など当時の女流歌人の歌をこのようにマイナ

ス・イメージを塗り重ねた「女歌」で一括りにし、一方、無名の女性歌人の「素朴な清新さ」をたたえた。また、当時二十代の女性新人歌人たちの「清らか」で「知性に満ち」それでいて「一種の悲哀感」の流れている歌をたたえた。

当時の三十歳以下といへば、戦後の男女平等教育による新しい学校制度の下、ようやく女性も大学に進学できるようになった初めての世代であつたが、これに対して葛原妙子は、「今日中年女性の周りには『家族制度』といふ厚い壁が、いまだに厳然と存在して」いるのだと、反論した。「鬱屈したものが内部にわだかまつて」いる中年婦人の歌に比べて、なるほど三十歳以下の「彼女達はほぼ男女同格の知性を身につけ、余り家庭の束縛も意識せず済む立場であり、さうした人達の歌ふ歌が、中年女性の歌にくらべて美しいと、近藤氏が言はれることは、よく了解出来る」。しかし、「封建時代とさして変らない自我抑圧の中に生きてきた」中年婦人たちが、『自ら』に真に目覚めた」のもつい最近のことではないか、といふのである。

葛原妙子は、「現代のインテリゲンチヤの一つの型」である近藤芳美の発言には、「氏自身の資質による女性の作品に対する嗜好とでも言ふべきもの」があると喝破した。「男の叱言」のような尾上篤二郎の発言はもちろん、「素朴な清新さ」を求めた山本友一も、結局それぞれに自分好みの女性イメージをその作品のうえに求めているのであり、そこを指摘したのであつた。三十代以上の女性の内部に鬱屈とした、心の乾いた、醜い、粘着した情感があるのは事実

だが、なぜ男性はそれを否定して女性の歌に「清新さ」「清潔さ」「清らかさ」だけを求めようとするのか。男性でも、いまの社会機構の中で己を遂げがたくなっているための鬱屈の情、また機械文明の中の人間存在の希薄さ、そういった醜い乾燥した情緒をうたおうとするのではないか、というのである。三十代以上の中年女流と三十歳以下とを分けることについても、男性を戦争による傷痕派と二十五歳以下の無傷派に分けて論ずることと同じように意味がない、と指摘する。ようするに今の言葉で言えば、男性歌人は、女性歌人の作品を批評する際に二重基準を使用していると、葛原妙子というのが求められている。作家である以前に、男性好みの女性であることが求められているような、そのような女性作品に対する批評のあり方の総体に、葛原妙子は反論したといつてよい。

そのうえで、女歌論議を、方法や手法・文体の問題すなわち写実・反写実の問題へと移し変えていく。

葛原妙子は、「女歌」という言葉を、「折口氏が『女性の本質にかつた短歌』を説くで、だてとして選ばれたに過ぎず、役目はそこで終了してゐる筈」とする。しかしながら「女性の本質にかつた歌」があることを否定したわけではない。「私は女性の本質から言つて、その短歌が男性のそれよりも、より情的であり感性的なものである事は、やはりどのやうな時代が来てても否定出来ないのではないかと思つてゐる。従つてそのやうな本質を利用して、女性には主観を伸張した発想をゆるす時に、男性とは違つた特色ある文学を作るものであらうと思ふ」とする。そして、とかく批判されている

「女流作品の『方法』は、この主観的な表現をとるものであり、『反写実的な立場』であるとするのである。

このように、一九五五年の段階での「女歌」とは、中城ふみ子の評価をめぐつて増幅された「女の性と生理に根ざ」す歌を指し、そこには女性のマイナス・イメージが塗り重ねられていた。これに抗議した葛原妙子は、「女歌」という語をすでに無効のものとし、写実／反写実・現実主義／反現実主義といった方法論議へと問題を開いていく。葛原妙子自身、反現実主義的な歌を拓いてゆき、前衛短歌運動のなかで独自の位置を占めた。五五年の女歌論議は、前衛短歌の時代への結節点ともいえるのである。

②「女歌」の終焉をめぐつてなされた七〇年初頭の女歌論議

敗戦から二五年を経た一九七〇年前後は、戦後短歌を「史」としてみることができるようになつた時代でもあつた。共同研究「戦後短歌史」を連載していた「短歌」（角川書店）では、第三十章を「三十年代の女流群像」（七〇年七月号）に当て、上田三四二が担当した。上田三四二は、冒頭、「女流の作品を単独に取出すこと」に消極的な姿勢を見せながら、中城ふみ子以後、昭和三十年（一九五五年）代前半を中心に紙数を費やす。そして、最後に、「昭和三十五年を頂点とする全国民的な政治の季節は、『整理期にきた前衛短歌』をゆすぶつたとおなじように、『曲り角に來た女流短歌』をも押し流した」とし、昨今若い女性たちの性の意識もすっかり変わったのを見ればそれは「女流の眞の開放の道が見つかつた」からかもしれない、そうだとすれば、「負の環境における女性の生理や感性

に基礎を置く『女歌』はすでに過去のものとなったのであり、したがって、昭和三十年代の後半に亘って、引続き女流だけを別個に上げるこの意味は、なくなつたとしていい」と結論した。

この「負の環境における女性の生理や感性に基礎を置く『女歌』」とは、すなわち①で述べた「女歌」である。これをすでに過去のものとして括り捨て、昭和三十五年（一九六〇年）以後の女性の歌は別個に取り上げるほどのものでもないと暗に括つた上田三四二に対し、馬場あき子は翌年、「女歌のゆくえ」（『短歌』七一年三月号）において、そもそも逍空のいう「女歌」とはそんなものではなかつた、と反論したのである。

馬場あき子は、冒頭まず、衾の下に桐火桶を抱いて作歌したという俊成の態度は決して男性的なものとはいえないと述べ、「この短歌詩形に託される情感は、もともと私的な女々しさの情に発するものと考えられていたのではなかつたか。したがって、へ女歌」の興隆に期待を寄せつつ、しばしば短歌の伝統的うたくちの衰弱をなげいた逍空の場合も、対象はあながち女人にのみあつたとはいえないのである」と述べる。逍空の言う「へ女歌」とは単に女の作る歌という意味だけでなく、非アララギ的なへ艶への美意識の伝統への愛惜」であり「日本的な表現技巧への愛着であつた」、すなわち逍空は「二つの対照的な歌風の、一方の衰弱を嘆いたのであつて、アララギを男歌と断定したと同様の感覚をもって、王朝的なへ艶」の伝統を継承した歌を女歌と称したのである」と主張した。

すなわち、簡略に言えば、逍空の女歌論は、「ますらをぶり」万

葉集—アララギ—男歌」に対する「たをやめぶり—古今集以来の和歌の伝統—非アララギ（明星—女歌³）」という、この「二つの対照的な歌風」における「女歌」系統の衰弱を嘆いたもの、とする。与謝野晶子や山川登美子を評価した逍空のいう「女歌」とは、王朝和歌のへ艶への伝統を継承したものを指すのであり、そのような「日本的な表現技巧」「艶や幽玄の趣、またはそれを生む技法」を指すものであつて、たんに女性が作る歌という意味ではなかつた、とするのである。

戦後二五年を経、前衛短歌勃興の時代を経て、中城ふみ子の評価も変わり、「女歌」という語に感情的なあからさまな反感を示すような男性歌人たちの批評言はずでなくなつていた。しかし、上田三四二の評論に見るように、相変わらず「女歌」は「女性の性や生理」に根ざした歌を意味するのであり、馬場あき子の反論は、そのような本質主義的な解釈に抗議するものであつたといつていい。さらに、「女流の眞の開放の道」が見つかったのだから「女歌」はすでに過去のものとなつた、すでに「女流だけを別個に取り上げる」意味はなくなつた、とする上田三四二の一見りべらる物言いは、じつは相も変らぬ男の論理や男社会からの物言いであるということを見破り、それは女性の歌の新たな不可視化であると指摘するものでもあつたのである。

こうして馬場あき子によって、「女歌」とは、たんに女が作る歌という意味ではなく、王朝和歌のへ艶」の伝統を継承した「日本的な表現技巧」「技法」の問題なのだとする、新しい解釈が提出され

た。このような「女歌」に対する解釈は、同時代の女性歌人や年若い女性歌人たちに、王朝和歌への再評価・回帰の機運を促したといえるだろう。

またこの時期、「女歌」をたんに女の作る歌の意味としない言方は、中井英夫によってもなされている。一九七三年、『読書人』匿名時評において、中井英夫は、「二〇余年前、釈逍空に復権させられた『女歌』は、すでに塚本と葛原妙子の二人にのみ華麗無残な余映をとどめることになったらしい」（『増補黒衣の短歌史』所収、一九七五年刊）と述べた。大岡信によって佐佐木幸綱の歌は「男歌」と称えられたが、その佐佐木幸綱をはじめ、新鋭の福島泰樹、岡井隆の復活と、「男歌」は「七三年以降の歌壇を席卷する勢いを見せている」のに対し、逍空の遺志であった「女歌」は衰弱してしまつたらしいと嘆くのである。さらに、葛原妙子について述べた時評では、「その後の歌壇に、逍空の真意を体した作家が二人だけ現われた」、塚本邦雄と葛原妙子である、「この二人だけは『女歌』すなわち翳の歌であり、眼に見えぬもの、非現実世界にこそ現実を律する法則のあることに気づいて反世界におもむいた新しい黒衣の旅びとである」と述べた。

中井英夫による逍空の「女歌」解釈は、必ずしも馬場あき子のものとは重ならない。しかし、六〇年安保闘争の政治的季節に女性の歌が「押し流され」てのち、「衰弱」してしまつたと言われる一九七〇年代にいたって、「女歌」とはたんに女の作る歌を意味するのではない、むしろ方法や技法・文体を指すのだ、という了解が生ま

れつつあったことはいえよう。

③ 逍空の「女歌」解釈をめぐる一九八四年前後の女歌論議

一九七五年あたりから、『短歌』や『短歌研究』の新人賞を女性が毎年のように受賞し、七〇年安保闘争前後以降に青春期を過した戦後生まれの女性新人が続々と現れはじめた。そのなかから、七九年には松平盟子歌集『帆を張る父のやうに』、八〇年には阿木津英歌集『紫木蓮まで・風舌』、道浦母都子歌集『無援の抒情』が出るに及び、若い女性の歌が一躍歌壇の注目を集めるようになる。八三年五月には、名古屋の中の会主催で行われたシンポジウム「女・たなか・女」で、初めて女性だけのディスカッションが企画された。そのパネリストであった河野裕子・道浦母都子・阿木津英・永井陽子の四人は余勢を駆って、翌年春、これも短歌史上初めての女性企画によるシンポジウムを、京都で開催した。

阿木津英は、これらのシンポジウム席上および当時連載していた短歌結社誌『未来』の時評において、②に述べた馬場あき子の「女歌のゆくえ」を取り上げ、逍空の「女歌」に言及し、当時ようやく紹介されつつあったイヴァン・イリイチのジェンダー論と結びつけ、逍空の「女歌」論再考を促そうとした。再考にあたっては、まず、②において述べたような馬場あき子の「女歌」解釈、また中井英夫の述べたような「女歌」解釈を、逍空の文章に即すれば違うのではないかと、否定した。とくに馬場あき子の「女歌」解釈のうち、「女の人は生物学的にからだのしくみがちがう、からだのしくみがちがう」ということと、短歌における手法というものは区別

〔阿木津発言・シンポジウム記録集「84春のシンポジウム」〕しななければならぬとする解釈に対しては賛意を示しつつ、王朝的なへ艶の伝統を引くという「たをやめぶり」と「女歌」を結びつけるところに疑問を提出した。逍空のいう「女歌」はたんに手法・文体というより、歌におけるジェンダーすなわち「社会的な価値付けにおける女歌」(阿木津発言・同)として見ることで、そういう意味でもやはり女性の作る歌をさしていると主張した。

一方、馬場あき子は、一九八三年一〇月から放送された市民大学講座テキストにおいて、「女流に特色的に継承された和歌文体のへ艶」の今日的開花をへ女歌へ、とよんだのは釈逍空だが、それに対応する、剛直な物言いや、自らの存在の簡潔な把握に詩的思想性を反映させることを特色とした詠い方を、へ男歌へと便宜的に呼ぶことがあるとし、「それは文体や手法の特質」を指すものであり、「性別にのみかかわるものではない。話を原点に戻せば『ますらをぶり』と『たをやめぶり』とは、万葉以来の抒情的好みの二原点であり、風体の謂である」と、改めて主張した。そして、岡井隆と安永路子の歌を取り上げ、「岡井はいたく女文体を取り入れ、安永は男文体を取り入れつつ、それぞれの抒情表出に成功している」と述べた。

このような、男と女が文体を互いに吸収しあって歌を豊かにするといったような言い方は、逍空自身の女流短歌史の一部には見ることができ。だが、この解釈をもって、逍空の「女歌」論全体に及ぼすことは、もちろんできない。逍空Ⅱ折口信夫の「女歌」には、

それまでの「たをやめぶり」には回収しきれない概念が含まれている。

その論のもっとも目覚しい部分は、①で述べたように戦後でさえ「女性の性と生理」によって女の歌が作られると人々が信じ込んでいるときに、早くも昭和初期以来、人々が集まってする生活文化の中から「女歌」は生み出されてきたとした点であった。信仰を背景とする歌垣といった村の生活文化があつて、そこから機知に長けた切り返しや撓ね返しのスタイルを持った「女歌」が生まれ、それは中国文化の移入による「文学」が意識されるようになって、当時の支配層に排除されず、むしろ包摂された、と説いたのである。また、折口信夫は決して文体論に終始せず、「女房階級」「隠者階級」といった折口名乗が端的に示すように、どのような人たちがその表現を遂行し、運ぶのかということをつねに問題とした。「女歌」の切り返しや撓ね返しのスタイルについても、たんに文体論として展開するのではなく、そのような「女歌」をへ書く行為によって、女性主体の上に産出される意味——「強さ」や「プライド」——を見ようとした。

これはまさしく生物学的な性差とは別の、社会的に構築されてゆく性差をとらえきった「女歌」解釈である。この「女歌」の伝統が日本の文学を特徴付けていると見るゆえに、折口は男性の歌に対抗する「女歌」の再現を願った。

阿木津は、このような折口信夫の「女歌」論に、馬場あき子の「女歌」解釈よりもはるかに精緻で徹底したヴァナキュラー(民俗

的)なジェンダー論を読み取り、それに対する正当な評価付けを要求しつつ、しかし、躊躇と懐疑を提出したのである。折口のいうような「女歌」再現は、現代のような社会に本当に可能なのか。「生理のレベルがむしろ連続しているのに、社会的なレベルでははっきり対立させなければ私たちは生活していけないところがあるようなんです」(阿木津発言・前掲)と、男/女の二項対立は社会の構築したものとしながら、その二項対立図式の改編のあり方について思いをめぐらしていたといっている。

折口信夫の「女歌」論については、最近においても本質主義であるとする和歌研究者の発言があるほどで、長くまともには取り扱われてこなかったようだ。国文学研究の分野では、鈴木日出男『古代和歌史論』(東京大学出版会、一九九〇年刊)に収められた「女歌の本性」あたりからジェンダー批評として「女歌」研究がなされるようになったというが、そこでも論は文体論に限定され、生活文化としての歌垣には触れられていない。昨今中国少数民族における歌垣のフィールドワークの成果が出るようになってようやく、一九九九年に刊行された鈴木日出男『古代和歌の世界』(ちくま新書)では抑制を解いて、やや大胆に生活文化としての歌垣と「女歌」との関係に言及しているようである。本来文献学から出発した国文学分野のテキスト中心主義ともいべき体質は、そのような国文学の方法に批判を持って民俗学に赴いた折口信夫の「女歌」論を、これまで重視しなかったものであろう。馬場あき子の「女歌」解釈も、そういう国文学的方法を出ない範囲に折口信夫の「女歌」を置きなおすこと

によって——狭く局限して——なされたものであった。

このような逡空の「女歌」解釈をめぐって議論が紛糾混乱するなか、一九八三年以来のシンポジウムを見てきた国文学者鳥津忠夫は、『女歌の論』(雁書館、八六年刊)を著わし、「女歌」という言葉を和歌における女房歌という意味へと引き戻した。「恋のうたは、女房のうたに、しみいりて面白きがおほきなり」(「正徹物語」)などの記述に見るように、「恋歌の系譜の上に、その特色がくつきりとうかんでくる」としたのである。そして、万葉集以来現代歌人にとるまでの女性の恋歌の系譜を引き、その正統性を確認したうえで、阿木津英や道浦母都子のような歌は「女歌」^{ジョカ}ともいふべき新しい女性歌である、逡空の論じた「女歌」とはかかわりをもたない、と論じた。鳥津忠夫は、恋歌の系譜の上に「女歌」を見ながら、女であつても「女歌」を作らないものがあることをはつきりさせたが、やはりこれも折口の「女歌」論の限定的な解釈といふべきだろう。

かつて葛原妙子は男性歌人の批評の二重基準を見破り、七〇年初頭の馬場あき子は一見リベラルな男性歌人の物言いに女性の歌の新たなる不可視化を喝破した。同じように、この八〇年代においては、文体上すでに男女が対等にあり得ているかのように述べる馬場あき子の「女歌」解釈に対し、「女性の時代」到来に女性自身が対等を錯覚してしまう自己欺瞞を、阿木津は見通したといっているのはあるまいか。それは、いかにも理想的な男女対等関係を描いていたイリイチのジェンダー論における現実隠蔽あるいは欺瞞と同質

なのでもあった。

当時、第二派フェミニズムを担う若い女性たちの間にイリイチ批判が沸き起こり、その同調者を否定し去つてのち、生物学的な性差とは別の、社会的に女性性が排除されて構築される「ジェンダー」という概念が紹介され、これは現代思想における重要な批評軸となつていく。しかし、短歌における女歌論議においては、国文学的な流れをくむ馬場あき子の「女歌」解釈がひとまず一般的な了解を得てゆき、いち早くなされようとしたジェンダー批評の可能性とその機運は減殺されてしまったといつていい。

三 女歌論議とは何だったのか

(一)〈近代性〉を尺度とする文学ジャンルの序列

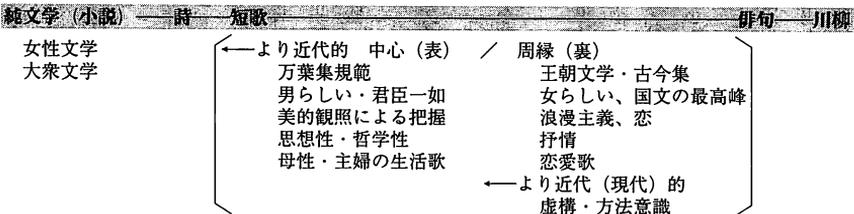
以上、見てきたように、女歌論議には三つの大きな節目があった。その意義をさらけだすにうがってみたいが、そのままに近代文学における短歌の位置を確認しておこう。

西洋近代に、帝国主義的な経験の形成において、小説という文化形式の果たした役割はとてつもなく大きいと、E. サイードは『文化と帝国主義』において述べた。このような、文化全般にわたる、西洋近代からの帝国主義的な圧力を含んだ「西洋化」への傾向を、概括的に〈近代性〉とくくるとすれば、明治以降、近代日本国家において浮上した小説という文学ジャンルは、その〈近代性〉をもって第一の文学として特権化され、あらゆる他の文学ジャンルに対して優位に立った。

さらに、詩歌においても〈近代性〉を指標として「詩」というジャンルが形成され、伝統的な和歌や俳諧は、短歌や俳句へと変貌し、おおよそ明治末期から大正期にかけて、文学ジャンルは〈近代性〉を指標とする一つのスケール(平面というより、円錐形を考えたほうがよい)の上に序列化されたといつてよいだろう。図式化【図参照】すれば、まず、円錐形の頂点たる中心に、純文学とも言われた小説が君臨する。そこには女流文学や大衆文学といったものがゲッター化されて含まれ、その下に近(現)代詩があり、さらにその下に短歌があり、俳句があり、川柳がある。このような文学ジャンルの序列が、少なくともだいたい一九八〇年代半ばくらいまでは揺るぎなく存在したといつていいだろう。

【図】〈近代性〉を尺度とする文学ジャンルの序列

←より近代的
中心(表) / 周縁(裏)



真ん中あたりの短歌というジャンルに属したわたしたちは、つねにより一層「近代性」を帯びた詩や小説から圧力を感じ続けていたといつてよい。わたし自身、体感としてその圧力を記憶している。

一方、俳句や川柳にはそのような圧力を感じない。親近感はあるにしても、あるいはエイゼンシュテインの俳句的な映画手法など西欧の目を通した俳句への関心はあるにしても、現代詩に対して送るようなまなざしを俳句や川柳におくことはなかった。(個々の作家によって異なるのは当然だが、ここでは概括的な傾向を述べている)。近代日本の文学ジャンルには、西洋近代からの帝国主義的な圧力が後進意識として刻み付けられており、その中心から周縁へとはたらく圧力は、つねに反語的に憧憬を含んだ中心化への駆り立てを周縁に生み出したといつてよいだろう。

しかも、新体詩から近代詩へ、さらに現代詩へといったように、詩は詩の内部で、短歌は短歌の内部で、俳句は俳句で、川柳は川柳で、それぞれのジャンルの内部でも「近代化」の圧力が働き、それぞれに「近代性」を尺度とする作家あるいは流派の序列化がなされた。そこでは「近代化」に遅れ、成功しなかったものは、周縁化される。

たとえば、歌においては、一八九四年、与謝野鉄幹がいち早く「亡国の音」(二六新報)で、「今や上下挙つて此類の女性的和歌を崇拜する其害毒果して如何」と、「現代の非丈夫的和歌を罵」つて和歌の男性化を唱えた。歌における「近代化」とは、明治期において、まず男らしさの要求、男性化——「狭小」「繊弱」「品質卑

俗」「格律乱獲」でない歌——への要求であった。まず江戸期の賀茂真淵によって、当時の権威であった古今集以降の和歌の詠みぶりが「たをやめぶり」とされ、低められるものとしての女性ジェンダー化の先鞭がつけられたといつてよいが、明治期には「害毒」として罵られるまでに女性ジェンダー化され、早急な男性化Ⅱ(近代化)が求められる変革の対象となったのである。

しかし、このような柔弱かつ文学的にも衰弱固定した和歌の調べの改編Ⅱ(近代化)に成果を挙げたのは、万葉集を規範とし、写生を手段として美的観照による把握を追求した正岡子規以来のアララギ派であった。さらに大正期の島木赤彦や斎藤茂吉らは、万葉集のなかに君臣一如の国民意識を見出し、かつ写生という語に「鍛錬道」というようなモラルを付加し、西欧的な近代思想性や哲学性をも歌になじませていくことによつて、「日本的な近代化」をおしすすめ、アララギは近代短歌の中心に位置しつづけてきた。これは、家父長的な家族国家観によつて国民意識を統一しながらも、西洋近代と同型の帝国主義的な圧力を身に帯びることに成功した当時の国家体制に合致し、したがつて、このような中心以外のものは、すべて周縁化されてしまったのである。

一方、明治中期から末期にかけて、日本の文学伝統のなかから漢文学を脱落させ、西洋の文献学の方法を移入して、国文学という学問分野が確立した。ここにおいても男性的価値称揚への欲求は強かったが、漢文学を排除して、「純国文学」のみを対象にしようとするとき、平安期の女性の手になったものを排除したり、あまり低

めたりするわけにはいかなかったのである。本居宣長の源氏物語研究など国学の積み重ねを基盤に、「貞操堅固」を担保とすることによって女流文学は承認され、源氏物語と枕草子は「国文の双璧」(芳賀矢一)⁶⁾とたたえられた。平安期の王朝女流文学は国文学の峰をなすものとして尊重されることになったのである。しかも、平安期以降いずれの時代においても、たとえ男性的とされる江戸期の文学であろうと、そこには古今集を文化規範とする世界観が支配していた。このような国文学分野の流れを汲んだ歌人たちは、大正期以降、万葉集を規範とするアララギ派が中心に位置する短歌界においては当然周縁化されることになり、そのねじれから生ずる対立意識はくすぶりつづけていたのである。

(Ⅱ)〈中心―周縁〉の圧力関係から〈表／裏〉の対抗関係へ⁷⁾

さて、このような〈近代性〉を尺度とする文学ジャンルの序列を念頭に置いて、①一九五五年前後の女歌論議を見直すと、その底流には敗戦を契機とした、さらなる〈近代性〉へと向かう力が、やみがたく働いていたことが見てとれる。

一冊の歌集を読めば、ある個人の顔が見えてくるばかりでなく、その生活ぶりまでも見えてくるといった〈私性〉は、アララギの主たる貢献によって遂げられてきた歌の〈近代化〉の成果だといってよい。大正期に入り、結社制度が確立して来るにしたがって、それは「写生制度」と化し、叙景歌一辺倒となり、のちにはトリビアルな生活記録録・身辺雑詠の排出となった。このような制度化による歌の硬化を批判する声は、まず昭和初期に澎湃として起こる。その

なかのモダニズム短歌の系統を引くものが、この一九五五年前後、トリビアルな〈私性〉への批判として、西欧文化の香りをもった虚構・反現実性・幻想の価値を再提出してきたのであった。

女性の歌に即してふりかえるならば、明星衰退後、アララギへ次々と転向していった女性歌人たちは、アララギ風な歌い方を学ぶことによってはじめ、洗濯をしたり、料理をしたり、赤子を負ぶってあやしたりするような、母としてまた主婦としての、自分の身の回りの生活を歌にすることができるようになる。母性の歌としては五島美代子の『暖流』(三省堂、一九三六年刊)が有名だが、それより以前すでに大正期から、アララギに学んだ女性たちの間にそのような歌の蓄積はなされていたのである。いわば、ここで女性の歌の〈近代化〉が果たされたといっている。

しかし、歌集一冊を読めばその人の生活のすべてがわかってしまうようなアララギ的な詠みぶりは、生物学的性差を顕在化させ、個人の現実生活を露呈させる。それゆえ、女性にとっては社会の要請する良妻賢母の監視システムとなる。もちろん男性にとつても、斎藤茂吉が永井ふさ子との恋愛を歌の上でひた隠しにしたように、あるいは戦後においても菊池恵楓園の山本保が歌の並べ方で妻への相聞であるかのように装ったように、やはり監視システムとしての力は働いた。しかし、一般的に言って放蕩や無頼といった価値も許されている男性より、女性にいつそう厳しい強制力が働いたのは当然のことだろう。

このような経緯があつて、日本文学の核心部に「恋歌」を見てい

た逍空Ⅱ折口信夫は、いかにも女性らしい素材を扱った母や主婦の歌はじつは男の歌の口真似である、われわれには「女歌」の伝統があるのだから、男の歌の口真似でない女の歌を求めてはどうかと、女性たちを挑発したのであった。しばしば口に出された「ろまんちつく」「せんちめんたる」「もう少し女の人には、現実力を発散する想像があつてもいい、でせう」といった言葉は、現実生活のみならず、歌の上でもこのような監視システムに閉じ込められていた女性たちに対する、そのかしであり、挑発であつたのだ。

この監視システムによるタブーを、戦後の新しい時代の空気に力を得た中城ふみ子は、余命半年足らずの捨て身で踏み破つてしまつた。また、すでに逃れようとしても逃れられない女性としての現実を引き受けてしまつていた葛原妙子は、良妻賢母の監視システムの目をかいくぐり、文学の世界でだけは完璧な自由を確保する唯一の方法として、反現実的な世界を築き上げたのである。

要約すれば、①の一九五五年前後の女歌論議とは、いわば近代から現代へと、さらなる「近代性」へ駆り立てられた時代に、アララギを中心として築き上げてきた「日本化された近代性」廢位の要求のもと、中心性攻撃の尖兵の役割を果たすものであつた。このような、「近代性」への駆り立ては本来、男性的なるものへの傾きを意味する。男性とともに走ろうとした女性の歌がついていけず、あるいは置き去りにされていつたのは、当然のことだといえよう。

それゆえ、馬場あき子は、このような「近代性」を指標とする序列化に対し、②一九七〇年初頭および③一九八四年前後の女歌論議

において、先に述べたような国文学系王朝文学派の正統意識を、対抗的価値として差し出したのであつた。いわば歌壇を支配していた「中心—周縁」の関係を脱構築して、中心を「表」とし、それに対抗（ときに逆転）しうる「裏」として「女歌」を位置せしめようとした。万葉集規範に対する古今集規範、「ますらをぶり」に対する「たをやめぶり」、「男歌」に対する「女歌」、近代の「論理的文体」に対する伝統的な和歌の「非論理的文体」など、アララギを中心とする男性たちが懸命に「近代化」Ⅱ男性化してきた文体に対して、女々しい情、女の抒情、恋、艶、ものあわれなど、情の側面を強調した、和歌という女性ジェンダーの対抗的価値の復権をはかつたのであつた。これは、ひとことでは、本居宣長のなした「へからごころ」批判である。

一九六五年から一一年間にわたつて、小林秀雄は本居宣長を雑誌『新潮』に連載し、一九七七年に出版された大著『本居宣長』は二〇万部を超える部数が売れたという。このような時代を背景として、馬場あき子の「女歌」解釈は出されている。

そして、この本居宣長こそは、文学ジャンルの「中心—周縁」関係の圧力を脱臼させて、「表／裏」の対抗する関係へと組み替え、外来文化に対抗しうる女性ジェンダーとしての「日本的なるもの」の価値を純粹化しようとしたものであつた。

十二世紀末期、僧澄憲によって書かれた仏教テキスト『源氏一品経』には、平安後期から中世初期に存在していたジャンルのヒエラルヒーが次のように上から下に並べられているという。へ1. 仏教の

経典（内典） 2. 儒教の経典（「外典」） 3. 「史記」のような歴史書（史書） 4. 漢詩文の選集『文選』のような中国の文芸（文） 5. 和歌 6. 物語と草子、すなわち仮名で書かれた日記その他の文章。ハルオ・シラネは、このようなジャンルの序列を紹介して、権威ある上位四つのカテゴリー——外国起源のもので主として「唐」（中国）と結びついたもの——と、底辺の二ジャンル——「やまと」（日本）と結びついたもの——を、十八世紀の国学者たちは転倒させようとし、上位四つのカテゴリーをカノン（正典・古典として選別されたテキスト群）から排除しようとしたと指摘する⁽⁹⁾。

この中国大陸からの圧力を一掃できたのは明治期に入ってからだが、しかし、先に示したように、西洋からの近代帝国主義的な圧力に置き換えることによってそれは可能となったのであった。そして一方では、近代国民国家としての自国のアイデンティティを持つために、国学の成果を基盤としながら「近代化」された国文学のような学問分野が形成された。

しかし、先にも述べたように、〈近代化〉はすなわち男性化への要請でもある。〈近代化〉に成功した文学ジャンルやその系統が中心を占めていく大勢のなかで、自国文化の本質を女性性に見てとり、その文化的アイデンティティを女性性に置いて、外来の圧力に對抗しようとした宣長以来の系統を純粹に引こうとするものにとつては、つねに抑圧されつつ、利用されるという微妙な位置取りを余儀なくされた。それはときに、天皇への恋關の精神を叫ぶ國粹主義

的なイデオロギーともなったのであるが、また日本文化の核心部に「女性」を見ていた柳田国男や折口信夫の新国学としての民俗学も、この流れをくむものであった⁽¹⁰⁾。

さらに、古代に女性の力を見、男女対等の関係を見る女性史もそうである。古代史研究の出発点に本居宣長があったことがしばしば指摘される高群逸枝の研究は、昭和初期以降成果が始めていた民俗学の摂取なくしてはありえない。高群逸枝は、宣長の国学から民俗学へと続く流れのなかに、頂点（中心）から底辺（周縁）へと働く圧力関係を脱臼させるへ「男性」に對抗する「女性」という概念を見出し、そこに関係組み換えの可能性を見出したとき、女性の失われた過去の復活の方途を見出したといっている。しかし、そのような「男性」に對抗し得る「女性」の肯定はすなわち「外来文化」に對抗し得る「わが国の文化」の肯定でもある。高群逸枝が火を吐くような戦争協力のアジテーターと変貌するのは論理の帰結であった。

そして、「女性の時代」が到来しつつあった一九七〇年代から八〇年代にかけての、馬場あき子の「女歌」解釈もまた、抑圧的な位置取りを余儀なくされてきた女性の、宣長的な「女性」復権の声である。ここでは馬場あき子は、折口信夫の「女歌」論を国文学的方法の範疇に局限することによって、本居宣長の時点にまで差し戻す解釈をなした。

確かに、それは、〈近代化〉＝男性化に抑圧されてきた、小さなもの、優しいもの、繊細な情感などなど「女らしい」という語をもつ

て表される、古今以来の日本的なるものとしての「女性性」復権ではあつたろう。しかし、それは女性の復権を意味しない。

たとえば、仮り名と呼ばれていた仮名で、歌が表記されるようになった歴史を見るがよい。平安時代初期、男性支配層の間では漢文学隆勢の頃、女性はいよいよ取り残されて漢字漢文を一般に学ばなくなり、すでに使われていた万葉仮名^{マナ}（本当の文字の意。漢字）の草書体を一層崩し、自分たちの歌や消息を記すのに用いた。

この、いわば簡単でお手軽な実用文字を女手といい、男も女への消息には用いることがあつた。しかし、やがて、宮廷後宮での女の世界が文化的に意味を持ちはじめたとき、流通していた女手が歌合せの文字として用いられるようになり、勅斥集である『古今和歌集』が斥進されるとき女手が用いられた。これが、女手が仮り名として社会的に低い位置に置かれていたのが、公的な文字として認められた最初の機会となつたという。正式とされる学問の機会を奪われた女性のあいだで多く使われた、簡単お手軽な「女手」が、権力を背景とする時宜を得て、歌合せの場など男女がともに洗練させる機会をもち、ついに紀貫之という男性の手によって「やまと」のアイデンティティを背負わされ、公的に格上げされるのである。この、おもに女性たちの積み上げてきたサブカルチャーの「お召し上げ」は、女性一般の格上げを意味するだろうか。確かに、このような背景あつて世界にもまれな女性文学が誕生するが、それはむしろ環境さえ整えばいつでも女性は能力を発揮するということの証に過ぎないのではないか。自国文化のアイデンティティ形成に女性も奉

仕したといえは聞こえはいいが、それによって男支配社会——男を中心とする性支配——が揺るぎはしなかつた。自国内部には（中心—周縁）関係を保持したまま、すなわち男性が中心性を領有したまま、外来文化の中心性へ対抗しようとするとき、（表／裏）関係が利用された。女性性は（裏）に包摂されてはいるが、決して（表）に出ることはできない。むしろ、上流支配層の男性の好みは（女性化）し、（表）（裏）二領域を往来できる力が誇示された。これは、女の文化は政治的に収奪利用された、というほうが適當ではないのか。

以後、流麗な仮名でつづられる和歌は、「から」に対抗しうる「やまと」の文化として、第一の文学の位置を占め、『古今和歌集』は文化規範となる。紀貫之は『古今和歌集』によって、漢字漢文学の圧力を、対抗する関係に組み替えた。本居宣長は、その対抗する関係への組み替えを、古事記の時代にも見たのである。

このようにして明治近代以降、（近代化）≡男性化による二重の中心からの圧力の下にあった女性たちは、自らの（近代化）≡男性化を不可能と悟つたとき、圧力を脱臼する「男性」／「女性」の対抗関係を見出して大いに鼓舞されることになる。女性たちはそこではおのずから「女性」に自己同一化しようとするのであるが、じつは、そこは女性の力や文化が政治的に収奪され利用される場所でもあつた。

一般に日本という場所では、外来の（中心—周縁）関係の圧力から逃れ、（表／裏）の対抗する関係へと組み替えの欲求が盛り上が

るとき、その圧力的關係脱臼の尖兵として、つねに女の力や文化あるいは女性性が使われる。

一九八〇年代に上昇した女性の目覚ましいエネルギー、ことに第二派フェミニズムを中心とする女性たちの男性中心主義批判、男社会批判、すなわち中心性を攻撃するエネルギーは、それまでの欧米先進諸国(II中心)からの圧力を脱臼する尖兵として、時代の前面にさし出された。しかし、八〇年代後半にバブル経済期を迎え、「対抗」「拮抗」あるいは「逆転」しさえする〈表／裏〉の關係への組みなおしが完了したと見るや、女性はもう対等になった、自由になった、フェミニズムの意図は成就したと言われるようになる。いわば「御用済み」になったのである。そして、なおも男性中心主義批判を繰り返すフェミニズムは、すでに廃位されたへ中心―周縁―關係に気づかない「遅れたもの」とみなされ、あるいは中心奪取を欲望する「男性」になりたがるものともみなされて、成就した〈表／裏〉關係における「女性」の側の女らしい価値——わが国の文化の伝統——が称揚され、再生するのである。

四 近代文学にとつて、いま、

短歌とジェンダーを取り上げることの意義

一九八〇年代半ば以降、純文学を頂点とした〈近代性〉を尺度とする文学ジャンルの序列も、消費文化の進むなかで、変容をきたし、ひしゃげ、ジャンルは並列化したかに見えた。

しかし、これまでの〈表／裏〉対抗關係がつねにいくばくかの夜

郎自大的な自己欺瞞を含み、再びへ中心―周縁―關係へと回帰していったように、現在、アメリカを中心とするグローバルズムによって世界的な規模で、近代的なへ中心―周縁―体制が再編されようとしている。一方、自国文化のアイデンティティを求める動きも表面化しつつあり、「女らしさ」に結びついた「わが国の文化の伝統」は強調されつつある。

これまで近代文学という研究分野は、〈近代性〉を尺度とする文学ジャンルの序列化に従うかたちで、その中心たる小説のみを主な研究対象にしてきたように見受けられるが、それだけでは、へ中心―周縁―關係と〈表／裏〉關係との複合した關係が批評し切れないのではないか。ジェンダー批評とともに、短歌・俳句・川柳のジャンルをも正面に引き据えていく視点の切り替えが、ぜひとも必要なことと思われる。

注(一) 「和歌大辞典」(明治書院、一九八六年刊)では、歌学用語として

「女房歌人の意」とする。近代短歌までを範囲とした「和歌文学大辞典」(明治書院、一九六二年刊)では、「第二次大戦後における歌壇が、混乱し乾燥した事態の中で、写生歌の呪縛から脱し、短歌の明るい将来を開く機運を、釈道空は女流歌人のルネッサンス的活動に期待して、女歌の重要性を強調した。(鉄幹の浪漫主義運動にも、女歌を重要視する思想が存した。)女性の歌と同意に用いるものとして、もちろん男性の歌が荒唐をもたらす傾向のある時に、特に女性の歌が潤いのある情緒と温かい叡知とを天性保有していると見られるためであろう。」(白田甚五郎)として、以下和歌における用例を紹介し「女房歌と同じ意に用いられたのであろう」とする。この六二年という時

期に、国文学者の見た迫空の「女歌」解釈を、以下に述べる歌壇での女歌論議とあわせて読むとき、さらに興味深いものがある。

- (2) 阿木津英「女人短歌会」、「扉を開く女たち ジェンダーから見た短歌史1945-1953」(砂子屋書房、二〇〇一年刊)、および阿木津英「折口信夫の女歌論」(五柳書院、二〇〇一年刊)を参照。
- (3) 「女歌のゆくえ」においては、「ますらをぶり」「たをやめぶり」「万葉集」「古今集」といった言葉はまだ現れない。一九八三年のNHK市民大学講座テキストにおいて初めて明言されるが、このような対照は「女歌のゆくえ」の時点ですでに含まれていたといっている。
- (4) 馬場あき子「短歌への招待」(読売新聞社、一九八七年刊)に所収。
- (5) 近藤みゆき「古今集の「ことば」の型——言語表象とジェンダー——」、国文学研究資料館編「ジェンダーの生成 古今集から鏡花まで」古典講演シリーズ8 (臨川書店、二〇〇二年刊)。
- (6) 芳賀矢一編「国文学歴代選」(文会堂、一九〇八年刊)序論。
- (7) 〈表〉〈裏〉という用語は、千野香織の「日本美術のジェンダー」(『美術史』一九九四年三月)における「からり公り表り男性性/やまとり私り裏り女性性」を踏襲している。
- (8) この監視システムの圧力がどれくらい強かったかということは、阿部静枝が、戦後、歌集『霜の道』において、自己の体験を、私生児を産んで里子に出したある女のフィクションの歌として編集したことを見てもわかるだろう。註2の阿木津英「女人短歌会」の項、参照。
- (9) ハルオ・シラネ「創造された古典——カノン形成のパラダイムと批評的展望」、ハルオ・シラネ・鈴木登美編『創造された古典』(新曜社、一九九九年刊)
- (10) だからといってわたしは、折口信夫の女歌論や高群逸枝の研究を全否定し去るつもりはない。ここは注意深い取り扱いが必要であるように思われる。

※ 本論文は、二〇〇二年九月二八日、「短歌とジェンダー」をテーマと

して行われた日本近代文学会九月例会での口頭発表を原型として書かれたものです。

非公開

占領期雑誌データベースと雑誌『Intelligence』

山 本 武 利

ブランゲ文庫のデータベース化

連合国軍による日本占領の時代、とくに一九四五年から一九四九年にかけて発行されていた全ての出版物は、連合国軍総司令部によって厳しい検閲下におかれていた。どの出版物も民間検閲局（CCD）に出版の事前ないし事後に検閲を受けねばならなかった。検閲終了後、CCDに保管されていた出版物は廃棄処分されようとしていたが、パールハーバーを扱ったドキュメント『トラ・トラ・トラ』で有名なゴードン・ブランゲ博士の手でメリーランド大学に送付された。このコレクションは後にブランゲ文庫と名づけられ、整理、公開されている。そして同大学と国立国会図書館によって雑誌、新聞全文がマイクロ化された。

私が代表者となった占領期雑誌記事情報データベース化プロジェクト委員会は、二〇〇〇年度から日本学術振興会科学研究費（研究成果公開促進費）を受けて、ブランゲ文庫所蔵雑誌のデータベース化

を進めている。なぜデータベース化を思い立ったかと言えば、マイクロ資料はきわめて使いづらいからである。なるほど、マイクロ化とあわせて雑誌目録が作成された。そこには雑誌が内容別に分類され、それぞれのタイトル、出版地、出版者などの情報が掲載されている。雑誌タイトルから目的の記事なり、筆者名なりにアプローチすることができる。しかし、各誌、各号の掲載記事タイトル、筆者名が掲載されていない。さらに雑誌タイトルがその内容をストレートに示すことは稀といつてよい。また意外なところに意外な筆者が寄稿することも少なくない。目標とする記事や筆者にたどり着くには、時間、根気、さらには幸運が必要である。

私たちのデータベースは五年がかりで、ブランゲ文庫の全雑誌・全号に掲載された記事のタイトルや、執筆者、出版者、出版地など四〇項目を越える情報をパソコンに入力している。現在その作業は第三年度を終えようとしている。五年間で計約一万三千七百誌、推定一五万冊、記事タイトル数二〇〇万と膨大な量を対象とする。入

力作業は業者に委託しているが、同人誌やミニコミ誌が多くなる次年度以降の作業の指示が大変と予想している。というのはそれらの雑誌は商業誌のようにきちんとした目次編集や割り付けがなされていないからである。

ともかく昨年一二月にインターネットで第一年度と第二年度の入力を無料公開した。公開によつて利用者の声を聞き、より良いデータベースを完成させたいからである。二年分で約八〇万件のタイトル数である。全国紙、地方紙、NHKテレビなどに紹介されたためか、データベースへの登録者やアクセス数が予想以上に多い。二ヶ月間で登録者は一千名を越えた。

書き直しを迫る新資料

私は二〇〇〇年に『紙芝居——街頭のメディア』（吉川弘文館）なる本を出した。その執筆時にプランゲ文庫雑誌目録が出たので、文献補充に活用しようとした。そこには『紙芝居』という雑誌が載せられている。しかしこの雑誌は関連文献に必ず登場する雑誌である。私は自分なりのカンをはたらかせて類似雑誌に当たったが、骨折り損だった。通説を覆す紙芝居の記事をプランゲ文庫から発見することができなかった。もう少し時間をかければ、未見記事に行き当たったであろうが、そのときは余裕がなかった。ところが、今回公表のデータベースに当たると、キーワードの「紙芝居」で二〇八件、「街頭紙芝居」で一四件のタイトルが瞬時に出る。たとえば後者のうち、雑誌『紙芝居』に出ていないものに、次の六つがある。

タイトル

執筆者

雑誌名

○保育紙芝居と街頭紙芝居

阿部克孝

保育

○街頭紙芝居を中心とした

校外指導

浅藤四郎

教育技術

○街頭紙芝居をよくする運動

神戸市社会教育課

教育委員会だより

○街頭紙芝居の実相

・業者の偽らざる嘆き

緒貫武雄

P・T・A

○街頭紙芝居のこと

・批判の立場

佐木秋夫

新児童文化

○視覚教育の体験を語る

荒井富之

小二教育技術

占領期に紙芝居とくに街頭紙芝居が子供に高い人気があったこと、そして教育関係者からその低俗性への批判が強かったことは、これらの記事、雑誌のタイトルから推測できる。ともかくこれらの記事を執筆前に見ておれば、私の本も「拙著」といわずにだかと思ふ。

今回公表のデータベースには文学関係の新資料もきわめて多い。第一年度は政治、法律、行政、経済、社会、労働の雑誌を対象とした。ところがこれら社会科学系の雑誌にも著名な作家が新作や評論、エッセイを寄稿していることがわかった。それについては雑誌『Intelligence』一号掲載の宗像和重「プランゲ文庫データベースと近代文学研究——武者小路実篤、志賀直哉の newly 資料を中心に」に詳しい。第二年度は文学雑誌を扱ったので、さらなる新出資料がで

るものと予想している。拙著『紙芝居』同様、大幅改定を余儀なくされる著作や全集が出るのは必至である。

二〇世紀メディア研究会の設立

私は日本メディア史を専攻している。『新聞と民衆』（紀伊國屋書店、一九七三年）、『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局、一九八一年）など新聞史研究が中心であった。近年は占領期研究やプロパガンダ研究に力点を置き、『占領期メディア研究』（法政大学出版局、一九九六年）、『ブラック・プロパガンダ』（岩波書店、二〇〇二年）などをまとめている。私は研究のテーマや対象時期の広がりとともに共同研究の場が必要と認識した。そこで二〇〇一年七月に仲間数人と二〇世紀メディア研究会を組織した。そしてほぼ隔月に研究会をひらいているが、次第に賛同者が増え、幅広いテーマで自由な発表と議論をしている。

会員は原則だれも拒まない。実際、大学所属研究者だけでなく、民間研究者、ジャーナリスト、主婦などと多彩である。会費は無料で、早稲田大学現代政治経済研究所会議室（二号館二階）で開催している。現在、メイリング・リストで一五〇名、手紙で八〇名に案内状を出している。さらに今回のデータベース登録者の内、メール研究情報送付希望者八〇〇名にも、研究会の案内を送っている。最近五回の発表者とテーマは次のようになっている。

第四回研究会——六月一日（土）

発表者…土屋礼子（大阪市立大学）／H. E. ワイルズの日本新聞研究について——一九三〇年代から一九五〇年代へ

谷川建司（専修大学）／新資料に見るタイクCIE初代局長辞任の真相

太田尚樹（東海大学）／甘粕正彦と満州

第五回研究会——七月一三日（土）

発表者…河原啓子（日本大学非常勤講師）／日本における新聞社主催の展覧会の文化振興力

石井清司（ジャーナリスト）／中部日本放送開局による

民間放送開始とフランク馬場の果たした役割

山本武利（早稲田大学教授）／OWI・国務省の延安リポートについて

第六回研究会——九月二一日（土）

発表者…大藏雄之助（異文化研究所所長）／第二次大戦中のアメリカ陸軍の日本語強化教育

高橋博子（同志社大学院博士課程）／核実験にかけられたアメリカ式生活様式——一九五五年ネヴァダの核実験における民間防衛計画——

事務局報告／過去一年間の活動報告並びに今後の活

動計画について

第七回研究会——二月二日(土)

発表者：川崎賢子(文芸評論家)／雑誌『満洲浪漫』紹介——

満洲国における日本語文学をめぐって

田島奈都子(筑波大学)／大戦ポスター展の実態とその役割

山本武彦(早稲田大学)／情報戦争のグローバル化と「経国済民」の策——エシユロン・システムをめぐって

第八回研究会——二月一四日(土)

発表者：馬 挺(早稲田大学)／中国古代新聞『題奏事件』『京

報』の検証——現代新聞紙の二大源流の一を重点に

陳 祖恩(神奈川大学)／上海の『申報』における楽

善堂の広告宣(伝活動)——一八八〇～一八九三年

宗像和重(早稲田大学)／ブランゲ文庫の新出資

料——近代文学研究の立場から

『Intelligence』の発行

研究会の内容が充実するにつれ、それを活字化し、さらに広い研

究者に知らせる必要を感じた。そこで二〇世紀メディア研究所を設立し、それを母体に新雑誌『Intelligence』を二〇〇二年三月に創刊した。発売元は紀伊國屋書店である。近く第二号が出る。同誌は紀伊國屋書店だけでなく、全国の主要書店で購入できる(定価一八〇〇円)。創刊号は二回増刷となるなど好評なので、年二回刊行することになった。なお研究会設立にしろ、雑誌刊行にしろ、占領期雑誌記事情報データベースの内容の改善を目指しているが、それぞれ独自の予算で運営しており、科学研究費とは無関係であることは申すまでもない。

この雑誌は研究会の中心に掲載するが、投稿も歓迎している。その際には、本誌編集委員会で掲載の可否を審査させていただく。文学研究関係者は研究会メンバーに少ないので、本会メンバーのご参加を切望している。

データベース <http://www.prangedb.jp>

二〇世紀メディア研究所

一六二一〇〇五一 東京都新宿区西早稲田二一―三―二二三

電話・ファックス 〇三―三三〇五―一九三九

<http://www8.ocn.ne.jp/~n20h/>

E-mail: n20h@luck.ocn.ne.jp

「もの語り」の座標軸を立体化する

——メディア研究の視座から言と文の関係性を考える——

山 口 誠

一 言文一致の裏ヴァージョン？

一九三四（昭和九）年、日本放送協会は「放送すべき国語」を調査研究するための内部機関として、「放送用語並発音改善調査委員会」（現在の放送用語委員会）を設置した。初代の主査委員には岡倉由三郎が任命され、六人の委員には新村出、神保格、保科孝一などが名を連ねていた。

ここに上田万年が入れば、明治三〇年代に東京帝国大学国語教室を中心に活動していた「言語学会」の主要メンバーが、声のメディアであるラジオに本格参入してきたかのようにも見える。

同年、放送協会はアナウンサー学校も新設した。それまでアナウンサー個々人の属性と実践に任せ切っていた「語り」の実態を改め、「声」の規格化に動きはじめたのである。放送協会は新入局員を対象に研修を実施し、「放送すべき国語」を話すアナウンサーを

計画的に養成する制度を作っていた。

初期のラジオ放送に観察できる、こうした「声」の規格化への一連の動きは、近世末から言文一致体の時期を経て、「国語」というナショナルな言語の編制へと向かう、近代日本の「国語」統一の潮流に浮ぶ事例群として、理解することもできるだろう。いわばラジオというメディアも、（やはり？）「国語」統一の装置として利用され機能していたのだ、と。

しかし問題は、これ以前、一九三四年までのアナウンスにある。

「声」の規格化が始動する以前のラジオでは、放送用語委員会のメンバーが想定する「国語」や言文一致体の「言」とは異質の、むしろそうした「国語」潮流とは逆行するかのような「もの語り」が、全国へ発信されていたのである。

言い換えれば、「言」に「文」を一致させ、ナショナルな言語の

創出を志向する「国語」統一の欲望とは反対に、「文」に「言」をすり寄せ、文字の文化から声の文化の作法を意図的に借用することで成立した「もの語り」が、初期のラジオ放送に存在していたのである。

しかもそれは例外的な「もの語り」ではない。

初期の放送協会に、松内則三というアナウンサーがいた。独特な語り口で一世を風靡した、スポーツ・アナウンズの始祖と目される人物である。その彼が実践したアナウンズのスタイルが、話しことばから意図的に離脱した、いわば文語的な「もの語り」だったのである。そうした「文」に「言」をすり寄せた松内特有のアナウンズ話法は、同時代において「松内節」と呼ばれ、一九三四年以前のラジオ・オーディエンスに広く受け入れられていた。

なぜ松内は、文語的な「もの語り」を、わざわざラジオのアナウンズに注入したのだろうか。そしてなぜ、それが初期のラジオ放送において突出した人気を博したのだろうか。

ここには、言文一致体とは異なる様式の「もの語り」が、近代日本の「もの語り」の地平に存在していた状況が垣間見える。あるいはここを入り口に、近年の「国語」研究や言文一致体の議論から抜け落ちている、もう一つの「文」と「言」の関係性を問題化する展望がひらけるかもしれない。さらには、「文学」中心の「もの語り」研究が前提としてきた「もの語り」の座標軸を再検討する作業へと、この問いをつなげることができるかもしれない。

ただしこの小論だけでは、そして現時点の論者の力量では、こう

した問いのすべてを検証することはできない。そこで松内則三のラジオ・アナウンズを議論の導き手にして、近代日本の文字の文化と声の文化の関係性について、文学研究の方々のご教示を期待しつつ、微力ながらできるだけ具体的に「問い」の展望を提示してみたい。

二 声の文化と文字の文化の参照関係

そもそも太平洋戦争の後まで日本放送協会には取材機能は無く、記者は存在しなかった。ニュース番組では新聞社や通信社から提供された原稿をそのまま読み上げるに過ぎず、放送協会が原稿を自主編集する権利さえ、一九三〇（昭和五）年まで認められなかった。

こうした事情から、新聞社の圧力や通信省の検閲から比較的自由にアナウンズできるスポーツ放送こそ、初期放送のアナウンサーたちが活躍できる場だった。

そこに、早慶戦を代表とする東京六大学野球と両国の大相撲という花形の実況中継を一手に担当する、松内則三がいた。松内は、東京放送局が最初に野球放送を発信した一九二七（昭和二年）から球場のマイクの前に座り、後に「松内節」と呼ばれる独特なアナウンズ話法を開発し、実践していった。

その「松内節」の実例を幾つか拾ってみよう。たとえば一九三二（昭和七）年の早慶戦、ゲームは九回、最後の攻防を迎えた応援団の様子を、松内は次のように語り出している。

將^だして「都の西北」、断然最後のイニングに輝くか、「陸の王者」輝くか、此の所両軍の応援団、立上つての応援であります。満を持して放たざる慶応の応援、今や最後の応援であります。之に対して歓喜、狂喜、乱舞の早稲田の応援、立上がった儘絶叫しております。此の所早稲田狂喜、歓喜、乱舞の形⁽²⁾。

松内は、対戦する二チームの選手だけでなく、それぞれを応援する観客を含めて、野球場という空間に二つの戦う勢力を語り出す。その大きな「対決の図式」の象徴としてピッチャーとバッターの対決を描き、野球放送の「もの語り」を創り出すことを、彼は得意としていた。そうした「もの語り」の図式は、次の例にも鮮やかに見て取れる。やはり早慶戦、早稲田の人気投手・小川に対して慶応の岡田が打席に立つ、フルカウントの場面。

形勢逆転。早稲田に一転リードされた慶応はいまや必死の攻撃。

ツーダウンといえども、未だにチャンス。

カウントはツーストライク、スリーボール。

最後の一投。最後の一撃。

小川の鉄腕、よく危機を脱するか。

岡田の健棒、よくチャンスをつかむか。

神宮球場、風雲愈々急なり⁽³⁾。

この例の他にも松内は、「夕闇せまる神宮球場、鳥が一羽、二羽、三羽、四羽、風雲愈々急を告げております」や「球は転々、外野の塀」などの漢語調の決まり文句を多用する、七五調の語法を意識的に使っていた。これが「松内節」の特徴である。

なぜ松内は、このような「文」に「言」をすり寄せるような語り口を、新しい声のメディアであるラジオに持ち込んだのだろうか。

それは、松内個人の無自覚な趣味や嗜好に回収されるべき特徴ではない。たとえば松内が野球放送に着手した一九二七年当時、彼はこうした文語的な語り口を使用していなかった。つまり松内は、野球放送の語法を模索していく過程で、意図的に、漢語交じりの七五調に象徴される「松内節」の「もの語り」の語法を作り上げていったのである。

松内本人の言説を引けば、彼は「放送の標準はグット低い所に置いてお爺さんお婆さんと迄は行かなくとも、少なくともあまり野球を見たことのない人が聞いても堪能して呉れる程度にグット碎けた放送を続けたいと希^たって居る。これがどうも自分の立場なり放送上の効果をうんと一般的に価値づけること」であるという⁽⁴⁾。

つまり野球の試合というスポーツ・イベントに興味や関心を持たない人にも、野球の放送という「もの語り」は「堪能」してもらいたいという意識をもって、松内は自らのアナウンス語法を作り上げていったのである。そうして彼がたどり着いたのが、ほかのアナウンサーのように話しことばでストレートに語るアナウンスではなく、「文」に「言」をすり寄せるような語法による、独特な「もの

語り」のスタイルであった。

こうした松内のアナウンスに対して、同時代の野球評論者である橋戸頑鉄は「講談師」的だと評している。また現在のメディア史研究でも、「松内節」は講談調のスポーツ・アナウンスとして名指されている。⁽⁵⁾

たしかに、漢語交じりの七五調で対決の図式を「もの語り」する「松内節」は、まるで軍記物の講談に出てくるような、典型的なまでの対決シーンを野球場に活写するかのような語り口ともみれる。そしてこの時代の野球放送のオーディエンスと大衆文学や講談雑誌の読者の間には、かなり高い親和性が推測できるため、松内はこうした先行する活字文化の語り口を野球放送に借用したのかもしれない。

ただし、この時代の講談物は、既に「書き講談」や「新講談」を通過した大衆文学へと脱皮しており、「松内節」のような漢語交じりの七五調を基調とした文体は廃れていた。松内が意図的に使った「もの語り」は、たしかに文語的な響きを持ち、また「もの語り」の作り方はそれ以前の文字の文化から借用したものと推測できるが、「松内節」の精確な参照元は、現時点では同定できない。

これは論者が専攻しているメディア研究の蓄積のみならず、文学研究や映画研究、大衆文化史などの力を借りて、今後探求すべき問題であるため、ここでは、松内が過去の文字の文化を借用し援用して、新しいラジオの声の文化を、そのアナウンス実践の過程を通じて作り出した状況を指摘するに留めておきたい。

こうして「文」に「言」をすり寄せた「もの語り」によって作られた「松内節」は、同時代において絶大な人気を集め、ラジオ普及の牽引役となる野球放送の代名詞になっていった。

その人気の絶頂期である一九三〇年から三一年にかけて、松内は『早慶大野球戦』（ポリドール）や『早慶野球争覇戦』（ビクター）などの「仮想（創作）放送」をレコードに吹き込んだ。また同じ頃の『文藝春秋』や『新青年』などの雑誌には、松内の野球実況の速記録が数十頁にわたって掲載されていた。こうした例からも、松内のアナウンスが多くの人々に広く受け入れられていた様子がみえるだろう。

言い換えれば、「松内節」の独特な語り口が成熟していく過程と、松内の野球アナウンスがラジオの中継放送を飛び出し、レコードや雑誌を通じて多くの人々に支持されていく過程は並行しており、おそらく両者は相乗関係にあったと考えられる。

ここで注意したいのは、松内の前にも後にも複数存在していた初期のアナウンサーの中で、松内だけが突出して人気を博したことがある。つまり「松内節」の声の文化は、同時代の耳にとって新奇な、あるいは奇異な声とは響かず、むしろ耳に馴染んだ「もの語り」として、ヘゲモニックに支持され成立していたのである。⁽⁶⁾

それゆえ、「松内節」の語り口は、松内個人によるまったく新しい「もの語り」の様式の発明ではなく、それまでに形成されていた近代日本の声の文化と、それを包括する「もの語り」の様式に着実に根ざした一実践であったと考えられるべきである。

そうであるならば、「松内節」は、単にラジオ史の一資料としてのみでなく、近代日本における声の文化と文字の文化の参照関係を考察する上で、貴重な手がかりとなりうるのである。

本論では「松内節」を事例に、「文」に「言」をすり寄せた「もの語り」がヘゲモニックに成立していた様態を問題化した。しかしこうした「文」と「言」の参照関係は、ラジオに限定されない。たとえば過去の文字の文化を参照した「松内節」の声の文化が、さらに同じ時代の他の話芸によって参照され借用されていく事例がある。

その最も鮮やかなものは、横山エンタツと花菱アチャコによる漫才『早慶戦』である。ポケとツッコミの「しゃべくり漫才」の原型を確立したといわれるエンタツ・アチャコの名コンビは、この『早慶戦』という演目によってその人気を不動のものとするのだが、現存する同演目のレコード版には、二人が松内の野球放送の語り口をデフォルメした「もの語り」が記録されている。

さらにエンタツは、杉浦エノスケと組んで新作の『早慶戦』や『野球評判記』や『スポーツ漫才』などの演目を次々と発表しているのだが、それらの中でも野球放送は重要なモチーフとして使われている。こうしてエンタツが好んで自らの漫才で繰り返し使うほどに、「松内節」は同時代の「もの語り」のある象徴的な実践として存在していたのだろう。

ここで松内のアナウンスやエンタツの漫才などのテキストをいくらか精緻に分析しても、個々の語り口の特性はある程度まで明らかに

できても、それらが体現した声の文化と文字の文化の関係性は見えてこない。またメディア史の視座だけでは、「松内節」が実践した昭和初期の声の文化をある程度は分析できても、それを成り立たせていた近代日本の「もの語り」の系譜は見えてこない。ここで必要なのは、そうした従来の文学研究やメディア研究の「合わせ技」のような問いを可能にする視座の設定であり、「もの語り」の座標軸を立体化して捉える分析手法の開発である。

三 「もの語り」の座標軸

この小論では、松内則三のアナウンスを事例に、声の文化の参照しあう関係が初期のラジオ放送に存在していたという点、そこから「言」に「文」をすり寄せせる言文一致のベクトルとは別に、「文」から「言」の話法を借用して成立した声の文化のベクトルが、少なくとも昭和初期において、たしかに存在していたことを示した。

ここから、いかなる展望を導き出すことができるだろうか。たとえば、W. J. オングの著書 *Orality and Literacy* (邦題「声の文化と文字の文化」) の日本語訳者によれば、オングがいうオラリティという言葉には「ことばの声としての性格」と「ことばのそうした性格を中心に形成されている文化」という二つの意味が込められており、リテラシーにも「文字を使いこなせる能力」と「そうした能力を中心に形成されている文化」という二つの意味があるという。

リテラシーの第二の意味、すなわち文字の文化については、読書

(者) 論という蓄積が文学研究にはあり、テキスト分析の研究蓄積には遠く及ばないものの、前田愛の一連の仕事をはじめとして、今日もその水脈は活きている。しかしオラリティに目を移すと、オングの訳者が指摘した第一の意味でも第二の意味でも、ほとんど手付かずのまま放置されていることに気付く。

そこで読書(者) 論の蓄積を援用して、たとえば聴者論のようなオラリティを考察する問いを設定することは、可能ではなからうか。

また、リテラシーとオラリティはそれぞれ独立した、あるいは棲み分けた概念ではない。この小論で例示したように、両者はしばしば相互に参照し、ある種の「もの語り」の様式を生成する。

このとき、「もの語り」という概念を、フィクションを創出することばの働きに留めず、「リアルなもの」を描き出し創出させる、時代に特殊なことばの働きとして捉えれば、文字によるテキストや声によるディスコースのいずれかに限定した「もの語り」分析からは見えてこない、そして「言」を「文」に一致させて「国語」統一を図る潮流を問題化する視座では隠れて見えなかった、より動的で立体的な「もの語り」の座標軸が姿を現すだろう。

こうしたリテラシーとオラリティの相関関係は、いままでも文学研究あるいはメディア研究で、どれほど考察されてきただろうか。たとえば本論で扱った野球実況や漫才などの諸言説、そして講談師や活動写真の弁士などの諸実践は、いわゆる「文学」研究のテーマとしては不適当なもののだろうか。もちろん、「メディア」研究の

側にも同様の省察が必要である。その時、個々の研究者がそれぞれ個別に取り組む作業も重要だが、専門分野を超えた研究交流も実現できないものだろうか。

「もの語り」の座標軸は、より立体化して考察することができ

注(1) 放送用語委員会の詳細については、拙著『英語講座の誕生』(講談社選書メチエ、二〇〇一年)第七章を参照。

(2) 「早慶大決勝戦記」『文藝春秋 オール読物号』一九三二年八月、四九五頁。なお、これは文芸誌に採録された速記記事のため、一字一句が正確に書き写されたテキストかは実証できない。こうした一次資料の難しさが、声のメディアの研究には常に付きまとう。ここでは、

同年に発売された松内のアナウンスのレコードと対照し、両者の資料に共通して現れた言い回しの部分を引用した。

(3) 松内則三「早慶大野球戦」(ポリドール・レコード、一九三〇年制作) 四枚目(四七五―B)の冒頭より。

(4) 松内則三「早慶戦アナウンス物語」(『野球界』一九三〇年一〇月増刊号)六二頁。

(5) 橋戸頑鉄「野球のラヂオ放送批判」(『サンデー毎日』一九二八年九月二三日号)二九頁。また、竹山昭子「ラジオの時代」(世界思想社、二〇〇二年)や、竹山も参照している南利明「早慶戦と松内則三①④」(NHK総合放送文化研究所「文研月報」、一九八二年二月号―八三年三月)でも、松内のアナウンスは「講談的」と評されている。

(6) 「松内節」を中心とするスポーツ・アナウンスの成立過程をメイ

ア史の視座から検証する作業は、現在論者が進めている。その一つは「スポーツ実況のオラリテイ」(関西大学社会学部紀要)第三四巻第三号、二〇〇三年)に発表予定である。

(7) 横山エンタツ・花菱アチャコ『漫才 早慶戦』(ニッポニー・レコード、一九三八年制作、六三七六—A・B)の後半は、野球放送をデフォルメした「もの語り」によって展開されている。

(8) W. J. オング(桜井直文他訳)『声の文化と文字の文化』(藤原書店、一九九一年)三七〇—一頁。ただし、オングはラジオを含む電子メディア時代の声の文化を「二次的な声の文化(Secondary Orality)」とよんでいるため、それ以前の一次的な声の文化との区別に注意を払うべきだが、こうしたオングの「二次的」「二次的」という区別や、そもそもオング自身の議論が前提としているOralityとLiteracyの関係性については、改めて検討すべき重要な課題である。

同じテキストを読む

——日本文学研究と日本文学——

中 川 成 美

今、この世界で、どれだけの人々が日本語で日本文学を読んでいるのだろうか。また、日本をめぐる日本語テキストを研究する人々ほどのくらいいるのだろうか。日本文学と呼ばれるテキストに携わる研究者が、案外にこのことに無頓着でいるのは、日本語と日本人、あるいは日本文化が不可分に結ばれていると無意識に信じているからであろう。しかし、現在多くの大学では様々な国からの外国人留学生がすぐ隣の席で日本語の文学作品を読む光景は決して珍しくないし、また少なくとも数の日本人学生が日本文学を海外で学んだりしている。それなのに、日本が日本文学研究の「本場」であると安定的に考え得るのは何故なのだろうか。勿論、日本文学が日本という地域に根差した日本語によつて書かれたテキストであると考えれば、圧倒的に研究人口、読者人口が多いのは当然であり、数の上からの判断では世界に突出した研究環境を有しているといえる。しかし、そのことと日本が日本文学研究の主流であると考ええるこ

ととは、一致しないのではないだろうか。そもそも、文学研究に主流や非主流があるのか、そう断定するのは誰なのか、またそう断定するのはどんな資格と条件をもつてなされるのであろうか。二〇〇二年九月から半年間、スタンフォード大学の客員教授として、またワシントン、コロラド、コロンビア、ハーバード、ウエーズレー各大学での講演、UCLA、シカゴ大学でのワークショップへの参加などを通じて出会った日本文学というテキストを共有する北米の研究者、そして日本文学を学ぶ大学生や大学院生らとの対話は、私に深くそのことを考えさせた。

一

現在、ある国の文学がその国の名を冠して「〇〇文学」と呼称され、その国がその文学を私有・固有しているかのように考えることに對して、近年特に研究が進展するポスト・コロニアル論やカル

チュラル・スタディーズ、エリア・スタディーズなどの成果から見直しが図られようとしている。日本文学研究にも日本文学の自明性を問い直そうという動きが出てきた。例えば、在日韓国・朝鮮人のいわゆる在日文学や、また朝鮮半島や中国、東南アジアで多数出版された被植民地作家による日本語で書かれた文学、またリビ・英雄など外国人による日本語の文学は、果たしてこれまでの概念規定による日本文学と単純に呼称して良いのかなどの新たな問題項が出現している。川村湊による「日本語文学」の提唱などは、このことへの関心を示した見解の一つであろう。ここには政治的、歴史的、文化的な各コンテクストが複雑に絡まりあつて、単純に日本文学を指定できない、また、してはならないという意識が確実に反映してきている。

逆に外国語で作品を書く「日本人」（日本語を一度は母語とした人々）作家、例えばイシグロ・カズオや多和田葉子、モリ・キヨウコはどうなるのか、あるいは「日系」（日本語を母語とはしなかった日本人をルーツとする人々）作家らの日本をめぐる小説や詩、例えばジーン・オオイシ、ケリー・サカモト、ジョイ・コガワ、リイディア・ミナトヤなどの作品はどう規定されるのかという疑問もここに浮上する。彼ら／彼女らが外国語によって提出した作品を単純にその言語が話される国の文学と言い切つていいのかということだ（北米ではアジア系作家の作品にアジア系アメリカ文学 *Asia American Literature* という命名をしているが、この言葉も私にはしっくりこない。特に日系二世、三世のアイデンティティの揺れに題材をとった作品を読むとき、そ

の呼称を与えるアメリカの責任が問われなくなってしまう気がするからだ）。

つまり、当たり前のことではあるが、日本をめぐるテクストはただ日本語だけで書かれないし、日本語は決して日本人のみの表現言語ではないし、また外国語で書かれた文学がその書かれた言語の話される国のみの文学ではないということである。それらをいっしょくたにこれまでの日本文学（日本語で書かれた日本人の文学）に統括しようとする自体が無理だし、また同様に外国文学に繰り入れることも不可能なのだ。日本文学という言葉概念規定しようとするべするほど、国家と言語の一体化という近代国民国家の幻想のテーズがたちまちのうちに呼び込まれて、正統と異端という分別を要求する。メカニズムをどのように考えていけばいいのか。このことは、私たち日本近代文学（この言葉も考えれば問題を孕んだチームである）を研究する者にとつて、存外に大きな問題ではないだろうか。

それでは日本文学という規定をとばらつてただ文学と呼ぼうとか、文学とは世界文学なのでありそうした国民国家の枠組みを超えるものである、あるいは日本文学研究もこれからは「世界文学」研究となるべきだなどという論議も、私にはどこかまた同様なアポリアに陥る危うさを感じさせる。文学という枠組み自体を一体誰が決定・承認するのかという根本的な問題はさておき、「日本」と総称されそのなかで生じた政治的・歴史的・社会的諸問題を根底に据えたこれらの作品群を、そのことに関与させないままに「文学」や「世界文学」と一足飛びに呼んで、「美学的範疇」に閉じ込めてしまふことには抵抗を覚えるからだ。おそらくこうした問題項の根本

にあるのは、日本文学と呼びならわしてきた概念そのものをどのよう
に再審問していくかというこれからの文学研究の基底的方向であら
う。

単純に「日本語で書かれた日本人の文学」という規定がもう通用
しないのと同様に、「文学は文学であつて国や民族は関係ない」と
いう安易な文学主義的言辞もはや何の指標にもならないというこ
とである。ならば逆にこれまでの「日本文学」という語が持つ自明
性そのものから出発したあらたな方向の模索が必要だと、私は思
う。この語から浮上するのは、正統化されたテクストと、排除・周
縁化されたテクストの分別がどのような歴史的・文化的・社会的コ
ンテクストによつて構成され、どのように構造として定着してい
たかという問いである。そしてなおかつ研究者はどのようにその個
別の対象への意識を、そうした構造へと連絡させていってしまった
か、構造へと連絡させたことも意識させないような規範認識をどこ
で獲得してしまつたかという問いを、自身に投げかける契機を発見
していくにはどうしたらいいのだろう。

つまり、研究者なり読者なりの「私」が今在る場所としての「日
本」と、その「私」の固有性を思考する場所としての「文学」と
は、危ういバランスのなかに屹立しているのだということへの意識
を、どのように想像力のなかで成熟させていくかという論点が要求
されているのだ。だからこそ「日本文学」という語に徹底的に拘
り、その展開・転回に向けた試行を歩みたいというのが私の基本的
な立場である。

2

この試行への歩みを踏み出すために、やることは無数にある。し
かし、一人では出来ない。細分化されてしまった研究状況を再編制
して、様々の表現とのより緻密な連携を図っていく必要がある。た
だ、ここで断つておきたいのは、「細分化した研究」とは決して否
定的な評価ではなく、そうしたより専門性の高い文献学的な堆積を
基礎としない限り、ここで述べる目的は達せられないと私は考えて
いる。そうした積み上げこそがこれからの研究を可能にするのだ。

問題はそれらが「研究方法」となつて自給自足した時、また総合的
と称する「研究方法」がその堆積を安易に「使用」・「略取」する時
に発生するテクストの「封じ込め」、つまりそのテクストに付与さ
れた評価を自明のものとして継承する再生産の上にもつてもテク
ストを括りつけてはならないということだ。これまで文学は、それ
を多様な言説に交差させる試みの中でその文学性を豊かに發揮して
きた。専門的視点と巨視的視点という相反する方向を同時に行使す
るのは共同性である。高度の専門性に培われた各研究者の達成は、
勿論各個人の業績である。署名をもつて書くということはその個人
の責任のもとでなされるのは当然である。

が、私がここで述べたいのはそれらが相互に接触した時に生起す
る衝突・衝撃が、テクスト自体を「発達」させるのではないかとい
うことである。テクストが研究の名のもとに括りつけた様々な読解
を交差・連関させ、テクストのなかに置き去りにされてしまつた人

間の「生」、また「感情」を外界へと解き放つ努力は、おそらくはテクストそのものが持つ可能性をあらたに拓いていくことになるのではないか。そしてそれが「生きた実体」となって各個人に共有された時、その違った意識、見解、認識は、それがどうして生成されていったのかという根本的な場所に戻って、思いもしなかった読解を生み出していくかもしれないのだ。それは思い付きなどではなく、まして奇をてらった新解釈でもなく、もともとテクストが内包する人間の「共通問題」を、文学の土壌で考え直すことでもある。

その一つの試みが、冒頭で述べた一体誰が「日本文学」を読み、研究するのかという問いである。現在、世界の多くの大学ではアジア研究の学科、学部が設けられ、そこには必ずと言っていいほど「日本語」、「日本文学」のディビジョンが設置されている。またそこから日本文学を学びに学生が日本に留学している（この留學生の問題については別に論じたい）。よくそれを日本の経済発展に伴う国際認知などの結果という説明がなされるが、少なくとも欧米圏では第二次世界大戦下における「敵性外国人」の研究として出発した。「不可思議な敵」を知るための学問は、やがて日本という「異質な文化構造」への分析となり、やがてハイ・テクノロジーの先端国としての日本が発信する「ポストモダンの表現」への関心に推移したことは、エドワード・サイード風にいえばまさしく「西洋が東洋の上に投げかけた一種の投影図」（「オリエンタリズム」）なのであるが、現在北米の日本文学研究においては大きな変換が起きている。

北米においても「文学の衰退」は八〇年代末から大きく論じられ、文学研究はカルチュラル・スタディーズやサブ・カルチャー研究にシフトする傾向があった。そのなかで北米の日本文学研究は周縁的な学問としてあつたがために、より自由にそのシフトを利用して日本文学の旧来の枠組みを変換していったのは、一見「文学離れ」のように見えて実はそこにある圧倒的な質量に支えられた日本文学テクストを発見させていった。北米での価値、アメリカ的価値基準を相対化する役割として見出されたそれらが、個別に研究対象として成熟していった一つの例として、北米における近代性^{モダンティ}に関する研究を挙げたい。

北米において日本の近代化は、西欧型モデルのアジア型達成として日本に関する歴史学、社会学の領域では研究の中心的テーマであったが、文学研究においてはそうした近代化への反措定としてエドワード・サイデンステッカー、ドナルド・キーン、ハワード・ヒベットらによる谷崎や川端、三島の精力的な翻訳・紹介がなされ、世界に日本文学を認知させた。しかし、圧倒的な「異質性」として提出された日本文学を、近代化の一面面として再定義しようとしたのが九〇年代以降に顕著となった北米日本文学研究における近代性^{モダンティ}への注視にあつたのではないだろうか。それはアメリカが到達した近代資本主義の相対化であり、近代性^{モダンティ}の桎梏への深い疑惑が介在しているような気がする。

こうした近代性^{モダンティ}へと言及する、九〇年代前後からの示唆に富んだ刺激的な研究書を知る限りの中からランダムに拾えば、チャール

ズ・シロウ・イノウエ『泉鏡花と視覚的伝統』(ミシガン大学出版社、以下大学出版社は大学名のみ、一九八八)、ミリアム・シルバーバーグ『替え歌——中野重治のマルキスト宣言——』(プリンストン、一九九〇、邦訳は平凡社、一九九八)、デビッド・ポーラック『文化に抗する読み——日本文学におけるイデオロギーと語り——』(コーネル、一九九二)、ホゼア・ヒラタの『西脇順三郎の詩と詩論』(プリンストン、一九九三)、ジェームス・フジイ『共謀するフィクション——近代日本散文の語りにおける主語——』(カルフォルニア、一九九三)、デニス・C・ウオッシュバーン『日本文学における近代のジレンマ』(イェール、一九九五)、ジョン・トリート『爆心地を書く——日本文学と原爆——』(シカゴ、一九九五)、ジョン・ソルト『意味のタペストリーを切り刻む——北園克衛の詩と詩論——』(ハーバード大学アジアセンター、一九九九)、フィリップ・ガブリエル『狂える妻たちと島嶼の夢——島尾敏雄と日本文学の周縁——』(ハワイ、一九九九)、ミリアム・サス『断層線——文化的記憶と日本シニールレアリズム——』(スタンフォード、一九九九)、マーク・W・ドリスコル『エロスの帝国・グロテスクの帝国——日本帝国主義モダニズムの作品とテクスト——』(ミシガン、二〇〇〇)、セイジ・ミズタ・リビット『日本モダニズムの地誌』(コロンビア、二〇〇二)、デビッド・M・ローゼンフェルド『不幸せな兵士——火野葦平と第二次世界大戦日本文学——』(レキシントン・ブック、二〇〇二)、ジェニファー・ヴァイゼンフェルド『マヴォ——日本の芸術家とアヴァン・ギャルド、一九〇五—一九三一』(カリフォルニア、

二〇〇二)などが並ぶ。これに例えば史書美の『近代の魅惑——半植民地中国における書かれたモダニズム、一九一七—一九三七』(カリフォルニア、二〇〇二)など日本との交通を描いたアジア文学研究、文化に相渉る仕事、レスリー・ピンカス『帝国主義下日本文化の認証——九鬼周造と国家美学の勃興——』(カリフォルニア、一九九六)、ハリー・ハールトユニアン『近代性を乗り越えて——戦時下における歴史、文化、そして共同体——』(プリンストン、二〇〇〇)などの日本思想史研究、そしてノーマ・フィールドの『天皇の近く国で』(ヴィンテージ・ブック、一九九三、邦訳はみすず書房、一九九四)などの日本をめぐる深い洞察に満ちた文学的思索、それに英語以外の言語による日本に関する近代性研究、翻訳を加えていったら一体どれほどの数の書籍を挙げなければならないのかと、気が遠くなる思いだ。問題は、僅かを除いてこれらの殆どが翻訳されていらないという事実である。私を含めた日本近代文学研究に携わる者にその責任の一端はないであろうか。

3

前節で羅列的に挙げた題名(各表題は意識した)を繋げていくと、九〇年代前後からの北米日本文学研究はシステムとしての近代化過程を注視するために、また近代化への抵抗としてあった文学的位置を表出するために、大きな機能を果たしてきたように思う。しかし、もっと重要なのはこれらの研究者たちが必然として選び取らなければならなかった自己の「位置付け」が、これらの著作を生み出

す動機ともなっている点である。アメリカにとつて最も「忘れたい事実」である原爆を真正面から採り上げたジョン・トリートはその感動的な前掲の大作の中でこう言っている（未訳であるのは残念ではない）。

私の立つ位置は安穩なものである。私は広島・長崎の被爆者ではない。私は日本人ではないし、ましてや第二次世界大戦中に生きているのではない。だが、まったく個人的な関与であつたとしても、原爆という話題に文化的にも歴史的にも完全に無辜であるとして近づいていくことは、私には出来ない。私、あるいは私の仕事に賛同してくれる誰かがアメリカ人である限り、私の位置は紛れもないアメリカ人、また空前の核兵器の使用ということによつて条件付けられている。

「加害者」からの発想ということを、「日本文学」のなかにいる私はもちろん共有しない。「被害者」であるからこそ、「告発」は有効であると信じてきた。だが、「原爆」というあらゆる道徳、法、正義を超える根源的な悪を表出していくためには、「被爆者でもアメリカ人でもなく、第二次大戦中に生きているでもない」私という日本人が立つ「安穩な位置」をも相対化しなければならぬのではないのだろうか。文学はそこにある人間の通つた歴史的・文化的コンテクストを感じしないままに、また自分が通つた歴史的・文化的コンテクストを通過しないままに解釈出来ない。だが、それだけでは不十分だ。その幾重にも巡返す中にならずに形を結んでくるものを、より高みに向けて困難を超えて思考実践

することだけが、この耐えがたい人間存在の呪縛をゆるめていくのだと思う。

とすればこの「苦痛」の共有が、日本文学のあらたな地平を見出していくことになるだろう。それは文学に内包された「他者」の微かな声を聞き取ることでもある。私が言おうとしているのは「お互いの立場にたつて理解し合ひましょう」などというお気楽なものではない。「異質」であるということをとことん追及し、そこに胚胎する矛盾・葛藤を検討し、その相対化の果てにはんやりと輪郭をとる「なにものか」を見出したいのだ。

九〇年代以降の北米においての日本近代文学研究が積極的に近代性モダニティの問題を採り上げるのは、「遅れた近代」としての日本が西欧近代の中心性を逆説的に否定する役割を果たすからであろう。ジェニファー・ヴァイゼンフェルドは前掲書のなかで、「(西欧の)学者は二十世紀初頭の日本美術に『モダニスト』というタームを使用することに對して、日本には『モダニズム』の母型モティフが欠けていたという理由から問題視してきた。」という北米の日本美術の理解を批判しながら、江戸期からの文化伝統のなかにあつた模倣と経験主義の経緯を追っている。彼女の論点は同時代的に進行する近代性モダニティを、西欧的手法や形式に集約することが出来るかということである。つまり、精神性のレベルに引き戻すことによつて、前衛芸術運動の中心的な意識を考察しようという立場に立っている。マヴォはまさしくここで語られるコンテクストの横断を果たした。これは極めて有効な観点ではないだろうか。

こうした日本との研究の相違を「ずれ」とか「特殊性」といった言葉で片付けるのは間違いであろう。モダンティイという用語を基幹として発見されていったのは、日本文学と呼称されるコンテクストの中に、今のアメリカを相対化する多くの論点が見出されたからに違いない。特に一九二〇年代から五〇年代の作品群に集中する彼らの研究を見渡すと、そこにはこの二十一世紀という「近代」の終点に戦争を始めたこの国が、日本の近代性モダニティをとことん見据えることによってアメリカ合衆国の虚妄と、その背後に聳える近代性の神話を打ち壊そうとしているかのように見える。翻って「日本人」である私がこの「他国の戦争」を具体的な恐怖とともに「実感する」ことは、母国の歴史的な記憶、例えば一九三〇年代の戦争への過程（それは驚くほど似ている）を追体験して、今のアメリカが掘る近代性の言説を理解・批判する根拠を導き出している。私たちが「同じテクスト」を読み研究することは、こうした逆方向の同じものへの感じ方、そして具体的な目的を交換してくれる。この文学の求心力が時空を超えて共に語る共有の場へと運んでいくのだ。これはおそらく文学にしか出来ない、文学でしかありえない出来事だと思う。そして、何より重要なのは、このことをもって私たちは別の場所・立場オルタナティブ・スペースを獲得することが可能となり、抵抗としての共同性に立つ契機をこの手にすることが出来るかもしれないのだ。

4

最後にささやかな具体的提案をしてこの小文を括りたい。先に述

べたように今北米では陸統と若い世代を中心に新しい研究が発表されているが、世界の各地で私たちが触れてみたい研究が発表されていることだろう。先ず本誌に望みたいこと。(1) ぜび、本誌の書評欄でそれらのなかの優れたものを採り上げて批評してもらいたい。勿論、外国語を読むということは時間がかかるが、先ずは何が書かれているかを紹介してもらおうだけでも大きな研究の助けになる。(2) 海外の雑誌掲載論文の翻訳、ないしは直接に海外の研究者に原稿依頼（徳穂原稿）をして本誌に掲載することは出来ないであろうか。将来的な希望を言えば日本と海外との研究者が共同して双方の刊行物、および作品の翻訳作業を進めていければと思う。翻訳とは具体的な注釈作業であり、これに双方の眼が注がれることはテキスト解釈の上からも大きな成果を生んでいくだろう。

次に情報交換に関して。(3) 日本の近代文学関係学会情報、例えば大会発表プログラムとか刊行物の紹介とかを海外にも発信することは出来ないか（私の知る範囲でもこの要望は高い）、また海外での日本文学関係の学会情報を簡単に閲覧できないか。こうした情報は個別にインターネットからとれるがその情報を集約して提供してくれる場があればと願う。

これだけでも決して「ささやか」とは言い難いエネルギーを割かなければならないのを重々承知しながら、それでも私が拘りたいのは本誌を読む多くの人たちが大学や高校など「国家のイデオロギー装置」の中にあることを考えるからだ。教員も学生も少子化、文学衰退、教育改革、大学再編など「時代の趨勢」という騙し文句に引

きずられ、今眼の前にある状況・光景を自明のものとしてしまっている。だが、本当にそうなのだろうか。大学行政改革で見えてきたのは、限らない資本主義への摺り寄りであり、競争原理の過酷な導入であり、人文学への偏見に満ちた蔑視であった。それは日本文学研究が培ってきた膨大な文献学的堆積が実証するまじいまでの人間性への抑圧、人間感情の抹殺の記録を隠蔽して、その伝達の存続を切断しようとする国家欲望の遂行には好都合なものとなるだろう。無意識にでもそこに手を貸してはならない。

その抵抗のためにも日本文学研究はある。同じテクストを読む人間がそれぞれに持つ身体化された抜きがたきコンテクストを引きずりながら、そこに展開する葛藤・混乱を突き詰めて、なお対話し続ける意思の持続のなかに共同性は機能し始める。共同性とは妥協でも中和でもまして馴れ合いでもなく、未だ見ぬ^{オルトナティブ}もうひとつの可能性への追及である。それは結局「自分」への関心をいかに「他者」への関心へと接合・交通させるかという文学の問題なのである。この関心のなかに文学テクストは初めて成立する。「文学は終わった」などという論議を支えるのは、この「関心」が想像力という問題に直結していることを全く考えない思考力の貧しさである。

戸坂潤はその「関心」についてこう言っている。

人間が関心の組織的發展力を持つてゐるなら、当然現はれるに相違ない健全な聯想力によつて、関心と関心との間の關係が追及されるに相違ないから、関心体系の振幅は自然と肥りながら拡大して行く筈だ。さうすれば未知のものに就いても、夫々

の体系に相應しい見当づけが行はれるに相違ないのである。この見当づけの探照灯の下に照らし出された新しいものは、新しい関心対象に値するものとして、初めて発見されることになるわけだ。

(傍点は戸坂、「思想と風俗」平凡社東洋文庫)

この人間の「健全な聯想力」に支えられた「見当づけ」と、その下で初めて「発見」される新しい関心。それは自分と他者の間を結び関心にも応用されるだろう。ここで「初めて発見されることになる」ものこそ、同じテクストを読む人間たちが共有しようとする共同性の別の呼び名なのだ。この関心こそが私たちも未だ知らない「日本文学」を喚起し、国民国家の枠組みに収納されてしまった「文学」を別のコンテクスト(私が夢想するのは抵抗の共同性として機能するものだが)へと導いていくのだと信じたい。

二一世紀の中・日関係を築くために

——「日中・知の共同体」の六年間——

小 森 陽 一

中国思想史の溝口雄三さん（大東文化大学）と中国社会科学学院の孫歌さんと出会ったのは、まったくの偶然であった。一九九七年の秋、北京の「日本学中心」（日本学センター）開設十周年記念シンポジウムに招かれたことである。

北京にむかう同じ飛行機の中で、当時講談社の編集者であった小孫靖さんと隣の席に座った。初対面ではあったが、私がゲラ刷りの校正を広げているのを見て、小孫さんから声をかけてくれたのだった。小孫さんは、戦後ずっと日中友好運動にかかわってきた経験を持ち、その政治的紆余曲折についても熟知されている方であった。ある時期、大岡昇平さんや大江健三郎さんの担当編集者をなさっておられ、機内の話はつきなかつた。

長年文芸担当編集者をなさってきた小孫さんは、その過程で集められた膨大な蔵書を「日本学中心」に寄付され、その「小孫文庫」

開設の式典が、十周年記念行事とあわせて行われるということであった。

いつまでも勉強家である小孫さんは、このとき「日本学中心」の日本側の主任をなさっていた溝口雄三さんの著作を持っていらして、中国の学者よりも、はるかに中国の歴史と文化と思想を知りつくしている溝口老師をめぐって、ひとしきり語り合った。

かくして小孫さんと私は、シンポジウム終了後の夜、ビールとウイスキーを持って溝口老師の部屋に押し入ったのである。そのとき溝口さんは、この年の春に「市民社会、近代化、公共領域、中間層」という題で行われた、日・中の「知識人」によるシンポジウムが、いかに失敗したのかを語られた。思えば、その失敗の経験が、「日中・知の共同体」の第一回の試みであったのだ。

その夜の対話の中で私にとって印象的だったのは、溝口老師の口

を繰り返して出てくる「知識人」という言葉であった。

中国の実状について、ただ情報を知りたいという姿勢ではだめだ。なぜして何のために知りたいのか、という動機や目的意識をはっきり示さなければいけない。日本と中国、それぞれの国で、自国のよりよいあり方に批判的に悩み、責任感を持ち、知識を得ることだけに満足せず、知識それ自身が負っているはずの社会的歴史的責任を自覚的に担おうとする者同士でなければだめだ、それが「知識人」なのだ、というのが溝口老師の考え方であった。

アジアへの侵略戦争を美化し、歴史認識を歪めようとする「新しい歴史教科書をつくる会」の動きと、新しいナショナリズムの策動に対して、全面的な批判を行う、「ナショナル・ヒストリーを超えて」（東大出版会、一九九八）の準備を、哲学者の高橋哲哉さんとはじめていた私は、溝口老師の言葉に意気投合した。小孫さんは、そこそ自分が求めている日中友好の運動だ、と語気を熱くした。

すると溝口老師は、すでに深夜であったにもかかわらず、孫歌さんを深夜の酒宴に呼び出したのだ。溝口老師の言葉によれば、孫歌さんは、日本学の専門家としては得がたい「批判的知識人」だ、ということであった。その言葉がぴたりとあたっていたことは、孫歌さんの『アジアを語ることのジレンマ』（岩波書店、二〇〇二）を読んでいただけでは証明されると思う。

深夜の酒宴は明け方まで続いたが、そこでいくつかの基本的な一致点が確認された。「日中・知の共同体」は、なによりも社会的、歴史的な責任を自覚的に担おうとする日中両国の「知識人」の出会い

の場とし、閉鎖的で固定的な場にはしない。「共同」とは、単なる知識の交歓や評論家的談義ではなく、常に自己のあり方に対する批判の目を注ぎ、自己に緊張を強いながら、知によって日中相互の現実により深く関与する方法であることが確認された。

翌一九九八年には、北京で「近代とナショナリズム」と題したシンポジウムを開いた。このシンポジウムには柄谷行人さんにも参加してもらい、このときから岩波書店の「世界」と「思想」の編集長・編集部も常時参加してもらえることになった。中国側からは、公称発行部数一二万部の「読書」という雑誌の編集部が参加した。

「読書」は、中国では、知識人や学生に最もよく読まれている雑誌だが、そこに日本人の執筆者の論文が載ったり、日本の問題が論議されることはほとんどなかった。しかし、「日中・知の共同体」の運動をとおして、シンポジウム参加者の発表原稿が掲載されるようになり、同時に「世界」や「思想」にも、中国側の参加者の論稿やインタビューが繰り返し発表されるようになった。

とくに一九九九年、中華人民共和国建国五〇周年の年に、あえて「戦争と革命」と題して行なったシンポジウムは、大きな反響を呼んだ。それまで、中国の知識界には、日本における、かつての侵略戦争に対する、きちんとした批判的言説はほとんど紹介されていなかった。けれども、このときの日本側参加者の戦争に関する発言が「読書」誌上で小特集として発表され、それに対する北京大学、中国社会科学院、上海の復旦大学の研究者たちの応答がなされた。

また、中国側の参加者が、「世界」などにたびたび登場し、その

都度新しい問題提起的な発言を行うことよって、現在の中国の国内において、自由な言論の空間を拓けようと努力している人々の存在が、日本の読者にも伝えられることになった。体制の内か外かといった、類型化した見方では、現在の中国の言論界の状況が捉えられないことも明らかになった。

二〇〇〇年からは、東京で会議を開くことになり、台湾、香港、韓国からの参加者も招き、「日中」という枠が、さらに「アジア」へと開かれることになった。哲学者の高橋哲哉さんにも参加していただいた「アジア認識と戦後責任」、さらに「日中間における報道ギャップ」といったように、アクチュアルな議論を行えるようになっていったのである。

ここには、「知の共同体」の運動が、単なるタテマエとしての「友好」の運動ではない、ということがはっきりとあらわれていたように思える。

国家と国家の間における「友好」のタテマエは、実際にそれぞれの国のマス・メディアによって意図的に煽られて生み出される、気分や感情の上での対立関係を、事実上隠蔽する役割もはたしていたのである。

それが「友好」的な「交流」を、きわめて表面的なものに終らせ、日中両国が長年蓄積してきた、それぞれの国に対する大衆的なイメージの中に潜む、根強い憎悪や不信感につながるコンテクストに対して目をつむることもつなげていたのである。

ポリティカル・コレクトネスのレヴェルで問題を捉えているよう

では、本気の対話は成立しない。国境を越える対話の中には、常に、形にならない危機感や緊張関係が内在している。そうしたいまだけ形にならない潜在的な気分や感情のレヴェルまでも、言葉にして相手との間にはっきり提示することをとおして、はじめて「知の共同」の発端が切り拓かれるのである。

日本近代文学会のメンバーとしては、一九九九年あたりから、島村輝さんに協力していただいている。「日中・知の共同体」の運動をしながら、小孫靖さんも含めて、平行して現在の中国における日本近代文学研究を担っている、私と同世代からより若い研究者たちと、研究会を積み重ねてきた。

たしかに、ビジネス・チャンスと結びついた形での日本語学習者は、年々中国では増えつつけている。けれども、日本文学や日本学を中国で教えてきた、それまでの日本側の研究者たちの多くは、現実の中国の状況に対して無理解のまま、旧態依然たる日本の学風を平気で学生や院生たちに押しつけてきたのである。

日本の近代における「文明開化」路線もそうだったが、中国の中心的な知識人や文化人の多くが、欧米への留学体験者であり、主要な関心は欧米諸学問に向いていて、アジアに対する関心はきわめて低い。日本に留学する場合でも、それは日本の欧米化を通して、欧米的なものを吸収するためであり、日本の社会や文化それ自体に関心をもつてのことではなかった。かつて福沢諭吉の掲げた「脱亜入欧」が、そのまま中国においても反復されたのである。もちろん、現在では「脱亜入米」に変形してはいるが。

その意味で、日本には、知的思想的「資源」はない、というのが、現在の中国においても、知識人や文化人にとって一般的な認識なのである。そうした状況の中で、日本国内の狭い業界でしか通用しないタコソポの学風を平気で中国に持ち込んだ人々によって、日本学に対する軽蔑や不信任は増幅されたのである。

世界的なレヴェルで通用する最先端の学問を担いうる研究者を、「日本学中心」にも派遣しようという努力が、九〇年代後半から行われている。その中で島村輝さんなども、孫歌さんや若手の研究者と協力しながら、中国の日本学の在り方を変革するために重要な役割を果たして来たのだと思う。

二〇〇一年には、東京で、「日本のメディアの中国イメージ」、「教科書問題について」「日中・知の共同体」の現在点、「現代中国の社会変容」と題して、四回のシンポジウムを行った。日本側からは主要新聞の記者や編集委員、テレビ関係者など、マス・メディアにかかわる人々にも広範に参加してもらい、類型化され、歪められた中国像を反復的にたれ流している状況をどう変えていくことができるかについて、素直な討論が行われた。

ときには激しい論争にもなる討議の中で私たちは、いくつか重要な発見をした。一つは、戦争責任問題や、歴史認識問題(靖国問題も含む)は、通常「日中」両国間の政治外交問題あるいは国際問題としてとらえられがちだが、そのレヴェルで素直で批判的な議論を徹底すると、それらの問題が、実はきわめて「中国的」な、そして「日本的」な国内問題ないしは内部問題として存在していることが

明らかになってきたのである。

一例をあげてみよう。「新しい歴史教科書をつくる会」のように、なぜ日本のナショナリストたちは繰り返しかつての侵略戦争を美化しようとするのか。これは、一方では、九〇年代に入ってから、あらためて「従軍慰安婦」問題を軸に、アジア諸地域から、日本の戦争責任と戦後責任を問う声が、これまで自国内部でも発言を抑圧されてきた女性たちを中心にあがってきた、という国際問題であった。しかし他方では、ついに自らの戦争責任を認めないまま、「冷戦構造」が崩壊するのとは同時に昭和天皇ヒロヒトが死んでしまい、私たち日本国籍を持つ者が、自力で彼の戦争犯罪責任を裁くことができなかつた、という内部問題でもあるのだ。

「新しい歴史教科書をつくる会」の末尾近くの昭和天皇をめぐるコラムでは、ヒロヒトが自らの戦争責任を全面的に認めたことを証明するために、一九六四年に発表されたマッカーサーの回想録を引用している。「東京裁判史観」を打破すると声高に宣言している集団であるにもかかわらず、ヒロヒトが戦争責任を認めていたことを示すためには、マッカーサーの言葉に頼るしかないのである。

昭和天皇ヒロヒトの戦争責任を免責すること、とりわけ東京裁判で彼を訴追しないことが、「国体護持」を至上命令にしていた日本の支配層と、占領支配の中心的道具として天皇の「権威」を使おうとしたマッカーサーII GHQとの談合的シナリオであったことは、ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』(上・下、岩波書店、二〇〇二)や、ハーバード・ピックスの『昭和天皇』(上・下、講談社、二〇

〇二などがつまびらかにしている。

そして二〇〇二年の秋には、情報公開によって、外務省の公式文書にも、宮内庁のそれにも、昭和天皇の「全責任発言」が存在しなかったことが確認された。そうであるにもかかわらず、ある種の歴史家たちは、あったのに削除されたのだ、と強弁してはばからないのである。

歴史認識をめぐる問題というのは、ウソがホントで、ホントがウソという日本の侵略戦争の最高責任者の、言説の質の問題なのであり、こうした言説空間こそが、敗戦後の「あいまいな日本の私」を形成してきたのである。こうした内部問題、国内問題をどう総括するのかが、素直な議論を展開する中で、日本側には鋭く問われたのである。

同時に、国内の様々な問題から目をそらさせるために、反日ナショナリズムが利用されていることに対して、中国側からも、きわめて素直な批判が行われたのである。

二〇〇二年の正月、北京で開かれた「流動する中国の現状と課題」では、中国が抱えている三農問題、「農村・農業・農民」問題が赤裸々に報告された。「社会主義的市場経済」の根本的矛盾が、日本のジャーナリストも含めて議論されたのである。

それは、アメリカン・スタンダードを全世界に押しつけるWTOシステムに加入させられることで、上海や広東といった沿岸部の工業都市で生産される製品を売るために、農村と農業が犠牲にされ、農民たちの生活が踏みにじられている現実をどうとらえるのか、と

いう問題であった。同時に、それは中国の安い労働力を求めて進出する日本企業の在り方をどうとらえるのか、ということとも連動し、東北アジアにしろ東南アジアにしろ、一国内部の問題が一国だけでは解決できない状況を浮き彫りにした。

こうした討論を受けて、二〇〇二年夏に東京で、「日中・知の共同体」としては、とりあえずの活動の締めくくりとして「アジアを語ること——その困難さと可能性」と題したシンポジウムを行った。中国、日本、台湾、韓国からの参加者が、それぞれの個人として最も切実な、今・ここにおいて直面している問題について、分析的であると同時に政策的な報告がなされた。

このような討論のしかたをとおして、各国の現状を並列させて、あなたもアジア全体の問題を論じたことによるような、よくありがちな議論を突破することができた。アジアにおける「南北問題」、富める北による南の搾取が、国と国との間においても、同時にそれぞれの国の内部においても深刻化し、差別や偏見の温床になっていることが明らかにされた。

とくに、アジア地域とアメリカとの関係に焦点をあてた議論が、様々な角度からなされた。これまでのアジアにおける外交が、常にアメリカと中国、アメリカと日本、アメリカと韓国という二国間関係に拘束され、アジアにおける多国間外交が阻害されている問題。とりわけ日本の歴代内閣の対米追従路線が、多国間の自主的外交の可能性をつぶしている問題などが、緊張感を孕んだ議論の中でとりあげられていった。

ここからここまでは「国内問題」だから、「内政干渉」になるような発言はできない、といったような遠慮は、どの地域からの参加者にもはやなかった。最もローカルな課題の政策的な解決は、グローバルな観点からしかありえない、という共通認識を確認しえた、と判断している。

こうした踏み込んだ議論は、「日中・知の共同体」に限ったことではなく、ほぼ、どのような議論の場でも可能になっている。

二〇〇二年の九月、かつて関東軍の本拠地であった長春で、「日中国交正常化三〇周年記念国際シンポジウム」が開かれた。この会議には、広東に滞在中の島村輝さんも参加された。

私は、日中国交正常化を実現した、田中角栄が押し進めた「日本列島改造論」的な開発主義が、日本の資本主義の在り方をどう歪め、バブル経済とその崩壊の要因をつくったのかについて基調講演を行った。

その講演の最後で、長春がある吉林省の農民が生産したトウモロコシと大豆が、まる二年分放置されている現実についてふれた。WTOに加盟したことによって、アメリカのトウモロコシと大豆の方が安いと、地元農民の生産した農産物を放置してまでも、アメリカの農産物を輸入し、農民たちは収入を得られないという現実、明らかに沿岸都市部で生産される製品を売るために、すべてのしわよせを農民に押しつける搾取ではないか、と私は問題提起した。この現状は、とても「社会主義市場経済」とは言えないのではないか、と。

中国社会科学院の経済学者は、これは搾取ではなく、市場競争の結果だと反論した。この問題は、むしろ中国側の参加者を中心に、翌日の分科会の議論においても、徹底した論争の火種になった。それは、このシンポジウムの中国側の参加者の何人もが、北京で、あるいは東京で開かれた「日中・知の共同体」の経験者だった、ということにもかわっていたと思う。

日本におけるゼネコン型バブルが、中国においても反復されているのではないか、という問題も含めて、日本からの参加者にも、矛盾や対立をさらけ出す形での、歯に衣を着せない討論が続けられたのである。

けれども、地元吉林省の大学関係者の多くが、吉林省のトウモロコシと大豆が二年分、商品化されることなく貯蔵されている現実を知らなかった。私の基調講演に対して、「よく言ってくれました。」と共感を表明したのは、吉林大学の日本語科の科長であった。彼の両親は農民であり、農民の現実が無視されていることを彼は嘆いていた。

案内された吉林大学は、巨大な団地のように学生寮が建設されていた。学生食堂には、四川料理、上海料理、と、中国全土の各地域の特殊性を持ったいくつもの料理ブースがあった。日本では考えられないほどの恵まれた環境だ。

日本の学生と見分けがつかないファッションを身にまとった学生たちであふれるキャンパスのそこそこで、農民たちがトウモロコシや果物を売っていた。一つの都市の大学のキャンパスの中にも、

「南北問題」はくつきりと刻まれていたのである。

「日中・知の共同体」を別な形でつづけたい、という声が、中国の若手の研究者たちからあがっている、と孫歌さんが伝えてきた。どんな形になるかまだわからないが、互いに踏み込んだ徹底討論の場は、何度でも何度でも創りつづけていきたいと思っている。

■ ■ 展望（研究季評） ■ ■

で、どうしたいの？

跡 上 史 郎

● 現状を利用して

まだ自分が学生だった頃のことである。欧米理論を援用した日本近・現代文学研究の主な担い手であった一回り上の世代は、旧弊はやがて減びると息巻いていて、その剣幕に圧倒されつつそうかも知れぬと思った。減びると言われていた二回り上の世代は、やがて流行は廃れるといつていて、その揺るぎない自信のようなものに触れるとそれもそうかも知れないと思った。

今になってみると、結局なにも減びたりしなかったし、廃れたといっても形を変えながら、ときにはそのままの姿でちゃんと生き延びている。これからもなにかが減びるということはなさそうな気がする。いろいろなものがあるがいろいろ残る。局所的かつ非対話的な違和の隆起はあるものの、基本的にはそれぞれ他領域への関心は薄く、特に主導的な潮流というものもない。全体として私たちは、皆が信じていることのできる価値や物語を失い、なにもかもが相対的に並立し

停滞する状況を生きている。ポストモダンニズムは失速しても、ポストモダン状況はますます進行するばかりというのは、まったく本当だ。もつとも、私は例えば○×派と△□派がお互いに寄り掛かりあいながら棲み分けることによって停滞を助長しているなどと批判めいた言辞をものすつもりはない。現状の否定からとりあえずレトリカルに導き出されるだけの空疎な問題提起をするつもりもない。停滞を嘆いてもいいのだろうが、私のような隅っこに棲息する輩には、むしろ、ありがたい時代になったものだというのが本音だ。

私は、一九八〇年代の終わりくらいから、ほとんど戦略らしい戦術もないまま、ずっとサブカルチャーを研究しようとしてきた。しかし、実はそれがサブカルチャーなのだという意識はなく、なんとか文学の研究たらしめようがいていた。それは、サブカルチャーではなく、「異端」と呼ばれていたもので、「異端」文学だと思っていたのである。むしろ、まんがやアニメのようなものだと早く気付けばよかった。パブルがはじけるとともに、それは消費され消えゆく

まぎれもないサブカルチャーであったことがあらわになった。

しかし、最近それは『ケラー』（二〇〇二・一〇）の「カルチャークラブ」第2回で取り上げられて、時にロリイタちゃんであったりする現在のサブカルチャーな女の子たちのちよっぴりお洒落な神様にもなれる（いまだに！）ことがわかった。もはや私はそのような事態に対して訂正を求めることなく、むしろ積極的に肯定したいのだ。振り返って、一九六〇年代以降の『週刊少年マガジン』における大伴昌司の「カラー大図解」シリーズの源流にそのサブカル神を見た浅羽通明『濫澤龍彦の時代 幼年皇帝と昭和の精神史』（一九九三・八、青弓社）は、完全に正しかったと今では思う。そう、私は濫澤龍彦のことを言っている。柳瀬善治「研究動向 濫澤竜彦」〔昭和文学研究〕第44集、二〇〇二・二三」という過去数十年の濫澤にまつわる批評に関する優れたまとめと紹介が現れた現在、ようやくそれは適切な文脈において研究できる状況になったのかもしれない。

こんなことを気にしている私の関心はただ一つのところにある。すなわち、停滞する現状に乗っかるのでも、それを否定するのでもなく、むしろそれを利用しつつ、マイナーなものがメジャーなものとの多種多様な力関係の中で、いかに自分の居場所を確保していくかということである。

●セクシャル・マイノリティの成功に学ぶ

最近、セクシャル・マイノリティ（性的少数者）および、それにまつわる表現に大きな関心がある。そのような題材で研究・教育活

動をしていると、学生や同業者から、お前はホモなのかとか妻帯者だったっけなどと訊かれる。質問すれば答えてもらえらると思つてんじゃないよ的なことは松浦理英子もいつている（『アニス』二〇〇一夏号）。見識に倣う。

とりあえず、自分としては、なぜこんなにもセクシャル・マイノリティの問題に引きつけられるのか、最初はよくわからなかった。本質的には、私はどうやらセクシャリティへの興味や当事者性からセクシャル・マイノリティに関心を抱いているわけではなさそうなのである。流行を追うのも苦手である。よく考えてみると、最初はそのような系統の原稿依頼が来たときも、単に性にまつわる面白読み物を書くこうとしていたふしがある。自分でもどこか違うと思つていたが、ここから離れ難いのも事実で、今しばらくはこのまま行こうと決意している。

なぜなのか。それは、自分を肯定的に捉え解放していくということと伊藤悟や伏見憲明といった日本のセクシャル・マイノリティ当事者の著作から学んだからだと思う。他人はどうか知らないが、研究上のマイノリティであった私は、ほとんど「生まれてすみません」状態で、前向きな発想は、まったくなかった。学会の片隅に置いてもらえるだけでありがたいというような、卑屈な気持ちであったのである（だんだん「展望」なんだかどうかわからなくなってきた）。しかし、セクシャル・マイノリティの当事者たちは、明快な言葉で自分たちの置かれた現実を語り、それに働きかけて改善していくという分かりやすい目的を持っていた。「生まれてすみませ

ん」じゃなくていいのだというシンプルな感動がそこにはあった。私は、マイノリティが、いかに自分で自分を肯定し、居場所を確保していくかということ学んだのである。

「脱構築」を知った私たち文学研究者は、難しい言葉を駆使しつつ、手持ちのカードを全部捨てたものが勝つというゲームを繰り返してきたが、それとは正反對の原理である。要するに伝えるべきものを持つている場合は、極力わかりやすい道筋を選択すべきなのだ。相手の言いたいことが分かる、相手に言いたいことが伝わることの喜びや面白さというのは、やっぱりあったのである。そのため努力というのは、別に低次元のことではない。セクシャル・マイノリティに関する情報は、依然として濃い薄いの差が大きい。濃いとところから薄いとところへなるべく正確に平明に情報を伝えるのは、非常にやりがいとよろこびのある課題といえると思う。私のセクシャル・マイノリティへの関心は、そのような一般的な問題にも関連しているようなのだ。

●セクシャルリティにまつわる研究

斯学でも、セクシャルリティにまつわる論考は多く書かれている。しかし、なにかというとセジュイックやバトラーを引用して、ホモソーシャルがどうのこうのというのが申し合わせみだいになってしまっているような気がする。結局、主眼は、現代思想の高級なお話なのである。それでもいいといえはいいのかもしれないが、セクシャルリティに関してはおもつと違う可能性があるのだということを、

知っておいてもいいのではないか。例えば、『クイア・ジャパン』VOL. 2(二〇〇・四)の柿沼英子×西野浩司×伏見憲明「三島由紀夫からゲイ文学へ」などは、三島研究者でなくとも必読であろう。当事者が、『仮面の告白』がいかに先鋭的なホモセクシャルの自覚に貫かれた驚嘆すべき作品であるかを生き生きと語ってくれている。

当事者が自らの声で語った著作の基本的なものを取り上げたいのだが、いろいろあっても紹介しきれないので一つだけ。同性愛について解説した伊藤悟『同性愛がわかる本』(二〇〇・二、明石書店)は、一般向けに、特に十代くらいの若者を想定して、極めて平易な言葉でわかりやすく書かれたものである。振り返ってみるに、ホモセクシャルとホモソーシャルがどうか言っている文学研究者は、皆、このような十代の若者向け程度の基礎知識を理解しているのかどうか、不安になることがないではない。今、セクシャル・マイノリティが流行のようになってきているのは、日本においても当事者たちが自分の声を獲得し、自分の声で語り始め、それが一定の成果を挙げつつあるという事態を受けてのことだと思っただが。

『現代思想』臨時増刊「総特集 レズビアン/ゲイ・スタディーズ」(一九九七・五)や、キース・ヴィンセント＋風間孝十川口和也『ゲイ・スタディーズ』(一九九七・六、青土社)は、日本近代文学研究者キース・ヴィンセントの大作躍もあつて、やはり必読である。前者は「現代思想」ではあるが、翻訳作業まで含めて当事者たちの「伝えたい」という願いが込められているのが貴重だ。後者で、

フーコーの日本語訳者が同性愛に関する記述を歪めて訳しているのを明らかにしているところも興味深い。誤読が生産的だなんて能天気なこととは言わせない。

ここでは誰が何のためにそれをするのか、何が明快だから、何が有効で何が有効でないかがすぐにわかる。その明快さは、ほとんど安手のキャッチコピーではないかと思われるほどだ。たぶん「自分らしくありたい」ということである。だから、彼らの活動は、ときにマジョリティにさえ救いを与える起爆力を持っている。例えば、異性愛者だけど子供のない夫婦とか。それから（……たくさん中略）、難しい理論を援用しなければ格好がつかないと思いつ込んで硬直している文学研究者とか。

もはや「お約束」と化したセジウィックの機械的な援用に私は反対する。むしろ、ホモソーシャルとホモセクシャルがきちんと区別されるのが有効な領域がもつと取り上げられるべきだ。セジウィックにはセジウィックなりの必然性があるというところは理解できる。しかし、現在の日本での両者を繋ぐことによる生産性など、つまるところそのような議論を展開する研究者にとつての生産性であった、現今の当事者は被収奪者にしかならない。セクシャル・マイノリティそれぞれ立場や違いが肯定的に認められたら、その後で大いに「脱構築」していったらいい。初めからセジウィックでは、難しく高級なようであるところ、マジョリティは頭を使わずに済んでしまふ。

私たちは、相対化するとか批判するとか、自分がどうしたくない

かということばかりを高級にはやくテクニクを洗練させてきた。しかし、自分がどうしたいのか知っているものはほとんどいないのではない。自分がどうしたいのか知るところを学ぶべきだ。

ところで、記録映画『ハーヴェイ・ミルク』（一九八四、バンドラ〈URL:<http://www.panda.co.jp/>〉でVHSビデオが入手可能）には、自分のしたいことを実現していくためのヒントが満載である。ハーヴェイ・ミルクは、サンフランシスコのゲイの政治家である。映画では彼が多くのマイノリティに勇気を与えたことが語られている。例えば、ミルクは中国人コミュニティのために尽力し、困惑に近い彼らの感謝と、やがてゆるやかな連帯を得、他の人々にも支持を広げていった。私はマイナーなどところにいつつも、他の人と共有できる問題を探るべきなのかもしれない。

●サブカルチャー研究夜明け前？

自分が積極的に帰属したい領域を考えてみると、先に少し言ったようにサブカルチャーにまつわるところである。サブカルチャー研究を標榜すると、それに伝統的な文学研究が対立してしまい、領域の不毛な固定化を招くという考え方があられるかもしれない。しかし、それは実は余裕のある人の発想であって、がんばらなくても普通にサブカルチャー研究ができるようになったら、「脱構築」していけばいいと思う。

京都精華大学にマンガの専門学科ができた、二〇〇〇年に日本マンガ学会（URL: <http://www.kyoto-seika.ac.jp/hyogen/manga-gakkai>）

hml) が設立されたと思ったら、二〇〇二年一月にはゲーム学会 (<URL: <http://www.dmic.org/game/first.html>>) もできたようだ。ようやくサブカルチャー研究に具体的な形を与えようとする動きが見えてきたように思われる。一九八九年設立の日本ポピュラー音楽学会 (<URL: <http://www.jaspm.org/>>) はすでに老舗であろうか。

斯学でも、カルチュラル・スタディーズ (のようなもの?) が隆盛を誇るようになって、サブカルチャーに注目が集まるようになってきた。『日本文学』(二〇〇一・一一)の「特集・『文学』と『サブカルチャー』の社会学」は記憶に新しいところであろう。この特集名に現れているように、サブカルチャーというと、社会的な成果やアブローチに多くを負うことになるようだが、宮原浩次郎・荻野昌弘編『マンガの社会学』(二〇〇一・一一、世界思想社)に、ヨコタ村上孝之のような比較文学者が参加していることから伺えるように、比較文学的方法も有効だと思う。そもそも『漫画原論』(一九九四・六、筑摩書房)によってマンガの表現論における革新的な仕事をなした四方田大彦は、比較文学比較文化の人であった。その先駆性は、漱石遺伝子を受け継ぐマンガ評論の第一人者、夏目房之介に負けていない。

当学会員で、サブカルチャーの現場にもっとも近いところで活躍しているのは、榎本正樹かもしれない(彼はサブカルチャーではなくて文学を主張するかもしれないが)。榎本が、自分はロシア・フォルマリストのように同時代の作家と歩むのだ、と言ったかどうか知らないが、『ダ・ヴィンチ』で書評士やインタビュアーとして活躍して

いると思ったら、『文藝』の「特集D」(二〇〇二秋)をコーディネートしたりと新たな展開を見せ始めた。榎本が学会シーンにそれらの成果を持ち込んでくれたらうれしいし、彼がそうしたくなるような学会であつたらどんなにかいいであろう。

実際にサブカルチャーの担い手でありながら、精力的に論陣を張り続ける大塚英志も外すことはできないだろう。ササキバラ・ゴウとの共著『教養としてのへまんが・アニメ』(二〇〇一・五、講談社)の起点にあるのは、若者たちが当然知っているべきへまんが・アニメを知らないというサブカルチャーの現場における「教養の崩壊」への危機意識である。大学の教養課程で手塚治虫や「あしたのジョー」を教えることが有効な時代だつてくるのかもしれない。

『江藤淳と少女フェミニズムの戦後 サブカルチャー文学論序説』(二〇〇一・一一、筑摩書房)等で、サブカルチャーが現代文学を支えている状況に注意が促されているのも無視しえないだろう。研究者も笑っていられないような気がする。斉藤環によれば精神科医にはオタク率がかかなり高いらしい(『戦国美少女の精神分析』二〇〇〇・四、太田出版)が、斯学においてもけっこうそういう人がいるのではないだろうか。意外に、明治文学研究の若い担い手の精神構造を「ガンダム」「エヴァンゲリオン」の世界観が規定し、清新な研究の原動力になっているなどということがないとは言えないのである。あるいは政治的な感受性は? 『新現実』Vol. 01 (二〇〇二・九)で大塚は、次のように言っている。「9・11の事件が起こった時だつて、柄谷とかが俺の予言当たつたつて言ってたけど、『ガ

ンダム」は「……」パレスチナの話を昔からずつとやってる。なん
で北部同盟だかタリバンだかにシャーっていう人がいるのかっ
て、そこで気がつく子はやつと気がつく」。

漱石研究の革新など文学研究の新しい流れに精神的支柱を与えた
のが柄谷行人だとするならば、サブカルチャー研究において同様の
役割を果たす可能性があるのは、柄谷の鬼子(こ)東浩紀であろう。

『郵便的不安たち#』(二〇〇二・六、朝日新聞社)は、私の身の回り
でもそれなりに知的関心のある一〇代後半くらい若者が楽しんで
読んでいる。東のわかりやすさは脅威だと思う。東は、日本で映画
を勉強することをあきらめ、アメリカに留学した学生のエピソード
を紹介しているが、八〇年代的まどろっこしさに対する若い世代の
絶望の深さを、もったいぶった言い回しで冷笑していいものか
どうか、どうも私には判然としない。研究や批評の元気な部分を担
う一九七〇年代生まれの世代にとって、すでに柄谷や蓮實重彦は、
私の世代にとっての吉本隆明のようなものになってしまっているの
だと思う。正しいとか間違っているとか新しいとか古いとかいう以
前に、異質なもののだ。平野啓一郎が「文学」するように異質な
ものを面白がる心性もあり得るだろうが、それはまた別である。

大学等研究機関の紀要をつらつらながめてみれば、少しずつサブ
カルチャーに関する研究成果が現れ、ここにおいても気運が高まっ
てきているという事は明らかであろう。国際関係論など社会科学
の分野から、われわれ人文科学の領域に関心を広げ、サブカル
チャーの文化交流などを扱う事例は、政府関係広報の類にも見か

けることができるようになった。メディアではいつも宮崎駿のアニ
メ映画の情報を流している。今までサブだったものが、メイン(ハ
イ?)の停滞によって、中央に躍り出てくる雰囲気は濃厚だ。その
一方で、だからと言って、それはサブがメインになることを意味し
ているのではないからやっかいかいでもある。この点には注意しておか
なければならぬ。

私たちの問題に引きつけていえば、たぶん、問題はディシプリン
のことに関係してくる。私があつたらいいな思っている日本のサ
ブカルチャー研究においては、どのようなディシプリンを想定した
らよいのだろう。誰もが予想するように、斯学におけるサブカル
チャー研究はどこかで度々コケるはずだ。卑近な話、文学の授業で
学生に対して、今日からサブカルチャーを研究しましょう、自由に
やってください、などと言えば、その先に彼らの困惑があるのは必
至である。もし本当にやるのだしたら、不本意であつたとしても、
教育システムまで含めて、オルタナティブであることを考える必要
があると思う。そのような意味では、各専門領域のディシプリンを
突き崩すような流行の営みを、足算や掛算のように捉え続ける努力
があつていい。例えば、近世板本研究の知見の上に、模図かずお研
究を構想する高橋明彦 <URL: [http://www.kanzawa-bidai.ac.jp/
%7Ehangyo/](http://www.kanzawa-bidai.ac.jp/%7Ehangyo/)>の試みなどは、決して大上段に振りかぶってはいな
いが、大きなヒントに満ちていると思う。

魚が陸に揚がるのは大変だ。しかし、そうしたいと思つて挑戦し
なければ、今も私たちは海の中だったはずだ。

「口承」orality アラビヤ

——声、ことばの身体性——

兵 藤 裕 己

昨今の出版界の日本語ブームとは何だろうか。日本語を「声に出して」読みたい、などの本が異様な売れ行きを示した背景には、何があるのだろうか。二〇世紀後半の冷戦構造の崩壊と、それにつづくグローバリゼーションの荒波のなかで、グローバル・スタンダードに対抗する拠点が世界各地で求められている。原理主義ファンダメンタリズムや国民主義ナショナリズムの台頭は、声と身体がまさに今日的なテーマとして浮上りつつあることと無関係ではないだろう。近現代の文学研究プロパーでは、いま、ここに浮上りつつある声と身体という問題に、どう対応しているのだろうか。プロパーの研究者の意見を聞いてみたいところだが、そう思っていたら、本誌の編集委員会から、口承oralityについて何か意見を述べよ、という依頼をうけた。ことばの身体性や声に関するアクチュアルな議論は私の手にあまるが、とりあえず「口承」という用語に関して、その近代日本における沿革を素描してみたい。今後の議論のための一つの布石にはなると思う。

1

口承という言葉は、フランス語の *orale* の訳語として、柳田国男によって考案された。一九三二（昭和七）年に『岩波講座 日本文学』の一冊として書かれた「口承文芸大意」のなかで、柳田は、

始めて口承文芸といふ名を用いた人は、仏蘭西のポオル・セビオといふ民俗誌家であった。今から五十年ほど前に此人が、*la littérature orale* といふことを唱へ出した頃には、まだ何処にもそんな語を使つて居た者は無かつた（中略）私も今度は此新語を借用してみようと思ふ。

と述べている。ポール・セビオ (Paul Sebillot, 1846-1919) は、ブルターニュ地方のケルト伝承の調査・採集から始めて、フランスの一国民俗学を確立させた人物である。柳田の旧蔵書 (成城大学民俗学研究所、柳田国男文庫所蔵) には、セビオの *Le Folklore: littérature orale et ethnographie traditionnelle* (1913) があり、精読のあとを示す印しやメモが書き込まれている。セビオが考案したりテラトゥール・オラル (英語ではオーラル・リテラチュア) の翻訳語として、柳田は「口承文芸」をあてたのである。

日本文学の研究に「口承」という概念をもちこんだ柳田の「口承文芸大意」は、まず口承文芸の「大意」について述べ、つぎにそれを一〇種類ほどのジャンルに分類している。ことわざ、なぞ、童ことば、民謡、語り物、昔話、笑話、伝説などが、このジャンル区分は、ほぼ同時期に講述された柳田民俗学の概論書、『民間伝承論』(一九三四年)、『郷土生活の研究法』(一九三五年)でくりかえし論じられている。口承文芸を主題化しつつあった当時の柳田は、民間伝承^{フレイブ}民俗の学の組織化・体系化をくわだてていたのである。

一九二〇年代 (大正から昭和初年) の社会主義運動の盛り上がり、それにつづく国家主義的な時代風潮は、柳田民俗学の成立にある重要なモメントとなって作用しただろう。民俗^二民間伝承の世界に日本社会のアイデンティティを「復元」的に再構築するくわだては、一九三〇年代の柳田によって、ある危機意識をもってすすめられた。

柳田国男の「民俗学」的転回については、赤坂憲雄によって明快に論じられている。一九三〇年代に形成された「常民」の十足的な村落生活のイメージは、かつて「遠野物語」(一九一〇年)で語られたような閉塞的な村落のイメージから、その恐怖と抑圧の幻想を消去するかたちで成立した (赤坂「柳田国男の読み方」ちくま新書、一九九四年)。そこに提示されたノスタルジックな農村の風景が、一九三〇年代当時の「いま」(近代)と対置される。「今」と「昔」を無歴史的に対置させるのは、失われてゆく声の世界に日本社会のアイデンティティを「復元」しようとした柳田民俗学の思考のパラダイムといえる。

一九三五年から三六年に書かれた「昔話覚書」(『昔話研究』創刊号一第二号)の冒頭で、柳田は、民話・民間説話などの翻訳語 (英語のフォークテイルズ、ドイツ語のフォルクスメルヒェン、等) を用いずとも、日本には昔話という言葉が古くからあり、それを採用することが、実地の採集にも便利であると述べている。だが、一九五五年に刊行された『総合日本民俗語彙』(民俗学研究所編) には、昔話を意味する「ムカシ」の項目はあっても、「ムカシバナシ」という項目はない。「昔話」は、ふつう一般に考えられているほど自明な民俗語彙ではなかった。

近世の噺家用語では、前座の「落し咄」にたいして、真打ちによる本格的な出し物を「昔話」と呼んでいる (一八八七〜明治二

〇〇年三月二十六日付の「やまと新聞」には、「是迄落語と称え来りし咄しは、人情話、音曲話等ありて不適當の文字なるより、今度一般に昔話と改め度旨、談取締より其筋へ伺ひ出し」とあり、「昔話」は明治二〇年代には落語の公式名称になっていた。また、明治の巖谷小波は、昔話とともにおとぎ話・童話を併用している。「昔話」という語が「恣意的な造語ではなく、古くから民間において慣用語として使われ」（『日本昔話名彙』）たとする柳田の説は、かならずしも事実ではない。

「昔話覚書」の連載が継続中の一九三六年、柳田は関敬吾とともに『昔話採集手帖』をつくり、全国の教育関係者や郷土史家に配布していた。フィンランドの民話学者アールネがはじめた話型索引（タイプ・インデックス）の方法をふまえた昔話の採集マニュアルである。

柳田の手もとには、かれが定義した「昔話」にしたがって、全国からその採集資料が寄せられてくる。たとえば、新潟県で昔話採集にあたった水沢謙一の『昔あつたてんがな』（一九五六年、『とんと昔があつたけど』（一九五七―五八年）、「いきがぼーんとさけた」（一九五八年）について、関敬吾は、発端と結末の定型句が、編集段階で書き加えられた可能性を示唆している。「昔話」の採集が、その「復元」作業と並行して行なわれる、あるいは「復元」すべき昔話へむけて、その採集作業が行われる。そしてその延長上に、「昔」という時間軸で切りとられた、かつての（しかしどこにも実在しなかった）日本社会の原風景が「復元」されてゆく。

「昔話」は、特定の民俗事象に対応する実体概念である以前に、柳田民俗学と不可分に発想された、すぐれて方法的な概念だった。たとえば、一九三五年（昭和一〇年）に関敬吾が『島原半島民話集』を刊行したとき、柳田はその「民話」という名称に強い不快感をせめしたという。「昔話」というタームが、柳田民俗学の方法と不可分の関係にあったのだが、そしてこれと同様の用語上の問題が、じつは「口承」という柳田語彙についてもいえるのである。

2

さきに述べたように、口承文芸という日本語は、リテラトゥール・オラル（英語ではオーラル・リテラチュア）の訳語として柳田によって考案された。「口承」は、「口頭で伝承される」を約した柳田の造語だが（ちなみに諸橋轍次『大漢和辞典』に「口承」という語は登録されていない）、しかしリテラトゥール・オラルの日本語訳としては、むしろ口頭文芸、ないし口誦文芸などがより自然な訳語だろう。あえて口承（＝口頭で伝承される）という造語をあてたところに、オーラル・リテラチュアを主題化する柳田の

方法が問題化していた。

かりに「口頭文芸」といった訳語が採用されていたら、どうだったか。以後のわが国のオーラル・リテラチュア研究は、かなり違ったものになっていったと思われる。

柳田国男が日本「口承」文芸の組織的な研究を提唱しつつあった一九三〇年代のはじめ、ヨーロッパに残存していたオーラル・リテラチュアの調査・採集を行っていたのは、アメリカ人のギリシャ古典研究者、ミルマン・パリイ (Milman Parry, 1902-56) である。ハーヴァード大学でギリシャ古典詩を講じていたパリイは、ホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』のすべての文体的特徴を、詩行が口頭的に(文字にたよらずに)組み立てられるときの独自の制作方法から説明した。その仮説を検証するため、パリイは、一九三〇年代はじめに、旧ユーゴスラビア地域に残存していた吟遊詩人のパフォーマンズを実地調査したのだが、かれが収集した録音資料は、現在、ミルマン・パリイ口頭文学資料集として、ハーヴァード大学図書館に所蔵されている。

パリイの仮説(口頭的作詞法といわれる)は、物語詩の創造に、口語りのエコノミーにもとづく固有の文法が存在することをあきらかにした点で画期的だった。それは以後のオーラル・リテラチュア研究に多大な影響をあたえたが、しかしパリイの没後にフィールド調査の地域が拡大され、世界各地のさまざまな口誦詩の事例が集積されるにおよんで、その仮説の一定の限界もあきらかにされている (John M. Foley, *The Theory of Oral Composition: History and Composition*, Indiana University Press, 1987) ほか。かくいう私も九州や東北地方の語り物のフィールド調査をおして、パリイ理論に対する異議申し立てを行なったことがある)。

しかしパリイの研究が現時点的な意味で興味ぶかいのは、その口頭的作詞法の仮説もさることながら、かれのフィールド調査が、一九三〇年代という時点において、しかもヨーロッパの火薬庫といわれたバルカン半島の旧ユーゴスラビア地域で行なわれた点である。グスレという弦楽器で物語を弾き語りする演者について、パリイは、

……彼は聴衆を楽しませなければならない。でなければ報酬を期待できないからだ。だから、トルコ人いるときはムスリムの歌をうたったり、自分の持ち歌を使ってイスラム教徒の戦勝をうたうという具合であった。

(Albert B. Lord, *The Singer of Tales*, chapter II, Harvard University Press, 1960)

と述べている。吟遊詩人たちの口頭的作詞法に注目したパリイは、同時に、かれらのしたたかな口頭芸によって、旧ユーゴスラビア地域のナショナルリイティが再生産されるしくみを観察していた。

西欧社会ではやくに失なわれた声の芸人たちの活躍の場が、複数の民族・宗教がモザイク状に入り組んだヨーロッパの辺境地域で保存されたことには理由があるだろう。パリが調査をはじめた一九三〇年代初頭は、ラジオという新時代のメディアが、ヨーロッパ各地で一言語・一民族・一国家という近代国家の枠組みを再編制しつつあった時期である。ナシタル・ラヂオ 国語による広域のネットワーク放送が、諸国民のナシヨナリティを急速に肥大化させつつあった時代だが、そのような一九三〇年代のヨーロッパにあって、多言語・多民族・多宗教地域として取り残されていた東欧の辺境地域では、声の芸人たちの活躍の場がまだ残されていたということだ。

だがもちろん、声の芸人たちの活躍の場は、一九世紀にさかのぼるなら、西欧の諸地域にも残存していた。たとえば、ラフカディオ・ハーンの「日まわり」〔怪談〕所収という短編には、ハーンが少年の日に出会った竖琴弾きの吟遊詩人のことが回想されている。「あいつ、ウエールズ語で歌うのかな」というハーンの幼友達のことばは、吟遊詩人の語る（歌う）言葉と、イングリッシュに統一されつつあった少年たちの言葉とのずれをかいまみせる。それは産業革命後のイギリス社会から取り残されてゆく吟遊詩人たちの末路さえ予感させるが、そのような近代国家の枠組みからずれ落ちる言語的なローカリズムを整理するかたちで、二〇世紀のラジオ放送は開始されたのである。（注）

（注）昨年一〇月に来日した現代イギリスの吟遊詩人、ニック・ヘネシー氏は、竖琴の伴奏で、ウエールズ、スコットランド、イングリッシュなどの伝承のパラッドを演唱した。フィンランドのカレヴァラ叙事詩大会で優勝した経歴をもつヘネシー氏の演唱は、「歌は古い民族のエネルギーに満ち、力強い。ハーブは軽やかに美しい」（桜井美紀氏のホーム・ページによる）。もちろんヘネシー氏は、生まれながらの芸人ではなく、学生時代にパラッドに興味をもち、「伝承」としてのパラッド演唱を「復元」させたのである。ニューメディア時代の現代にあって、一方でこうした動きがまさに世界的規模で起こりつつあることは、たとえば、ここ数年の（東京の夏音楽祭）の公演パンフレットなどをみてもわかる。

3

ところで、ミルマン・パリーによってヨーロッパ辺境のオーラル・リテラチュアが調査・採集されていた一九三〇年代は、極東の日本で、浪花節という声の芸能が大流行していた時代である。柳田国男の「口承文芸大意」が発表された翌月の一九三二（昭和七）年五月、日本放送協会と通信省の協力によって、第一回の全国ラジオ調査が行われた。ラジオの全国放送の開始（一九二八年）から四年後に行なわれた、最初の大規模なアンケート調査だが、それによれば、聴取者の好む番組は、浪花節が第一位

で五七パーセントを占めていた（『日本放送史・上巻』日本放送協会、一九六五年）。昭和初年の浪花節は、その大衆的な広がりと共に人気がおいて、ほかの大衆娯楽をはるかに圧倒していた。

柳田の同時代にイメージされるオーラル・リテラチュア（リテラトゥール・オラル）とは、「昔話」などよりも以前に、まず第一に浪花節だったのである。一八九〇年代に大道・門付け芸から寄席演芸として台頭した浪花節は、日清・日露の二つの国民戦争を画期として急速に流行した。旅まわりの芸人が語る浪花節は、鉄道という近代の交通メディアによって、前代の各種の語り物とは比較にならないスピードで全国に流行してゆく。明治以後の急激な近代化にともなう前近代と近代のメディアの併存状況のなかで、日本の吟遊詩人たちの声は、大衆の国民（ナショナル・イデオロジー）化をになう主要なメディアとして機能したのである（兵藤『声』の国民国家・日本）NHK出版、二〇〇〇年）。

一九〇八（明治四二）年に書かれた夏目漱石の『夢十夜』には、主人公が「豚と雲右衛門は大嫌いだつた」（第十夜）という一節がある。日露戦争期の浪花節ブームの立て役者となった桃中軒雲右衛門が、一九〇七（明治四〇）年六月の東京本郷座の公演で、一ヶ月間、連日満員札止めの記録的な興行を成功させた話はなかなば伝説化されている（真山青果作『桃中軒雲右衛門』ほか）。雲右衛門の浪花節ブームの背景に、日露戦争とその後の社会不安（不況と労働争議・暴動、そして大逆事件）があったことはたしかである。大衆の共同体への回帰願望が、浪花節を国民的な娯楽へ押しあげてゆく。大衆の不安やアイデンティティ・クライシスなどを背景に、それらを吸収するかたちで浪花節が大流行する事態は、昭和の経済恐慌と一五年戦争の時代により顕著なかたちであらわれる。

一九三七（昭和一二）年に発表された永井荷風の『濃東綺譚』は、周知のように、隣家のラジオから流れてくる西国訛りの政談、新劇風の朗読とともに、浪曲（浪花節）の声をさらって、主人公の「わたくし」が隅田川東岸の玉の井遊郭を徘徊するところから話が始まる。柳田国男が常民の文学史として「口承文芸史」を構想していた一九三〇年代当時、ラジオから流れてくる浪花節は、さまざまな義士・義民伝的なイメージを背負って活躍する帝国兵士のすがたを語っていた。ウェットな語り口で大衆を情緒的に巻きこんでゆく浪花節は、一五年戦争当時のもつともアクチュアルな「口頭で演じられる」文芸だったが、そのような近代日本の声の世界が、「口承」という枠組みによって、柳田の考察対象からはずされてゆく。同時代的な声の世界に対して冷淡なことは、柳田のオーラル・リテラチュア研究の特徴ともいえるのだが（兵藤『口承文学総論』、岩波講座日本文学史）第一六卷、一九九七年）、柳田の「口承」研究から浪花節が排除されたこと、そして失われてゆく「昔話」の世界に日本社会の原風景が

「復元」的に夢想されたことには、柳田民俗学における状況論的なモチーフを読みとるべきである。

そして一九九〇年代以後（ポスト冷戦）の現在、近現代史や近現代文学、あるいは社会学等々の研究プロパーでは、「口承」という言葉が一つのキーワードとして浮上している。おそらくその背景には、近代の活字リテラシーによって編制された「国語」や国民文学に対して、そのカウンター・カルチュアとして「口承」oralityが注目されているという面があるだろう。また、活字メディアを支配的に担ってきた男性中心の「文学」に対して、それに対抗するマイナー文学の拠点が、女性の「口承」にもとめられたという面もあるだろう。だが、あらためていうまでもないことだが、「口承」と活字リテラシーという対立軸、あるいは「口承」の担い手としての女性という論点も、その大筋において、すでに一九三〇年代の柳田の「口承」研究によって言及されていた。

おそらく二一世紀初頭の今日にあつて問題になるのは、研究者のそうした問題関心をなかば置き去りにするようなかたちで、声と身体の問題が急速に、しかも大衆的な広がりをもって「われわれ」のアイデンティティ形成の媒体として浮上していることである。あるいは、私たちの置かれたいま、ここが、柳田国男が「口承」研究を提唱していた一九三〇年代当時と似てきたのだといえるかもしれない。同時代的な声の世界を拒絶（おそらく嫌悪）しながら、なおかつ失なわれてゆく声の世界に日本社会のアイデンティティを「復元」しようとした柳田の「口承」研究は、声がつくりだす主体の問題にそれなりに倫理的だった点において、今日なおさまざまな問題を考えさせている。

遠くからの声

——中上健次の文字（書くこと）——

種 田 和 加 子

1

中上健次について考えるとき、いつもひっかかるエッセイがある。「口語的なものの力」〔読売新聞〕82・2・16⁽¹⁾というのがそれだ。中上が民俗学者宮本常一に民話のテープを聞いてもらったときの回想からはじまっているが、エッセイの最初のエピソードは、近代前夜、倒幕の志士たちが方々から京都に集まったとき、何を共通語にしたかと尋ねると、宮本は、その当時町人や下層武士のあいだに流行していた浄瑠璃の科白をつかった、と答えた、という話である。浄瑠璃の台本をまわし読みした武士たちは、その言い回しを自分のものにしてすぐに使えるほどだった、と答えたという。中上はそこから、標準語の成立にはまだほど遠いが、武士たちが発音した地方語とすでにある共通性を持ちえていた浄瑠璃の台本が接触し、「軋む」⁽²⁾時点を近代のはじまりとみなしている。この部分についてはかつて拙稿「物語の重圧／重圧の物語」で考察したと重複もするが、あらためて見直してみたくなってくる。浄瑠璃の七五調のリズムで書かれたものが、志士たちの話し言葉と接近し、七五調にいままでいう方言性が加わったものとしてあらたなパロールを形成し、それが一定の型をもつて意味が伝達された、としよう。台本に「書き文字の強い制御力」はあるとしてもそれによって一方的に話し言葉が規定されたのではなく、パロールとエクリチュールの対立を無化して、あらたな型を生み、また崩す「音」の可能性を中上は宮本常一との問答からさぐりあて、それを近代「日本語」の発生の姿とみているのではないか、と考えてみる。すると残る問題は二つ目のエピソード、中上がヘキンジニヤニヤと呼ぶ「鼠の浄土」の民話から「口語的なものの力」を引き出し出てくる手続きをどう意味づけるのかということである。ここからの考察は、中

上のエッセイ「口語的なものの力」の私注にかなり傾きながら、文字（書くこと）と声の関係をさぐる試みになろう。

「鼠の浄土」、それ自体はよく知られた話である。貧乏で正直な男がいる。仕事を探しに出かけ、みつからず、はずみで携えてきた握り飯がころがって穴に落ちる。穴の中から「キンジニヤニヤ、猫の声すればよ、あとは袋の御用鼠よ」の歌が聞こえ、そのまま鼠の世界に招かれる。歓待され、彼は金持ちとなった。隣家の男はそれをねたみ、わざと握り飯を穴に落とし、鼠の財産を独り占めにしようと猫の声をたてる。鼠の叫び声とともに土がくずれ、男は村人に掘り起こされるが、神社の土くずれをまねいた咎で罰せられる。

語りの例にもれず、「とっと」がまるで語りにはずみをつけるように多出するのを耳にしなが、宮本常一氏に質問せずとも、私は民俗学者の興味を持つ語りと小説家の目を引く語りが微妙に違い違っているのに気づいたのだ。宮本常一氏はその「キンジニヤニヤ」には関心を示さなかったし、私はそれ以後「キンジニヤニヤ」の意味を解こうとするように紀州を旅してまわった。

語りにも語られる文体のようなものがあるが、それは日本芸能のさまざまなもの、説経節から浄瑠璃、落語までその中に存在するが、私が興味を持つのは、もっと下位に位置するもの、手に負えぬもの、別の言葉で言えば物語の自由な組み換えをやり、書き文字の世界をぬけぬけと横断し、食い破るものである。さらに言葉を変えてみれば語られる文体を持った語りではなく、もっと口語的なもの、暴力のようなものである。その暴力のようなものが、日本文では音便変化を促す原動力であり、それが同時に書かれることによつて制度ともなる。それこそが物語と私には映る。

「語られる文体」、「語られる文体をもった語り」とは、説経「小栗判官」などでいえば「あらいたわしや、小栗殿（照手の姫は）、「つづらの懸子にとくとく入れ、連尺、つかんで、肩にかけ」などといったすぐに思い浮かぶ決まり文句があり、その他にも多くは七・五か八・五の章句でできていて説経の語りを特徴付けているだろう。浄瑠璃の台本であれば、詞や地、地色、フシなど三味線と語りの弁別、競合を示す符号が本文に付され、それによつて語る声は話法の制度（直接話法や間接話法）上でコントロールされていく。（酒井直樹『過去の声』⁴）落語では「下げ」という結末の効果の言葉が「語られる文体」といえるだろう。

「キンジニヤニヤ」に宮本常一は興味を示さず、中上はこの言葉に暴力性を見る。両者は、物語の世界をまず、constativeなものにとらえるか performativeにとらえるかの違いにもみえるが、「語られる文体」より下位のものが「キンジニヤニヤ」であるとは、ただたんにこの言葉が猫の声の再現も含んだ声の効果だとしても、まだ不十分だ。「キンジニヤニヤ」は「あらいたわ

しや」とどう違うのか。「あらいたわしや」には、語る「場」を組み込んだ、その意味で聞き手をあらかじめ取り込んだ間投詞としての文脈がある。それは Emile Benveniste が「話の現存」(instances de discours)⁽⁵⁾とよんだ、「わたし」(語り手)「あなた」(聞き手)の対話の場をその萌芽だとしても志向している。説経の世界に作者もおらず、人称体系は不安定であるが「あらいたわしや」は語り手の詠嘆のみならず、聞き手の詠嘆も方向づけ、物語に聞き手を密着させる⁽⁶⁾。

〈キンジニヤニヤ〉は歌であり、歌であれば人は好むと好まざるとに問わず「聞いてしまう」。耳という受動性の器官にいきなりはたらきかけるだろう。だから、暴力的なのだ。Benveniste のいう「話の現存」がいきなりやってくる。それによって、話の世界の受け手としていやおうなく指定されてしまうのだ。薩摩小若太夫は「説経やぶれかぶれ」⁽⁷⁾で「説経の章句はすべて、七・五の12文字か、八・五の13文字で書かれていますから(中にはとんでもない字余りを強引にはめたり、足りない字数でやたらアードのウーだの伸ばさなきゃならない物もあります)が、どの節で語ったつてはまるのです。……」と言っているが、その足りない、あるいは余った字数を伸ばす声こそ、より下位にある「口語的」なものといつてよい。

中上はエッセイの後半では、小説のもつ役割、書くことにおける文字の制御力を口語的なものと対比させているが、口語的なものが文字と対立するわけではないことは充分承知のほうである。口語的なものとはいえ、小説家にとっては書かれなければ、口語的であることすら表現しえない。

……共に、それを地の文に書いてしまえば身動きつかなくなるはずのものを、会話や噂という語られる物を導入して、時制や人称の自由や場所の自由を得ている。語られる物、さらに下位の口語的なものを物語としてとらえる、それを小説の中に導入すれば、驚くほど豊穡な世界をもたらしてくれると気づいたのは私一人ではないのである。

〈キンジニヤニヤ〉が「無文字の共同体にある伝承のような暴力」⁽⁸⁾だとしても、意味作用の最小単位である反復可能な記号(原エクリチュール)なしに伝承はありえない。伝承者が文字を書けなくても、記号を使用する以上、文字意識の書き込みはあるのだ。文字は原抑圧を経て人に刻まれる。〈キンジニヤニヤ〉を〈キンジニヤニヤ〉と聞いてしまうことは、それが、いったん分節化された音の単位の更なる召喚である。語る／聞くという直接の場を離れて〈キンジニヤニヤ〉を文字として書いた時、直接の場で歌い、語るだれかれのその時々⁽⁹⁾の違ひは抽象されてしまう。だからといってどこかに「声」の純粹な姿があるのではない。中上のエッセイが向かうのはすでに分節化された文字を用いていかに口語的なものを表現するかなのである。

〈キンジニヤニヤ〉がもっているのと同等の喚起力を、中上はどういう方法で小説に持ち込もうとしたのかと考えると、会

話や噂、人称、場面も含めていかに谷崎を撰取しようとしたかがわかるし、折口から学ぼうとしたものもつかめかけてくる。「きょうだい心中」を「枯木灘」(河出書房新社77・5)に挿入して本格的な作品を書いたあと、がらりと傾向を変えて『日輪の翼』(新潮社84・5)でまたなぜ「きょうだい心中」をとりあげるのかも察しがついてくる。

谷崎については、連載「物語の系譜」(『国文学』79・3)でとりあげるまえから、短編集「化粧」(講談社78・3)にその手法の痕跡がはつきりみられる。そして『熊野集』(講談社84・8)はその延長上であり、「重力の都」(新潮社88・9)はまさしく谷崎にさざげられたものだ。次の章では、「化粧」のなかの「穢土」(『風景』75・8・1)と『熊野集』の「不死」(『群像』80・6)をとりあげ、分析してみたい。

2

熊野を舞台にし、修行者といつてもいかにも生半可なヒジリがたまたま居ついた女を殺すさまを「穢土」で書き、さらに『熊野集』の中の「不死」ではほ同人物と思えるような被慈利を登場させる。女を殺す結末も同様である。

「穢土」では「彼」と三人称で語られる男は女から毎夜「しょうにん様あ」「救ってくださいませ、……」と繰り返し呼びかけられる。それほどの人物ではないと何度言つても女はきかないのだ。

あげくのはてに女が観音のように思えてきたころ、男に決定的な変化が訪れる。

女は、夜の闇の中で、相変らず、「ああ、救ってください、お救い下さいませ、お教え下さいませ」と、言った。呻いた。ふるえた。極悪非道の、無慈悲そのものが彼であるように、彼に身を投げ出し、這いつくばり救いを乞う。そして時々、女の声は、彼の声である気がした。自分が、自分にむかつて、救いを乞い、同時に、女にむかつて、心の中で言っていた。

「ああ、教えて下さいませ、お救い下さいませ、浄土への道をお教え下さいませ」

その日、早朝から郭公が鳴っていた。雨戸を閉ざした家の中で聞いた。(傍線引用者)

女に「しょうにん様あ」と呼びかけられるたびに、自分は「一介の被慈利であり、沙弥、毛坊主のたくいだ」と言つてきかせたのにそういう男を女は「しょうにん様あ、たいし様あ」と呼んでやめない。男は名指される自分を盗人や人殺しだと名乗ることも放棄し、女に祈っているような気になる。「穢土」の場合、女の主人を殺し、女をも殺すやくざな修行僧がふるう暴力と、それを誘発する女の祈りの声との質が問われているようにみえる。女にとっては浄土に導いてくれる誰か固有で特権的な存在が

必要だった。しかし、それと名指され、固有なものにされるのは、被慈利がやくざな存在でありつつつづけたいたいと思っているかぎり苦痛でしかない。繰り返し誰かを名指し、「固有」なものにすることは、特権を与えつつ、それ以外のものにさせない、という意味であらかじめ存在のありようを限定する暴力なのだ。『熊野集』の「不死」も基本的には同じモチーフが見出せる。

女は夜の闇の中で相変らず「ああ、救けて下さい、お救い下さい、お教え下さい」と言った。震えた。極悪非道の無慈悲そのものが俺であるように俺に身を投げ出し這いつくばり救いを乞う。そうするうちに女の声は時おり俺の声である気がしたのだ。自分が自分にむかって救いを乞い同時に女にむかって心のなかで言っていた。「ああ、教えて下さい、お救い下さい、浄土への道をお教え下さい」その日早朝から郭公が鳴いているのを雨戸を閉ざした家の中で聞いた。

(傍線引用者)

『枯木灘』の竹原秋幸が、路地のまなざしによって、浜村龍造の子であることを意識させられるように、「穢土」や「不死」では声が被慈利に襲いかかり、被慈利の輪郭を外側から作るうとする。

「穢土」と「不死」の文体は、「彼」から、「俺」への三人称から一人称への変化がみられ、表記上では読点がなくなり、段落の切れ目も消えている。読点も段落もテキストにおける分節の記号¹¹文字と考えれば「不死」では、女の声を書く自分が相手の側にとりこまれ、自/他の境界がぼかされ、外から聞こえるはずの郭公の声もより接近したものになることを表記の面の効果としてもあらわしている。唐突なようだが、「穢土」や「不死」ほど谷崎の『春琴抄』¹⁰を逆説的に模倣した作品があったらどうかとも思えてくる。『化粧』における「紅の滝」(『季刊芸術』77・10)のように段落を排除した作品があり、『重力の都』(前出)に『春琴抄』と物語内容への谷崎の影響は強いものの、佐助と春琴の会話を引用符号なしで書ききった場面は「不死」とむしろ比較してみたい。

……よくも決心してくれました嬉しう思ふぞえ、私は誰の恨みを受けて此のやうな目に遭うたのか知れぬがほんたうの心を打ち明けるなら今の姿を外の人には見られてもお前にだけは見られたうないそれをようこそ察してくれました。あ、あり難うござり升そのお言葉を伺ひました嬉しさは両眼を失うたぐらゐには換へられませぬ……

『春琴抄』のこの部分は、「声」と「文字」がきわめて幸運な形で出会った例である。書き手は句読点も引用符号も制御して、会話を前景化する。だからこそ引用部分で二箇所(全集二十行分であると四箇所)のみ打たれた読点は春琴と佐助の息遣いをあらわすシルシとして力をもつ。佐助と春琴が互いの声を聞く場は完璧である。「……胸がすくやうでござり升佐助もう何も云

やんなど盲人の師弟相擁して泣いた」という文の「と」によってはじめて春琴、佐助の発話行為が語り手によって媒介されて終わる。書き手が登場人物の完全な了解関係を声の対称性として与える手つきは自信に満ちている。

「不死」の場合、「」でくくり出された声はヘキンジニヤニヤと同じく、聞く側を一方的に指定してくる力をもった声である。だから、その声に被慈利は直接答えることができず、対話は成立せず、女の声に自分が差し出される。声の対称性は存在しない。被慈利は、声を聞かないためにはその声を殺さざるをえないのだ。声が女のものか、自分のものか、どこから出てくるのかわからなくなる——それは被慈利の中に複数の声が住みつくことだ。ここには「声」と「文字」の接近がありながらも逆に被慈利の意識の「亀裂」を鮮明にする。被慈利自身、自分が誰でもよく、初めから何者でもなかったという事実を暴くのだ。

『重力の都』の表題作も、巫女である女が死んだ「御人」の声を聞いて苦しみ、それを幻聴だと否定していた由明も、女と交わりつづけているうちに「痛ミガヒドクナルカラ雨ヲ止メテクレ」という死者の声が聴こえてくる気がしてくる。由明は女の求めに応じて言いにし、自らも、女にとつての「御人」になっていく。これは、死者から送られてくる声はどこまでも一方向であるがために、聴くものがあらがいようなくその声に支配される物語である。

『化粧』に収録された「欣求」（風景）75・2には熊野の湯に霊験をもとめてやってきた、ライ病を病む弱法師とその連れの女が登場し、つい彼らと行動を共にした男が、女から「お救け下さりませ、穢れをお救い下さりませ」といわれながら交わり、そのすぐそばで弱法師はそれしかいことがないように「なむあみだぶつ」と唱える。別れ際に、「彼」は女の脇腹に「口をあけた桃色の大きな傷」を見る。冒頭に引かれている説経の「小栗判官」や「信徳丸」の世界を現代に移し入れられる物語の型をとりながら、やはり、ここでも、「なむあみだぶつ」の声と弱法師の病、女の傷と「あなた、浄土からの湯でござります……」は、身体に刻まれた病や傷が聖痕であると同時に祈りの声の出所が意識に刻まれた文字に傷からきているというところをみておくべきだろう。

「不死」では「ジャアラジャアラ」という音も表象されている。その音は草木とこすれあう音、被慈利の中から出る音、経の代わりに唱える音といくつもの記号内容をもってしまふ。そうでなければならぬ必然性はないにもかかわらず。定まった位置から発せられない「ジャアラジャアラ」の効果からさらに中上の文字へのマニヤックな姿勢はみてとれるのだ。会話や独白の記述に関して『鍵』（中央公論社56・12）や、『瘋癲老人日記』（中央公論社62・5）のカタカナ表記に影響をうけていることは、『重力の都』のみならず『熊野集』の「鴉」など多くの例があげられるが、「音」とリズムの書き方について、折口信夫との関係のみ

ておきたい。⁽¹²⁾

中上は物語作者の評論を試みていた一九七九年、「国文学」10月号で折口信夫をとりあげていた（風景の向こうへ）所収。そこで、『死者の書』（43・8）の冒頭を引き、「彼の人の眠りは……」を三通りのリズム（拍数）で分解していた。最終的には「カノヒトノネムリハ」が音節は9音節でも、2音ずつのリズムにわけられる（カノ ヒト ノ ネム リハ と分け、「ノ〇」と余りも一拍に数えているようである）、というかなり強引なやりかたではある。そして死者の聞く水の音「したしたした」について「オノマトベとも言いきれない奇怪な、読む者、聴く者の体の奥に波立たせるような二音の音の連鎖をつくる。」とのべ、このリズムから舞踏のリズムに通じるものをみている。中上が折口からひきだしたかったのは「音の幾つ分節してもしきれないほど多様な意味の派生」らしく、折口の小説の言葉はどう分解しても破綻しないリズムに支えられ、意味はそれに自動的に従う、と言いたいらしい。中上の「音素」という用語や、リズム分解の単位が拍数（モーラ）なのかどうかはつきりしないため、これ以上介入できないのだが、「ジャアラジャアラ」についても2音節3拍のくりかえしで、かりに「ジャアラジャアラ」と書いても音節も拍数も同じでありながら、「ア」の表記にこめる書き手のこだわりは「ア」の一字が一音節でなくとも無理にでも音と意味の単位として認めさせたい意思ではないかと思えてくる。

『日輪の翼』（引用は『中上健次全集』7）であれば、「きょうだい心中」の歌の節をめぐるミツノオバとコサノオバのいさかいで、「ココサン、いっつも節、間違えるさかじゃわ。アノモンテン、イモトニホレテというの、アアニ、と言うし、イイモトと言うがやい。兄と妹の心中じゃのに、話、分かんようになる」というミツノオバの非難の部分で「アアニ」「イイモト」と表記し、あくまでも「アアニ」「イイモト」のように長音記号は使わない。『枯木灘』で「きょうだい心中」の濃厚な意味が作品の構造を支えていたとすれば、発音一つで心中の物語かどうかあやうくなる歌をあらたに導入した『日輪の翼』は、口語的なものによって起源の物語をずらす力をもつものかもしれない。

中上のエッセイ「口語的なものの力」をヘキンジニヤニヤの問題設定に即して考えてきた。浄瑠璃のリズムが文字となつて「われわれ」という共通の地平を生み出すものになつたと想定して、またそこからのがれようとする「他者の声」があるはずだ。中上にとって「より下位の口語的なもの」とは文字（書くこと）と声の関わりをどこまでも融和させないエネルギーなのだということとはひとまず確認できたと思う。

- 注1) 冬樹社『風景の向こうへ』(83・7)所収、以下の引用はこれによる。
- (2) 「昭和文学研究」第41集(00・9)。このときの考察に「音」の問題ははいっていないかった。また、現在では「口承芸能」もその台本も厳密には文字(エクリチュール)のカテゴリーで考えるべきだと思っている。
- (3) 東洋文庫二四三「説経節」(平凡社73・11)
- (4) 以文社02・6
- (5) 「一般言語学の諸問題」代名詞の性質(河村正夫他訳)みすず書房83・3)
- (6) Roman Jakobson が「言語学と詩学」(「一般言語学」川本茂雄監修)みすず書房73・3)のなかで論じている、間投詞の心情的メッセージ機能の部分をつまみあげている。間投詞はコンテクストへの方向づけとしてコードを要求するメッセージとは別に、独立して、言語の心情的な層をなす、という点である。さらにメッセージには聞き手をひきつけるシルシでもある「交話的機能」もあるという指摘に「あらいたわしや」の語りの機能はあてはまると考える。
- (7) 薩摩小若太夫のインターネット・サイト <http://ian.webup.co.jp/yuu/friend/hiko/yabure.htm> による。
- (8) 引用は「中上健次全集」3(集英社95・5)による。「不死」の引用は「熊野集」(講談社84・8)による。なお、「穢土」と「不死」は初出誌と異同はない。
- (9) Roland Barthes は「物語の構造分析」(花輪光訳)みすず書房79・11)で物語行為の人称体系には「人称法」と「無人称法」の二つがあり、それは「人称」(わたし)を「非人称」(彼)に書き換えても不都合がなければ、「その真の審級は一人称」であるといっている。「穢土」と「不死」が書き換えによって意味内容に不都合はきたさず、その意味では両者とも人称の体系内であるが、ここで問題なのは「彼の声」を聞くことから「俺の声」を聞くことへの変化が声の「現前性」により近づく書き方であることである。
- (10) 創元社33・12。引用は「谷崎潤一郎全集」第十三卷(中央公論社82・5)による。
- (11) 注2拙論ですでに言及し、論じた。
- (12) 本来「春琴抄」のなかの口三味線のリズムなども考慮すべきであるが、この稿では折口との関係にとどめる。

共同体の〈声〉／複数の〈声〉

——時局雑誌『放送』と〈書く〉こと——

黒田大河

〈声〉の記憶を掘り起こす作業は、活字のように対象化して捉え直すことが困難であるがゆえに、個人史の奥底にからみつくように留まり続ける記憶を断ち切ることであるようだ。甘しい郷愁のように存在するそれは、個人の記憶であると同時に、共同体的な記憶として形成されたものでもあるからだ。ラジオによって増幅された声音は、その時間的な同時性と空間的な近接性の感覚によって、聴取者にある種の共同性をもたらす。メディアによって産み出されたこのような〈声〉を対象化する作業は、近代のリテラシー（文字の文化）とオラリティー（声の文化）の相克を見つめることでもあるだろう。

例えば、一九四五年八月二十五日の正午、ラジオから「終戦の詔書」が天皇の肉声によって伝えられた。いわゆる「玉音放送」である。一九二五年の放送開始以来、メディアの中で空白として聖化され続けて来た〈玉音〉が開封されることによって、国民全てに終戦の「儀式空間」がもたらされた、と竹山昭子は言う。確かに、〈玉音〉の記憶は多くの日本人の共同体験として感じられることだろう。数々の敗戦日記もそれを証するように見える。しかし、メディアと権力の共犯関係の中で準備された「玉音放送」に、寄り添うように見える敗戦日記の記述もまた、詳細に検討すれば、共同体験をずらして行く差異の集積なのではないか。その個々の差異を記憶の中で隠蔽するのが〈玉音〉の共同的な記憶なのである。姜尚中の指摘するように、「八・一五」を歴史の『零度』として「爾臣民」の意識に天皇の肉声を通して鮮明に刻印し、敗戦以後も『国体』が維持されていくことをマニフェストしておく必要があった⁽³⁾のは、敗戦国の権力の要請であつたと同時に、戦後民主主義の原点として「八・一五」を位置付ける知識人達にも共有される力学だったのである。外地と内地、植民者と被植民者、都市部と農村部、戦闘員と非戦闘員、様々な体験の差異が〈声〉の記憶によって一元化され、「日本国民」というフィクショナルな共同性が形成されたのである。

「書かれたもの」を検討することで、〈声〉を対象化する作業はどのような共同性から切り捨てられたもの達の〈声〉を再生することではないだろうか。

『戦争と放送』『ラジオの時代』と続く竹山の仕事は、ラジオと共に成長した自らの記憶の物語を跡付けようとしたものであり、共同性を形成した放送メディアの力学を考える上で重要な考察であることは言を待たないが、〈声〉の共同性に絡み取られた竹山の記憶自身は無垢のまま残されているのである。その記憶を相対化する作業が直接体験として共有する〈声〉の記憶を持たない世代に求められている。もちろん、竹山の仕事が客観性を欠いていると言うわけではない。例えば、一九三七年のベルリンオリンピックにおいて河西三省アナウンサーが「前畑ガンバレ！前畑ガンバレ！」と絶叫したという〈声〉の記憶。竹山は資料を繰りながら、ナショナルな感情を引き起こすオリンピックというイベント、国際的な孤立の中での日本におけるナショナルイズムの高揚、ナチスによる狂信的なナショナルイズム、「これらが三位一体となって競技場に在る日本人を追い詰めていった」と分析する。初めての海外実況中継によつて伝えられた〈声〉に引き起こされた熱狂を竹山は客観的に描き出している。だが、その〈声〉が記憶の中で再構成される様相に迫るためには別の回路も必要なのではないか。

佐藤卓巳はラジオを「共感の母体となる、共通の『記憶』を創造していく」メディアとして捉えている。ベルリンオリンピックにおける「前畑ガンバレ！」の〈声〉もまた国民的な共通の記憶となつているのだ。ただしそれは、直接経験よりもむしろ記録映画やレコードによつて後付けされたものであり、活字メディアによつて補強された記憶なのだという。佐藤は国民大衆雑誌『キング』が「ラジオ的雑誌」として、ラジオと補完し合いながら、大衆的公共圏、さらにはファシズムの母体としての国民的公共圏を形成する過程を描き出している。活字メディアとラジオが互いに増幅し合いながら〈声〉の共同性を形成する様相を見つめるこのような問題意識こそ竹山の仕事を補うのである。

前置きが長くなったが、次に一九四一年一〇月から一九四五年四月（または五月）まで、日本放送協会から発行された時局雑誌『放送』における文芸関係記事の目次を紹介する。時局雑誌『放送』は一九四一年一〇月「ラジオ講演講座」が統合された聴取者向けの雑誌で、従来の『日本放送協会調査月報』を引き継ぐ部内報的な性格の『放送』（一九三四年四月～一九四一年九月、『放送研究』と改題）とは異なる。「国策の普及徹底に資すると共に聴取者各位と放送局との紐帯として、斯業の使命達成に役立つこと」（改刊の辞）を目的としたこの雑誌は、放送内容のガイダンスとしてラジオ聴取者を方向づけ、聴取困難な地域では「読むラジオ」として働くことを狙っていた。聴取者とラジオの「紐帯」として〈声〉の共同性を作り出そうとしたこの雑誌を検討す

ることで、〈声〉の記憶の形成に〈書く〉ことを通して文芸が如何にかかわったかを見いだす手掛かりが得られるのではないだろうか。

時局雑誌『放送』における文芸関係記事一覧（同志社大学図書館蔵本）

一九四一年一〇月号（二巻一号）

戦時下の母と娘におくる 奥 むめお／戦線の俳句 水原秋櫻子／放送文芸へ「空の放送文芸」懸賞募集入選作品 天翔る

夢（ラジオドラマ） 樺山三恵子／青桐の下 堤 千代／戦陣訓の歌 丹羽文雄／明日の人生（放送小説） 尾崎士郎

一九四一年一二月号（二巻二号）

現代に生きる歎び（随想） 吉川英治／戦線と銃後を語る座談会 中野実、濱本浩 他／放送文芸へ馬鈴薯と花嫁 北町一

郎／体力章親爺 サトウ・ハチロー／生まれた土地（ラジオドラマ） 森本 薫／馬車にて（放送文芸） 阿部知二／禁裏修

築記（放送文芸） 加藤武雄

一九四一年一二月号（二巻三号） 未見

一九四二年一月号（二巻一号）

愛国詩 戦勝のラジオの前で 西条八十／「職場の短編」入選発表（山田さんの話・木炭トラック暴進・おひるまえ・霜と戦う・

籠手）／短歌の鑑賞 土屋文明／放送文芸へ早春——或失明軍人の手紙——（小説） 上田 廣／北進先駆（ラジオ小説）

関口次郎／夏目漱石（詩吟物語） 木村 毅／濱田弥兵衛 長谷川伸

一九四二年二月号（二巻二号）

大いなる春（随想） 吉田絃二郎／優にやさしき心 岸田国士／愛国詩へ光の嵐——マレー戦線進撃譜—— 佐藤春夫／呼

びかける 堀口大輔／マニラの陥落 野口米次郎／世紀の詩 川路柳虹／和歌 大木御稜威 佐佐木信綱／放送文芸へ十

二月八日の西貢 吉屋信子／名のみ残らば（小説） 神山 潤／御民われは（小説） 堤 千代／濱田弥兵衛（連載小説）

長谷川伸

一九四二年三月号（二巻三号）

シンガポール陥落す（詩） 室生犀星／入選感想文 大詔奉戴の感激（われ一人にて米英を打たん・吾が子等と語る・燃えさかる

- 数十の瞳・晴れがましい母の途／愛国詩へ剣とともに 佐藤一英／新たなる曆 尾崎喜八／真住吉の神 河井醉茗／我が子に教ふ 勝 承夫／放送文芸へ竹の皮 吉田絃二郎／最初的大海戦（物語） 土師清二／武家義理物語（井原西鶴原作） 依田義賢／応募佳作 聖壕の歌 関川周
- 一九四二年四月号（二巻四号）
- 愛国詩 戦捷の春 吉田絃二郎／放送文芸へ詩の世界にも 室生犀星／雞をめぐりて 棟田 博／海鷲教官の手記 倉町秋次
- 一九四二年五月号（二巻五号）
- 愛国詩へ建設の歌 尾崎喜八／蒼空のはて 百田宗治／うぶすなの土地——帰還兵士の歌へる—— 川路柳虹／生活のうるほひ 岸田国土／放送文芸へ秘蔵南方図 加藤武雄／右の家左の家（小説） サトウ・ハチロー／日本の船出 水木京太
- 一九四二年六月号（二巻六号）
- 私の従軍手帳より 海野十三／招魂の御祭事 吉川英治／愛国詩 こだま 笹澤美明／放送文芸へバタアン戦線従軍行 火野葦平／續武家義理物語（井原西鶴原作） 依田義賢／天使の行衛（小説） 深田久彌
- 一九四二年七月号（二巻七号）
- 熱帯戦線より 海野十三／比島第一線の放送陣 木村 毅／小説 梅雨 鈴木紀子
- 一九四二年八月号（二巻八号）
- ブキテマ戦線をめぐりて 藤田嗣治／ジャバ作戦の九日間（一）富澤有為男／支那戦線慰問行へ中支戦線を巡りて 真杉静枝／北支の兵隊さんを訪ねて 美川きよ／放送文芸へ小説 海鷲教官の手記 少年飛行兵 倉町秋次／小説 星の牧場 諏訪三郎
- 一九四二年九月号（二巻九号）
- ジャバ従軍座談会（武田麟太郎・小野佐世男・横山隆一・郡司次郎正・司会松井翠聲）／海を護る心 石川達三／ジャバ作戦の九日間（二） 富澤有為男／放送文芸へ小説 鏡 山本周五郎／小説 町の録音 水木京太
- 一九四二年一〇月号（二巻一〇号）
- 南方建設の鼓動を聴く（東京 バタビヤ対談） 菊池寛 阿部知二・堀内敬三 飯田信夫・高田保 松井翠聲／戦時下の国民

- 文学へ田園の文学と俳句の精神 山口青邨／歌に表れた国民的感動 土屋文明／入選放送文芸へ放送劇 魂の魚雷 平楽太郎／放送劇 喇叭 原田重久
- 一九四二年一月号(二卷二号)
- 放送文芸へ小説 返礼 穂積純太郎／物語 亀田の久蔵 伊藤永之介
- 一九四二年二月号(二卷二号)
- 大東亜戦争と短歌 斎藤 瀏／詩精神と日常生活 高村光太郎／放送文芸へ小説 十二月八日 木村 毅／短編劇 父の家 堀江林之助／物語 野にも山にも 堤 千代
- 一九四三年一月号(三卷一号)
- 愛国百人一首の時代と作風 松村英一／従軍記録へバタアンの思ひ出 尾崎士郎／比島より還りて 今日出海／文芸へ稲の中の話 岩倉政治／名人 森本 薫
- 一九四三年二月号(三卷二号)
- 米英文化との戦ひ 中野好夫／日本人の矜りと嗜み 岸田国土／戦時随想へ戦ふ者の美しさ 吉田絃二郎／生活の味はひ 高橋健二／小説 友よ征け 日比野士朗
- 一九四三年三月号(三卷三号)
- 現地報告へジャワの文化とわれら 阿部知二／戦線で見た皇軍魂 里村欣三／ビルマ戦線の思ひ出 倉島竹二郎／向日葵 室生犀星／生活とことば 野上彌生子／文芸 兵魚 上田 廣
- 一九四三年四月号(三卷四号)
- ジャワみやげ 大江賢次／昭南譚片 徳川夢聲／若鷺還る(小説) 倉町秋次
- 一九四三年五月号(三卷五号) 未見
- 一九四三年六月号(三卷六号)
- ビルマの兵隊さん 水木洋子／大東亜戦争の俳句 水原秋櫻子／多感な少年と時代の保護 吉川英治／文芸 教官(入選作品) 伊郷定雄
- 一九四三年七月号(三卷七号)

- バリー島王族滅亡物語 高見 順／小豆畑の夫婦(短編) 深田久弥／霊前に生肝を(詩) 山本和夫／山本元帥追悼特輯
 へ山本元帥を悼む(歌) 斎藤茂吉／山本元帥を悼む(歌) 土屋文明
 一九四三年八月号(三卷八号)
- 起ち上る印度 野口米次郎／山征かば 逗子八郎／農民勤勞の短歌 吉植庄亮／防人とその妻の歌 今井邦子／文芸 仔豚
 の生れるまで 武井一男
 一九四三年九月号(三卷九号)
- 学徒出撃(詩) 坂本越郎／文芸へ椰子の実爆撃 北村小松／気魄 大江賢次
 一九四三年一〇月号(三卷一〇号)
- アツツ島の雄魂を憶ふ 尾崎士郎／久遠の大儀(短歌) 逗子八郎／信念をもつて(千代女と子規の作品より) 長谷川かな女
 ／放送文芸へ村は星月夜(入選作品) 岩田兼吉／密林 上田 廣
 一九四三年一二月号(三卷一一号)
- 死ぬ覚悟と生きる覚悟 下村湖人／電波兵器を語る(対談) 網島毅・海野十三／銀翼に祈る 吉川英治／初放送失敗譚
 徳川夢聲／兜(放送劇) 小山祐士
 一九四三年一二月号(三卷一二号) 未見
- 一九四四年一月号(四卷一号)
- 生死行徹(短歌) 斎藤 瀏／決戦の春(俳句) 富安風生／放送文芸 怒濤は月に吼ゆ 間宮茂輔
 一九四四年二月号(四卷二号)
- 短歌・建国祭 斎藤茂吉／放送文芸 タツカの娘 北村寿雄
 一九四四年三月号(四卷三号)
- 共栄圏の防衛増産 中野 実／いざ征かむ(詩) 大木惇夫／放送物語 採炭夫 鶴田知也
 一九四四年四月号(四卷四号)
- 噫音羽候(短歌) 土岐善麿／応募川柳「母」入選発表表(川上三太郎選)
 一九四四年五月号(四卷五号)

喜劇 プロペラ一家 伊馬鶴平／応募俳句入選作品選評 富安風生

一九四四年六月号（四卷六号）

放送劇 晩餐 福田春吉

一九四四年七月号（四卷七号）

米英の功利外交を衝く 徳富蘇峰／前線と放送（座談会） 木村莊十、大木惇夫他／放送劇 デリーへの道 村上元三

一九四四年八月号（四卷八号）～二月号（四卷二号）

文芸関係記事特筆すべきものなし。

一九四五年一月号（五卷一号）～最終号（四号または五号） 未見

ここに登場する作家の多くは里村欣三（マレー方面）、梶山潤、高見順（ビルマ方面）、富澤有為男、阿部知二（ジャワ方面）、火野葦平、尾崎士郎、上田廣（フィリピン方面）など陸軍報道班員、丹羽文雄、海野十三、石川達三ら海軍報道班員や海軍嘱託の吉川英治など、いわゆる南方徴用作家である。臨時徴用の女性作家（吉屋信子、美川きよ、水木洋子ら）や帰還作家（棟田博、日比野士朗ら）を含めるとほとんどが軍関係の作家ということになり、前線と銃後とをつなぐ時局雑誌としての性格が明らかである。坪井秀人が検証した愛国詩朗読運動／愛国詩朗読放送と連動して愛国詩も多数採録されている。「放送」は「キング」ほど多数の読者を獲得したわけではなかったが、ラジオ放送を採録するだけではなく、放送に相応しいものを掲載するという編集方針によって、ラジオと補完し合う性格が生まれていた。特に「放送文芸」という枠組みを考えると、実際に放送されたか否かよりも、聴取者と放送メディアの共同性を担うにふさわしいテキストが選ばれている。つまり、「声」をテキストに定着すると共に、「声」を想定したテキストがそこに生み出されたのである。かわった作家達はいかに「声」を意識しながら「書く」ことをなしたのだろうか。拙論では僅かに火野葦平、上田廣、高見順、室生犀星を考察したが、今後の課題として読者の投稿や無名作家を含めて、国民を統合する「声」の記憶を対象化するための検討が成されるべきだと考える。残されたテキストを通して見えるもの、聞こえて来る「声」があるはずである。

最後に、共同的な記憶とは異なった、微かな「声」の記憶を辿る試みを紹介したい。一九四五年八月六日、原爆投下後の広島放送局から、「美しい澄み切った声」で絶え絶えに大阪放送局を呼ぶ声が続いたという。壊滅した放送局から誰が、どのように

放送し得たのか。一聴取者の記憶に残る（声）をたどって、筆者は、当時の放送局員の証言を求める。その声は女性の声だったという。しかし、スタジオが崩壊した中で放送し得た女性アナウンサーは誰もいなかった。その（声）は幻の記憶なのか。しかしやがて、複数の証言がラジオから流れた（声）を語りはじめ……。記憶の証言という移ろいやすいものの中に浮かび上がる複数の真実、証言者それぞれの広島体験と分かち難く結び付いた複数の（声）の存在を追う筆者は、やがて知る。「その声に、多くの人びとがヒロシマの、そして人間の運命をよみとっていた。その声は、途切れたからこそ、あの時もいまでも、わたしちにさまざまな意味を、そして鋭い問いかけを投げかけているといえるのであった」と。共同体験とは異なつた（声）の記憶を掘り起こす試みは、テクストの中の（声）を読もうとする我々にも、共同性の中に埋もれた複数の（声）の存在を指し示すようなのである。

- 注(1) 竹山昭子「戦争と放送」(一九九四年三月三〇日、社会思想社、二〇二頁。「ラジオの時代」(二〇〇二年七月一〇日、世界思想社、一三九頁からの「封印された天皇の声」においては、「封印」から「開封」までの様相がより詳細に追われている。
- (2) 拙論「夜の靴——(敗戦)という「不通線」——」(『解釈と鑑賞』第六五巻第六号、二〇〇〇年六月)においては、高見順、中野重治の敗戦日記と横光利一「夜の靴」を対比しつつ、敗戦の微小な差異に眼を向けた表現を考察した。
- (3) 姜尚中「ナショナリズム」(二〇〇一年一〇月二六日、岩波書店、九〇頁。
- (4) 竹山「ラジオの時代」(前掲)、二二二頁。
- (5) 佐藤卓巳「キング」の時代——国民大衆雑誌の公共性——(二〇〇二年九月二五日)、二二七頁。
- (6) 坪井秀人「声の祝祭——日本近代詩と戦争——」(一九九七年八月三日、名古屋大学出版会)。(声)と(書くこと)の問題をめぐって、坪井の仕事は重要なものとして看過できないが、「玉音放送」をめぐっては「ラジオから流れるこの声こそが戦時下に朗読された(詩)の、その(声の祝祭)の総決算であったのではあるまいか」(二四七頁)としている。
- (7) 拙論「国民」統合の(声)の中で(書く)こと——雑誌「放送」に見る戦時放送と文芸——、「木村一信編『戦時下の文学——拡大する戦争空間——文学史を読みかえる四』(二〇〇〇年二月二五日、インパクト出版会)。
- (8) 白井久夫「幻の声 NHK広島八月六日」(一九九二年七月二〇日、岩波新書)、八七頁。

花田 俊典 著

『清新な光景の軌跡——西日本戦後文学史——』

新城 郁 夫

八百頁にも及ばんとする花田俊典氏の新著『清新な光景の軌跡——西日本戦後文学史——』を読み終えて、それこそ、軽い眩惑のような感覚にとらわれたのは、本著の膨大さや資料探索の緻密さばかりが要因とは言えないようである。

むろんのこと、二百人を越える文学者たちとそれらの人々に関わる数知れぬほど多くの表現のひとつ一つを読み込み、そこにある連絡を見つけ記述していく本書の構想に、著者の圧倒的など言いたくなるほどの「文学史」的知見の深さと読みの確かさがあずかっていることは疑いようがない。加えて、著者の考察の対象とする文学が、山口・九州・沖縄という広範囲の地域に広がっていくのを見とどけると、そこに「西日本戦後文学史」という新たな文学史あるいは文壇史を構築していく試みが開示されていると、あるいは思われないでもない。

しかし、圧倒的な文学史的情報の集積という点で言うならば、わたしたちは、既に、伊藤整―瀬沼茂樹による『日本文壇史』や高見順『昭和文学盛衰史』、野口富士男『感觸的昭和文壇史』などを持つているし、また、紅野敏郎や谷沢永一あたりの歴史的思考を欠いた書誌フェティシズムの産物をも参照することもできるわけだから、これら既存の文学史記述や文壇史的考証の系譜に沿いながら、そこに、「戦後」という時期設定と、「西日本」という地勢的設定をそれらしく組み直していく過程の中で、「西日本戦後文学史」が今書かれたというのであるならば、なにも驚嘆する必要などないだろう。「郷土」や「地方」に焦点を当てた、また一つの「日本文学史」が提示されたのだ、と了解すれば事足りるだけのことである。

だが、本書を読み通し、そこで心地よい眩惑を感じてしまうの

は、副題として掲げられた「西日本戦後文学史」という「文学史」の構図そのものへの解体の契機が、この花田氏の『清新な光景の軌跡——西日本戦後文学史——』という書物自体のなかに仕組まれていくからであることに気づかされる。西日本という日本の一地域の、戦後という一時代に関する文学史、といった通史的記述のあり方そのものについて、本書は一貫した記述方法を持っていない。と言うよりも、むしろ、文学史という通史的記述や地方（郷土）文学という地勢的把握を回避することだけが、この書における唯一の方法らしきもの、と言ったほうがより正確であるかもしれない。その意味で、花田氏の新著は、その拡散的とも見える記述のあり方そのものによって、「西日本戦後文学史」というタイトルが読み手に予感させる認識的枠組みを、みずから裏切り続けていると言えるだろう。

H・R・ヤウス（挑発としての文学史）が指摘するように、「文学作品の歴史をよりどころとして、民族の個性（民族性）が形成される過程を記述すること」のなかに「国民文学の歴史」としての「文学史」という構想そのものの歴史性があり、その意味で、文学史的記述それ自身が十九世紀ナショナリズムの政治経済的運動の一形態であり、文学史が国民文学史として成立している点でそれがまた強固なナショナル・ヒストリーでもあることは、やはり確認しておく必要があるだろう。同時に、「地方」や「郷土」といった概念を置きたいも、また、国家や国土の自律的同一性を補完する流通的記号であることを鑑みれば、「西日本戦後文学史」という構想その

ものが、戦後日本のクロノロジカルな歴史認識を、「西日本」という周縁から立ち上げてしまいう危険を孕んでいると言わねばならぬ。

しかし、こうした危うさについて誰よりも意識的かつ自省の的なが著者の花田氏であることは、本書に見出される言葉の連なりの中に明かである。たとえば、一九二二年長崎県出身という出自によつてひとまずは本書の対象（西日本戦後文学）たる資格を与えられた橋川文三の『日本浪漫派批判序説』（一九六〇年）を論じて、氏はこう書いている。

橋川文三が発見したのはつまり、戦前・戦中と本質的にはなに一つ変わらない戦後の精神構造であった。というより、戦争を支配したイデオロギーは、戦争が終わったからといって自動消滅してしまふほどやわなものではなく、たとえ戦時下だろうが戦後だろうが、そんな時代相の上皮などには微動だにせず、したたかに時代の底部に頑として伏流し続けているということなのだ。
（第五章 独立^{ひたたく}、二七六頁）

「いかなる現実もそれが「昨日」となり「思い出」となる時は美しい」という橋川という言葉のなかに、鋭いアフォリズムを読みとる花田氏が本書を通じて拒み続けるのが、まさに過去の現実を美しい「昨日」の「思い出」とするような「戦後」的ヴィジョンなのであり、そうした制度的思考への批判を通じて、戦前・戦中から戦後を貫いて「伏流」する「支配的イデオロギー」の文学的形象があまり出されていくのであった。この時、本書は、「日本」という実体的空間

やその連続的通史性のフィクションを露呈させていくことになる。

おそらく、そうした著者の企てを最もよく開陳することとなるのが、本書においてあまたたび言及される戦後沖縄文学と言えるだろう。と言うのも、沖縄の文学を思考することを選択した時、既に、本書は、「西日本」ひいては「日本」という空間の実体性と「戦後」という政治的時間区分とを手放さなければならぬからである。米軍占領下にあった（と言うより今なお占領され続けている）沖縄は「西日本」や「日本」という空間の領土化に回収されることのないこと、また同時に、沖縄に「戦後」という時間の秩序化をはめ込むことはできないということがここで想起される必要があるだろう。沖縄を視界の外に追い出すことによって、かろうじて幻視しえたかもしれない日本戦後文学史は、他ならぬ沖縄の文学によつてその正統性を剥奪されなければならない。そうした沖縄への、あるいは沖縄からの問いを導き入れることによつて、本書は、「西日本戦後文学史」であることから逃れて、幾層もの「伏流」が交錯しあう文学表現の饜齋を、それこそ「清新な光景の軌跡」のなかに見出すとするのである。

加えて看過されないのは、沖縄を語る行為を介して戦後日本の被害者の「主体」性の回復を図るといった、いかがわしい物語生成こそが拒まれようとする本書のあり方である。たとえば、それは、「第四章 アメリカ世」のなか、仲宗根政善『沖縄の悲劇——姫百合の塔をめぐる人々の手記』（一九五一年）の記述に丁寧によりそいつつ、その悲劇の伝説化にふれて、「真実らしい意匠をもつ自己慰撫

の物語が、なによりも欲された」（二二〇頁）戦後日本の制度的物語を批判する花田氏の言葉のなかに明かである。実は、こうした戦後日本の「自己慰撫」物語への批判は本書の核ともなっている。

たとえば、永井隆『ロザリオの鎖』（一九四八年）以後広まっていくことになる長崎原爆をめぐる伝説化の過程に、「被爆者と敗戦国民との絶望と痛苦を癒す当座の即効性」（一九二頁）を見出す思考のなかに、あるいは、「国家や人種やムラ組織などという陰湿固陋な共同体への偏頗な帰属意識」への忌避という媒介を通じて、藤原新也『東京漂流』（一九八三年）と宮内勝典『グリニッジの光りを離れて』（一九八〇年）との重層が見とけられる記述（七四四頁）のなかに、戦後文学が「国民」の物語と化していくことへの危機感と、その呪縛からの脱出の可能性への問いが書き込まれているのを見逃してはならないだろう。

戦後文学史という構想そのものうちに、戦前・戦中の現実を美しい「思い出」（橋川文三）のなかに解消しようとする心性が隠され、そこに日本国民という「主体」の回復という政治が潜んでいることを見出していく著者花田氏の鋭敏な思考が、「引き揚げ者」たちによる文学表現や在日朝鮮人文学、さらには、筑豊炭坑に拠点をおく雑誌「サークル村」に関わる谷川雁、上野英信、森崎和江らの文学について、繰り返し記述を試みるのは、だから、当然と言うべきであって、容易に「戦後日本」の国民の物語に馴致され得ぬ人々の、身体的な問い返しでもあるこれらの文学表現にまなざしを凝らすことによつて、著者は、「西日本戦後文学史」という枠組みを自

ら覆し、そこに、交錯する表現（者）の磁場を設定し直そうとするのである。そうした著者花田氏の試みによって、「西日本戦後文学」は、「郷土」文学という矮小化された限定的規定からも、そして、「戦後」という通史的歴史認識の閉塞からも逃れ得て、混沌とした文学表現の錯綜のなかから「清新な光景の軌跡」を垣間見せてくれようとしている。

（二〇〇二年五月十五日 西日本新聞社 七六五頁 二八五六円）

『近代文学研究とは何か』 刊行会 編著

『近代文学研究とは何か』 三好行雄の発言

田 中 実

三好行雄は最期の仕事、『別冊國文學』の『夏目漱石事典』（平成2・7 学燈社）の「あとがき」で、「担当した『作品事典』が、既発表の論を要約したのみに終わつたのは不本意であつた。他日、補正の機会を期待したい。」と言ひ残したまま、逝つてしまつた……。その「序」には漱石が芥川・久米に宛てた破格の書簡を引き、「この一節にこめられた思いの深さはいささか異様」と述べ、「牛のように歩け、人間を押すのです」という漱石の言葉を「最後のへ教訓」とした。死の病にあつた三好は自身の思いをそこに重ねていたはずである。

最後の本格的論文「『高瀬舟』——研究史と作品論」（別冊國文學・森鷗外）平成元・10 学燈社）は登場人物同士の相関、すなわちプロットを捉えるのでなく、「縁起」を含めた四つの言語表現（「言述」）の位相を組み合わせ、へ語り手への領域と登場人物の相関を論

じた。その手法はそれまでの「作品論」の方法からへ語りへの「からくり」を論じ、「作品論」の可能性を示そうとしてへ語り手」を一方ではへ機能へやへ関係へとして認めながらも、他方で実体としての「作者」鷗外でもあると捉えていた。三好のポストモダン、「八〇年代問題」との出会いである。ところが、小泉浩一郎は視点人物羽田庄兵衛を直接「作者」鷗外と重ね、「視点」を「語り」としてあらわに問題を後退させていて、その後の研究状況は管見の限り、旧態依然とした地平で『高瀬舟』論が継承されるか、これとは別にテキスト理論の影響下にあつて、作品のコンテキストを辿らないう形で論じられるかして、今日に至っている。一種の知的退廃であると私は判断している。

『三好行雄著作集全七巻』が筑摩書房より刊行されたのは一九九三年のこと、それからさらに九年後の二〇〇二年五月二〇日の命

日、本書『近代文学研究とは何か 三好行雄の発言』が刊行された。『著作集全七巻』に収録されなかった方法論に関するものを主軸に、全五章に分けられて収録、その各冒頭には一ページに渡って解説が加えられ、章末には「解題」と「編者注」が付されている。しかも各論のタイトル、例えば、「作品論は入口のない部屋か」、「バルトの理論は私には不要だ」、「危険な畏と悪食性」などはいずれも編者によるもので、いかにもポレミック、この意欲を歓迎したい。

編者たちは「はじめに」で、「あらためて『文学研究』とは何か、を具体的にわが国の歴史を振り返りながら」、「今、何よりも問われているのは『近代文学研究』という枠組みの歴史性を問い直すことであり、そのためにはまず第一に、現在考えられている『研究』がどのような成り立ちを持つのかを過去にさかのぼって検証してみなければならぬ。」と述べ、その「きわめて重要な意義」を強調する。「三好行雄の問いかけ」は「個々の流行を越えた不易の課題」であり、これを回避して近代文学研究があらうはずもない。制度としてこれが崩壊しつつある今日こそ、本書の「発言」が問われるのではないだろうか。

*

*

三好行雄はもともと空体力学を学んで軍用機の研究に勤しみ、「現実に対する直接の有効性への志向」に向かっていた。それが十九歳で敗戦を迎え、その挫折体験が三好に実学から最も遠い無用の学問である国文学、しかもその中でも特にいまだ学としての認知を

受けていない近代文学研究を専攻させた。それは研究主体の（私）の存在を信じないこと、研究主体のへその緒を研究行為から自覚的・意図的に断ち切れさせ、この断念によって知的体系としての学問研究に参与させた。それは素朴な読解及び実証、あるいは鑑賞を斥けただけではない。マルクス主義の洗礼を受けた歴史社会学派に対する距離を取らせ、既存の学問の権威であるアカデミズムを斥け、「認識」と「行為」の関係を深い断絶をもたらしただのである。これが近代のエートスを生きさせ、自らの内なる権威に基づく虚学という学問を形成させ、独自の文学史を構想させたのである。ところがその虚学もまた現実の諸要請、「実践課題」に晒されているために常に「ほころび」に遭い、文学研究がひとつの「からくり」、虚学と言えど体制内研究の欺瞞でしかないことを三好に自覚させる。そこでこれを受け止めてくれる（文学）をさらに求め、内なるアカデミズムへの志向として純化し、表現活動に邁進していったのである。すなわち、敗戦による三好の「戦後体験」から全共闘による学生運動体験は、現実のことに直接何一つ結び付かない「虚学の存在」をいっそう求めさせ、三好独自の学問体系（作品論・作家論・文学史を往復する認識の純粹往復運動）を成立させたのである。こうした姿勢が当時の学会水準を越え、近代文学研究をリードさせ得たのである。

ところがそこには結果としてある難問^{アポリア}が待ち受けていた。研究主体の（私）の存在は断念しながら、研究成果の知的体系は信じるという矛盾である。すなわち、そこには研究のアポリアである批評と

実証の乖離と矛盾があり、それはやがてあり地獄のような畏、捉えた対象を超えるとは何か、「向こう側」という領域を顕在化させることになる。研究主体のへその緒を断念することで文学研究を成立させる詩人Ⅱ表現者三好行雄の宿命である。この屈折した回路に不出生の近代文学研究者「三好行雄」の誕生があつたとともに、晩年の闘いがあつた。

*

*

三好行雄の生涯には世代を越えて幾人かのライバルがいた。まず歴史社会学派の猪野謙二は研究者として自立していく時の一つの目安であつた。長谷川泉に対しては特に鑑賞概念を批判することで、自らの「作品論」の方法を構築した。この二人の先輩に対し、三好の対象作品を捉えることの〈断念〉ははるかに深かつた。これに対し同世代の後輩、後にテキスト論者となつた前田愛はそれと名指ししないものの、三好の「作品論」を「病理」と呼んで、対象の実体性を斥け、「作品」から「テキスト」への道を拓いていき、小森陽一に継承されていった。そしてその背後には文学研究者として最大のライバル、ロラン・バルトの存在があつた。ここには読書行為によつて現象する対象の文学作品の文章はいかなるものか、その対象認識の領域、すなわち、捉えた対象の向こうとは何かを問う〈ニヒリズム〉か〈神〉かの領域が明確に違つていた。つまり、カソリック社会のフランスの言語に生きるバルトと「神神の微笑」（芥川龍之介）の文化の日本の言語に生きる三好との相違であり、これが三好に最期までバルトのテキスト概念である「還元不可能の

複数性」Ⅱ〈ニヒリズム〉・〈神〉を捉えさせなかつた所以であると私は考えている。三好には「バルトの理論は私には不要」、だが、思うに、二十一世紀の文学研究はその「バルトの理論」から始まる……。

後戻りする。三好の読みは、鑑賞の正しさを斥け、読解の深まりにつれて、批評に転ずるとした。批評対象を「外から、それを客体として認識し、表現できるという立場を幼稚な認識」、「実像を描くこと」として斥けることから始めた三好は、研究対象を批評主体の〈私〉の精神の運動として捉えるヴァレリーや小林秀雄の方法、「虚像」を描く方法を「文学史」という歴史学のひとつの系として位置付けた。とすると、そこに背理が生まれる。対象との一定の「時間の距離」を取つて、且つ「感動」から始めない、逆にヴァレリーの斥ける「碩学」の方法を選び取ることになる。ここにはヴァレリーから始めた批評を実証として完成する危うい回路を歴史学によつて渡りきろうとする三好の立場があつた。自ら「夢想の域にとどまる作家研究のための方法」と呼ばなければならない所以である。しかし、「夢想」と自ら呼ぼうとそこはやはり研究の急所、アポリアは読書主体と対象の文章、ロラン・バルトの「作者の死」「作品からテキストへ」にあつた。これが蓮實重彦との最後の対談で露出するかに見えて、矛盾は露わにならなかつた。三好は蓮實に「作者」は死なないことを容認させたのである。何故曲がりなりにもそんなことが可能だつたのか。

三好は「作品を統括している作者」が「実生活との非常に細い

糸、つまり作者の肉体」と連結していると説き、「作者の意図を超えたところで書く体験が逆流することによって作品が変貌していく」可能性、「作品論」から「作家論」への細い通路の可能性を語った。「作品」の文章は読み手に読まれて文学（コンテキスト）が現象するのだから、これはへ元の文章へ、作家や作品という実体に還元できない。「作家」と読み手の文章に実体的な通路はないと私も考える。その意味でなら確かに逆流などあり得ない。「作者」は死ぬ。だが、読み手に文学作品の文章そのものではないが、その「影」は現象する。細い逆流があり得る根拠はここにある。とすれば、三好行雄の方法はその実体性（容認可能な複数性）を残している限り、一旦は批判、否定され、「還元不可能な複数性」に読み変えられなければならないが、それを条件に、その復活と再生が求められると私は考えている。

小森 陽一 著

『歴史認識と小説 大江健三郎論』

石 橋 紀 俊

本書はいわゆる文学研究の書でもなければ、文芸批評というべきものでもない。「大江健三郎の小説とエッセイを読みなおし、私自身この国の近代から現代にいたる歴史認識を批判的に検証しなおす」「必然」(あとがき)をになった本書は、「新^{ネウ}・ナ^ナ・シ^シ・ヨ^ヨ・ナ^ナ・リ^リ・ズ^ズム」「新しい歴史教科書をつくる会」に対して、その歴史認識を「再審」しようとする。ただし本書の倫理の核心は、むしろ著者自身に向けられている。

本書は『取り替え子チェンジリング』の千樫やW・ペンヤミンを方法的な視座としながら、大江文学の「全体」を「星座」のように読もうとする。一つのテキスト、その細部は、「星座」をおりなす光源として見えてくる。

本書全体の見取り図を与えてくれるのが、第一章で論じられる『取り替え子チェンジリング』である。テキストに記された固有

名、書名、出来事の巧みならずされ方は、読者に現実世界への還元を誘う。しかし本書はそれを現実世界との一対一対応において読むのではなく、大江文学の「全体」に開かれた「一つ一つの痕跡として」読もうとする。例えば実名で引用された「丸山眞男」の出典探しは、テキスト生成の過程で分散された同じでありつつ異なる丸山眞男の複数のテキストを呼び込むことになる。何の変形も被っていないがゆえに現実世界を直接指示するかのようなその固有名こそが、実は千樫が示唆する「ズレをふくんだ繰り返し」を端的に示す仕掛けであり、同時に大江文学の「全体」を常に照らす光源の一つとして発光しはじめる。

著者は「読者の現在の読書行為をとおして」「それぞれの小説の世界に閉じたのではない、その間の闇の「座」を、その都度組み替えながら、新たな「星座」を見いだす」ことで、大江文学の「全

「体」を歴史へと刺激的に接続していく。ただし本書が指向する「全体」は単一で強固な構築物ではあり得ない。それが「星座」というメタファーで言い換えられるのは、「その間の闇の「座」」を見ようとしているからにはかならない。光源を見るためには、それを可能にする「闇」を見なければならぬ。「闇」に鈍感な全体化は、たしかに「自潰」的ではあり得ないだろう。

本書が投げかける歴史認識とは何か。第二章で『万延元年のフットボール』を解説しながら、著者自らが近代の歴史に亀裂を差し入れ、揺るがしていく行為において指し示されるのは、その複数性である。「歴史」が「定型化」される過程で「複数の声の抗争は消し去られ、安定した一つの声が響くだけとなる」がゆえに、「複数の声の抗争」をあらためて回復することが要請される。それは「その出来事に当事者としてかわった人の数だけ、その出来事に対する解釈、すなわち言葉による記憶の語り方が違ってくる」ことによる「論理的」な必然であるとともに、歴史に向きあう倫理的な実践である。

それはまた、歴史が「暴力」の歴史であり、その隠蔽の「野蠻」な歴史であることを照らし出す行為でもある。第三章で取りあげられる『同時代ゲーム』は、「六通の手紙をとおして「壊す人」の事跡が、読者にまで伝承される、という複数の再話過程と情報伝達回路、そしてそれに伴う時差を内在させたテキスト」としてある。そのとき読者に課せられるのは、無数にあり得た手紙の紛失や誤配の可能性に開かれ、「配達されなかつた数多くの手紙への想像力を延

ばしていく」ことによって、単一の伝達経路のもとで抑圧された「暴力」の歴史に立ちあうことである。

第四章で扱われる『懐かしい年への手紙』のなかで、ギー兄さんはむしろ「暴力」の隠蔽に荷担してしまう。ギー兄さんが通訳として進駐軍と村とを巧みに媒介する過程で隠蔽されるのは「被差別部落」の歴史であり声である。このことよつてのみ「ギー兄さんは、この村の起源を正しく」（傍点本書）伝達し、「谷間」と「在」の神話と歴史に根ざした「存在として特別な位置を占めていく。ギー兄さんが『個人的な体験』の結末に善意で引いた抹消線は、テキストに加えられた「禍々しい暴力の「傷跡」」を示す光源であることとを免れない。

『万延元年のフットボール』で鷹四の犯した殺人は、ギー兄さんの犯した殺人として反復される。その殺人が事故であつたかのように語るギー兄さんは、鷹四の殺人に対する蜜三郎の解釈をも反復する。本書が重視するのは、事故の原因を蜜三郎が「なにことがおこり」としか語っていない点であり、その空白をもギー兄さんが反復していることだ。このとき耳を傾けるべきなのは、「罪を悔い改めようとする者の倫理的眞摯さ」を示すかのようなギー兄さんの告白ではなく、「この娘さんの側から、考えずにはいられないわ。事故であれ殺人であれ」と語る僕ⅡKちゃんの妻の言葉である。ギー兄さんの告白が「問題の核心が、事後にずらされたことにすぎない」のであるならば、ギー兄さんは妻の言葉からあらためて「再審」にかけられなければならない。僕ⅡKちゃん、テキストの作者

もまたこの「再審」を免れることはできない。「歴史を認識する」ということは、常に「再審」であり、いまここにおける自らの責任における「審判」を下すこと」であるからだ。

しかしその告発が「小説内部の必然性として説得力を持たない」ことによるならば、論理的な整合性にとられるあまり、本書は自らを死角に追いやってしまっているように思える。事故だったしながら、「倒れたあの人を車に担ぎこんで、谷間の病院まで運びおろせばね、死んだと思いきんでいたのが助かりえたのじゃないか？」と自問し、「アッ！」と叫ぶしかないギー兄さんは、おそらくこのテキストのなかで「自らの責任における「審判」を下」している。ここでギー兄さんが「アッ」と叫ばなければならぬのは、その「審判」が既に遅すぎるからだ。その賸いようなない無限の時差タイムギャップこそ「愕然」とするしかない。この点でギー兄さんの告白は根源的であるようにさえ思える。逆に鷹四の告白に対する蜜三郎の解釈が根源的であり得ないのは、論理的な空白を抱えているからではなく、鷹四の告白の取り返しのつかなさ「愕然」とすることを回避するための解釈だからではないか。

『懐かしい年への手紙』の僕ⅡKちゃんが「政治少年死す」を書かれなくてもよかった小説、別様の書き方があったかもしれない小説として自省することに対して、本書はそれが必然的に書かれるべき小説であったと断言するだろう。しかし『政治少年死す』を自省する僕ⅡKちゃんは、それを書きなおすには既に決定的に遅すぎることに、ましてやそれが書かれなかったことなど不可能であることに

「愕然」としているように思える。

本書は「中学と高校における歴史教育しか受けていない、産まれたばかりの大江小説の新しい読者」を教導しながら、その単一の歴史観を揺さぶり、彼女、彼らをしぼしば「愕然」とせざるを得ない歴史の局面に立ちあわせる。歴史の前で「愕然」とすること、このことこそ本書の歴史認識を支える倫理の核心であるように思える。ただし何よりも「愕然」とするべきなのは、歴史とは、常に取り返しのつかない「廃墟」でしかないということではないか。そのことに「愕然」としない歴史は、あり得たであろう歴史を素通りし、歴史から取り返すべきものを見失う。それを取り返すことができるのは未来であるほかないが、歴史の前で「愕然」とする経験を内包しない未来は、真になにもものをも取り返さない。本書の問いもおそらくこのことから始動している。

本書に登場する「産まれたばかりの大江小説の新しい読者」が「小説を読む専門家」である著者自身であること、また、大江文学の読者にとって「産まれる」ことが単なるメタファーではあり得ないことに著者は自覚的であるはずだ。歴史を認識するということは、同一化することによって死者、他者を生き延びさせることではなく、その生、死の取り返しのつかなさをおの私においてあらためて生き直すことであるだろう。私たちは、常に誰かの生まれ替わりとして、この私を歴史という「星座」に連ねている。



宮野 光男 著

『有島武郎の詩と詩論』

本書は、有島の「詩への逸脱」をめぐる論考、および、『有島武郎著作集』とワルト・ホイットマンの詩とをエピグラフとの関連から考察した論考を中心にしてまとめられている。よく知られているように、有島とホイットマンとの関連は大変深く、『著作集』に付せられたエピグラフにはホイットマン詩が選ばれていた。本書の中心をなす考察は、一連の論考として、実に粘り強く考えつづけられ、そのほとんどが梅光女学院大学「日本文学研究」に発表されてきた。著者が『有島武郎の文学』を昭和四十九年六月に上梓してはどなくの頃の論から平成十年に書かれている論（この論が最終章に置かれている）まで、持続された問いかけがほぼ発表順に並べられて一冊となった。このことを著者とともに喜びたい。

長い年月にわたって書かれた論文を一冊にまとめた場合、たとえ一貫したテーマの下に集められていても、文学研究方法における状

況変化の跡をたどることにもなっていることがある。本書にもそれを感じさせる点がないが、些少であって、むしろ、揺ぎ無く一つの方法が持続されたという印象が強い。実に粘り強くとは、この、一貫したアプローチのあり方に対してのことでもある。

この一貫性は、序章を含む全四章の構成にまず示されていることが開巻してすぐわかる。有島が晩年に「詩への逸脱」というエッセイを書いたこと、八篇の詩からなる『瞳なき目』があることなどを序章の入り口として置き、有島の生涯にわたる詩への傾倒を日記や書簡なども含めて丹念に追う第一、二章、『著作集』とエピグラフとの関連を中心にした第三章、そして新たな可能性を求める最終章という構成は、第三章が質量ともに重いことと相俟って、この印象を強くする。三章の論を読み進めるにつれ、この印象は、時に若干の揺れを感じさせることがあっても、強まっていく。

佐々木 さよ

その第三章であるが、なぜその詩が選ばれているのかということ、宮野氏は次の三点から見ようとしているようだ。まず、「彼自身」の作品のテーマ理解にひとつの示唆を与えている」（第二章）と、次に『著作集』が「非常に意識的な編集意図に支えられた試みであること」を「証明するひとつの方法」（第三章）であること、三点目として、有島の精神構造解明のため、有島の精神史における詩を位置付けるためである。この三点は連続的相互関連性を持って、二点目が他の二点をつなぐと理解することができようが、宮野氏は三点を等価としているのだろうか。そうすると、一点目はやや物足りない感がしないでもない。精神構造解明のために二点目があることに關していえば、初出時の精神のありようよりも、『著作集』に編集する時の意図を重視することであり、異論をはさむ向きがあるかもしれない。全体としてみるならば三点目にこそ宮野氏における有島に対する関心のありかがあるようだ。「著作集」には評論も入れられているから、当然ながら評論作品もエピグラフとの関連で論じられる。四節を与えられている『惜みなく愛は奪ふ』のみならず、有島の評論の「テーマ理解」のためにエピグラフの詩の解釈と位置付けがあるようだ。したがって、エピグラフと小説作品あるいはホイトマンと有島の小説との関連の解明に多くを期待して本書を手にするべきではなからう。本書は、有島の精神構造の変遷において詩とは何であったのか、有島の精神史に果たした詩の役割とは何であったのかということ、宮野氏自身によるホイトマン理解も交えつつ説明しようとしたと言えるであろう。

つまり、書名は『有島武郎の詩と詩論』であるが、「有島武郎における詩と詩論」あるいは「有島武郎にとって詩とは何であるか」を論じている。そしてそれは、「神」と「文学」と「革命」とを詩に結び付けて論じる第三章後半以降に至って熱気を帯びる。エピグラフに注目することは個々にはなされてきたし、その必要性を多くが認めていたが、最も集中的に取り組んできたといえは宮野氏の名がすぐにも思い浮かぶ。また、有島はその生涯の大半をホイトマンの詩とともに送ったといっても過言ではないくらいであるから、ホイトマンとの関連を論じた者も多い。その中であって、特に「神」信仰との関連を丹念に追っていることを本書の特徴としてあげておきたい。

有島における「神」と詩との関連を、宮野氏は次のように推測している。「神の愛への期待が消滅」した有島であるが、「ひとつの可能性として、ホイトマン詩をエピグラフとして採用したことのなかに、匿名化された神への期待というかたちで顕れている」、「神の内化ということ」をいい（第二章）、最終章では、有島が死をもって生を表現しようと試みたことは「自爆的行為の敢行」か、あるいは「神もしくは神に変わるものへの信仰のようなものを持つ」としていたことになるとし、それは「あえていえば詩信仰という形」で表されようとしていたとする。また、有島には「文学固有の場」への回帰（第三章）の可能性、期待があったとする。「文学固有の場」とは「詩もしくは詩人性の成立する場（同）である。詩もしくは詩人性への期待が「神」と結びつくと、それは「詩信仰」

という結論になる。

「匿名化された神」「神の内化」については、わかりにくいところが残ったが、この「詩信仰」、詩が新たな「神」であって、詩に絶対的帰依をすること、晩年の有島がそうであろうとしたという結論にはおおむね賛同したい。キリスト教の「神」から「詩信仰」へ、詩による救済へという流れを見るとらえかたである。

有島の詩「瞳なき目」には、「可憐な小さい一つの瞳が、／燃えかすれゆく隕石のやうに、／瞳のない目の灰色の面に吸ひこまれる。」という一節がある。結びは、「せめては叫べ、ひと声。瞳よ。」であった。本書は、有島のこの言葉を引用しつつ閉じられている。宮野氏自身が述べているように、『瞳なき目』そのものの作品分析が本書にはないので、絶叫への期待ともいべきこの一節がどのように読み解かれるのかは推測するしかないのだが、女性観との関連において、氏は読もうとしているようである。この推測があったついでとすればではあるが、そうした方向性を否定するものではないものの、精神史あるいは精神構造を詩への傾斜から解こうとし、「詩信仰」ともいべき詩に対する信仰のようなものを有島が持とうとしていたと指摘する氏には、「叫べ、ひと声」という絶叫の形をとることの意味を解く方向をも視野にあることを期待したい。宮野氏が提示している方向には、おそらく『或る女』結末の葉子の絶叫があるのだろう。しかし、本書を読み進めて、勝手なことと知りつつ期待したいのは、絶叫という行為、あるいは形式をとる必然性と詩表現との関連性を解明してもらえたらということである。

先ほど「詩信仰」という結論におおむね賛同するとしたが、ここに至るまでの展開がもう少し整理されていたらと思う。つまり、第三章の中ほどを過ぎるまで、全体像のラインを掴みにくいのである。方法としてエビグラフに関心を向ける必要性が最初に示されているにもかかわらずである。しかし、本書では個々の作品の分析もなされているうえに、精神史とエビグラフとの関連は『著作集』刊行順に追わざるをえなくもあるから、蛇行せずに結論にたどり着くのは誰であつても困難である。また、個別的な下位のテーマとして論及されたもの、たとえば、神秘主義や美術の問題、象徴や「暗示」、「海」や「道」などと詩との関連を論じた部分は、その部分を読んでいる間は当然のことながら、「詩信仰」との関連不分明のままであるが、しかし興味深く読んだだけに、大きなまとまりのもとで論じてもらえるとありがたかった。

最後に、読了後の心に去来したことを記しておきたい。宮野氏によると、有島は死の優位性を強調することによって生の逆説的認識をした。この論理構造の今日における意味についてが一つ。いま一つは、「文学という神」への「信仰」について。有島はそこに生きること活路を求めざるをえなかったと宮野氏はしている。それが「回帰」といえるのかどうか、あるいは「回帰願望」なのかは議論のあるところだろうが、この「神」についてもやはり今日の状況との関連に考えが及んでいった。

大塚 美保 著

『鷗外を読み拓く』

青 田 寿 美

本書を繙くとき、目次に列挙されたタイトル群がまず人目を惹きつける。I章を例にとれば、1、2節に分けた上で1・1・1・1・4、2・1・2・6に細分化された項目が立てられ、各々の内容を端的に示すタイトルが付されている。一見煩瑣にみえるこれらの細目と標題が、実は、各項で扱う問題を重点化し、多角的な視座を統括する行論に基づく連立であることは、本書を読み進めるに従って明らかとなる。それはまた、〈本稿〇〇参照〉〈本書〇〇参照〉等、随所に参照コードが張り巡らされていることも無縁ではないだろう。一つの論稿を、そして一書全体を有機的に統御する大塚氏の炯眼と論証力を改めて実感した。

既発表論文をへいずれも大幅に加筆修正した（あとがき）本書は、二部構成をとる。以下、目次から章題のみ抜粋した後、第一部を中心に内容紹介をおこないつつ、卑見を述べてみたい。

第一部……I「普請中」——序論にかえて——/II「うたかたの記」——ロマン主義的芸術家小説——/III「生田川」——鷗外と唯識思想——/IV「半日」——〈近代〉のざわめく周縁——/V「金毘羅」——虚構の方法——/VI「魔睡」——催眠術下の〈姦通〉——

第二部……VII「罌粟、人糞」——誰がレイプしたのか——/VIII「Eindrickel」——二人の師、コッホとペッテンコーファー——/IX「没理想論争」——現代思想を視座として——/X 松本清張「或る「小倉日記」伝」——〈作者の意図〉を越えて——

I章は、〈記号学〉に立脚し、現在の稿者の研究スタンスをほぼ完全に反映しているため、「序論にかえて」という副題をつけて巻頭に据えた」という著者の言に違わず、白眉の論稿である。章の前半でまず、ウンベルト・エーコの用語に倣い〈モデル作者〉（テキスト

から導き出される仮説的・抽象的（作者）と（経験的作者）（テクストを生成した現実的存在としての作者）が区別され、次いで、（意味の複数性）を重視し（適切かつ十分な同位体の抽出）によってテクストを解説するというスタンスが示される。その前提のもと、（既成の鵡外像のもつとも強い磁力下に読まれてきた）『普請中』を取り上げ、（モデル作者）の領域を腑分けしていく。さらに、『普請中』に描かれたトポスを「築地」「ホテル」という二重の意味での（境界領域）としてのウォーターフロントと見、それと（同位体）を形成する要素を渡辺と「女」のやりとりから析出した上で、近代日本／男女関係というトピックからなる（二つの意味の系列が相互補強的）に併存する（外交交渉）の物語と定位する。

Ⅱ章は、ロオレイの持つ（誘惑するエロティックで危険な女性性の象徴／ロマン主義的な無限と憧憬の象徴）という両義性をハイネの詩集等から掘り起こし、「ドイツ土着の神々やギリシャ神話が支配する層」（田中実）の解明を目指したものの、（表層的な物語と「相補的」な関係に立つ深層の物語）を照射することにより、ロマン主義的な構図において展開される芸術家小説として『うたかたの記』を位置づけている。

鵡外的美術評論と『うたかたの記』との相関を考察の補助線とするⅡ章同様、Ⅲ章でも、鵡外と仏教の関係、小倉時代の唯識研究から説き起こし、『生田川』論への架橋が果たされている。唯識思想とハルトマン美学がともに（芸術創造の原理を無意識的なものに見出す点）で類縁関係にあることを指摘し、さらにメーテルランクと

も（神秘的な最高智の源泉を無意識的なものに置く点）において鵡外の中で交差したと論じる。その上で、鵡外が唯識研究のテクストとした『成唯識論』を参照しつつ『生田川』における頌を読み解き、結末の蘆屋処女のゆくえを、唯識の悟りを帯びた（出離）として捉え直している。

Ⅳ章は、従来の『半日』研究が見過ぎてきた「奥さん」の古さ、前近代性に照明をあてることで、近世と地続きの古い「迷信」と新しい家庭観とを混和させた存在として「奥さん」を捉える。高山博士及び高山家の行動規範に明治国家の（近代）を透視する一方、「奥さん」の新旧思想いずれもが、博士の「秩序」への批判であるのみならず、明治国家の（近代）に対する反体制的な（ざわめき）としても見出されている。ただ、本章前半で、（意志と判断を持った人格的な語り手）による（情報の質・量をコントロールしようとする戦略的志向）を指摘しながら、語りの（戦略）が、後半のテクスト分析に生かし切れていない憾みも残される。

その意味で、同じ（人格的な語り手）が採用された『金毘羅』『魔睡』を扱うⅤ・Ⅵ章は、（据わりのよさ）を感じさせる論稿である。

Ⅴ章。リアリズムの中に（反科学・非合理）の（神秘）を接続させるテクストの構造を解きほぐし、併せて、新ロマン主義の価値観——リアリズムの中に神秘性を象徴的に表現する——の投影をみる。そのことは、（科学と反科学の境界領域）にあつて（両者の調停または連結の道を模索する）存在たらんことを、「哲学者」であ

る小野博士に求める語りの方法とも重ねて論じられる。これらへ虚構の方法の解明によつて、テクストから仮説的に得られるのが「モデル作者」であり、従つて「作者の意図」も仮説として導き出されるものであることを提言している。

Ⅶ章。「既成制度の根柢の自明性を疑う」というテクストの構造を炙り出し、へ相反する複数の見解を並列的に提示し「論理的脈絡を曖昧化」することで読者を誘ひ込む語りの戦略を明らかにする。また、結末部で語り手によつて示される「道化役タントリス」へのテクスト間相互関連性^{インターテクスチュアリティ}の検討を通して、テクストの余白へと読者を導いていくへ過激なテクスト戦略^{テクスト戦略}を読み取つてゐる。

ここで、「底がはいつてゐる」の解釈(Ⅶ章二〇六頁)に関して異論を一つ。へ既婚女性の生殖器は「底がはいつてゐる」、すなわち夫との性経験がすでにあるため、未婚の「処女」と違い「私通」の痕跡を確認できない」と述べるが、へ底が入る」は、処女膜喪失を含む性交の履歴をいうのではおそらくない。「腹に八月のそこだめ」(近松門左衛門「大職冠」)の用例からも、「底」に胎児が「はいつてゐる」状態と考えられる。「底がはいつてゐるから好いと思ひました」という「賤しい男」のことは、姦通の結果としての妊娠が回避される点において、子を孕んだ女性を都合のよい「器」と見るものであり、それに対する博士の反応——「覚えず独で吹き出したが、忽ち顔を蹙めて」に、男性／夫という二つの面貌が示唆されるのではないか。

「注釈的研究」(はじめに)とされる第二部に関しては、注釈作

業の緻密さの点で、Ⅶ章を興味深く読んだ。「うた日記」所収「罌粟、人糞」に詠まれた「紐は黄袴朱」が、日本陸軍の軍服を指し示すへ記号」であり、当時の戦況からも裏付けられる旨、同時代資料の博捜によつて明らかめ、ロシア兵をレイプ犯とする定説を覆す。

それに比べ、Ⅰ章で、へテクスト生成当時のコードを再編成するへ意図のもと、長谷川堯「日本ホテル物語」の援用のみで「ホテル」の「属性」を規定するのは物足りない。「築地」はどうか。かつて外国人居留地であったへウオーターフロント」の様相は、テクストに描かれた「海軍参考館」から窺えるものの、渡辺が「歌舞伎座の前で電車を降り」、「役所帰りらしい洋服の男」や「お茶屋の姉えさんらしいの」とすれ違う冒頭の描写の意味は汲み取れていない。「精養軒ホテル」から川向こうに見える「待合か何か」の影も併せ、輻輳するトポスとして捉える視線も有効ではないか。例えば、鷗外の言説をへ経験的作者」のそれとしてではなく、作中人物と同時代人による言説として比較(Ⅳ章一四〇頁参照)するならば、次のような、鷗外日記にみえる「築地精養軒」の「属性」は如何。明治末頃は「赤十字社の宴」「陸軍省の忘年会」「三田文学会」や大臣等の催す宴会の場、大正以降には、長女茉莉・他数件の「婚姻披露」の会場としても記されている。Ⅶ章に準拠する文化的コードの導入が望まれる。

以上を、テクスト分析の前提となるへ作者」概念に則して眺めれば、「経験的作者」とへモデル作者」を一体化させて捉えたⅡ・Ⅲ、「モデル作者」に重点をおくⅠ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵに二分される。その点

を含め、へ各論稿の方法上の不統一性へ(はじめに)と述べているが、テキストの読みの可能性と読むための方法とを、ともにへ拓くための『柔軟性』と、あえて換言したい。

(二〇〇二年八月八日 朝文社 三〇九頁 本体三〇〇〇円)

永瀨 朋枝 著

『北村透谷——「文学」・恋愛・キリスト教』

清水 均

永瀨朋枝氏は「北村透谷研究会」においては中心的存在であり、またその論は既に「秀抜」(楳林混二氏「日本文学研究大成 北村透谷」・解説)という評価を得ており、若くしてその著作が待望されていた人である。本書は、書き下ろしの「序章」と「終章」を除けば、一九九一年から二〇〇一年にかけて発表された論文が収録されているが、私自身の論点と重なるところが多々あり、かつ私には到底かなわない「新しい資料の渉獵」という氏の大きな研究的美質がいたるところに発揮されていて、その論証ひとつひとつに納得させられてしまったというのが本当のところである。しかし、その一方でいくつかの疑問を持ったことも事実なので、以下それをふまえて本書についていささか述べてみたい。

本書における永瀨氏のモチーフ、というよりも、氏の「透谷を論じる行為」を駆り立てているもののひとつが、「透谷に貼られた

レッテルを剥がすこと、そしてそのことよってこれまで「見えにく」かった透谷像を明らかにし、ひいては「日本近代文学史、さらには『近代』を捉え直す」ことにあることは、たびたび使われる「指摘されたことはないが」というフレーズ、あるいはそれに類する「着目されてこなかったが」「あまり注目されてこなかったが」と言ったような言葉に端的に表れていると思う。言ってみれば「透谷に関する通説、定説に属する言説」を覆すということである。勿論その場合肝心なのは、レッテルを剥がすことで新たな何を見出すかということであり、氏が望むと望まないとに関わらず、そこで見出されたことがいかなる新たなレッテルになりうるかということであろう。その際、そうした「新たな発見」に到る過程において、剥がすべくレッテルが「目立つ論文」を中心にしてしまいそれ以外の研究史を取り落とす危険性があるということは注意すべきで

あろうし、同時に、〈仮想敵〉として設定されているレットテルが現在〈仮想敵〉として有効だろうかということを考えて、本書の〈レットテル剥がし〉が逆に氏の論の水位を多少低める印象（実際は新たな優れた考察を提示しているのにも関わらず）を与えてしまった感のあることは氏のために勿体無いことであろうと思う。無論、氏が目配りのきく人であることは言うまでもない。しかしながら、〈剥がすべくレットテル〉が、例えば透谷におけるキリスト教を論じる際に笹淵友一氏の論考をもつて代表させ、「クエーカーリズムに合わないところには東洋神祕主義思想というレットテルをはるといふ態度に終始しては、人の思想に踏み込めないのではないか。」と批判することは、今の時点でどれほど有効なのだろうか。問題は既にその先であつて、例えば氏も引用しているように「キリスト教的の神論から汎神論へという単一な構図が安易に語られるべきではあるまい」（佐藤泰正氏）という指摘の上に立つて、では何が語れるかを提示することではないか。実際、氏は見事に〈その先〉を示しているのであつて、だからこそ同様に〈その先〉を提示した他の研究者の論の中でいかにそれが際立っているかということこそが計られるべきではないか。

またその一方で、「透谷は『軟文学』を代弁したのか」を論ずる際に、氏が「『軟文学』すなわち紅葉らの文学を『代弁』したという文学史の通説」と言う時、例えば北川透氏の「山路愛山の文章事業説とは、反動をして反動を起さした単なる硯友社文学の反対物に過ぎぬのではないかというのであろう。」「総じて、透谷の同時代

文学への対し方は否定的であつて、愛山批判のなかにはそれらを擁護するモティーフはない。（中略）反動から反動へ漂う両者がみかけの硬軟に反して、同根のものとして透谷の眼に写らなかつたといへまい」という指摘をどう考えるのかということが語られない。永渕氏の論自身が説得力をもつことは確かなのである。しかしながら、レットテルを強調するために、レットテルそれ自体の有効性や、「通説」「定説」をどこに設定するかということが逆に問われてしまふことになつていのではないかと思う。少々批判めいたことを書いてしまつたが、実はこれも、「現実世界と文学」「宗教と文学」「文学史や『文学』の再検討」といった「問題」に関わろうとする氏の壮大なる視点においては卑小な問題なのかもしれない。

さて、本書は「序章」「第一部 透谷の『恋愛』論とそのゆくえ——透谷から藤村へ——」「第二部 文学史の再検討——透谷と民友社——」「第三部 『文学』の創造——キリスト教と文学——」「終章」という構成からなつていゝ。氏も書いているように透谷の評論を「文学論」「恋愛論」「キリスト教」の面から研究したものであるが、それぞれの面が「密接につながっている」がゆゑに、論じられた各部も密接に結びつくものとなつていゝ。そして、その結果、先にも触れたようにこの書の総体としては、「政治さらには現実社会と文学とはいかに関わるのか、宗教と文学とはいかに関わるのか」、「日本近代文学史の創成期から自然主義への移行の意味」を問うものとなつており、ひいてはそのように「問い直す」ことが「これからの新しい『文学』を創造するための困難のありどころを

教え、突破口を指し示す」ことになるという、言わば「現代における北村透谷のアクチュアリティー」を示すことが目指されているといえる。

そういった意味では、私個人としては第一部と第三部の内容が特に興味深かったし大変感銘を受けた。第一部の第一章「厭世詩家と女性」論——美那子体験の意味——は、透谷の言説を美那子側の資料をも合わせて見ることによって、二人の恋愛、結婚を捉え直したものである。近年は美那子側の資料を重視することでの透谷の読み直しが行われるようになったが、そうした方向性をもたらしたものととして、ほかならぬ氏のこの論（一九九四年八月初出）が果たした役割は小さくない。この中では透谷が「実在の美那子とずれたところにある架空の『美那子』を見ていた」とし、有名な「花巻よりの書簡」に対し、「そればかりではなかったはずの美那子の不満を生活上の不满に集約し、美那子に、自らがめざす文学の本質を理解する詩人の妻たれと訴えていた。」との解釈を与え、その視点で『厭世詩家と女性』を読んでいる点が重要であろう。書簡において「詩人の妻としての理想像」を押し付けていた透谷のあり方は、例の高村光太郎の、妻智恵子に対するそれに近いものを感じ、また、光太郎が妻を狂気に追い込んだのに対して、押し付けていた側の透谷が狂気に陥ってしまったという対照性を感じられて面白いが、それはそれとして、そうした指摘をしている氏がジェンダー論を展開するのではなく、『厭世詩家と女性』の読みにおいて、『厭世詩家と女性』の『恋愛』には『近代の男女の対関係への要求が脆弱』と

現代の『恋愛』観から批判するのではなく」という立場をとっているとこれは氏の特徴をよく表しているだろう。ただ、これに続く「反対に『恋愛』は『対関係』『対幻想』でなければならぬのだろうか」と現代の『恋愛』観をゆるがすものとして、透谷の論を捉えることはできないのだろうか。」という部分は、透谷のアクチュアリティーを考える上では、このように「注」に控えめに書くのではなく、本文中に更に「どのようにゆるがす」のかを論じてほしかった、というのは私のないものねだりであろうか。

第二、三章は、そうした透谷の恋愛観のゆくえを「藤村という切り口から再考」し、「透谷から藤村へ」というテーマを捉え直したものであるが、ここでの『恋愛』の高い価値を説いた、透谷の前半の評論から力点を移動させている」という指摘は極めて重要で私も同感である。それは、藤村が透谷から何を「受容しよう（するまい）」としたかということ、そして結果的に藤村が透谷を「踏み越えた」ことを示すためであるばかりでなく、私個人としては、そうした藤村による「脱透谷」が行なわれる一方で、透谷自身の中にも「脱キリスト教」がなされていたのではないかと考えるからである。このことは第三部の内容とも関連するのだが、キリスト教会批判を展開する透谷には自らのキリスト教に対する自負があったとして、その自負を支えるものが、氏の強調する西洋文学ルートの『心』のキリスト教にあったとすれば、エマソンに傾倒していく透谷においてはそれは実際にはもはやキリスト教離れであったと言つてよいのではないかということである。無論そのことは氏

が論証した透谷の「理想の文学像」というものを貶めるものではない。むしろ、キリスト教をそのように消化した透谷だからこそ、氏の言う「他界から現実へ」という文学論を提示できたといえるのではないだろうか、ということである。

紙数が尽きた。いづれにせよ本書は、現代における北村透谷の「クチュアリティ」を問うことにおいて必読の書であり、それは氏の貼った（貼ってしまった）「他界から現実へ」という新たなレッテルにどう立ち向かうかという課題を我々につきつけているといえる。

（二〇〇二年八月二日 和泉書院 三三五頁 二八〇〇円）

槇林 滉二著

『槇林滉二著作集』 全三巻

平岡敏夫

槇林氏の著作集は第一巻が「北村透谷研究」、第二巻が「明治初期文学の展開」、第三巻が「日本近現代文学の展開」である。ダークブラウンの布クロスと貼函の最高ともいえる堅牢美麗な装幀で、ずしりと重い。第一巻の北村透谷研究を要として、第二巻で明治初期文学から民友社の文学に及び、第三巻で日本近現代文学の展開を、漱石、大正教養主義から昭和文学、戦後文学、そして井伏鱒二の文学へとたどって論及する。著者による日本近現代文学研究の総決算であり、他の多くの研究者の追隨を許さぬ独自の視点と領域を持つ。その奥には、研究とは何かの問いがつねに潜在しており、それは価値判断を避けないこととも関わっているが、相対思考、バランス思考がいつも働いていることも重なってくる。

第一巻の「北村透谷研究」は「絶対と相対との抗抵」と副題され

ているが、「あとがき」には、透谷の内裏に一つのものを追いつづける絶対志向と、それを根本的に問い直そうとする相対志向が同居しており、二つの「闘争」を、たんなる「闘争」ではなく、クラウゼッツの「戦論」の鷗外訳語「抗抵」を用いることで示そうとしたとある。著者はこれを透谷のバランス思考ともするが、さきに述べたこの著作集を貫くバランス思考は、透谷のそれと相関関係にあると考えられる。

第一巻は「透谷文学の位相——思想的見取り——」「透谷における思想の開展」「透谷文学の基底」「透谷における詩と小説」「透谷と古典」「透谷の文体」「透谷の文学的位置」の七章から成る。北村透谷研究として周到な構成である。第一章は「近代と反近代」「相対の思考」の二節より成るが、その書き出しに「かつて、小田切秀雄氏は、その師片岡良一氏が、北村透谷を『どう評価するかは、日

本の近代文学史叙述の試金石だね」と語つたと記す。つまり、透谷をどう扱うかで文学史の「性格や優劣」がわかると言うのである。

少し過大評価かなと思いつつも、やはり心に残る言葉である。」とある。周知のこの言葉は今日なお有効であり、この言葉で測られる卑近な例を見出すのも容易だが、著者榎林氏の独自のありようは、「少し過大評価かなと思いつつも」と記すところにある。これは著者の相対思考を示すもので、榎林氏の研究態度を象徴している。

「すこし過大評価かな」という表現は、三巻に類出する「そこいらに」といった表現とも応じており、対象を明示し、性急に断定するのは逆な思考と方法を示すものだ。では、あいまいかと言えば、これまた逆で、著者の相対思考は、透谷を相対化しつつ論理の糸にからめとり、価値判断を下そうとする「研究」のありようなのである。

著者は透谷三つの闘いとして、民権運動参加の体制変革、離脱して体制内で個内部の精神的な自立と解放としての体制内変革、「内部生命」を中核として体制内外の再チェックとしての体制外変革をあげている。色川・小田切の論点は第一の闘いに、その間の暗部解明に桶谷、笹淵は第二の闘いに、平岡は第二から第三の闘いの道程に、小田切・平岡論争は両者の論理・論拠のずれの上に云々と述べて、片岡の言に帰りつつ、「透谷を炙りだすはずのものが多々自らを語ることもなかった。そしてそこにこそむしろ逆に透谷の特質がある。こういった研究者や評家を他の日本の文学者はさほど持たぬはずである」と言う。

そして、この透谷三つの闘いは、日本近代文学史全般にも敷衍しうる大きさを持つと言えば少し事を広げすぎたと言われようか。政治と文学、文学と宗教、文学と美、国家と文学、思想と文学そして文学と実存などとたどるなら、透谷の三つの闘いは、日本近代に深々とかわつてくる。一つの原水脈である。

右の一節にも「少し事を広げすぎたと言われようか」云々という相対化の意識がみられるが、著者の面目は、さらにこのあと、にもかかわらずそこには継承しうる世界が残つてもいたとして、「蓬萊曲」等にかかわる劇詩の世界、他界の追尋、内界の地獄を語る「我牢獄」の追求、「漫罵」にかかわる日本近代そのものの全像垂鉛、「透谷自死にかかわる国家と思想創造の問題等、すぐれて現代的な問題はそこから萌生するかもしれない」としているところにある。ここから著者の透谷研究は出発する。

第一章の第二節に「相対的思考」が用意され、透谷の発想法への言及がある。透谷には奇妙に醒めた所があり、鋭く尖った錐で中心部を深く抉りつつてゆくように見え、事実そのように言われてきたが、透谷の発想の恐ろしさは鋭利さのみにあるのではなく、むしろバランスの思考にあるのではないかと著者は言う。独創的な指摘で、著者のバランス思考が透谷にそれを見出したのか、透谷から学んだのか、いずれにせよこの二重のバランス思考は、従来の「私の透谷」を語るような地点を相対化しているのである。「元禄文学の精神構造に擬した紅露批判はあるが、その文飾について、短絡的な

攻撃を決して行っていない透谷を發見し、思わず驚きの声をあげるののである」という一節があるが、著者の相對思考には驚きの声をも含む価値判断がある。「内部の生命」追求による「唯心的な」内面重視を生涯を通じて主張した文学者とするのを奇妙な偏見だったとして「ここらあたりにも、バランスの思考の存在を認めたい」と言うのである。「理と哲理」「信と不信」のはざまを凄烈に走った人と透谷を見るのも同様である。

全三巻の大著の書評に与えられたスペースはあまりにも小さいものだが、第二章の歴史意識、人生相渉論争、「國民と思想」言及では、テーヌの種族が出てこない問題はあるものの、愛山評価での著者のバランス思考の説得性、「國民と思想」言及での資料の博搜、透谷と明治維新政府の國家論対比、スペンサー「進化論」との関わり等、すぐれた達成である。第三章での「内部生命論」言及は第一巻の圧巻と言うべく、とくにインスピレーションの推移を「基督教新聞」「六合雜誌」「真理」「日本評論」「福音新報」による一覽表で示していておどろく。「内部の生命」は「如何に考ふとも人間の自造的のものならざること」のくだりを海老名弾正と合わせ考えようとするのも著者独自の試みである。

第四章では、「蓬萊曲」が相對思考により、「透谷全像の見事な予見の書」として読み直され、抒情詩群は「内部生命論」表出の一過程として位置づけられ、「宿魂鏡」は川端、谷崎、島尾、安部公房などの早い試行とされる。第五章は漢学、とくに「莊子」「文選」言及は他の追隨を許さず、第六章では透谷文体に変則漢熟語中心、

漢熟語倒置多用、比喩、の三時代を見出しているところ、きわめて説得的。第七章は「文学界」検討のなかで透谷を位置づけて充分である。第二章以下、小走りになってしまったが、第一巻「北村透谷研究」こそは二重の相對思考による新たな透谷「研究」の出發なのである。

第二巻「明治初期文学の展開」には「後退戦の経絡」の副題がある。「一気なる近代化と総体なる後退の道行を見出す」（あとがき）ゆえんである。「明治初期文学提要」「民友社の文学」「明治・大正の思想と文学」の三部から成る。第一部は「明治初頭の文学」「一つの思想原型」「キリスト教の開示」「川上眉山の文学の位相」の三章立てである。戯作と「雪中梅」「花間鶯」頭注考、「西国立志編」言及の第一章では、頭注考という新視角にも注目すべきだが、「西国立志編」と新訳との比較は正直訳を際立たせて見事。第二章ではスペンサー受容の様相を六誌を中心にとどり、睽目するしかない。第三章の植村正久・小崎弘道追求、第四章の眉山研究も余人は及ばない。四章にわたる第二部の民友社言及がこれまた徹底していて、だが蘇峰、愛山、蘆花、小楠、象山をこれほどやれるか、小楠のワシントン、象山のナポレオンという対比など興が尽きない。第三部では、透谷と嘲風の対比が新鮮で、西田幾多郎、柳田国男、河上肇、丘浅次郎をはじめ、大正教養派にも寺田寅彦など新視点が多し。第二巻の広い領域にわたりつつ、資料の博搜に立つ徹底した実証ぶりは近代化の表面ではなく、まさに後退の経絡をたどって豊か

な内実を鮮明に示している。

第三卷「日本近現代文学の展開」には「志向と倫理」の副題がある。二部より成り、第一部「近・現代文学提要」は明治大正昭和そして現代に至る文学の中より志と倫とを追求する（あとがき）。第二部は「井伏鱒二の文学」。第一部は第一章で漱石「草枕」「行人」を論じ、第二章で大正教養主義の一系統として倉田百三と西田幾多郎、広津和郎、第三章で中島敦、その「弟子」、第四章で戦後文学、梅崎春生、その「桜島」、火野葦平、第五章で小島信夫、「天平の薨」、「夜と霧の隅で」、第六章は「文学と地方」、広島、佐賀の文学を論じ、近代文学に現れた方言を論じている。

「凡常の小説概念で読むなら、この作品は三つの欠陥をもつ」と「草枕」論を書き出し、その三つの欠陥がすなわち漱石のねらいであった、一種の文学変革を志した作品とわかるとしつづ、これまた鈴木三重吉宛の有名な書簡で一挙にほうむられる——こういう展開にも著者の相対思考が見てとれるが、一冊ともなるべき豊かな井伏鱒二研究にも、井伏にいずれにも偏せず己れを恃し続けた気配をみてとり、「日本近現代文学史の衝程としたら」と思う著者がいる。

著作品集全三巻、風邪の中であらためて読み続けた日々は、評者にとっても充実した時間であったことを記して小文を閉じたい。

(第一巻 二〇〇〇年五月二十五日 和泉書院 四四七頁 本体九〇〇〇円、

第二巻 二〇〇一年二月二十八日 四八八頁 本体九〇〇〇円、第三巻 二〇

〇二年八月二十五日 三七八頁 本体八〇〇〇円)

伊藤 氏貴 著

『告白の文学』 森鷗外から三島由紀夫まで

大久保 健 治

伊藤氏貴氏の『告白の文学』 森鷗外から三島由紀夫まで』は、
 〈告白〉の行為が、近代日本文学に「固有にして不可欠である」こ
 とを示した書である。鷗外『舞姫』から、藤村『破戒』、漱石
 『こころ』、秋声『仮装人物』、芥川『藪の中』、三島の『仮面の告
 白』までを時間軸とし、その中の作品が、それぞれの異なる〈告
 白〉を有していることを指摘する。〈告白〉の行為が「作品の生
 成」に「影響」を与えていることに注目して、「告白という行為そ
 のものの構造を炙りだ」していく。西洋的宗教概念である告白（＝
 懺悔）の意識を、そのまま当て嵌めることのできない日本的〈告
 白〉は、文学では「自己省察」を打ち明けるといった概念として提
 出されるしかない。氏の目論見は、西洋的告白の受容史を描き出す
 ことよりも、むしろ積極的に西洋と日本との告白概念に横たわる齟
 齬を作品解釈に使用することにある。だが、本書の射程は、〈告

白〉のコードを用いた作品解釈だけには止まらない。近代日本文学
 研究の準拠枠の二つ、つまり作家作品論とテクスト論とに対する本
 書の批判は、解釈基準をあくまで作品から導き出そうとする著者の
 独自の「作品論」によるものであり、文学研究史に対する問題
 提起の性質をも本書が併せ持つことを伝えている。

序章に於いては、従来の文学研究で、明確に定義されなかった
 「告白文学」について、新語に過ぎなかつた告白という語が文学に
 どのように採用されたかを時代文脈的に検証され、「文学の告白
 性」が「文学における自己省察」として把持する必要性が説かれ
 る。第一章『舞姫』——告白の誕生——ちなみに本書は終章に著者に
 よる各章の要約が付されている）では、告白の主体である者の自己言
 及が問われる。現在の視点から、往時の自己を認識し、自己収束を
 図ろうとすることから、「舞姫」は「我」の変遷の歴史、自己認

識の変遷の告白」とする結論が導き出される。第二章「二つの告白——藤村「破戒」をめぐって」では、現象学的他者像が問題となる。一般的な告白が、外部（社会）に対して行われたものであるのに対して、葛藤する相手が「内面」というもう一人の自分である丑松は、告白の相手を失うことにより、世間への告白へと論理飛躍を伴った行為をしてしまう。結束の丑松の行動は、作品の流れを損なうとも考えられるが、「語られる相手に応じて告白は恒に変容」するだけであり、「分裂した自己像を収束する」手段の一つとしての「告白」の一形態なのである。

第三章「告白する「こころ」——すれちがう告白」は、他の章が告白の「自己省察」の面からの考察であるのとは異なり、告白の行為を獲得する資格の問題を指摘する。「私」が先生との「精神的親戚」となる条件は、先生とKとが歩んだ道、つまり、告白する相手を「間違える」ことから生まれる「悲劇」を繰り返すことであつた。「私」は、本来静に語るべき事の真相を打ち明ける相手を、静以外の読者に求めた。これにより、「私」は告白の行為を獲得し、結果作品は告白を軸に循環構造を形成する。「自ら回収されている」として「いるかのような」のように、推測の表現の多用が表しているように、「自己省察」の面で「私」が意識的にこの図式に参入したかどうかは断定できない。「こころ」と他作品との比較が少ないのもあるいは作品を図式的に処理したことに理由が求められるかもしれない。

続く第四章「擬装する告白——『仮装人物』」、第五章「仮面」

の告白」では、告白文学中質的転換を遂げた二つの作品が比較対照されている。自らが「観客席からどう見えるか意識」できる人物が登場し、西洋の告白に含まれる「罪障感や赦しを希う気持ちがあまりに稀薄」な「告白」が語られる『仮装人物』には、苦悩することを表すといった意味での告白は存在しない。ここでの告白はむしろ、「作品に現実感を与える特殊な方策」として利用されている。

「私に見せるための仮面劇」が展開される『仮面の告白』では、語られる内容自体が、遅延され続ける。両作品共に、「告白をその手段」とすることに意識的であり、同時に「透明な告白、直線的な告白など不可能」であることを「告白」してもいる。第六章「藪の中の告白」は、これまでの論をまとめる為に配置され、言語学的他者像の問題と告白との間の接点を見出そうとする意図を見て取れる。

本書は、作品を細微に検証し、新たな作品解釈を導き出す。しかし、告白が「自己省察」を伴うことを論じる原論の部分と、個々の作品論と、必ずしも有機的に結びついていないことも指摘しておくねばならない。まず、告白を「自己省察」とする本書で扱われるのは、ジュネット（本書でも意識されている）の言う「視点」の問題に限定されている。往時を振り返る語り手と語られるものとを区別する際の、水準設定に関して、往時の自己の心情と語り手のそれを分ける保証が常に解釈者側の切り取り方に委ねられてしまっているのである。先に「こころ」論の本書での役割が明確ではないことを指摘した。「ずらされた告白は、連鎖して増殖」といった指摘は

興味深いのが、この発想が精神分析学を意識してのものかどうか判別しにくいのは、換喩に対する注目が無い為であろう。告白が手記を通じて示される場合本人の要求を越えた地点での、エクリチュールの問題が不問にされているのは、本書の批判の対象を、テクスト論に限ってしまい、ナラトロジーを「視点」の問題としてのみ処理した結果であろう。

この限定の問題は、作品論を強調するスタイルにも影響を与えている。その代表例として「われわれ」という特徴的な言葉を挙げる事ができる。恰も解釈共同体を構築することを意図するかのようなこの言葉は、従来の研究において作品論が存在していないことを訴える効果を持つ。確かに、作品論と銘打った論文の多くが作家作品論にすぎないことは事実だが、では作品論とは何かといった問いに答える理論的な構えは、手薄のように感じられる。作品論の必要を宣言することから、演繹的に告白文学を論証するのが本書の手続きだと言えよう。しかし、作品検証で採られている論法は、帰納法的な色合いが濃い。この論法上の矛盾は、作家の言説に対する論者の距離が一定でないことに起因するのではないか。「必要に応じた考察が作家の伝記資料に及ぶことはあっても、作家は出発点でもなければ終着点でもない」と断りを入れながら、各章には論証を保証づける為に作家の言説が導入され、また第六章、終章に作家芥川龍之介の告白に関する言説を、本書の位置を確認する為のまとめの言葉として使用されていることは、作家の言説の特権性を強調している、作品の自立性を印象づけることはない。氏の指摘するように、

作家作品論にも見解の相違は存在する。従来と見解が異なることを提出したとしても、本書の手続きは作家作品論への批判たりえるものではない。作家の言説に保証を求め作品を解釈すること、本書のように作品を作家の言説と併せて説明することとの間には、理論的な相違はない。両者の違いは、論述の順番の問題にすぎない。

告白から作品を解釈し直す氏の姿勢には賛同させられる部分が多く、作品分析の緻密さには魅力を感じさせられたが、先行する理論への批判に多くの紙幅を費やしながら、理論的に徹底した立場が打ち出されていないことには不満が残る。しかしながら、解釈基準が浮遊している現在の文学研究において、敢えて自らの解釈基準を宣言し、作品を一つの軸から捉えなおそうとする氏の態度には、ある潔さを感じられる。私は本書で扱われた作品を読み直し、新たな解釈の可能性を探ろうとする誘惑に強く駆られた。このこと一つを取っても、本書が挑発力を帯びた書物であることは疑えない。

(二〇〇二年八月三〇日 鳥影社 三三六頁 本体一八五〇円)



栗田 廣美 著

『死と飛躍・有島武郎の青春——〈優等生〉からの離脱——』

川 上 美 那 子

栗田氏は一九八九年『亡命・有島武郎——へどこでもない所へ』の「旅」を上梓している。この著書は有島武郎の在米時代を取り上げ、有島が生活した場所に氏自身が身を置いて、新しい資料を発掘、二〇世紀初頭のアメリカ社会の時空間を再現しつつ、有島という作家の生成に立ち会うというスリリングな書であった。

今回刊行された『死と飛躍・有島武郎の青春——〈優等生〉からの離脱』は、第一次札幌時代すなわち札幌農学校入学（一八九六）から渡米（一九〇三）までのまさに青春のただ中にある一人の青年が将来へ有島武郎という固有名を獲得してゆく基盤ともいえるべき観念の形成過程とその形を「観想録」と名づけられた日記をテクストとして読み込むことによつて解き明かそうと試みたものである。

方法的にみれば、前者が有島の生きた空間——いわば外延から考察されているに比して、きわめて私的な日記の緻密な読み込みと分

析によつて一人の青年の内部に深く立ち入り、細かな襞を掘り起こしてその観念体系の確立をたどっていくところ、対蹠的といえる。有島の渡米を「亡命」と名づけた根拠は、札幌農学校在学時代に培われた内部世界なしにはありえないのであつて、今回刊行された著書は、いわば栗田氏の有島論の第一部に当たるといえよう。

ところで、戦後、近代文学派によつて有島の再評価が始められて以来、この作家の特殊性でもあるが、精神史・思想的側面に研究が蓄積されてきた。それらはほぼ四つの点に集中している。①第一次・二次札幌時代②キリスト教からの離反と社会主義への開眼③大正生命主義の表れとされる「惜しみなく愛は奪う」④「宣言一つ」論争から農場解放にいたる晩年の問題である。

とりわけ札幌農学校在学時代を中心とする有島論の基調を形成しているのは、性格や資質の側面からの霊肉二元論と自殺未遂事件か

らキリスト教人信にいたる友人森本との関係における有島の受動性と思想的に脆弱であるという評価であり、この傾向はほぼ定説として現在も通用している。

栗田氏は「あとがき」で近年の有島研究が作品論なんかなく「或る女」論に集中し、一九七〇年代までに蓄積された精神史・思想史研究が閑却され、定説化した論を批判的に継承しつつ新たな視座を提起することが忘れられていると指摘しており、本書を有島精神史の新たな読み直しにしたいと述べているが、実に綿密に先行研究を検討、批判し、氏の論を組み立てている。

本書は先に述べたように、有島が十八歳で札幌農学校に入學し、キリスト教を受容し五年後に卒業、帰京して軍隊入営を体験してから渡米するまでの過程を扱っている。この過程を「一つの精神の革命の実現」と呼び、この「革命」によって生み出された精神構造が彼の全生涯を貫いて際立ってラディカルな近代文明批判者を生み出したといい、この精神革命の内実、それが如何なるエネルギーによって惹き起こされたか、革命の結果有島の世界はどう変容したのかと問題設定をし、性格や資質に還元することなく、有島の「精神の展開軸」を明らかにすることによって迫ろうとする。

従来から札幌時代の有島を「明治的近代のインサイダー」とする捉え方と「上流階級の生んだ鬼子」とする二つの捉え方があるが、栗田氏は「インサイダー」から「鬼子・異端者」へと転換する過程として札幌時代を見ていくことを基本として、なぜこうした転換が可能になったのか、その原動力を「インサイダーの優等生」であ

り、その「優等生性」を自己純化するエネルギーによってアウトサイダーへ転化していったとしてその過程を克明にたどることを本書の課題として冒頭に掲げている。この過程を、「虚構化」という概念を用い、「I章〈優等生〉からの脱却——〈虚構〉の準備過程 II章死と飛躍——〈虚構〉の成立過程 III章悪現実への宣戦——〈虚構的世界〉の確立」の三段階に分けてたどっている。

「虚構」「自己虚構化」あるいは「自己・世界虚構化」という用語は、本書のキーワードであり、方法的概念でもある。栗田氏はこの用語を「現実の対概念であり、自己や世界を見るときにそれを「ありのまま」の「実際」の姿では見ずに「別」の像を形成して自己投入することを意味している」と解説しているが、少々こなれにくい用語である。私なりに理解すれば、自己の生と世界との関係を根源的に意味づける内的観念体系とでもいうことであろうか。従来の有島精神史研究が〈作家〉有島武郎の資質や性格などの実体に囚われていた点を批判する概念として、フィクションとして純化していく観念のなかに〈作家〉有島を形成した特質を見出そうとしたといえようか。

栗田氏は、一八九七年に書き始められる「観想録」を一行一行の間を読み込むようにして分析、それらを先行文献の解釈とつき合わせながら有島の思念形成を跡付けていくが、中でも本書の圧巻ともいべきは、II章にあたる森本と有島の関係の把握、一八九九年冬のいわゆる「定山溪心中未遂事件」とキリスト教人信をめぐる解釈である。森本—有島の関係は、キリスト教受容にかかわる重要な

モメントであるが、有島自身の回想の重視もあり、同性愛をからめながら森本の強引な勧誘と有島の受動的な態度を見る観方が定説となってきた。この点について栗田氏は「一八九七年九月二三日日記」の読解によって、二人の関係は森本側の一方的なものではなく、対等な立場で「真理探究盟約」が成立していたという。有森本厚吉とは「有島が自らの思念を生活の中に外化し実現するための媒介」であり、「真理探究」に没頭できる空間を生み出す役割を果たしたのであり、いわば共同戦線だったと積極的に評価する。しかし、森本にはキリスト教という体系的なイデオロギーがあり、優位に立っていたことは否めない。ところが、森本自身の信仰が危機を迎えると有島は死を賭して忠告を試み、「一八九八・三・八日記」「与増山（森本の旧姓）厚吉書」が書かれる。こうして「死」のモメントが導入されてくるのであり、生の原理の追及としての観念の矛盾・動揺の中で「死」の導入によって新たな「飛躍」を遂げようとするその後の有島の思考サイクルの原型がここに見られるとしている。森本との関係においても、「死の盟約」を前提として「自己虚構化」しつつ、その頂点においてキリスト教受容を果たすのであって、かつして一方的な強要ではないと説いている。また森本―有島の関係について同性愛あるいはソドミズムを想定し、不可解な関係とされてきた点についても、栗田氏は、それらの見方を同性愛差別によるものとして、むしろ性的関係によって「真理探究同盟がエロスの実質を伴う濃密なもの」となり、有島の「自己と世界の虚構化」は深化したと積極的に評価する。

さらに、いわゆる「定山溪心中未遂事件」についても事件前後の「自殺日記」と称される長文の日記の構造を分析して、これが心中行ではないこと、舞台は必ずしも「定山溪」ではなく、有島は単独で「死」を決意し銃を入手、最後に別れのために森本を訪ね、森本が参加する羽目になってしまったという新しい事実を提示し、「森本への罪障感と死を賭しての見神」のための「心中行」という通説は日記を正確に読み解いていないためだと批判している。氏の「自殺未遂」をめぐる詳細な分析は説得力があり、たしかに有島は「死」を現前させていたと思わざるを得ない。この「死」に直面することで思想的に飛躍し、キリスト教を受容、新たな価値体系を獲得することになる。

有島のキリスト教受容が果たして信仰であったか否かについてはさまざま論があるところだが、栗田氏は、有島におけるキリスト教は現実に対抗するカウンター・イデオロギーであったとし、新たな世界像、すなわち「悪現実」を否定する「虚構的世界」の確立をここに見ている。

本書は、有島武郎の第一次札幌時代に関する研究の現時点における最も詳細にして綿密な検討の書であろう。また、多くの先行研究の摂取と批判の上に成り立っており論争的性格を持っている。冒頭に掲げられたエピソードにもうかがわれるように、論者自身の主体と一種の思い入れがこめられた独特なスタイルによって記述され、熟っぽい有島―栗田ワールドとでもいえる世界が現出しており、今日の研究状況の中では異色の書といえる。多くの批判された先行の

論者との間に改めてこの書の提出している問題についての論争が交わされることを期待したい。

(二〇〇二年九月五日 右文書院 四二頁 本体三八〇円)

非公開

非公開

非公開

非公開



澤 正宏 著

『西脇順二郎のモダニズム』

「ギリシア的抒情詩」全篇を読む』

市 川 毅

二〇〇二年は西脇順二郎に関心を持つ者にとって没後二〇年というひとつの節目の年であった。この年、長年にわたり西脇研究に携わってきた澤正宏氏の『西脇順二郎のモダニズム』「ギリシア的抒情詩」全篇を読む』が刊行されたことは、西脇という一詩人の研究にとどまらず、日本近代詩の研究という観点からも大きな収穫であったといえよう。

著者自身、「ギリシア的抒情詩」十二篇の読了に約八年半、また、その成果を一冊の書物として纏めあげるための資料収集に約九年半を要したことを「いかに時間もかかりすぎた」と述懐している。しかし、徹底した情報収集とその検討を土台として西脇順二郎の詩的世界すなわちポエジイの世界に分け入るうとすれば、それは当然の帰結であったともいえる。ことほどさように西脇の詩の世界は広くかつ深い。短詩といえど容易に読み切ることなどできない。

これは西脇研究に関わったことのある者の共通認識でもあるはずだ。

本書で著者は、日本のモダニズム詩の一つの到達点を示す詩集『Ambarvalia』（昭8）の前半部「LE MONDE ANCIEN」冒頭の序詩「コリコスの歌」および「ギリシア的抒情詩」と総題の付された十一篇の詩を取り上げ、精緻な「読み」を展開している。章と作品との対応関係を示せば以下のごとくである。一章↓「コリコスの歌」、二章↓「天気」、三章↓「カプリの牧人」、四章↓「雨」、五章↓「葦」、六章↓「太陽」、七章↓「手」、八章↓「眼」、九章↓「皿」、十章↓「栗の葉」、十一章↓「ガラス杯」、十二章↓「カリマコスの頭と Voyage Pittoresque」。

著者はほとんどすべての章で西脇自身の自作への言及すなわち「自作解説」を引用し、その言説に詳細な検討を加えている。そし

て作品の「読み」は、その内容を踏まえて展開されていく。これは「難解な表現が多いために、収められている詩篇一つ一つの、書き手の意図にそった読みや解釈の研究はまだ充分になされているとはいえない」という認識を持つ著者が、「作者の表現にむけられた意図」にそった「読み」を目指すための必然的な方法であった。また著者は「自作解説」と関連させつつ「比較文化」「比較文学」の研究方法も援用しているが、これは「モダニズムの詩」ことに「短い詩」の「読み」にありがちな「恣意的な解釈」を排し、「読みの揺れ幅を極力少なくする」ことを目的とするものであった。

実際、本書で取り上げられた一章から十章までの詩篇は、いづれも全体で十行にも満たない短詩である。これらについては先行する詩人、批評家、研究者らの論考が少なからず存するが、たしかにその「読み」の内容は種々様々である。解釈は多様、と言えばそれまでだが、ことに研究分野からのアプローチにおいては、その性質上から考えても、もっと「読みの揺れ幅」が狭まってよいはずだ。

紙数に限りがある。一部論考への言及にとどまらざるをえない。あらかじめお断りしておく。ではまず、著者のいう「書き手の意図」を踏まえた「読み」の例をみてみよう。たとえば八章の「眼」。これは「白い波が頭へとびか、つてくる七月に／南方の奇麗な町をすぎる。／静かな庭が旅人のために眠つてゐる。／薔薇に砂に水／薔薇に霞む心／石に刻まれた髪／石に刻まれた昔／石に刻まれた眼は永遠に開く。(注・「」は改行の意。以下同様)」という八行の短詩である。

著者は、この作品についての鍵谷幸信、千葉宣一、村野四郎、小海永二らの先行する論考(素材論と最終行の解釈)に言及している。

しかしそれらには同意せず、西脇から直接聞いた「読み」を踏まえて立論された大河原忠蔵の説を支持し、さらに著者自身、「自作解説」を参照しつつ素材論と最終行の解釈に新たな解答を与えている。曰く、前者に関しては、ローマの国立博物館にある「笛を吹く女」のレリーフであるとする大河原説が妥当であると。また後者に關しては、最終行に「精神的内容」を読む鍵谷説、「形而上学的認識」を読む千葉説、「不思議」なるものを読む村野説、「不可知の世界」の暗示を読む小海説を、「自作解説に信頼性をおくとすれば」と前置したうえですべて否定する。そして「眼は永遠の世界に向かつていると解釈するのではなく、眼は閉じる(まばたきする)ことのないままで開き続けていると解釈した方が、作者の意図にそうのである」と結論づける。

もちろん、この「読み」は「自作解説」の「信頼性」を大前提とするものであり、その限りにおいて説得力を持ちうる。よって問題は「自作解説」の「信頼性」に帰するわけだが、著者はそれを西脇の言説自体の内的整合性および作品との照応関係という二つの観点から丹念に吟味している。そして筆者の見るかぎり、その内容は「信頼性」を保証するに足るものとなっている。

次に、「比較文化」「比較文学」的な方法の導入された部分についてみてみよう。ここでは七章の「手」を取り上げる。これは「精霊の動脈が切れ、神のフィルムが切れ、／枯れ果てた材木の中を通し

て夢みる精氣の／手をとつて、唇の暗黒をさぐるとき、／忍冬の花が延びて、岩を薫らし森を殺す。／小鳥の首と寶石のたそがれに手をのばし、／夢みるこの手にスミルナの夢がある。／燃える薔薇の簍。」という七行の短詩である。

超現実的な「森林」がイマジスティックに描出された、いかにも西協的な作品だ。著者はその核となるイメージや表現の出自を「自作解説」を参照しつつ丁寧に探っていく。そして、キーツの詩集『エンディミオン』のなかのいくつかの箇所と本作品との関わりを指摘する。また、フレイザーの『金枝篇』やマレーの『ギリシア宗教発展の五段階』を援用し、「原始未開人」の発想が詩的虚構の視点に置かれて書かれていると主張する。このような西欧の文学・文化との比較検討を交えた「読み」の方法は、「欧米の文化的、文学的なヴェール」を纏った西協の「詩の言葉」の解明に必須のものといえるだろう。しかも、筆者が比較検討している文学・文化領域の対象は、決して恣意や思いつきで採られたものではなく、信頼に足る西協の言説や実際の蔵書リストをもとに選ばれたものである。ゆえに、著者はひかえめに「比較」の語を用いているが、そのほとんどが実際の影響関係の予想される重要な指摘となっている。

以上、著者のいう二つの方法について見てきたが、いずれも西協作品への適切かつ効果的なアプローチ方法といえよう。加えてそれが、「書き手の意図」にそった「読み」を実現する手段、「読み」の揺れ幅」を少なくする手段にとどまらず、著者の論考全体に強い説得力を付与している点は、注目に値するところである。

最後に、本書全体を通観し、その主題について考えてみたい。著者は『Ambarvalia』前半部の『LE MONDE ANCIEN』の序詩および「ギリシアの抒情詩」十一篇を詩集掲載順に取り上げ一章ごと論じているが、それはオリジナルの各論考（複数詩篇を同時に論じたものもある）の発表時期の順ともほぼ重なっている。おおまかに整理すれば、はじめに一章九章は複数詩篇を扱った前期の論考、十章十二章はそれぞれが一詩篇を扱った後期の論考ということになる。

「あとがき」によれば、本書で著者が目指したのは「モダニズムの詩の方法の具体的な解明」であった。実際、著者は既に述べた二つの方法を中心に据え、一篇一篇の詩を丁寧に読み込み、それを土台として西協の詩法に迫ろうと試みている。そしてその成果が明瞭にあらわれてくるのは本書終盤においてである。最終章の十二章をみてみよう。ここで著者は、それまでの作品の「読み」を踏まえ、「現実的な意味を認める言語を予め詩のなかに提示しておいて、その現実的な意味を他の言語によって無化していく方法」が西協の「イマジズムの本質」であると結論づけている。これは当時の西協の詩的方法の特質を的確に言いあてている。そして最後に、西協は「自分の内のロマン主義的なものをイマジズム（ないしは超現実主義）による言葉によつて無化することが貫徹し、それが超えられないままで、むしろそれを内なる本質とする自分の発見にむかった」とし、そこに以後の西協モダニズム衰退の一因を見出している。これは戦後の西協詩の研究に重要な示唆を与える指摘といえよう。

本書は、どの章をとつても行き届いた資料収集・検討を土台とした魅力的な「読み」に満ちているが、作品論的に見たとき重厚で読み応えのあるのは後期の論考である。ここでは西脇の「自作解説」への傾斜は表層的には薄れ、著者自身のクリティカルな視点が前面に出てくる。だがもちろん、それは無責任な批評のための批評とは異質のものだ。これは著者が執拗なまでに追求してきた「作者」の「意図」にそった「読み」の営為が、鋭い批評精神の発露を深層において支えているからであろう。いずれにしろ本書は『Dai-Daivalia』を、そして西脇順三郎のモダニズムを研究していこうとする者にとって、一度は読んでおかねばならぬ重要な文献となるだろう。

(二〇〇二年九月二日 双文社出版 一八八頁 本体二八〇〇円)

テレングト・タイトル (艾特) 著

『三島文学の原型——始原・根茎隠喩・構造——』

山崎義光

序説の冒頭に述べられているように「本研究は三島由紀夫の小説の構造的な特徴を捉え、そのしくみを解明しようとする試みである」(二九頁)。数多くの三島作品のなかでも、十三歳で書かれた作品「酸模」から『仮面の告白』までの初期作品八篇を対象とし、それらを物語構造論・言語論的な一定の理論的観点から詳細にテキスト分析することで、三島の初期作品の「始原」にある「構造」を解明しようというのが本書の企図である。そのため、時代や作家の伝記などの背景や、先行するあるいは同時代のテクストとの関連などは後景に退けられる。初期作品を対象を設定したのは、「三島由紀夫の場合は、その「習作期」の諸作品に、驚くほどその「原型」が表れている」(二二頁)からであり、「公表されたテクストとして、最初に生産されたものとして、最も始原的であり、あるいは原型的なモデルが最も鮮明に表出されていると考えられるからである」

(二二頁)とする。それゆえ、(三島)の初期作品を分析するのであるが、しかしそれは、三島由紀夫の思想や人物を解明することを目指すからではない。少なくとも本書で論じる範囲においては、あくまで構造的文体的特質の解明を通して三島へ作品の「根源」を明らかにすることに研究の射程を自己限定している。全体は四つの章から成り、第一章で「酸模」をとりあげ、仮説的な原型モデルが示される。第二章では「暁鐘聖歌」「鈴鹿鈔」「館」「彩絵硝子」、第三章で「花ざかりの森」、第四章で『仮面の告白』が取り上げられ、原型モデルとの比較を通して論じ進められていく。

「第一章 プリミティブ——構造と根茎隠喩」では、アステリズムで十四に区分された「酸模」の物語言語をシークエンスとして定義し、その機能と意味を詳細に分析しながら、修辭的技巧に満ちた文体が用いられ、情緒的な叙述としてのシークエンスが配されている

ることなどを論じ、テキストの文体は、装飾的であり、語り手の主観的情緒の抒情が全体を覆っているとする。そして、四つのシークエンスがテキストを物語として統合する構造的な骨組みをなす中核的機能体であることが指摘される。それら物語の中核的機能体としてのシークエンスには、それぞれに物語の生成の元であり、諸イメージの源泉である「指標」があるとする。社会の秩序と反秩序を意味する「刑務所」、主人公秋彦の「病的な憧憬」、脱走囚の「男」、そして男の「墓標」である。これら中核的機能体としてのシークエンスから見出された四つの「指標」が、「生きた隠喻」（ポール・リクール）としてこのテキストを構造化し、多くの自然の諸イメージや隠喻的、象徴的な言説を統合する「根茎隠喻（rhizome）」として機能しているとする。この第一章が、本書の最も基幹となる論述で、テキストを構成している言葉の秩序とそれぞれの機能が慎重に詳細に論じられ、一篇のテキストの仕組みが明らかにされる。ただし、厳密にテキストに密着しようとしたせいでもあろうか、本書の論述はわかりやすいものとはいえない。とくに、装飾としての機能を果たすシークエンスや微視的な文体レベルでの修辭的技巧が細かく分析され、それらが総体として「われわれを言葉自体に注意を向かわせる」機能を果たし、装飾の機能が強調されていると論じているのだが、そのことが中核的なシークエンス・指標との関わりでどれほどの意味をもつのかは今一つ判断としない。

「第二章 検証——形成の過程」では、前章で「酸模」から浮き彫りにされた仮説的原型モデルから、演繹的に「座禪物語」「晝鐘

聖歌」「鈴鹿鈔」「館」「彩絵硝子」が考察される。それぞれのテキストにおいて仮説的原型モデルの要素が部分的に反復して表れていることを論じる。

「第三章 定着——構成・構造の戯れ」では、「花ざかりの森」が取り上げられる。このテキストを構成する因果的関係の希薄にみえる挿話群が、「酸模」の分析から見出された根茎隠喻によって構造化されていることを指摘する。「序の巻」の諸エピソードには「夢想」「祖先」「死」という三つの指標があらわれるが、これらは「酸模」における四つの根茎隠喻のうちの「刑務所」を除く三つの指標を反復しているとする。そして、それら三つの指標が「花ざかりの森」を統合する機能を果たしていると論じる。

「第四章 完結——変奏と予兆」では、『仮面の告白』がとりあげられ、中核的機能体としてのシークエンスの抽出、語り、修辭的な技巧の諸レベルにおいてテキストの詳細な検討が加えられる。その結果、『仮面の告白』では、「酸模」にあったのと同様の物語を統合化する四つの根茎隠喻が反復してあらわれ、テキストの統合化を果たしていることが指摘される。

以上の論述を通じて、「酸模」を統合し構造化している四つの根茎隠喻は、取り上げられた初期作品群に部分的に、全面的に反復して表れ、三島の初期小説群に共通したテキスト構造化の要素となっていることを論じている。だが、こうして論じられた結論、すなわち「始原」にあらわれた「構造」としての四つの「根茎隠喻」が何に起因しているか、何を意味しているかについては、次のように述

べて、この研究の範囲外とする禁欲的な態度を貫いている。「その四つの構造的な根基隱喩の意味の根源と、作者における意味の起源の原因と、またその意味されることとの間に発生する関係性の総体については、一切問わないことにした。というのも、それはすでに作品と作者の心理、精神分析、無意識の解釈、さらには歴史的、思想的な解釈といったような、物語論的なアプローチの範囲を逸脱することになるからである」(一五頁)。しかしながら他方で、著者は考究の過程で驚きをもって発見したこうした構造の反復について、次のように述べてもいる。「文学を創作する行為が逆に作者をその文学の論理の中にかからめ取っていったのか、それとも何かが作者を通じて作品をそのように構造化させたのか、あるいは文学を創作するにおいて、文学の「構造」・「深層」の方が作者をそうさせたのか、その諸関係は未だに謎として残る問題である」(一四頁)。著者は別の論稿「見えざる「深層」「構造」に命じられて生死した文学——三島文学の「根源」あるいは「原型」——」(松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫論集Ⅲ 世界の中の三島由紀夫』勉誠出版 二〇〇一・三)では、本書で論じた「酸模」が、三島の自決までをも予定調和的にイメージとして含んでいると示唆している。

本書の「前書」や「結語」の端々には、著者の逡巡が読みとれる。「三島文学」から著者が看取した、そして「三島文学」についてしばしば指摘される、言葉の隱喩的な連鎖と構造的な一貫性への魅惑に導かれながら本書がとった考究の方法論的理論的な枠組みは一貫しており、見出された根基隱喩に還元していく手続きと結

論は、テクストの多義性を追求するよりも共通性、一貫性にむけられる。だが、それゆえに、そうした論じ方が取りこぼしていくテクストの多義性や、自らの理論的枠組みから導かれた結論自体への著者自身の当惑のようなものも滲んでいる。本書が対象としたのは、三島の本格的な創作活動の入り口にあたる作品群である。本書で明らかにされた初期小説に一貫した構造的文体的特徴は、その後の三島作品群に対しても当てはめて論じられるだろうか。また、それによって三島文学への新たな視点からの照射が可能になるだろうか。

共通性・一貫性に還元して論じたことから取りこぼされていくテクスト個々の読解可能性についてはどう考えるのか。あるいは、同時代の、または先行するテクストとの関連性や、三島のテクストが交又する同時代の文学テクスト・社会的言説との関連、歴史性についてはどうだろうか。研究の方法には、「正しい」方法もなければ、新しい・古いも問題ではなく、その方法によって何が明らかにされ、いかに新たな知見がもたらされるのかという点にのみ有効性と意義がある。著者の方法が明確で一貫しているがゆえに生じる疑問もまた多いが、今後どのような方向性でこの研究から進展していくのか興味をもって期待されるところである。

米倉 巖 著

『萩原朔太郎論攷 詩学の回路 回路の詩学』

山 本 康 治

本書は長年に亘って萩原朔太郎研究を持続されていた米倉巖氏の、萩原に関する三冊目の著書である。あとがきに拠れば『『定本青猫』、散文詩集『宿命』を含めた六冊の詩集の、「序文」や「跋文」をとおして、朔太郎の詩学（文体）を体系的に捉えてみよう」と試みた」とされる。

収められた論文は、三十年以上前に書かれたもの（加筆修正済）から本書のために書き下ろされた最新のものまで、発表時期は幅を持つ。本書を編むに当たって、それらは三部に構成され、独立した論でもある巻頭巻末の「序に代えて」、「結語」等を含むと、論文数二三本、六五五頁に亘る大著となっている。萩原を中心に、周辺詩人にまで目配りをした本書のこのポリウムは、氏の真摯で着実な研究姿勢を示すものでもあり、それを一冊に纏められたその営為に對して心から敬意を表したい。

第Ⅰ部「月に吠える」「青猫」の詩学」は大正期を対象として、第Ⅱ部「純情小曲集」「氷島」の詩学」は昭和期を、そして第Ⅲ部「詩の原理」その他」は、同じく昭和期の、特に詩作の背景を探った論考が中心に配置されている。

第Ⅰ部は「月に吠える」に関する論文が三本、「青猫」関係の五本が収録。特に、「月に吠える」再版の「序」に関する詩論」が、対象テクストを丁寧に読み解き、同時代に於ける萩原の「誇張と偏見」を明らかにしている点で面白かった。が、本稿では全体に亘って評する余裕はないので、評者の関心の向いた、第Ⅱ部を中心に見ていきたい。

第Ⅱ部は、七章からなり、順を追って紹介すると北川冬彦、吉田一穂ら萩原の下の世代、モダニズム詩人を中心に取り上げた「一九二六年の詩の様式」、「純情小曲集」の「百序」と「出版に際し

て」、中野重治の「郷土望景詩に現れた憤怒について」を巡って論が展開される。「一九二六年の萩原朔太郎と中野重治」、萩原の個人雑誌「生理」と、そこに掲載された「郷愁の詩人と謝蕪村」「日清戦争異聞」について触れ、萩原の「反体制的」な側面を明らかにした「認識者としての萩原朔太郎」、「水鳥」の「自序」について、「青猫」から定本「青猫」へ、「散文詩「宿命」の「自序」について」、と昭和期の萩原の活動がほぼ網羅されている。

第二章「純情小曲集」の「自序」と「出版に際して」では、安藤靖彦氏の見解（『純情小曲集』において、「感傷」から「詠嘆」へ回帰したこと、つまり歌への回帰が見られたとする見解）を取り上げるが、それと全く異なる立場が示される。つまり大正末の時代情況、行き詰まりから萩原は、それまでの「詩的言語を排除して、へいま・ここ」に提示された言語を、意識的に使用」して、氏の言葉によれば「科学的言語」により「郷土望景詩」を作ったのだとされる。一方、「愛憐詩篇」は「詩的言語」と位置づけられ、このような「言語」の違いが指定された上で、「郷土望景詩」「愛憐詩篇」がもともと別の詩集として構想され、「量的な問題」で一緒にされたとする佐藤房儀氏の論の追認に向かう。その上で、萩原が犀星には「愛憐詩篇」のみを、恭次郎には「郷土望景詩」のみを見せ、「序」と「跋」がそれぞれ依頼されたと推定する。その経緯については否定することもないのだが、しかしこの立論の根底にある、「科学的言語／詩的言語」のカテゴライズの当てはめには疑問がある。氏は篠憲一「言語と実在」を引用し、そこに示された「詩的言語」という

タームを援用しているのであるが、たとえば篠氏が「詩的言語」の特徴として挙げている「多義性」ひとつとっても、米倉氏の論においては、「愛憐詩篇」は「詩的言語」であるが故に、「多義性」を持ち、一方「郷土望景詩」は「詩的言語」でないといわれる故に、「多義性」を持たない詩ということにされてしまう。そのような視座の有効性は果たして認められるのだろうか。また「愛憐詩篇」と「郷土望景詩」を論じるに際して、高橋世織、阿毛久芳両氏によって既に明らかなように、この二章が、時間を軸とする「二幅対画的な『番構造』（高橋）を持ち、更に「郷土望景詩」がその自注である「郷土望景詩の後に」との関係において、やはり時間的な「番構造」（阿毛）を持つという指摘が既になされている以上、『純情小曲集』を論じるにあたっては、別の詩集として構想された二章が、「量的な問題」で一巻とされたとする結論では不満が残る。

第五章「水鳥」の「自序」については、俳句・和歌を「近代詩のイデアする未来形態」と述べることに對して、そこに至る道筋として、尾山篤二郎の「萩原朔太郎氏に答えて詩壇の人々に寄す」が萩原の和歌観に影響を与えたとする。つまり古典としてのみ和歌を見ていた姿勢が尾山の指摘により改められたとするのであるが、仮に萩原の和歌観に修正が加わったとしても、その延長線上に「水鳥」自序の記述がくることは考えにくい。例えばこれは、俳句の例であるが、犀星と俳句観を巡って論争した際、「再び詩に別れる言葉——萩原朔太郎君に答へる——」（昭和九・一一）において、犀星から萩原が俳句を古典とのみ見る姿勢を厳しく指摘されていた

のを思い返しても良い。これは『水鳥』刊行後のやり取りであるが、萩原においては、和歌俳句がある面においては、古典として意識されており、そのような姿勢は揺れながらも持ち続けていたのである。そのことを踏まえると、大正末の尾山の発言により萩原に見解の修正が加わったとするのは無理があるのではないか。またそのことと関連していえば、私見では萩原の俳句観、特に芭蕉へのスタンスが変わったのは、この犀星との論争がきっかけとなっており、これが『郷愁の詩人と謝蕪村』の改稿の問題（初出時の、春の詩人像が、二年後の単行本では冬の詩人として改稿されている）にも繋がると思われるのであるが、いずれにせよ『郷愁の詩人と謝蕪村』（認識者としての萩原朔太郎）の章に触れている以上、いずれにせよ氏の視角からの見解が欲しかった。

第三部は四章からなり、「詩学の象徴表現の位相」、「一九二二年の口語自由詩韻律論」、「日本への回帰」とはなにか、「詩と詩論」における佐藤一英の言語と朔太郎」と、詩作背景を探る論考が続く。最後の章は、これまであまり触れられてこなかった佐藤の詩観を萩原に対峙させた点で面白かった。特に戦時下の韻文観は学ばせていただいた。「結語」も、萩原の思考の延長上に、埴谷雄高を見て面白かったが、その考えを提示した菅谷規矩雄氏の見解の追認に過ぎないようで、差異はいまひとつ理解出来なかった。

全巻を通して、正直なところ、論の展開に疑問が残った。感じたことを二点ほど挙げておきたい。

先にも触れたことであるが、使っている用語（チーム）の位置づけが不明な点である。氏は「ポエジイの本質は「抒情」にあり、「抒情に批判精神を加えた作品こそ本物」（五五四頁）と詩観を示されるが、この「抒情」「批評精神」とは何を指すのだろうか。また「小説にも詩的小説の存在するのは事実で」、「詩と名づけられるものは、その形態、形式の違いはあれ、すべて韻文でなければならぬ」という佐藤一英の一文を引用し、「これは、われわれの常識からして当たり前のこと」（五七二頁）と断じて憚らない。あるいは、ある作品に対して「散文詩に妥当する」と断を下す。挙げればきりがないが、ここに列挙した「抒情」「批評精神」「韻文」「散文詩」、氏はこれらチームを用いて、萩原の「序文」を切り、作品を批評していくのであるが、しかし、これらのチーム自身がむしろ研究対象なのであり、決してひとつの尺度として用いることはできないはずである。「抒情」という語ひとつとっても、必要なのは萩原が「抒情」をどのように使い、どのように見ていたのか、またそれが同時代のコードにおいたときどのような意味が浮上するのかがここでは必要なことであり、それを見ずして「抒情」という語を用いられるも、氏の意図する「抒情」の内実は分からない。ここからかき見えるのは、萩原の、というより萩原に投影された氏自身の詩観に過ぎないのではないか。

先行諸学の引用に対しても疑問を感じた。例えば、カントの「規定的判断力」と「反省的判断力」というカテゴリーをそのまま、萩原に当てはめ、彼を「規定的判断力」の持ち主と断定する。そして

この「規定」を持つのは「思索型」の人間と位置づけられ、そこを軸にさまざまな問題が切り分けられていく。このような方法は果たして有効なのであろうか。他にも氏は、文脈も、背景も、時代も全く異なる、しかし表層的な点でのみ一致する（と思われる）用語を、多くは哲学、言語学の文献から引用し、対象テキストに向き合わせる。しかも実は、それがなぜここで引用されたのかも明らかにされない。哲学、言語学の諸学においても、その分野における相対的位置づけがあり、その引用・照合に際しては、その有用性の証明とともになされねばならないのはいうまでもない。そうでなければ、結局のところ、好みの「ものさし」を探し出してそれを当てはめることに過ぎず、そこに描かれるのは結局のところ論者の主観に過ぎないということになる。

「自序」を、断続的にほぼすべて引用し、当該箇所に対する先行研究、また多くは哲学・言語学にかかわる諸研究の成果を対置させる氏の研究から学ぶことも多く、啓発されたのも事実である。また、研究対象に対する熱意も充分に感じ取ることができた。それゆえにはからずも苦言を呈することとなった。了とされたい。

榎原 修著

『小林秀雄 批評という方法』

細 谷 博

この場の体裁上無理と知りつつ、もしこの短文に題を付すことが許されるならば、「硬質な読みの牙え」としたい。「硬質で牙えた考察」——榎原修氏のこれまでの小林秀雄論を収めた本書を読み了えて、つよく残った印象である。関谷一郎氏の言う、小林秀雄研究において「最も原則的な作品論的立場」を堅持している榎原氏なればこそ、「作品」個々に対してつとめて厳密たらんとする姿勢、そこから導かれる思考や情念を語りつつ方向づけるに際しての禁欲的とも見える手つき等々、まさにすぐれた小林論者としての榎原氏のあり方があらためて提示され、ここにしっかりと画されたのである。

本書には、初期小説「一ツの脳髓」から始めて、「ランポオ」、「様々なる意匠」を含む『文芸評論』、「おふえりや遺文」と「Xへの手紙」、評伝「ドストエフスキイの生活」、その序文「歴史について

て」と連作『無常といふ事』、中でも「当麻」と「美朝」、デカルトにふれた「常識について」、未完のベルグソン論「感想」と一連の『考えるヒント』そして「本居宣長」と、小林の初期から後期へといたる小説と批評をめぐる論考が収められている。すなわち、それらの作品個々を対象とする論述が時代順にならべ置かれ、さらに末尾に「評論の近代」と題された近代批評論が配されているのである。読者はただちにそこで小林秀雄の表現の具体相に接し、氏のすぐれた本文解釈と、小林批評の変遷の跡づけとに立ち会うよう促されるだろう。

まずは、習作「一ツの脳髓」が小林の「文学的課題」を早くも明瞭に表した作品とされ、梶井基次郎「瀬山の話」や志賀直哉との比較をつうじて、その私小説性が問題とされる。その結果は、「へ私」というものが方法的に処理しきれず、描かれた風景は「外界」と

しての資格を失い、「へ私」の「内界」が「ほぼ同じ大きさにまで充満」した小説とされるのである。本書中で最も初期の論考というべきこの「へ私」というアポリアは、まさに椋原氏の小林論の出発点として氏自身の「文学的課題」を提示したものと見えるだろう。

末尾の分析は特にすぐれたものである。そこで作品の根柢となるべき「へ私」とは「常に一步奥へ退くもの」となり、「意識によつて意識を明らかにしよう」とした小林は、逆に「意識によつて成るへ私」をつくり上げてしまひ、この時点ではまだ「私小説を脱け出してはいない」と評定される。「様々なる批評」を出発点とする従来の小林論に対し、小説作品の検討の不可欠を証明した氏の論述の新鮮さはいまだに色あせてはいない。だが同時に、「現実」との接点をもたない、言葉だけの世界」として貶する氏の作品批判は、いわゆる私小説論の方向性としては了解されるものの、「言葉」の根源へと降りていこうとしたその後の小林の批評的志向から見れば、それこそがある原点ではないのか、との問いもなお残るのである。

つづく「へ出発」の神話」とされた「ランポオ」論でも、椋原氏は、ランポオ体験により批評家小林が形成されたとする吉田潔生氏に代表される見方に待ったをかけ、「小説から批評へ」という単線的な理解に対して、その後も小説を書き続けた小林へと注意を促している。その初期批評文では「へ私」は白抜き」になった「虚の焦点」であり、批評家小林誕生とは「引きのばされた劇」なのだ」と看破する。また「ランポオ」の「文章の速度」の指摘も重要で

ある。文章の緩急の検討は、いわば小林の全テキストの作品性の受容に必要なものだからである。

さらに『文芸評論』論も小林の批評的出發を問題とし、そこで批評が「負の形」で選ばれていること、「生まの心」を語ろうとして「批評を始め」ながらそれを柵に上げなければならぬという「批評の宿命」に直面し、「へ私」は「批評文の虚数」として存在するのみとの認識を持ちつつ、「マルクスの悟達」で自分を柵に上げる徹底的な実行がなされたのだとする。すなわち、批評家小林の誕生は批評によつて批評の意味を問う「痙攣的な試み」であつたのだ、とするのである。聴くべき言葉であり、「Xへの手紙」に「批評家として第二の誕生」の言を見出さんとしたことも了解できる。だが、次の「おふえりや遺文」論で、小林とおふえりやが「奇妙にねじれながら一致していく」動きを鋭く指摘し、小林の「初期」の終わりを示す作としつつも、一方「最後の小説」である「Xへの手紙」については、関谷一郎氏とならんでそつけない否定的解釈にとどまっていることは、「Xへの手紙」を小林の代表作の一つと見る私には納得しがたいのである。そこにはもちろん氏の言うように、従来の論が「Xへの手紙」をヴァレリーの「テスト氏」との関連においてのみ高く評価し、その「俺」が小林の生身とどれほど隔たるかを問題としなかつたことに対する批判があるわけであるが、「へ人と人との間」に「へ橋」をかけたわたした作品」ではなく、「他者は不在」であると断定はなお性急にすぎると感じられた。

以下「ドストエフスキイの生活」、「無常といふ事」、「常識につい

て、「感想」と「考えるヒント」そして「本居宣長」へと及ぶ論述は、いずれも、樫原氏の小林論における核ともいふべき「歴史」の問題とかかわっている。ドストエフスキー論を「真の意味で批評を表現の手段として選んだ」ものとした氏は、「ドストエフスキーの生活」を「作家から作品への通路」が信じられず「伝記を否定する視点を含んだ」ものであり、生活の「固定的な視点からは書かれ得ない不安定さ」こそが注視され、「生活の再現」がめざされなかつた点に注目している。「文学界の混乱」にあるように、小林が自覚的に批評を始めたとは「確定した方法論をもって始めたというのではなく、批評を本来的に危機的なものと認識」したことであるのだ、とする氏の指摘はまさに首肯できるものだろう。そうした批評的自覚と共に小林の「歴史観」を問題とする氏は、小林はデカルト的二元論に立ち、「自然（物質）の必然と人間（精神）の自由」が対峙する（現在）から、「死にやすい生き物」としての「歴史」が見られたのだとする。小林の言う「思ひ出す」とはまさに「語り難い」ものであり、「客観的でも主観的でもない」ことが語られようとしているのだとするのである。「無常といふ事」に「当麻」を「入り口」として、語り手（僕）によって支えられた「思考の現場」を見、「実朝」に「歴史」の生きる姿を認め、それは「自然の必然性と拮抗して人間が保った（歴史）」であるとされた氏は、小林の「歴史」を「ドストエフスキーの生活」を書くことによって発見された「回路」であり、以後の小林はこの場所から動いていないと断言する。同時に、自然と人間、物質と精神の二元論は決して安

定したものでなく「秩序のジレンマ」であり、「人間に与えられた現実そのものの表現」なのだとし、あくまでも「思考の現場」にこだわりのつづけた小林は「文学」という「オブセッション」にもとらわれず考え続けた人であったのだ、とするのである。

私も小林はまさに「現場」の思想家であると考えている。その意味で、樫原氏の読みの『現場検証』には最も共感する者だが、ともすれば「厳密な論理と客観性の下に、証明の形式で論文を書きたい」（あとがき）とかつてより願ったという氏の論述に、読み手としてあるかたさを感じたのは、こちらの読みの頼りなさゆえであらうか。奇しくも同時期の刊行となった小著に関し「危機」のモチーフの欠落を鋭く指摘された氏に対し、私の考える「危機」とは「安定」と決して二律背反の関係ではないもの、と答えたいと思う。また氏の主張する小林論における作品の「実在感」^{ソリッド}の受容にもつよく共感する私は、氏の論自体が「美」を問題とし、文の動きを丁寧にとどりつつも、例えば「文学と自分」の一節を引用しながらそこに一瞬立ち止まることなく、表出された思いの受けとめの見えぬのを訝るのである。さらに、あえて付言すれば、現下の小林論者を代表する樫原、関谷両氏の「無私」論を遠ざけた小林秀雄理解に対して、私はあらためて、鋭さなどというものが意味をもたぬようになる方向としてそれ（無私）を理解する必要があるのではないか、と言いたいのである。



長野 隆著

『長野隆著作集』（全三卷）

本書は二〇〇〇年八月に突然死去した長野隆氏の著作集である。全三巻。第一巻「萩原朔太郎論集成」は氏の萩原朔太郎論をまとめたもの。第二巻「歌論・詩論・物語論」は萩原朔太郎論をのぞくへほとんど全ての（思潮社刊『抒情の方法』収録以外の）研究・評論を収録（第二巻、山田兼士氏「あとがき」）した。論の対象は西脇順三郎、宮沢賢治、中原中也、島尾敏雄、芥川龍之介、太宰治その他に及ぶ。第三巻「エッセイ他」は文学評論的な批評、エッセイ、解説、時評、美術・音楽評論、講演記録、インタビュー、その他短文の類（第三巻、野村聡氏「解題」）を収録したもの。巻末に長野氏の年譜も付載されている。

以上の全体の概観だけでも相当に広い範囲の内容であり、著者の力量をうかがわせる。

長野氏はへ一本の研究論文のために「死んでもいい」くらいの気

野 呂 芳 信

力がなければおよそ文学研究など無為に等しいへ命懸けで論文を書く以上、どこでいつ死んでも文句は言えないとの主張を持っていたという（第二巻、山田兼士氏「あとがき」）。このことについては長野さんは全力であった。体調を置き忘れるほどに（月報3、阿毛久芳氏「喪失」との証言もある。このような研究者の著作集を前にして、筆者は緊張するほかはない。また、一九八〇年代に非常に盛んだった萩原朔太郎研究（筆者も当時少しだけ参加をした）の世界で活躍をした研究者では、勝田和學氏のやはり生前の論文を集めた著書をかつて本誌において紹介したこともあり、感慨深いものがある。

今回の著作集に見られる長野氏の業績は、広いばかりでなく全体的に希有の緊張度を感じさせるもので、筆者は一方的に与えられて感嘆するばかりであり、全体的な書評を書くことは対象の大きさか

らして能力の限界をはるかに超えたことであるといわざるを得ない。ともあれこゝは筆者の研究内容と関わることに限定して、多少の見解を書き留めるだけにしたい。以下、第一巻の萩原朔太郎論について述べることにする。

「朔太郎『月に吠える』の象徴の構造——作品『猫』を視座に据えて——」は、この詩集の優れた詩篇がへ内部情調の不可避的顛動（実存の標徴）を象徴的に形象したものであり、特徴として仮構性に富んだ可視的形象の世界であることを、「猫」その他の作によって論じる。「朔太郎の詩のイメージにおける（実在）と（非在）——（椅子）（家）の象徴——」は「月に吠える」「青猫」「蝶を夢む」などに類出する（椅子）（家）のイメージに着目し、その意味をイメージ論的に追ったもの。面白い指摘に満ちている。この論において「時計」（定本青猫）を論じて（実存）から（永遠）へと解脱されて行く意識を指摘し、それがへさながら、「月に吠える」から「青猫」へと移行しつつある觀念の縮図を物語っているとする指摘は、前の論文の内容とともにやがて次の「萩原朔太郎の象徴詩——その「実存的なるもの」について——」へと総合されまとめられてゆくものようである。この後者の論においては詩集『氷島』にまで言及される。「萩原朔太郎の詩の美的範疇——その「実存的なるもの」について——」は、特性美としてのヘグロテスクという観点から朔太郎詩のへ永遠的なものではなくへ実存的なるものについて光を当てた論。「朔太郎の詩の象徴様式に関する一視点——形象の可視性について、「およぐひと」「月光と海

月」を視座に——」は、主に「およぐひと」の動詞の用法に注目しつつ、朔太郎の象徴詩の奇妙なリアリティーが浮き彫りにされるようである。この論はやがて次の「萩原朔太郎・陰画の原理」へと継承される内容を含む。

以上の短い論文数編は、おそらく長野氏が朔太郎詩へと肉薄するための、基礎的で細緻な、しかも魅力的なデッサンの役割を果たしているように思われる。そして氏の本領が発揮されるのが、次の「萩原朔太郎・陰画の原理」であろう。

「萩原朔太郎・陰画の原理」は雑誌「詩論」の第七号から十号（うち八・十号はいずれも「萩原朔太郎特集」なのだという）まで連載された長編で、精緻な理論展開と生き生きとした人間理解の感じられる、まさに圧巻といえよう。

この論は以前、長野氏の編になる「萩原朔太郎の世界」（砂子屋書房、一九八七・六）に収録された際に読み、刺激を受けた記憶がある。今回久し振りに読み返し、ことに第四章「方法としてのへ漂泊」が魅力的であることに気がついた。これは詩人以前の朔太郎に着目したもので、朔太郎の特殊事情が極めてわかりやすく説明された論である。若き日の朔太郎にとって（目的）を持つとは家業の医師を目指すことか、またはそれに対抗できるほどの自前の明確な目的を持つことであつたはずだが、実際は高等学校その他の進学過程という制度的な（旅）が、その実はすべて当面の猶予でしかなく、結果としていたずらに時を消耗し、歳しかとれない「生」の不安が指摘される。そして（旅）がこの国のなかに行き場を失つた

時、見知らぬ世界としての家郷への思慕が成立したとする、鮮やかな指摘がなされる。またこの論の、朔太郎の「檻の中の漂泊」という前橋における現状についての指摘は、次の「旅上」の風景——萩原朔太郎の「近代」——（檻と漂泊との二重性に生きる朔太郎が本質的な表現を獲得するに至る過程を論じてこれも秀逸な論）に発展継承されるものである。

ところでこの「萩原朔太郎・陰画の原理」は、第一章「月に吠える」の思想と方法」、第二章「エロティシズムの逆説」、第三章「竹」の図像学」を主要部分とする。ここは主に「浄罪詩篇」期前後からドストエフスキー事件あたりを扱ったもので、もし筆者がなにか長野氏の論に意見を述べることができるとすれば、この部分以外にはない。長野氏は主に「浄罪詩篇」期前後の朔太郎の基本的な発想として、自然の摂理を自己の体内に取り込んでいること、「一粒の麦」の喩えのようにそこに仮死と再生のドラマを通して自らの復活を祈念していたことを指摘する。しかし朔太郎独自の問題として、この場合「再生」するのもまたその「母体」も己れであるという二重性（母体回帰と「受胎」の二重性）という錯誤があるという。第一章ではこうした仮死―再生のメビウスの輪のような図も掲載されている。こうした自然（植物）のドラマ、生きたイメージの変遷については、まことに整然として矛盾もなく、大局的に見た場合まったく見事な指摘というほかはない。とはいえこれはあまりにも自己完結した論理のように思われる。この図式には、本質的に「浄罪詩篇」期における朔太郎の罪も罰も懺悔も入る余地が

無い。それでよいのであろうか。この点だけは筆者にとつては疑問である。長野氏にとつては朔太郎の神は植物の再生のように、自らの復活を仮託した「十字架上のキリスト」ということになるが、これも朔太郎内部で自己完結させた論理であろう。「感傷の涅槃」に至る道程としては認められるが、「草木姦淫」後の意外な発病を罰と認識した時、そこには他者としての神が想定されているはずなのである。こうした問題は氏の論理には一貫していて、たとえば朔太郎の神への祈禱の内容を直接表現した作品「祈禱」（「街」大4・6）を「浄罪詩篇」期よりも後のものとし、また「穴」という未発表詩篇を「浄罪詩篇」期のものであることにも現れている。このように位置づけることで、「浄罪詩篇」期における他者としての神の問題は存在しないことになる。しかし、前者が「浄罪詩篇」期のものである可能性が高いことを筆者はかつて論じたことがあり、また後者は「白い月」（月に吠える）との表現上の類似から、「浄罪詩篇」期よりも後のものと見た方が適切と思われるのである。要するに、長野氏の論理からは朔太郎の自己完結的な「疾患」イメージの運動を一貫して見ることができるのであるが、筆者は朔太郎が自らの絶対的な自己確立をかけた「罪人」へ懺悔者」が、大正四年にその意味を喪失した「病氣」へ病人」へと変質する激烈な挫折をさらに見ることができると思っている。

なおその他、朔太郎におけるドストエフスキーの意味なども、まだ考察の余地があるであろう。

生前の長野氏とは筆者はあまり縁がなく、お会いしたことも数回

しかない。また筆者は必ずしも氏のよい読者でもなかったのであるが、この度まとめられた氏の著作集を読み、その持続した異様に密度の高い論考の数々と、内部に感じられる直感的な生き生きとした人間理解などに心底から感嘆させられた。筆者に朔太郎論に関することしか言及する能力がなくて心苦しいのであるが、朔太郎論に關して言えば将来的にも読み継がれるであろう高い水準のものであることは間違いない。月並みであるが、まことに惜しまれる早世であつた。ご冥福をお祈りするとともに、著作集の刊行をせめてもの喜びとしたい。

(第一卷 二〇〇二年八月二日 和泉書院 三三六頁 五〇〇〇円、第二卷 二〇〇二年九月三〇日 一三三頁 四〇〇〇円、第三卷 二〇〇二年一月二〇日 一八二頁 三〇〇〇円)



樋口一葉研究会 編著

『論集 樋口一葉Ⅲ』

中山和子

この本は樋口一葉研究会の刊行した三回目の論集である。一葉専門家ではない研究の蓄積のほしい私、この書評を書くにふさわしいかどうか疑問であるが、外部のほうが自由気まま、遠慮のない発言もできよう。そこで、一読興味をおぼえ、あるいは問題を感じた論述のみ扱うことにしたいが、思わず透谷や桃水の同時代の意味を考へる機会となった。

北川秋雄「やみ夜」論——年上の悪女——は「やみ夜」の研究史的整理を手ざわよく行いながら、若干の異議をはさんでいくものだが、なかでもお蘭に「家父長制の異端者」を、お蘭・直次郎に「絶対的な魂の一致」（北田幸恵）をよむフェミニズム視点にたいする異議には問題を感じた。北川氏によれば「やみ夜」は年下の男の思慕を利用する（女の酷薄さ）を描いて、一葉が「物語の語り手から小説の作者」へと変貌を示す作である。しかし、亡父の遺志に呪

縛された娘、父の決めた結婚をひたすら待つ（貞節遵守）のお蘭、という批判は公式的にすぎるようだ。「我れも父の子やりてのくべし」の執念が「女夜叉」にも「女」の規範破りにもさせる。しかし、語り手は「やりてのく」べきことが何かを語りえないでいる。明治近代の金と政界・官界癒着の泥に穢され、生け贄となった父と娘のいわば怨念共同体が廃邸の闇であるなら、報復すべきものの正体を語りがたく、父の死後八年という（時間的錯誤）（北田）もまた止むをえまい。ただしお蘭・直次郎に理想の男女をよむ北田説は、『風ヶ丘』へ過剰に引きよせられていたろう。闇に自閉するお蘭は若い男の純真をも使喚する心の闇を持つにいたったとも読める。さらには二者に（擬似的母子関係）（菅聡子）をもよませるこの物語の空白の多さは、明治社会の現実と直面しながら、写真へと転換しえない語り手の混沌と一体であって、「年上の悪女」の近代ピカレ

スク風小説（北川）とは思えなかった。また北田説を批判するなら、北川氏は「やみ夜」と桃水「胡砂吹く風」との関連を問うべきだろう。本論集の山本洋「一葉の男性問題」（その一）は、さまざまな文献によるゴシップ・スキヤンダルの総合で、桃水がその中心にある。一葉研究の桃水を捉えるこうした根深い「男女」「恋愛」イデオロギーを背景に、北田氏は、せつかく取り上げた『胡砂吹く風』の可能性を、「やみ夜」と「相聞歌」の關係に矮小化してしまった。

知られている通り上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日朝關係』（筑摩書房、一九九六）によれば、明治時代の知識人中、桃水のようにほぼ完全に朝鮮語を操れる人物はいなかった。朝鮮通信員、優れた青年記者としての桃水が、現地の庶民感情を描きこんだ記事に、朝鮮社会の不安や期待をいかに伝えたか、さらに日朝の友好が危険な關係に進んだ明治二四、五年当時の『胡砂吹く風』が、日本読者に示した「朝鮮民衆の人間性の表現」が、どんな善隣の鼓吹よりも意味深かつたかを上記の書は記している。上垣外氏は一葉日記の中の『胡砂吹く風』評を読んで、*「彼女が涙するその対象が異国の女性たちであることは、忘れられてしまっている」と指摘した。一葉が朝日新聞小説記者桃水から学びえなかったもの大きさは、近年の成田龍一「新聞をよむ樋口一葉」（『文学』）を合せ鏡にすれば、より鮮明になるだろう。*

「大つごもり」論としては大井田義彰『『文学界』の中の一葉——「大つごもり」と「俠」——』、松下浩幸『「大つごもり」

論——貧民救済言説を手がかりとして——』がある。

前者は『文学界』の天知、透谷、『国民新聞』の愛山など同時代論壇のテーマであった「俠」の言説を視野に入れてよむ。意図はよいのだが、それが「俠」の体現者とされる石之助の新たなよみとなつて生きてはいない。大井田氏によれば透谷「徳川氏時代の平民的理想」は、天知「俠客論」に「女性」に対する態度からした異論を提出したものであるというが、それでは平民的理想としての透谷の「俠」の思想は捉えがたい。「社界の大傾向なる共和的思想は斯かる抑圧の間にも自然に發達し来りて……自ら不羈磊落なる調子を具有し……」。透谷の鬱勃たる近代の意識もまた、一葉が学びえなかったものである。石之助の「贈与」を潤沢な家産に依存したままの道楽息子の氣ばらし程度にしか語りえなかったゆえである。

一方、同時代言説として植木枝盛「貧民論」や『女学雑誌』社説「何んぞ貧民を救済せざる」などをあげ、「大つごもり」との「相似性」を説く松下氏の論は、お峰の行為を相対的「悪」と語る「語り」の背後にある時代の力」として「三之助に代理表象される貧民児童イデオロギー」、*「へ与える女性」*性への賞賛というジェンダー構成を見る。石之助におけるお峰の「盗み」と「贈与」の「反復」、結末の「劇的」意味転換からお峰と読者に残される「負目」というカタルシスの宙づり状態。およそこのように展開する論で、一葉研究会若手理論派の労作といえようか。引用文献など啓発もされたが、しかし疑問も残った。たった二円の「正直」のため「舌かみ切つて死んだなら」と覚悟するような使用人お峰と、石之助との決定的差

異をどう捉えるのか。「石之助はお峰が守り本尊なるべし、後の事しりたや」という語り手の「はなし」の文脈など解消させてしまふような、透谷の沈痛な言葉もまた『女学雑誌』の同時代言説なのである。「君知らずや、人は魚の如し、暗らきに棲み、暗らきに迷ふて、寒むく食少なく世を送る者なり」（時勢に感あり）。当時のキリスト教的慈善思想の欺瞞を透谷は鋭く見抜いていた。

お峰の行く手に「苦界」をよむ「大つごもり」論にも「少女と主婦——あるいは、切り裂きジャック」事件と「たけくらべ」——にも感銘をうけた記憶があるのだが、高田知波氏の「其の上人がためしにも同じく」——「軒もる月」を読む——はなぜか納得できなかつた。物語の二組の夫婦はいずれもへ入り婿、「殿」は男子不在の桜町家にへ譲渡された華族の子、といった氏の緻密なよみは推理小説を読むような面白さがある。ただこの物語には結婚した主人公のもとへ、一年以上も熱烈な恋文を書き送るといふ異常な設定があつて、へ書き綴ることそのものが目的化（関札子）したといふ読解がある。高田氏は「殿」の「恋愛」渴望には、透谷「厭世詩家と女性」のへ恋愛イデオロギーの影響があるとみている。しかし、現在の妻との生活はそのまま、かつて寵愛した小間使に延々と恋文を書き、送り続けるだけという近代恋愛主義者とは何者だろう。「厭世詩家と女性」は元来、近代恋愛宣言であつて同時に、至高の「恋愛」の「結婚」による敗滅の論であつて、「恋愛」とは「自らの意匠を愛する」とことという苦い覚醒がある。「殿」がもしそこまで透谷を受容したとすれば、恋文を書き続けること自体あり

えない。袖には自分を「殿」ご寵愛の犬猫と同視するような極端な身分卑下があり、寵愛を受け続けること（妾になる意）は「我れはさて、殿をば浮世に誹らせ参らせん事くち惜し」という古風な婦徳がある。こうした女性が「殿」の「恋愛」觀念に触れへカルチャーショックを経験したとは考えにくい。語り手は「殿」の「涙の文字」を文覚上人荒行の大滝に重ねるといふ無理をして自己超脱をとげる袖の変貌のドラマを語る。そこに「殿、我良人我子、これや何者」という、一切放下の宗教的境地が顕れる。透谷「心機妙変を論ず」もまた文覚の劇的変貌を重視した論で、それは袈裟御前殺害の瞬間だつたとされ、このほうが説得力がある。袖の心境は当然文覚に比すべくもない不安定な高笑いと共にある。「何物ぞ俄に、その空虚なる胸にひびきたると覚しく、女子はあたりを見廻して高く笑ひぬ」語り手は変貌の不可思議な瞬間を語りえず、主人公の内側へ入ろうともしていない。高田氏のように袖は激しい内面劇を経てへ心強き女子」として誕生したとは思えなかつた。

残念なことに、荒井とみよ「こと葉の自由」とはなにか——『通俗書簡文』をめぐる——、千田かをり「水の上」日記を読む——テキストとしての一葉日記（3）——など少し問題にしたかつたが、余白を失つてしまった。

清水 孝純 著

『笑いのユートピア』『吾輩は猫である』の世界

赤 井 恵 子

『吾輩は猫である』（以下「猫」と略す）について単行本一冊が書かれる、というのは既に例がある。例えば高橋康雄『吾輩は猫である・伝』（北新社、一九九八年三月）は本文三〇九頁という分量だった。本書は、さらに大部の本文四三三頁という量である。著者の初出發表論文を以前から追いかけて読んでいた。いずれ一書にまとめられるのだろうと思っていたが、やはり本書を手にした時あらためてその執筆量に驚かされた。

量のわりに読みやすく、よどみのない文章だと感じた。しかし書名にある「ユートピア」に当初覚えた違和感は、本書を幾度か読み返したあとでも解消されないうままである。著者によれば本書は「猫」の世界を笑いのユートピアととらえる試みである。著者は「日常的現実的空間が笑いと一種のスウィッチによって反転したところに」「笑いのユートピア空間」が生じる、と言う。「ユ-

トピア空間とは現実の世界それ自体を反転させたところに出現するのであり、寄席のように、現実世界の中に組みこまれている空間ではないからだ」と、著者は現実世界の「反転」「変換」「転換」を幾度も強調している。

本書を評するための着眼点として、次の二つが挙げられる。一、「猫」を論じるためにユートピア概念を用いることの有効性。二、「猫」の一章ごとに論じる方も一章を当てて書いてゆく、という試みは、「猫」の中の「さまざまに笑いの手法」を精緻に説明し、「笑いのユートピア」の創られ方、展開のされ方を明らかにするため、とのことであるのなら、その細部の読みについての検証。

先ず一。これについては、トマス・モアの『ユートピア』一書すら読んだことのない私などは何か言えることがあるのだろうか、と思わず立ちすくんでしまう。しかし西欧思想史においてユートピア

思想とその研究といえは、さぞかし膨大な蓄積があるのだろうかとは、そんな私でも想像できた。

しかし、著者がユートピア概念の定義に関して費やした頁数は、第一章の初めから一〇頁余り、用いた文献の数も少ない。「定義」として引用されているのは、川端香男里著『ユートピアの幻想』の中のカール・マンハイムの定義だけである。自身が用いるキーワードの定義に、あまり時間をかけていない。「ユートピア」が『猫』を分析してゆくための有効なことばである、と読者に確信させるための作業が、はなはだ少ないのである。それではこの「笑いのユートピア」なる語は、作品全体に当てた比喩のことばに過ぎないのか、ということになってしまふ。

もともとユートピアは定義しにくいものなのだろう。また著者は早い段階(第一章)で『猫』の笑いのユートピア世界が「東洋的ユートピアの変種」であると述べているので、西欧思想史におけるユートピア概念について長く言及することなど必要ないのだろう。しかし「論」としてそれでよいのであろうか。

関野野「ユートピアという一つの伝統」(ルイス・マンフォード「ユートピアの思想的省察」月森左知訳、一九九七年六月、新評論)に寄せた解説の中で、関はユートピアという語に関して長らくおこなわれてきた「ずさんな見解や言葉づかい」についてこう書く。「近世以来ユートピアという言葉が余りにもポピュラーになってしまったために、架空の望ましい国家や社会を描いた文献なら何でもユートピア文学とみなされることになった。その結果、中国の古典に登

場する桃源郷といったものまでユートピア文学に分類されてしまいい、ユートピア思想とはいかなる思想であるのかが不明になってしまった。先に述べたユートピアという語の通俗的な意味合いも、この混乱から生じたと言える」。

この混乱から脱却する唯一の方法として、ユートピアなる語を創出したモアの「ユートピア」を尺度としてユートピア思想を理解する必要を、関は説く。政治家でもあり思想家でもあったモアが「ユートピア文学という文学の新ジャンルの創始者となったことは、その政治思想と不可分に結びついている。そしてこのモアの思想と響きあうものももしそこにあるならば、もちろん我々は古代や中世の、あるいは中国や日本のユートピアについて語っていない。しかし架空の理想国を描いた文献なら何でもユートピアということにはならない」。

関に依ればモアの「ユートピア」は、いわばルターとマキアヴェリの二人への「回答」だったということだが、それはともかく、清水書のユートピアなる語の用い方が関の言う「通俗的なことばづかい」に近いものになってはいないか。

こう言うのも、定義しにくいものを慎重に自ら定義した「現代日本の開化」における漱石を思い出すからである。明治期の文明史論でも「文明」「開化」の定義から始めるものはそう多くない。福澤諭吉と夏目漱石はその点稀有な例である。

また私は、「無何有郷」^{むいかうきょう}Ⅱ「太平」Ⅱ「ユートピア」と結んでしまうことにためらいを覚える。本書四一八頁「猫の死に際しての工夫

は、心機を一転して、苦悶から太平を獲得したこと、といえるだろう。ひとつの現実が、その思想のスウィッチを切り換えることで、全く反転して、そこに絶対愉楽の境地をえる、「いわば死のユートピア世界」。猫が「無何有郷」ということばを用いたことからこの分析が施されたのだが、それにしても「無何有郷」（岩波新全集の注解によれば「莊子」を典故とする）と「ユートピア」とが、それぞれに持つ背景の違いというものを、私ならそう簡単に乗り越えられないのである（ちなみに漱石の“A Translation of Hojio-ki with a Short Essay on It”の中に“Let a Bellamy laugh at this poor recluse from his Utopian region of material triumph”とあり、this poor recluseとは鴨長明のこと。Utopian regionはこの場合否定的な意味で用いられている（岩波新全集第二十六巻））。

そして先述の二について。細部の読みについても疑いを持った所が多くあった。例えば第四章末尾、鈴木君が苦沙弥の正面攻撃と迷亭の舌鋒に悩まされた挙句、ようやく話題が金田事件を離れてほっと一息ついて述べたことは、「相変らず無邪気で愉快だ。十年振り始めて君等に逢つたんで何だか窮屈な路次から広い野原へ出た様な気持がする」云々だが、これなどは「胡魔化し」のうまい鈴木君の、その場を辞するための間に合わせのせりふだろう。本書では、鈴木君が臥龍窟のユートピア空間の中に入ることによって変貌を遂げたと言えるかもしれない、とされている。かなり無理のある解釈だと思ふ。

また第五章、泥棒事件の翌朝、巡査が帰ったあと、盗難告訴状を

書くべく、苦沙弥と細君が問答する場面についても同様である。この場面に関して、著者は先ず「苦さ」を感じると言う。「夫婦の心の軋みというもの」、「そのような衣類の細細こまこましたものにまで神経を配る夫というものの心のけわしさ」——これもまた的はずれな解釈である。

帯を締めていない細君を見て、気の回る夫なら最初に「もしや普段着の帯まで盗られたのか」と言うであろう。しかし先生はそんな男ではない（むろん、だから悪いというわけではない）。それに世間見ずの先生であつてみれば、女の衣類の値段など知っているはずもない。居高丈なものの言い方は今に始まったことではないし、官憲には弱い先生の、警察に出す書類を書くのだからという気の張りもある。このあと迷亭に「君は巡査丈に鄭寧ていせいなんだから困る」とからかわれ、その他何だかんだで学校を休んでも警察署に出頭してみせると意地を張った先生なのだから（猫「九」）。

本書では「苦さ」の次に「面白さ」について、細かな分析が施されているが、そこにも腑に落ちない叙述が多くあった。「あとがき」に「状況状況に応じた笑いの変貌を捉える」とある。人物の発言を、前後の章をつないだより大きなへ文脈ぶんまわにおいてとらえるということとは、だからあまり必要でないのか。著者は「いわばまるごと作品を、それも通時の軸に沿って読解する」と述べているが、その「通時の軸」とは、一章ごとのものでよいということなのか。しかしそれにしても、登場人物像、その「人格」などについての言及は、本書に存在するのである。それらが私には場当たりのなものに

感じられるのは、著者と私との読み方の差に依るらしい。本書の人物解釈の中でもっとも疑問に感じたのは迷亭像だった。

最後に一つ。本書においては作品別研究史への言及が殆どない。例えば、「ポリフォニー的世界」という語は、本書の第三章八六頁で初めて用いられ、第四章「太平の逸民」空間のポリフォニー的拡大」と章題にも用いられる。しかし「ポリフォニー」を用いるなら、板花淳志「吾輩は猫である」論——その多言語世界をめぐり——」（『日本文学』、一九八二年一月、のち『日本文学研究資料叢書夏目漱石Ⅲ』有精堂、に収む）への言及は必要である。

（二〇〇二年一〇月二二日 翰林書房 四二七頁 本体六〇〇〇円）

伊藤 忠著

『作品と歴史の通路を求めて』
〈近代文学〉を読む』

森 田 健 治

〈歴史〉に対して〈文学〉テキストはどのように存在するのだろうか。無論、現在の研究の趨勢からすればこうした問いかけ自体が問題視されようが、だからといってそれに対する〈正答〉があるわけでもない。たとえば、〈文学〉というジャンルをどのように設定するのか、また、〈歴史的〉出来事に関係する言説と〈文学〉テキストとして認定されてきた言説との境界をどのように考えるのか、といったような問題についてすでに多くの議論がなされているが、実践的な面においても理論的な面においても依然として大きな課題が存在するのは確かであろう。だが、こうした〈文学〉と〈歴史〉の問題を、『作品と歴史の通路を求めて』の著者は正面から言及しているわけではない。「まえがき」において、「作品が作者の考え方や生き方に収斂するものでない以上、歴史との通路を求め、歴史的な言説や文脈のなかで、作品世界の全体像を明らかにする」という

意図が述べられているが、本書において言及されているのは、〈文学〉テキストと「歴史的な言説や文脈」の〈通路〉の問題そのものよりも、物語世界における人物同士や人物と社会、そして人物と〈歴史的〉出来事との〈通路〉の問題であるように見える。しかし、そうした物語世界における〈通路〉のありよう、そして、そうした〈通路〉の意味を追究するそのありようは、確実に「作品と歴史」の〈通路〉それ自体の問題を仄めかしているのではないだろうか。

たとえば、「〈過失〉をその過去にもつ夫婦が住む「崖下の家」と「廣い世の中」を繋ぐ唯一の〈通路〉」としての「無数の〈物音〉」が、その夫婦の前に「突如『暗い社会』の侵犯を誘引した」こと、あるいは、予想外の「泥棒事件」を「一つの〈機縁〉」として「頻繁な〈交通〉が開」かれることの意味を考察した「聴覚空

間の中の劇——『門』論——」は、〈通路〉／〈交通〉の形成をあくまでも主体の意思の〈外部〉における出来事としてとらえているように思われる。「崖下の家」と「廣い世の中」を結ぶ〈通路〉が何をもちたらすのか、そして、〈通路〉によってつながれている「廣い世の中」から何がもちたられ、どのような〈交通〉を強いられるのかは、物語世界の主体の「内面」の彼岸にあるということだろう。また、「挑発する〈境位〉——『草枕』のヒロインを読む——」においても問題になるのは、「了解不能の〈他者〉」たる女を「自ら了解」しようものとして表象し内面化しようとしながら、結局は、「内面にその〈像〉をついに結ぶことが出来ない」男のありようにあるはずだ。女との〈交通〉が内面化への欲望を喚起しながらも、そこには決して内面化し得ない〈外部〉があるという図式をここに見出すことができる（こうした問題は、『行人』論への試み——「女景清」の〈世界〉——」においても言及されている）。

そして、こうした〈通路〉／〈交通〉といった主題は、『破戒』を論じた「丑松の父——『破戒』の隠れたイメージ——」においてより顕著であろう。この論文の主軸は、被差別民の父とその子の「内面の劇」にあるといえようが、注意すべきなのは、伊藤氏の読解によって見出されるのが、「戒」の意味が父と子ではまったく異なる意味を持つことである。「その言葉（決して自白るな——引用者注）は自らに向けた〈戒〉でもあったのではなからうか。〈夢〉を託せると頼んだ〈人物〉と〈状況〉に丑松の父が〈告白〉衝動を抱いたとしても無理はない。しかし、〈告白〉の衝動が

行為にまでおよび、その瞬間差別する〈論理〉の侵襲を受けたとしたら、『決して自白るな』とは血を吐くような父の悔恨を語る言葉の意味するだろう」という読解から見出しうるのは、父の言葉「戒」が「父の悔恨」を内包するものとして子に譲渡されていないということ、つまり、父と子の内面は、この「戒」を媒介／〈通路〉として連繋するのではなく、両者における「戒」をめぐる位置は決して同じではないということだろう。それは、子の思い描く起点／終点に〈通路〉が存在するわけではないことを意味する。事実、伊藤氏は子の内面に響く父の声をさして、「それはあくまで丑松の〈内面の劇〉に登場する父の声に過ぎない」と述べているはずである（その点を踏まえていえば、「破戒」ばかりでなく、「盗」視のなかの「私」——「性に目覚める頃」論——、あるいは「火垂るの墓」論——おぞましい〈劇空間〉の隠れた作者——」といったような論文において扱われているのが、父の不在をめぐる物語であり、そこで問題になるのは父と子の〈通路〉のありようであるといえるだろうし、そうした問題は、『破戒』や「五勺の酒」でも言及され、さらに「非日常」からのまなざし——中野重治「交番前」をめぐる——」においても言及される〈天皇〉とも関係するはずである）。

そして、こうした物語世界に対する読解の枠組みを踏まえたとき、伊藤氏の著書における〈歴史〉の問題がはつきりするように思われるのだ。再び『破戒』をめぐる論考にふれるならば、伊藤氏は「飯山」に「北信民権運動のメッカとしての歴史」を重ねあわせ、さらに明治四年の解放令をつなぎ合わせることで、父の「戒」と

「歴史」のあいだに「通路」を見出し、その「通路」を共有し得ない父と子との差異を浮き彫りにすることになる。それゆえ「歴史」の「通路」は、子を父の「戒」からさらに疎外する領域にほかならないのだが、しかし、父もまた、「解放令」に対する幻想」のなかに取り込まれていたとするならば、「歴史」の「通路」は父の意思を超えたところにおいて存在していたともいえるはずだ。その意味で言えば、中野重治「五勺の酒」をめぐる論考「犯した罪のディスクール——『五勺の酒』論——」は、「破戒」をめぐる論考と強く連繫するだろう。「南京陥落」という「歴史的」な出来事との間に「希望と願望」を見出してはいたはずの主体はその実、「南京陥落」という「歴史的」出来事それ自体の「欠落」のなかにいたと指摘するこの論考において大事なのは、「歴史的」出来事（南京陥落）の「欠落」のなかに存在しながら、主体の内面とは別の領域に「歴史」の「通路」が切り結ばれてもいるということであろう。なぜなら、「歴史」の欠落」をもたらし、主体を「宮城前」での「堤燈振り」に赴かせた「力」それ自体もまた「歴史的」なものなのであり、主体は「歴史」の「通路」とも確かに繋がっていたと言い得るからだ。主体によつて見出される「歴史」と主体を媒介するはずの「通路」は、あくまでも主体の「内面の劇」のなかで形成されたものでしかなく、それゆえに主体は内面の「外部」にある「歴史」を「欠落」させることになる一方で、主体の内面の「外部」において、主体と「歴史」を切り結ぶ「通路」も存在している以上、「通路」自体が「欠落」しているわけではないということだ

（さらにいえば、主体と「歴史」を切り結ぶ「通路」は、一つではない。「ハル子の物語」隠喩としての「水」——「風雨強かるべし」論——）は、「転向の時空」という「歴史的」出来事との「通路」だけではなく、「家」を巡る「歴史」の「通路」それ自体が、家族の中で異なること、そしてそれが「内」意識と「外」意識の対立の構図」を形成するありようを論じることで、複数の「通路」の並列性を考察しているといえる。

だが、このように見出される「通路」のありようから翻つて再度伊藤氏の著書のみならず、大きな問題点も浮き上がるようにみえる。「作品の表現的構造に関わる限りで、歴史的状況を大胆に読み込」むという意図（「あながき」）を、論考の中に反復されるような「通路」の「外部」性となぎ合わせるとどういうことになるのか。無論「文学」テクストに「歴史」の「通路」を見出すのは、論者の読解の枠組み／資料の収集／資料との整合性などを考慮した主体によるものだろう。だが、そのとき、テクストとその主体、あるいは資料とその主体との間にある「通路」は、どのように存在するのであろうか。どこを起点としどこを終点とするのだろうか。かりに「作品の表現的構造に関わる限り」という限定をつけるにしても、「文学」テクストの「構造」から出発する／起点とするという身振りは、逆に「歴史」から切り開かれていくかもしれない「通路」の存在を「欠落」させ、「文学」テクストの「表現構造」の「歴史」性それ自体が論者の「内面の劇」に収斂することになりはしないだろうか。そしてもし、主体の「外部」にこそ「通路」があるとすれば、「作品と歴史の通路を求める」ということは何を意

味するだろうか。本書は、「Ⅰへ日露戦後」の想像力」／「Ⅱへ戦前」 という時空のなかの感性」／「Ⅲへ太平洋戦後」のディスクリ」という章題のもとに論考を収めているが、そうした章題のもとに「作品」を位置づけることの意味、そしてそうした布置のもとに見出される「作品と歴史の通路」とはどの地点において存在するのかといった問題を、今度は正面から論じて欲しいと思う。少なくとも本書から見出せる「通路」をめぐる問題系が、それを要請しているといえるはずである。

(二〇〇二年一〇月二二日 翰林書房 本文一九七頁 本体二八〇〇円)

山崎 一穎 著

『森鷗外・歴史文学研究』

これまでどうかつにも思い至らなかつたのだが、実は自分の文章が山崎氏の文体の影響を受けていたこと、少なくとも影響を受けたそのひとつであることに、今回はじめて気がついた。本当の意味での独自の文体といったものなどより存在せず、所詮はさまざまな文体の巧妙なパッチワーク（といって悪ければ都合よく総合といつてもかまわないが）でしかあり得ないことは承知していた。また、本書に収められている論文はそのつど読んではいた。だが、本書を通読するまでそのことに気づかなかつたのである。

思えば、氏が『森鷗外・歴史小説研究』、『森鷗外・史伝小説研究』（いずれも桜楓社）をやつぎはやに上梓した八一年から八二年にかけての時期に、ちょうど研究を志したのであつた。これらの書が直接のきっかけとなり研究をはじめたというわけではないが、鷗外のいわゆる史伝を当面の研究対象と定めたとき、氏の仕事が大きな

柴 口 順 一

導きとなつたことは否定すべくもない。というのも、本当の意味での鷗外のいわゆる史伝研究は、氏以前にはなかつたからである。『史伝小説研究』の「跋」で氏自身述べているように、「鷗外史伝の網羅的研究は、鷗外研究史上本書が最初」だったのである。氏以前には、鷗外の史伝研究はすなわち『渋谷抽斎』研究だつたといつてよく、以後も基本的にそのことに変わりが無い。『都甲太兵衛』や『鈴木藤吉郎』といった作品はいうに及ばず、『伊沢蘭軒』や『北条霞亭』もまともに論じられることはほとんどなかつたのである。氏の研究が『寿阿弥の手紙』や『小嶋宝素』といった作品からはじまり、最後に『渋谷抽斎』論が書かれていたことにも注意すべきであろう。

「網羅的研究」といえば、本書（に収められた諸論文）に至つて、史伝のみならず歴史小説を含めた鷗外のいわゆる歴史物に関する氏

の「網羅的研究」が実現したことになる。前二著のあいづく上梓のことを考えれば、あるいは、きつちりと三ヶ月おきに年四回発行されていた驚異の同人誌『評言と構想』に毎回欠かさず論文を発表していたかつての氏を考えれば、前二著から二〇年をへだてての本書の完成はやはり失速の感をぬぐえない（もつとも、その間氏は鵬外に關する三冊の評伝を書いている）。しかし、その仕事の先導性と大きさを思えば、速度など何ものであろう。速度ばかりが要求される昨今のさまざまな状況には、もううんざりというほかはない。すでに反論する気さえ失ってしまったが、氏にことよせてあえて一言いうならば、山崎氏の文体は速度を求めないとてもいい放つしかない。この件についてもし誰かに責任があるとすれば、それは、いわばそのような速度にもかかわらずまんと氏に仕事を許してしまった過去及び現在の研究者にあるというべきであろう。

本書は第I部から第IV部までの四つに分かれている。そのうちの第I、III、IV部が、従来の研究方法とは多少異なっていると氏は述べている。要するに、第II部のみが従前の方法によるということになるのだが、そこには、いわゆる歴史小説のうちでそれまで論じられなかったものを中心とした各作品論が収められている。ここにおいて、歴史物に關する氏の「網羅的研究」がほぼ完成したことになる。加えていえば、次の第III部において「大塩平八郎」と「栗山大膳」が論じられることによって完成を見る。ここではそれぞれの作品が対象とした、あるいは作品の背景となった、いわゆる天保騒動と黒田騒動を題材とした他の諸作品を系譜的にたどるなかで、それ

ぞれの作品が論じられている。従来の方法と多少異なっているとはそういうことであり、氏自身も述べているように基本的な方法に変化はない。その方法とはいうまでもなく、「資料（史料）と比較対照しながら分析する研究方法」（本書「跋」）である。第IV部も、作品との直接的な「比較対照」を行なっているわけではないが、基本的にはいわゆる史伝に關するさまざまな資料についての研究である。第I部の「歴史叙述と文学」という一論だけが、他と少々ちがっているといえはいえるかもしれない。明治初期から鵬外（の史伝）に至るまでの、主として歴史叙述に關する史的概観を試みたものだからである。

氏の研究方法は一貫している。というよりは、一貫しすぎているというべきかもしれない。それは、鵬外の歴史物という、対象とした作品の性質にもよるのであろう。ただ、ひとつ気にかかるのは、最初の著書『歴史小説研究』の「跋」において、氏は次のように述べていたことである。「私も早や四十代半ばに差し掛かって今の方法で今後研究を進めることに危惧を感じている」。

「今の方法」のいかなる点に「危惧を感じて」いたのかはわからない。その「危惧」が、あるいは氏の仕事を遅らせた一因かと思われぬこともないのだが、しかし、その一貫した方法の上にはじめて氏の仕事を実現したものであることは疑うべくもない。「資料（史料）と比較対照」することによって明らかになった事実だけをとつても、貴重なものが少なくない。本書所収の論でいえばたとえば、『佐橋甚五郎』の典拠とされていた（鵬外自身もそう述べていた）

『続武家閑話』は『続武家閑談』の誤植であり、異なる二書ではないことが明らかにされた。また、『寒山拾得』に登場する役人「閭丘胤」の姓を鷗外は「閭」と呼んでいるが、正しくは「閭丘」であるという指摘に対して氏は、鷗外はそのことを承知していてあえてそうしなかったのだという。原資料の「閭丘胤」「胤」「胤大夫」に、鷗外が朱筆で傍線を引いているからである。「複姓の閭丘さんよりは、中国に多い単姓の閭さんの方が読者に自然であると考えたからであろう。」というのが氏の判断である。鷗外が実際に使用した資料にあたり、傍線や書き込み等を調査することによって明らかにされたこともまた少なくないのである。

本書の「序」において氏は、鷗外の歴史小説研究のあり方をはじめ、歴史と小説、あるいは歴史叙述に関する問題、さらには今後の歴史文学の研究方法について記している。ごく簡単に述べられているだけなので、それを捉えて拙速に判断することは控えるべきなのかもしれない。しかし、ここでのものいいに先に触れた氏の「危惧」があらわれているといえないこともない。全体としていまひとつ歯切れが悪く、中途半端の感をぬぐえないのである。研究の最後をしめくくる書の「序」であることを考えるに、その感はいっそう深い。それは、使用されていることばの混乱、というのがいいすぎならば、一部の不用意な使用にも関わっている。もとをいえば、三冊のそれぞれの書名にもなっている「歴史小説」「史伝小説」「歴史文学」も、特にそれぞれの書の内容と照らし合わせ、かつこれらの三つを並列して眺めてみれば疑問がないわけではないのである。

もつとも、それぞれの書名は便宜的につけざるを得なかったという側面はあったであろう。だが、書名に限らず、それらのことばが全体としてやや不用意に使われていることは事実であり、それはそれらのことばだけには限らない。もちろん、そのことは氏の基本的な認識のあり方や研究方法と関わっていることはいうまでもない。

だが、「序」においてひとつ注目すべき点がある。「歴史文学が歴史と小説との結合あるいは融合であるならば、歴史の意味について考えなければならぬ」。氏はそのように述べ、まずはロラン・バルト、ヘイドン・ホワイト、ピーター・ゲイに言及する。実はこの引用部分のものいにも、「歴史文学」がはたして「歴史と小説」の単なる「結合あるいは融合」といってよいかどうか、そして仮にそう「であるならば」、なぜ「歴史の意味について考えなければならぬ」とのかといった率直な疑問が浮かぶ。ここにもことばの使用や認識のあり方の微妙なずれを感じざるを得ないのだが、それはさておき、先の三者に触れた後、氏は最後にカルロ・ギンズブルグ『歴史・レトリック・立証』に言及する。歴史記述を主としてレトリックあるいはナラティブとしての側面から捉え、主観性を排除することの不可能性を強調する前三者に対して、ギンズブルグはそれらに一定の妥当性を認めつつも批判的立場をとる。「わたしたちは注意の眼を最終的成果から準備的諸段階へと移行させ、調査研究の過程、それ自体の内部にあつて経験的データとナラティブ上の束縛とのあいだでとりかわされている相互作用を探索してみなければならぬ」(傍点は原文のまま)というのがその主張だが、氏が最終的に

支持しているのもこのギンズブルグの立場にほかならない。かねがねホワイトを中心とした人々の主張には不満があり、時をおかず翻訳されたギンズブルグの書には大きな関心を寄せていただけに、氏の言及には意を強くしたと同時に、氏の基本的な考え方を改めて確認したのである。

(二〇〇二年一〇月二五日　おうふう　三七九頁　八八〇〇円)

山田 俊治 著

『大衆新聞が作る明治の〈日本〉』

菅 聡 子

山田俊治著『大衆新聞が作る明治の〈日本〉』は以下の十章よりなる。

- 序章 大衆新聞『読売新聞』の出現
- 第一章 『読売新聞』の位置
- 第二章 明治という国家の支配の網目
- 第三章 識字社会の様態
- 第四章 〈事実〉の時代
- 第五章 物語としての新聞
- 第六章 読者の欲望の行方
- 第七章 懲戒する新聞
- 第八章 スキャンダラスな眼差し
- 終章 表象のなかの近代社会

この著述がなされる背後にどれほどの資料の調査が、具体的に

は、初期新聞雑報記事の渉獵・分類・分析があつたかと思うと、まず著者への敬意を表したい。

明治初期の「読者としての民衆を考慮すること」をその目的として掲げる本書の特長は、「民衆」がいかにも「国民」として教化されていくのか、その様態を、西南戦争以前の初期「読売新聞」の雑報記事を通して、発信・受信の双方向から再現している点にある。従来、「読売新聞」について言及されるのは（ことに文学研究の領域においては）、明治二〇（一八八七）年、高田早苗が主筆に、続いて坪内逍遙が文芸主筆として迎えられ、一方小説欄では尾崎紅葉が登場する明治二〇年代以降、まさに「読売新聞」が〈文学新聞〉としての色彩を強くした時期についてが多かつたように思う。対して、著者が注目したのは創刊号に掲載された社告に見られる『女童のおしへ』という教化性」と「俗談平話」という「文体」である。「女

「童」とは「未熟な読者を総称する象徴的な呼称」であり、彼らこそ対象とするところに初期「読売新聞」の特長がある、とするとき、想起されるのは『小説神髓』（明治一八―一九）における読者の規定である。『神髓』は、近代小説の読者として「具眼の士」「大人」を想定し、「婦女富豪」を小説の読者から排除した。一方、「文明開化期に動きはじめた政治と民衆の関係」は、「女童」を対象とする雑多な記事にこそ見出されるのであって、著者はそこから「小新聞がもった政治性」を検証していく。すなわち、彼らを対象に提供される記事、なかでも東京府布達への解説、立憲政体の詔の解説といった記事に明らかで、「分かるやうに」という翻訳姿勢にある。

「教化性」はたやすく「統治の言語」と連動する。本書第二章「明治という国家の支配の網目」、第三章「識字社会の様態」では、明治初期の新聞がいかに「教化装置」として機能していくか、そのプロセスが種々の雑報記事の分析を通して明らかにされていく。一見、雑多な情報集積であるかのような雑報記事は、実は人々の「生活の細部」にまで行きわたる「新たな統治の視線」の代りであり、さらにその「教化」の範囲は日常のレベルから「国家の意思」にまで及ぶ。同時に、第七章「懲戒する新聞」で論じられるのは、新聞にその「悪行」を報じられることを通して、「社会的な制裁」が生じるという事態の意味するものである。すなわち、新聞は報じられた当事者の「周囲に差別的な視線を作り出すことで、悪行を抑止する勸善懲惡のメディアとなる」。そして、読者が「自ら

を排除するかもしれない『世間』を新聞によって内面化」する、という視点が本書のそもその問題意識と接続すれば、「時代の規範を内面化した」「模範的国民」が作り上げられる、そのプロセスが前景化されることになる。著者は、日常の雑多な出来事の隘路に埋め込まれた「統治の視線」を的確に抽出し、明治初期の民衆を取り巻く新しい権力の形が、新聞というメディアによってどのように実効作用を及ぼすか、具体的かつ明確な叙述を行っており、説得力に富む。

また著者は、本書に先立つ「明治初期新聞雑報の文体——現実というへ制度」をめぐって（『国文学研究』平成二・三）「現実感」の修辭学的背景——明治初期新聞雑報の文体（『日本近代文学』平成三・一〇）の論考において、「小新聞雑報のへ物語」的な文体」をめぐる詳細な分析を行っているが、本書に照らして言えば、第五章「物語としての新聞」、第六章「読者の欲望の行方」等で事件記事の「物語的に消費される可能性」を指摘し、雑報記事から続き物や実録ものへの展開を跡づけている点に、小説ジャンルとの交錯が見出される。だがむしろ興味深いのは、新聞が提供する話題によって見知らぬ同士が会話をかわすことができる、といった趣旨の投書から、「小新聞は、共通の話題を消費するような関係の下、共同化された大衆を創出するメディアであった」、そして「いわば表象の次元で結びつけられた関係を、人々は世間として生きることになつた」ことを読み取っていく、著者自身の視線である。まさに「読者としての民衆」の様相が、数々の投書や、それを媒介に透かし見ら

れる人々の日常のなかで、鮮やかに再現されている。

このような「読者」の一語に重なり合う多様性に比して、気になるのは「記者」という表象の曖昧さである。著者は、「読者」に照応する概念として「記者」の語を採用している。発信者―受信者、記者―読者という双方向の想定をなしたからこそ、たとえば第一章「読売新聞」の位置で明らかにされたような「読者と記者の応答関係」の生成の場としての新聞を捉えることが可能となった。そして、「俗談平話」という文体がそのような関係を保証していたことも、著者の明快な分析によって明らかにされている。しかし、ここで言う「記者」とは何者なのだろうか。著者自身が指摘するようにな、「当時の新聞は、読者の投書や、契約した売捌所などが報知人となつて知らせてくる地方の事情などで、紙面を補っていた。確認できる範囲ならば自社の探報者が取材しただろうが、それでも探訪者が記事を書くわけではなく、実質的には編集人である記者が机上で紙面を作っていた」。本書の叙述においては「事実を伝えようとする記者の意志」「露骨に犯人たちを批判する記者という主体」といった表現が散見されるのだが、引用部分で著者自身が指摘するような、様々な意向と身体の交錯するはずの発信者が、むしろ「記者」という呼称のもとに一元化されているような印象を受ける。すでに固有名詞として明らかにしている編集人たち、無名の探訪者たち、そして「読売新聞」というメディア自体の固有性。本書の特長は、読者の側に視点を置きつつ、情報を受容することを通じて民衆がいかに「国民」として教化されていくのかを考察した点にある

が、同じ事態を、発信者の側、すなわち「記者」の側にある葛藤や争闘の視点から描き出すとどうなるのか、新たな関心が導かれる。なぜなら、「記者」もまた「国民」であり、その自覚が獲得されていくプロセスは、「読者」のそれとは非対称であることが予測されるからである。

本書の具体的事例に基づく考察は、小新聞をめぐる従来の紋切り型の文学史叙述が、再考を迫られる時機にきていることを示唆している。メディア研究やカルチュラル・スタディーズの知見が積み重ねられている昨今、待たれるのは文学史叙述の再編成ではないだろうか。顧みれば、日本の文学史叙述は、国民国家の形成の過程のなかで、まさに「日本」という表象の希求とともに始まったと言えよう。とすれば、ポストコロナアルやマルチ・カルチュリズム、知のグローバル化といった新しい局面を迎えた現在、文学史叙述もまた、国民国家への批評的まなざしによって体系的に組み替えられる必要がある。もちろん、これまで積み重ねられてきた個々の事例に対する種々の考察が明らかにしているのは、このような「体系的」という安易な発想に対する批評性そのものであることは承知している。しかしながら、一方で、従来の文学史叙述が無批判に受容され、再生産され続けていることも事実である。本書は、明治初期の小新聞という分析の対象をこえて、文学史の把握そのものへの新たな視野を開いてくれるような、刺激に満ちた一書なのである。

飛ヶ谷 美穂子 著

『漱石の源泉 創造への階段』

小 倉 脩 三

本書は過去十五余年にわたる著者の漱石文学の源泉に関わる論考をまとめたものである。本書の特色は東北大学の漱石文庫の蔵書を精査し、またこれまでの比較文学研究の成果をふまえつつ、より作品そのものに踏み込んだ解釈を展開しようとしている点にある。源泉をめぐってはこれまでも主として英文学者などによる研究が多々あるが、一般に関連する事実の指摘に止まっている例が多い。著者の果敢な姿勢を何より評価するものである。

第一部「初期作品におけるラファエル前派文学の投影」、第二部「ジョージ・メレディスと「人工的感興」」、第三部「受容から創造へ——深化する位相——」、及び、資料編、第一部「漱石旧蔵メレディス作品 自筆書き入れ翻刻」、第二部「漱石自筆図書購入ノート翻刻」より成っている。

第一部は、「ラファエル前派」と関わりの深い詩人スウィンバー

ンの影響を論ずるもので、第一章「薙露行」とスウィンバーン詩集——「夢」のイメージアリーをめぐって——と第二章「風流な土左衛門」考——漱石・スウィンバーン・サツフォー——から成っている。第一章は、ギニヴィアがランスロットに語る「夢」の内容にスウィンバーンの詩「ヴィーナズ頌」の影響があるという指摘で、この部分の典故に関してこれまで決定的な論究を欠いていただけに興味深い。女の「髪」と「蛇」の交錯するイメージ、また、二組の男女が、「背徳の恋」「破滅の予感と罪」のもたらす「至福」という共通した状況にある点にかなり十分な説得力が感じられた。第二章は、「スウィンバーンの何とか云ふ詩に、女が水の底で往生して嬉しがつて居る感じを書いてあつたと思ふ。」と「草枕」の画工が語る、スウィンバーンの「詩」を探索するものである。ミレーの「オフィーリア」のモデルであるロゼッティの最初の妻エリザベ

ス・シダルとロゼッティ、スウィンバーンの奇妙な友情関係、夫の女友達をめぐる夫婦の確執とシダルの服毒自殺という三人をめぐるエピソードに始まり、『文学論ノート』にのこされた漱石のスウィンバーンの詩に関するメモから著者は、具体的に「水と死のイメージ」が結びついている作品六編を絞り込んでいく。六編を逐一検証した後、その「詩」をサッフォーを語り手とする詩篇「アナクトリア」であろうと推定し、そこから、那美の水死のイメージの背後には、オフィーリアとともに、ファホンという美青年に失恋してレウカスの断崖から身を投げたという伝説で知られる、古代ギリシヤの女性詩人サッフォーがひそんでいるのではないかと考える。論の進め方に手堅さがあり、また、サッフォーとの関連は、『三四郎』など他の作品の解釈にも幅広い問題提起が出来るように思われる。

第二部は、メレディスの影響関係が述べられている。その中には、第二章「蛇の女の系譜——『シャグバットの毛剃り』と『草枕』——と第三章「情け・憐れ・非人情——『ピーチャムの生涯』と『草枕』——」が興味深かった。両論考とも『草枕』の那美に「蛇の女」、「宿命の女」のイメージを重ねようとする点で、第一部のテーマに連なるものである。

第二章は、「草枕」第四章で、「画工が庭越しに二階の欄干に頬杖をつく那美の姿をかいま見て、思わず心に浮かべる英文の詩句に関するもので、この詩句の典拠がメレディスの『シャグバットの毛剃り』の第二章「美人バナヴァーの物語」にあることは、安田恭平氏等の指摘ですでに明らかなことであるが、著者はこの詩句が用いら

れている具体的な場面に着目する。村の乙女バナヴァーは恋人ズルヴァンに懇願して大蛇の宝玉を手に入れるが、ズルヴァンは蛇の毒牙に斃れる。この宝玉を身につけた者は蛇の女王となつて比類なき美貌と権力を得る代わり、彼女の接吻を受けた男が毎年一人ずつ死んでいくさだめだった。著者は、この詩句は、物語の発端部分、毒牙に斃れたズルヴァンがバナヴァーの腕の中でいまわの際にちくちくさむものであり、「まさに、「宿命の女」たるバナヴァーと彼女に魅入られて死んで行く男たちの運命を、予言するものであった。」として、画工はそういうバナヴァーを那美の中に見たと考える。第三章は、「草枕」第九章、「画工が「非人情」を説くくだりで、那美に「西洋の本」を日本語に訳して聞かせる、その「西洋の本」の典拠をめぐるものである。典拠がメレディスの『ピーチャムの生涯』であることは、前章同様旧知のことであるが、著者は那美と重ねられる女主人公ルネについて、より踏み込んだ考察を行っている。ルネは主人公の海軍士官ピーチャムが負傷してヴェニスに滞在中恋におちるフランスの伯爵令嬢である。ルネには定められた婚約者があり、悲恋に終わる。しかし、別れた後もとつぜん婚家を飛び出して、ピーチャムのもとに身を寄せるなどして主人公を惑わせる。著者は、ヴェニスで出会った時のルネがまだ十七才の可憐な少女であったにもかかわらず、ピーチャムと親しいカリソング夫人をして、*unconscious coquette*（無意識の蠱惑者）を看とらせ、また「卵のうちから蛇は所詮蛇なのよ」と警告させていることに着目して、のちに結婚後にルネがとるきわどい行動と合わせて、奔放だがどこか

痛々しい振舞いの、「宿命の女」のイメージを見いだしている。ピーチヤムに思いを残しながら親子ほど年の離れた財産家の侯爵と結婚したルネの侯爵に向けるまなざしと、「草枕」結末部、城下で随一の物持ちであった元夫の満州行きを見送る那美の「憐れ」の表情を対比する部分が特に興味を引いた。

第三部は漱石の新しい「二十世紀」の作家としての特質を探ろうとするものである。主として、トーマス・ブラウンへの関心をテーマとする第二章「ハイドリオタフビア、あるいは偉大なる暗闇——サー・トマス・ブラウンと漱石——」とヘンリー・ジェームズへの接近を論ずる第三章「現代精神」をもとめて——『黄金の盃』と『明暗』——から成っている。

第二章は、『三四郎』に引用されるトマス・ブラウンの著作「ハイドリオタフビア」(『壺葬論』)を検証して、十七世紀作家ブラウンこそ「現代」を超える存在と位置づける。現世の栄華や名声を求めるむなしさを説くこの著作は、広田先生その人の暗喩であり、「偉大なる暗闇」という先生の呼称も、その第二章の「偉大なる暗闇」の中にあり(『A great obscurity herein……』)に由来する、と著者は指摘している。ブラウン再評価が時代の新しい波であることの例証として著者は、ブラウンが作中人物の御者として登場する、E・M・フォースターの短編小説「天空の馬車」(『The Celestial Omnibus 1908』)をあげている。

第三章は、『文学論』における言及や、漱石文庫所蔵の『黄金の盃』の女主人公シャーロット・スタントに関する書き込みを手がかりに、

りに、漱石には新しい文学の進むべき方向として、人間心理の精細な解剖的観察力にもとづく記述への関心があったとして、その実践を『明暗』に認めようとするものである。主人公(津田/アメリカ)とその妻(お延/マギー)、および主人公のかつての恋人(清子/シャーロット)の三角関係というプロット、その関係に重要に関与する、吉川夫人とアシシガム夫人の配置、章による視点の男主人公から女主人公への移動など、著者は『明暗』におけるヘンリー・ジェームズの『黄金の盃』の影響を指摘している。確かに『明暗』における漱石の作風の変換は興味深いテーマであり、そこにヘンリー・ジェームズが関与したという指摘は興味をそそる。しかし、著者も指摘しているように、シャーロットが冒頭部から姿を現しているのに対し、清子は百七十六回に至って漸く姿を見せる。百八十八回をもって中絶という事実を考え合わせると、はつきり清子をシャーロットに対峙できるかどうか。シャーロットはアメリカゴとマギーの婚約を知って、わざわざアメリカゴの周辺に現れてくる人物であり、最初からマギー夫妻を脅かす存在として行動する。清子の役割にはそうした積極性は見出しがたい。しかし、作家の影響や受容は先行作品をまるごと受け入れるとはかぎらない。むしろ独自の受容の仕方こそ、単なる模倣に陥らない創造のあり方があるとも言えよう。今後のさらなる議論を待ちたいところである。

「資料編」には「漱石自筆図書購入ノート」の翻刻が収められている。英国留学中の明治三十四年十一月から十余年にわたって購入した洋書をその都度自ら書きとめたもので、筆者自身もすでに複写

したものを入力しているが、図書の入手時期、さらには読んだ時期を推定するうえで貴重な資料である。

円) 二〇〇二年一〇月三〇日 慶應義塾大学出版会 三三三頁 本体三二〇〇

大久保 典夫 著

『岩野泡鳴の研究』

著者の、岩野泡鳴に関する三冊目の書物である。三部構成をとっており、第一部が「伝記」、第二部が「研究と批評」、第三部が「岩野泡鳴周辺」という部立になっている。中心は第一部にあり、書物全体の約半分、二〇七ページがこの「伝記」に割かれている。

岩野泡鳴は特異な存在であり、日本の自然主義文学の欠点を強く持ちながらも自然主義の限界を打破する要素もまた強烈に併せもっていた作家である。しかし関心はもっぱら泡鳴の破天荒な行動とそれを題材にした五部作にのみ集中しがちで、泡鳴という人物全体への関心は薄かった。そうした状況下で作家主体泡鳴の研究を一貫して続け、今日まで泡鳴文学研究全体の牽引役を担ってきたのが著者である。

泡鳴の生涯はおおよそ四つに分けられる。第一期 幼年期を故郷の淡路で過ごしやがて東京に出て文学者を目指すまで。第二期 詩

鎌倉芳信

人として名を高めた後「神秘的半獣主義」を書いて小説家として出発するまで。第三期 樺太での事業に失敗して愛人とともに北海道を放浪した後帰京するまで。第四期 帰京後から晩年の活動まで。以上である。これに従ってこの「伝記」について見てみたい。

著者の最初の書物『岩野泡鳴』（昭三八・一一 南北社）では主に第一期、二期の伝記研究であった。二番目の書物『岩野泡鳴の時代』（昭四八・二 冬樹社）の伝記研究では四期までをカバーしたものの、三期四期はまだ見取り図の提示であった。そして今回の「伝記」で、第三期すなわち北海道放浪を経て帰京するまでを書いている。第三期は、泡鳴を捉える最も本質的な時期であり、また彼の文学の中核が形成される時期でもあって、「伝記」は、前二著に発表した実証的伝記研究をさらに深化発展させ実に詳細に書いている。別々に発表したものを「伝記」として一つにまとめたものだが、うまく

編集してあるので書き下ろしのような印象を受ける。ことに樺太、北海道における泡鳴の足跡が実に生き生きと描かれ、こうした言い方は失礼かもしれないが、読み物としても大変面白い。しかしその面白さを支えているのは、あくまで丁寧で正確かつ詳細な実証的研究である。今後の泡鳴研究はこの書に立ち返りその記述によって伝記的事実を確認しながら進められることになるだろう。

泡鳴という人物を捉えるには、ある種の危険が付きまとう。それは、五部作の主人公、田村義雄のもつ個性が作者泡鳴を巻き込んでしまうことである。田村義雄が示す圧倒的なりアリティに影響され、それを作者その人と見なしてしまう危険である。船橋聖一の『岩野泡鳴伝』（昭二三・一二青木書店）はそうした性格をもっていた。その点、この「伝記」では田村義雄と作者を峻別し、泡鳴の文章に描かれる人物一人一人について調査し、モデルとなった実際の人物像を泡鳴の造形した像と比較点検している。

例えば、泡鳴が「樺太通信」で描く樺太庁の役人小川小十郎——泡鳴は中川に付いて西海岸の巡察に同伴した——について、著者は猪瀬直樹著『ペルソナ 三島由紀夫伝』を踏まえ、中川には樺太庁長官平岡定太郎との確執があり、そのために中川には狡猾な意図があったとする。すなわち、泡鳴が中川の公務の巡察に同伴できたのは、泡鳴が「『東京二六新聞』に『樺太通信』を連載しているのを意識し」た中川からの「働きかけかもしれない。」と言う。ところが、泡鳴の楽天的な「樺太通信」にはそうした背後の事情は全く見えていない。このように「伝記」は、ルポルタージュの類にも検証

的に接し、書き手である泡鳴の見えていない部分をも明らかにしながら進められる。

同様に、五部作の一つ「放浪」に登場する様々な人物にも、それがたとえ周辺人物であっても可能な限り著者は実在の記録に当たり、その実像を探って小説の記述と突き合わせる。そうした上で、五部作は「作者じしんが体験ないし経験した事実を根底において、それらを取捨選択し虚構を交えながら物語化し」たものであることを立体的に証明してゆくのである。

著者のこうした作業は慎重であり丁寧であり、ために「伝記」の記述全体が均質で密度が高い。また信頼性も高い。ただ一カ所、泡鳴が北海道で道会議員田口源太郎の北海道土木勸業調査に随行した、その田口源太郎が田中源太郎と誤印刷された所がある（一九二P）。しかしそれ以外私を見る限り迷いとなる誤植の類はない。

実は泡鳴という人物の実像を明らかにする資料は意外に多くないのである。五部作の最重要人物の一人清水鳥のモデルで泡鳴が妾として困った増田しも江ですら、その実像を明らかにする客観的資料はほとんどないのが現状だ。その中で「伝記」は、泡鳴の妻宇野野の作成した「岩野泡鳴年譜」（『明治大正文学研究』昭四・六）に多くを依りつつも、江部鴨村、岡落葉等、著者が実際に聴取した直話や周辺資料によってそれを補正し確定するというやり方をとっている。著者が聴取した直話にしても、それをさらに別の資料につき合わせて修正するという具合に慎重である。周辺資料も、雑誌「趣味」の「文芸間語」、「読売新聞」の「よみうり抄」、「万朝報」の

「文界短信」、「文章世界」の「文界時報」などに及んでいる。こうした資料は実に小さい断片記事で、つい見逃しかねないようなものばかりである。それらを一つ一つ掘り起こして全体を組み立ててゆくのである。こうした作業には大変な時間と労力がかかり、それだけにこの「伝記」は、筆者のこれまでの長い実証研究の集大成とも言うべきものとなっている。

泡鳴伝における最大の焦点は、彼が亡父から引き継いだ下宿屋を抵当に入れ、樺太まで出掛けて無謀な蟹の缶詰事業に乗り出したことであろう。「伝記」では泡鳴のその動機について四点あげている、家の束縛からの脱出、妻幸及び妾しも江二人の重苦しい絆からの脱出、この二つが主で、そこに金銭への執着と仲間からの出遅れ感の二点が絡んだものだ、としている。先に述べたような著者の研究姿勢と正確な伝記記述の態度からすれば当然そのようになるのかもしれない。しかしこの記述に関しては、依然として泡鳴の動機は茫洋としたままで、もやもや感が残り釈然としない思いが残るのである。

「伝記」以外の部分についても少し見ておきたい。二部「研究と批評」、三部「岩野泡鳴周辺」に収められた文章は一つ一つ独立した論であるが、それらは「伝記」と相関関係にある研究という性格をもっている。ここでの論考の全てが「伝記」に引用されているのであり、また伝記研究を反転させて個々の論考としてまとめられているのである。

例えば「泡鳴五部作」の世界」で著者は、「小説を伝記の一部に

活用せざるをえな」としながら、しかし小説を離れてどこまで客観的世界として築き上げられるか、伝記の可能性と方法が述べられる。

さらに、「泡鳴周辺の人びと（三人の妻）」は、遠藤清、竹腰幸、蒲原英枝三人の実像を明らかにしたもののだが、その中で、五部作のクライマックスともいえる豊平橋からの心中未遂事件について触れ、これが「一種絶対的ともいえるリアリティを持ちえたことの裏には、泡鳴自身に同種の経験（体験ではない）があったと断定している」と述べる。同様のことを指摘した記述は「伝記」にもあり、こうした著者の鋭い見識が、事実と虚構を交錯して物語化する泡鳴の小説方法の本質を抉別しているのである。けれども著者は、泡鳴その種の経験がどのようなものであったのかは、どちらの記述でも明示していない。私見ではそれは、泡鳴が仙台で自殺を企てた時の経験ではなからうか、と考えている。「伝記」にも記述されているがそれは、政宗の立退路と呼ばれる深い谷に身を投げようと決心して家を出、断崖の上でまさに身を躍らせようとした瞬間、谷底にかすかに川の流れる音を聞いて我に返る。そして谷川に下りていって清水を一口飲んだ時一転して生命を重んずる気になった、というものである。「神秘的半獣主義」に記されたこの経験こそが五部作のクライマックスに生かされた原型と考えているのだが、はたしていかがなものであろうか。

まだまだこの書物について紹介したいところは多い。泡鳴の有情滑稽物と井伏鱒二の「笑い」とには共通するものが感じられるとい

う指摘（井伏鱒二と岩野泡鳴）。北海道から帰京後、泡鳴は日本主義に関心を持ち、飯野吉三郎に近づくが、泡鳴が政界に隠然たる勢力をもった飯野に引かれたのは彼の人心を掴むオカルト性に惑われたのだ、という指摘（岩野泡鳴と飯野吉三郎）。いずれも興味深いものだ。というのも、泡鳴のもっていた自然主義を越える可能性というのは、井伏が関心をもったその描写方法や、またことばを通して心熱を伝えようというその独特な象徴性にあると考えるからだ。

著書に泡鳴第四期の伝記までを求めるのは望蜀の嘆であろうか。あるいはこの書物にそれを欠くのは今後泡鳴研究の推進を求める著者の叱咤なのであろうか。いずれにしても実証的研究の重さと意味をあらためて知らされた書物である。

（二〇〇二年一〇月三日 笠間書院 四一頁 本体六八〇〇円）

野村 幸一郎 著

『森鷗外の歴史意識とその問題圏——近代的主体の構造——』

林 正 子

野村幸一郎氏は、前著『森鷗外の日本近代』（白地社 一九九五年三月）において、鷗外文学の魅力は、それぞれの作品が「文化的、社会的、歴史的状况との交通の中で多様な意味を開示」するところにある、「明治という時代が抱えていたさまざまな問題が鷗外作品の中でどのように消化され構造化されていったのか」に自らの興味があると記していた。具体的には、長編小説『青年』を「同時代の思想状況、文化状況、あるいはそれが形成されていく歴史的、社会的基盤」に遡及して論考し、そこに展開される「反時代的考察の内幕」、「文明論上においてそれが占める位置」を明らかにしたが、その研究成果の起点には、「日本の近代化の実相を、鷗外の視点から浮かび上がらせる」という目論見があったのである。

このような意図と方法について、ことさらに新機軸を謳うことはできないかも知れない。だが、鷗外による「行為の意味を問うこと

を問うようなその知性をわざわざでも継承していこうとする姿勢」を重要視する著者のモティーフに、近代文学研究における清新な開拓の意志を読まずにはいられない。前著の意図と方法が確実に継承された本書『森鷗外の歴史意識とその問題圏』の意義もまた、その点にあると言つてよいだろう。

本書の目的は副題「近代的主体の構造」が示すように、「(主)体」という表象の構造を前提としつつ、文学に描かれた近代日本のエトスを描き出す」ことであり、「近代日本における主体性獲得の営為」を追究することである。自由民権思想・社会ダーウィニズム・大正生命主義・昭和初期のマルキシズムなど、「それぞれの時代を画した西洋思想を消化しようとした時、少なくとも文学者が消化しようとした時、かならずと言ってよいほど、主体性獲得の問題が浮上」し、「それらが提示した超越的価値との関わりの中で個人はど

のような位置を占め、個人の生はいかなる意味づけがなされるのか、このような視点から、西洋から伝来した「普遍的な」思想を容しようとした側面が、明治以降の文学に絶えず存在した」という著者の認識が、強靱な論考の支柱となっている。

本書の構成は、幕藩体制の崩壊によって自らの「生の意味を剥奪された」という「精神的な危機意識」が士族たちにもたらされたとする「第一章 没落士族のシテイズン・シップ——明治初期の政治小説——」、明治期のニーチェ紹介に関する文献を渉獵し、ニーチェイズムがダーウィニズムの用語で解説されていることの意味を追究する「第二章 明治の社会ダーウィニズムと美的生活論争」、鷗外が「主体」性の問題についてきわめて自覚的な作家であったとして、その歴史意識の展開を跡づける「第三章 一九一〇年代の森鷗外」、大正期の与謝野晶子がベルグソンの思想を視座として思想・政治・文化を批評した必然性を述べる「第四章 『生命』という陥穽——大正期の与謝野晶子——」、小林秀雄の批評が私小説に「日本的な私」を見る議論の起源に位置しているとする「第五章 資本主義と自己意識——小林秀雄の私小説批評——」。この構成のもと、文学テクストを媒介にして、近代日本における各時局の実相が浮き彫りにされてゆく。

本書の要諦は、標題『森鷗外の歴史意識とその問題圏』が顯示するように、一九一〇年代の鷗外の文学活動の意義を追尋した「第三章」にあると言えよう。「自己の存在規定につながるような物語性／歴史性を懷疑し、行為の意味性を可変的なものとして認知する鷗

外のまなざし」が、「近代が強い歴史意識への批判」として機能していることが論じられ、近代国民国家の成立で特徴づけられる一九一〇年代という時代状況において、「行為の意味を問うことを問うような鷗外のまなざしそれ自体が、日本の近代の歴史主義と主体（＝臣民 観念との連結の構造を透視する、メタ・レヴェルの主体）であったという指摘に、著者の炯眼が光っている。

また、社会ダーウィニズム・美的生活論・自然主義の功利主義的人間観、それと表裏の関係を形成する科学的合理主義の流布によって、「国家観念という既存の超越的価値は解体の兆し」を見せ始め、その反動として極端な国家思想が台頭した時代状況のもと、「鷗外の目指したものは、あらたな国家理念と新たな思想・学問の親和的關係、一言で言えば、新たな超越的価値を創出することによって、齟齬を止揚し、混乱を收拾していく方向」であったと洞察されている。実際に、この時期に発表された鷗外の『かのやうに』を始めとする五條秀磨物では、「近代の物質文明を超越していく手段」としてのルドルフ・オイケンの思想が紹介されているのである。著者の論の妥当性が察せられよう。

さらに、明治四〇年代から大正期にかけて、鷗外が象徴主義的、神秘主義的傾向を内包した文芸をさかんに翻訳していることを指摘した著者は、鷗外作品に象眼された「主体」をめぐるさまざまな言辞を引いて、十九世紀末ヨーロッパのサンボリズム文芸に鷗外が触発されたことを論証している。鷗外によるサンボリズム受容の軌跡は、自然主義の台頭と懷疑主義的風潮のなかで余儀なくされた思索

の跡である、というのがその主張であり、鷗外文学のサンボリズムの性格を、「第一は、此岸を彼岸に近づけるため、自己に宿る超越的価値の意志に従って、現実に対する働きかけを社会的に実践していくような、主体の在り方」、「第二は日常への埋没を通じて、超越的価値との回路を開き、それへの従属を実現していくような、主体の在り方」の二種類に整理している。

続いて、従来の鷗外の「啓蒙の色合」が大逆事件を契機として稀薄になり、「自身の実存の問題とダイレクトに繋がる形」で歴史の意義が追究され、「個人の日常的生に深く関わる文学的表現が達成」されたという見解が提出される。鷗外が現実に対して「諦念」をもって臨んでいたわけではないことを看過してしまうと、明治末年から大正期にかけての鷗外作品の本質を見失ってしまう、という著者の指摘は正鵠を射たものであり、時代状況との関わりで文学を読み解くことに徹した点に、その面目躍如たるものがあるだろう。

また、阿部一族の悲劇には「一個人の力によってはいかんともしがたいような、偶然という要素」が介在しているにもかかわらず、「多くの論考においては、ブレ・テキストとの比較という学問的な体裁を採りながらも、この偶然の問題を閉却し、個と権力という図式にあてはまる言辞のみを取り上げてきたかのような印象を受ける」という指摘に、著者による『阿部一族』論のエッセンスを見ることが出来る。だが、果たして、従来の『阿部一族』研究の実態は、著者の「印象」どおりのものであったか。著者自身の論が画期的な意義をもち得るがゆえに、その「印象」についての手堅い論証

が望まれよう。鷗外が尊重した「歴史の自然」とは、「人間によって整理され解釈され意味づけられる以前の出来事の裸形の姿」であるという指摘——鷗外は「自然」という言葉を「自ずからそうなっているまま」という意味で用いているのであり、「近代の合理主義的精神に基づいた過去の出来事の再現を指して言っているのではない」という指摘は、まさに鷗外の歴史意識の核心をとらえたものであると思われるからである。

付言ながら、鷗外が訳出したボルクマン評の著者名について、前著でのケアレスマイス「シユレンテルマン」という表記が、本書でも訂正されないままになっている。「鷗外全集」の表記に拠れば「シユレンテル」が正しい。著者の論考が壮大なスケールを有するがゆえに瑕瑾が惜しまれる。

いづれにせよ、本書における成果は、鷗外文学の読み直しとしても意義深く、鷗外研究に確かな地歩を築き、新たな局面を拓いたと言えよう。そうであるがゆえに、「第三章」を軸足とした著者の成果、すなわち「森鷗外の歴史意識とその問題圏」という標題での一冊は、鷗外論考として徹底した方が、著者の分析をいっそう縦横無尽なものとしたのではないだろうか。さらに、「行為の意味を問うことを問うて」ゆく著者の旅は、「戦時下そして戦後へ」とさらなる歩みを進めることが予告されている。その旅の成果が綴られ、本書における「第三章」以外の論考が骨子となった『近代的主体の構造』の一冊も、多大の羨望とともに待たずにはいられない。

韓国日本近代文学会 編著

『日本近代文学』

— 研究と批評 —

1
申 銀 珠

本書は、序文にも書かれているように日本近代文学に限ったへ専攻分野を特定し専門化を図った初めての試みという意味で、韓国内の十数個の日本語日本文学関連学会の学会誌とはその性格が異なるものといえる。五人の日本人研究者の論文を含めた十九編の研究論文のほか、巻末には芥川龍之介の「舞踏会」の翻訳及び作品紹介（申英彦、柄谷行人「NAM原理」の書評（吳京煥）、日本の作家たちのペンネームに關わる逸話を紹介したもの（劉恩京）が掲載されている、外国文学としての日本文学の多様な読者層を想定した編集意図がうかがえる。

研究論文は「総論」「詩論・小説論」「プロレタリア文学」「三島の作品世界」「芥川作品世界」などに分類されている。「総論」の中心

の崔在喆「日本文学の現場」は、最近の日本文学の傾向と研究動向を文芸誌や研究誌の内容を中心に紹介している。著者の一年間の日本滞在の成果ともいえる本稿は、文学だけでなく、映画や演劇など文芸一般に關して幅広く同時進行的に紹介している点で興味を引く。

上田正行「日清戦争と森鷗外——「徂征日記」を中心として——」、渡辺喜一郎「日本のある地方詩人と植民地韓国体験——則武三雄の場合——」は、韓国外国語大学院日本近代文学会と日本近代文学会北陸支部が共同主催した第一回「韓国

合同日本近代文学会」(二〇〇一、一一、一)で発表したもので、満田郁夫「中野重

治論——その文学と朝鮮——」とともに、

文学を通じて日本と韓国の歴史上の時空間への理解が現在の研究者同士の交流の場において深まることの意味を考えさせられる論考である。孫順玉「正岡子規の絵と俳句」、玄松姫「国木田独歩の『河霧』論——水と故郷——」、許昊「三島由紀夫『命売ります』——『豊饒の海』との比較——」など十三人の韓国人研究者の論文は、そのほとんどがそれぞれの専門分野(作家別)の研究の蓄積を踏まえた書き下ろしである。

韓国における日本近代文学研究の現状の一端を包括的に把握できるといふ意味で、また日韓の研究者同士の交流の成果とその重要性を再認識させられるという意味で、本書は韓国語読者に大きな刺激と発見を与えてくれるだろう。今後、韓国で日本文学の読者層がさらに広がりが研究も深まって、その成果が真の日本理解に繋がるようになることを、一人の韓国語読者として期待したい。

(二〇〇二年四月二五日 図書出版月印 四一七頁 一一二〇〇ウォン)

鈴木健司 著

『宮沢賢治という現象』

読みと受容への試論

伊藤 眞一郎

い料理店」出版に
携わった一周辺人

物と詩集「春と修
羅」の同時代詩

人に照明を当て、

宮沢自身とのある

いは宮沢文学との

関わりをめぐる新

事実の発掘がなされ、さらに研究界を含む
現代の宮沢賢治受容のありように対して問
題提起がなされている。第一部に対し、第
二、第三部では概ね「受容」の側面に重点
が置かれていると言えるだろうか。

前著以来著者に窺われるのは、労を厭わ
ぬ周到な調査に基づく論究姿勢だが、本書
ではそれが見事なまでに徹底している。一
例を挙げれば、「作品研究」の部（銀河鉄
道の夜」の章と「青森挽歌」の章とが相補的關係
のもと、この部の核をなす）の冒頭章「銀河
鉄道の夜」の《銀河世界》の論で著者は、
それを作者の宗教性・科学性・心理的特性
の融合された幻想空間とみる観点に立ち、
まず『阿毘達磨俱舍論』等の説く仏教教理

との関連を、次に宮沢蔵書の片山正夫著

『化学本論』とジョンミルス著『通俗電子

及び量子論講話』の教える物質および真空

についての科学的認識との関連を同時代の

専門諸学説にまで果敢に踏み入って点検

し、さらに福島章・小野隆祥の病跡学的・

心理学的研究をふまえて関連諸作品を分析

する。宮沢の科学的認識が『化学本論』に

大きく負っていることは早くから指摘され

ていたが、受容の実態は少なからず輪郭不

分明と言つてよかつた。著者は、同時代諸

学説に周到に目配りしつつ、宮沢の『異

空間の実在』メモ』の記述を改めて前二著

の教説に沿つて丹念に読み解くことで、

《銀河世界》という幻想空間が、その後

に、作者の心理体験・宗教的認識とも整合

しうる、《エネルギー一元論》《放射性元

素》という科学的世界認識を置いているこ

とを明らかに、宮沢の思想に落ちたこの書の

影を、飛躍的に鮮明化してみせた。実証的

研究の範ともすべき著として評価したい。

（二〇〇二年五月二十五日 蒼丘書林 四三一頁

本体三五〇〇円）

『宮沢賢治 幻想空間の構造』（一九九
四）以降の論放に基づき、著者二冊目の宮
沢賢治研究書である。全体は、第一部から
第三部までそれぞれ「作品研究・比較研
究・周辺研究」と銘打った三部構成をとつ
ているが、うち童話・口語詩・文語詩を取
り上げた「作品研究」の部が全十一章二四
〇頁余と、紙数の過半を占め、副題で謳う
「読み」に重点を置いた論が展開されてい
る。「比較研究」の部では、坂口安吾・遠
藤周作・大江健三郎の三作家が取り上げら
れ、宮沢についての発言を糸口に、その文
学的課題の、それぞれにおける継承の模様
が描き出される。また、全五章にわたる
「周辺研究」の部では、童話集『注文の多

橋本寛之 著

『都市大阪〇文学の風景』

荒井 真理亜

助「夫婦善哉」、

開高健「日本三文

オペラ」、宮本輝

「泥の河」の三作

品が取り上げられて
いる。しかし、

今までも「大阪」というテーマで書かれた文学書はたくさんあった。本著もその一つであると言えよう。しかし、本著において注目すべきは、大阪の歴史や地理についての詳細な調査によって、作品の舞台となった大阪の空間的意味と、大阪が作品の舞台となり得た必然性を明らかにしている点である。また、市史や区史を初め、多くの文献が引用されていることや、関連地図が二十カ所に収録されていることも本著の特長の一つである。

『都市大阪〇文学の風景』というタイトルの目にしたとき、明治から現在までの近代都市としての大阪の風景がどのように追求されているかと期待した。本著は第一部都市の物語、第二部文学の風景から構成されている。第一部では、具体的に織田作之

明治・大正の都市の物語は取り上げられない。昭和の作家が問題とされる。その内容に触れておくと、「夫婦善哉」には御堂筋や地下鉄などの近代的な都市の風景は描かれておらず、それらをあえて作品世界から排除した織田作之助の意図を探っている。

開高健の「日本三文オペラ」の主人公はジャンジャン横町から旧大阪砲兵工廠跡に辿り着く。その過程に描かれたそれぞれの場所の持つ意味を明らかにし、「舞台装置たりうる必然性」を指摘する。また、宮本輝が「泥の河」に描いた川口周辺は、「人生の吹き溜りのような場所」を窺わせる歴史性が潜在しているという。著者によれば「大阪の町という土壌が作品形成の本質に深く関わっている」のである。

一般に文学の中心は東京と言われるが、

大阪は大阪で独自の文学を生み出し、育んできた。その「大阪」は一体どのような場所であるのか。第一部が作品論ならば、第二部「文学の背景」は、作品の情景描写を手がかりに、大阪の町々の様相を呈した都市論であろう。ここでは、詩人から小説家にいたるまで二十五名の、エッセイも含めて四十作品の記述が引用されている。小説に描かれた大阪に目を配ることによって、「猥雑にして、乱雑なだけ」ではない、新たな「大阪」の姿が見えてくる。

大阪を描いた作品は数え切れないほどある。渡辺霞亭や岩野泡鳴らが明治・大正期の大阪をどのように描いたのか、その続編が著者によって書かれることを期待したい。

(二〇〇二年七月一〇日 双文社出版 四六判
二七〇頁 二七〇〇円)

高木伸幸 著

『井上靖研究序説』

材料の意匠化の方法』

宮崎潤 一

私が本書の評をすることになった理由は、おそらく、私も高木も、いずれも学位論文を基礎として上梓していることによると推定される。拙著『若き日の井上靖』は修士論文が基礎になり、四高の柔道部体験から京都帝大と戦争体験を踏まえ詩人の始動の視点からまとめたものであった。一方、本書は拙著で論じた以降の井上靖の文学活動であり、原型は博士論文『井上靖研究「孤独」と「情熱」の展開』（一九九九）にある。本書は「流転」「闘牛」「水壁」など初期散文作品系列の作品の生成過程を中心に論じている。私と高木の上梓の過程と研究対象時期の近似性により私にも書評がまわってきたと思っている。さて、本書

は、I「流転」成立考、II「闘牛」考・

「貧血と花と爆

弾」論、III「水壁」

論・「報告書」「ナ

イロン・ザイル事

件」の活用」の三

部から構成されて

いる。いずれも長期に渡る渉猟が結実した

労作である。まず、博士論文の資料にも

なったIII「水壁」論とその資料の「報告書

「ナイロン・ザイル事件」の活用」であ

る。これは著者高木自身も述べているが、

今後この資料を凌駕する資料の出現はない

と思える第一級の資料である。その資料部

分からの立論はなかなかの圧巻である。

近年『井上靖全集』曾根博義監修が配本

された。その中の井上靖参考文獻目録（全

集別巻、藤本寿彦編）には、九五七頁から一

〇四〇頁に至る膨大な量が紹介されてい

る。それらすべてに目を通したわけではな

いが、立論のスタイルの一つとして井上靖

本人や周辺からの伝聞、それに付随する周

辺資料からの立論を試みる手法がある。拙著も一部に使用した。そうした場合のリスクとして、記憶違いなどの不整合を生じる

場合がある。高木の場合は、伝聞の使用は

必要最少限度とし、客観的資料で真つ向勝

負をした。立件に挑む検事にも似た一つ一

つの資料の吟味による立論。実際に現地に

足を運び原典にあたり、当時空気を論に縫

い込んだ労作であるといえる。特に井上靖

の初期散文創作の秘密、つまり資料活用と

ストーリーテリングの狭間に見られるわず

かな微光を増幅し整理・分析している点で

成功している一冊といえよう。このすぐれ

た高木の業績にも課題がないわけではない。しかし、不足部分はなによりも著者で

ある高木自身が一番良くわかっているはず

である。筆者は高木の次の論を心待ちに待

つばかりである。いずれにしろ、今後、井

上靖研究を試みようとする学生諸君には、

主要参考文献の一つに列せられるに堪うる

一冊であると考ええる。

（二〇〇二年七月二七日 武蔵野書房 一七六

頁 本体一八〇〇円）

星野 晃一 編著

『新生の詩』

竹本寛秋

書かれたと推察される草稿である。

星野による「背景」は、この草稿の成立をめぐって、「松山自由大

本書は、多田不二による草稿「現代の詩と詩人」の翻刻と、星野晃一による「現代の詩と詩人」の背景、及び多田不二年譜を収める。「感情」同人であり、萩原朔太郎や室生犀星に近い詩人である多田不二による近代詩史記述の試みの発掘であると同時に、多田が関わった「松山自由大学」

の試みとその活動母体となった「愛媛学生文化聯盟」の消長をめぐって、敗戦後の日本の文化状況の一端を浮き彫りにする著作となっている。

翻刻され掲載されている草稿「現代の詩と詩人」は、多田不二による明治から終戦直後までの日本の詩の歴史記述であり、昭和二十一年八月に松山高等学校講堂において開講された「松山自由大学」での講義用原稿をもとに、出版の可能性もみこして浄

学」と、その運営母胎となった「愛媛学生文化聯盟」が、敗戦後、新制大学が発足するまでの狭間の期間に現れた、旧制高校生・各種専門学校生主体による経済的・学問的欲求の受け皿として機能した組織であることを明らかにしている。

多田不二は、室生犀星と深く親交を結び、「感情」の編集を補佐しつつ、「感情」に作品を発表。「感情」終巻後は「帆船」を主宰する。一方職業としては時事新報社記者をつとめた後、大正十五年に発足間もない東京放送局（のち日本放送協会）社会教育課に入局。社会教育課や教養課で要職を歴任、終戦時には松山中央放送局長（理事）をつとめ、敗戦に伴って戦時放送の責任をとって辞職するという経歴を持つ。これは後に「教養番組の基礎を確立した功

績」により「勲四等瑞宝章」を授与されることになる、と価値の変転を繰り返すのだが、そうした不二の経歴をあわせ見るとき、本書の意図を超えて、多田不二という詩人―放送人が、詩と放送、そして戦争をめぐる極めてアクチュアルな場に参与し、介入したその様態を考えずにはいられない。著者は本書においてこうした側面を、戦後日本の「新生」の息吹として積極的に価値づけるにとどめているのだが、この問題は、戦争と詩の関係を構築していく極めて行為遂行的な発話行為上にあり、詩の現在と歴史の正当性を確保する闘争の様態としてとらえていく必要があるだろう。

（二〇〇二年八月十五日 愛媛新聞社 二八三頁 本体一八〇〇円）

尾西康充・岡村洋子 編著

『プロレタリア詩人 鈴木泰治』

作品と生涯

佐藤健一

一九二二年、四日市市の名刹・法蔵寺住職の三男に生まれ、三一年に大阪外語二年でプロレタリア詩の作者として登場しながら一冊の詩集も上梓することなく、三八年に中国山西省で輜重兵隊上等兵として二十六歳で戦死した鈴木泰治の、未発表あるいは発表誌未確認の草稿三三篇を含む全作品とその生涯が、本書によって初めて明らかにされた。

泰治は筆名で、本名は泰悟、幼名・澄丸という。この「澄丸」を筆名とした「赤い火柱——農民からの詩——」（『プロレタリア詩』三二年一〇月）が、現在判明している彼の最初の発表作である。彼が筆名を「泰治」と改めたのは、三二年に検挙され（不

起訴処分で釈放）大

阪外語を中途退学

させられた後で、

本書の区分に従え

ば第一期「プロレ

タリア詩」「大阪

ノ旗」時代の末期

である。第二期

「啄木研究」「詩精神」時代に書かれた

「飼葉」（『詩精神』創刊号、三四年一月）

を、本書は「泰治珠玉の作品」と評価す

る。第三期は泰治が「退路を絶つために」

上京した三六年、本書が「創作上の行き詰

まりに陥っていた」と見る「詩人」時代で

ある。泰治自身の「生産的」な詩人その

他（『詩人』三六年八月）を読むと、彼は

「生活的な勤勉と、詩の仕事の怠慢さ

（略）を隠蔽してゐる」自己の現実と闘っ

ていたようだ。それにしても詩人泰治の活

動期は短い。

を位置付ける「解説」鈴木泰治とその時

代」。その末尾に置かれたあとがきの数行

に、本書は「鈴木泰治生誕九〇周年を記念

して編集されたもの」だとある。この第三

部執筆のために編まれたものと思われるIV

年譜と、幾篇かの泰治論を集成したV参考

資料を加えて、全五部からなる本書を尾西

氏と岡村氏がどう分担し執筆したのか不明

だが、文学事典類への立項もない鈴木泰治

の全貌をほぼ明らかにした編者の願いは、

本書の読者による泰治作品の再評価にあっ

た。この労作の願いに応える読者はきつと

出るに違いない。しかし泰治ひとりの再評

価に向かうその前に、さらに多くの埋もれ

た詩人たちを発掘する類書が求められ、類

書の編集にはさらに工夫がこらされねばな

らないし、そのためにも発行部数が少なく

散逸しがちな詩歌関係の文献を対象とする

地味な研究がいま必要だと痛感して最近あ

れこれ研究計画を練ってみる私に、本書は

まったくありがたい届き物だった。

（二〇〇二年八月三一日 和泉書院 二五九頁

本体二八〇〇円）

水川隆夫 著

『漱石と仏教 則天去私への道』

加藤 禎 行

二章での「虞美人
草」執筆直前の京
都旅行における

「京都の寺めぐ
り」の叙述など

が、紹介者にとつ

て参照せざるを得ない構成であるがゆえに、やや予定調和的な記述を余儀なくされている面もあつたように思う。

とはいえ本書の提言は、時代の見取図としての宗教界の動向の重要性を再認識させるもので、とりわけ「浄土真宗の近代化運動と漱石」などのトピックの記述には教えられることも多かつた。紹介担当者自身も、明治期の新聞雑誌（例えば「早稲田文学」彙報欄など）が宗教界の動向を報じていたのは目にしていたはずなのに、いざ想起しようと試みるとそのアウトラインが思い起こせないという手薄さ、日頃の不勉強さを痛感させられる。おそらく本書が提示しているのは、漱石や仏教に限ったことではなく、従来あまり強調されてこなかった文脈への目配りを怠るなという警告に他ならないように、思われた。

（二〇〇二年九月九日 平凡社 二二八頁 本体一六〇〇円）

本書は「漱石と浄土教、特に浄土真宗との関係」（はじめに）を素描したもので、第一章「作家以前の時代」、第二章「作家時代（一）」、第三章「作家時代（二）」、第四章「晩年」と、夏目漱石の年譜的時間軸に沿って記述は進行し、末尾には漱石の参禅体験をめぐる考察が附されている。このような著者の関心は、その「あとがき」によれば、一九八〇年代から持続的に保持されてきたものだという。たしかに漱石と仏教という話題は著者が述べるとおり、従来、禅宗との関連で言及されることが多く、本書の報告は新しい問題領域の提案であると言えるだろう。

本書が漱石の伝記的事項に即して展開する記述としては、第一章における近親者の死に臨んでの哀悼の句の参照、さらには第

ては興味深く読むことができた。しかしながら、若干の不満もないわけではない。もちろん本書が、小説の読みなり解釈なりに主要な関心を置いていないことを承知した上で述べるならば、小説読解の参照枠として、浄土真宗というキーワードがおおいに強調されて適用される場合、そこから紡ぎ出されてくるコメントは単調な叙述になり、その連鎖がどうしても駆け足の説明になつてしまう傾向を帯びているようにも見受けられた。本書が必ずしも研究者のみを読者として想定していないにしても、積み重ねられた個々の引用文、そしてそこから筆者が導いている指摘を束ね合わせるような論考がひとつ置かれると、ずいぶん本書の印象も変わったのではないだろうか。また「則天去私」というキーワードを結末部

半田美永 著

『佐藤春夫研究』

中 村 三 代 司

まず、「佐藤春夫・独白者の矜持とその軌跡」では、佐藤春夫研究の基本姿勢が提示されている。著者

がら、小説「芥川賞」は「時代を先取した『太宰治論』」であり、「太宰治によって触発された佐藤春夫による『事実小説』（『実名小説』という、新しい小説のスタイルの誕生でもあった。」と結論付ける。

和歌山県生まれの著者には、『紀伊半島をめぐる文人たち』（一九八七）、『伊勢志摩と近代文学』（一九九九）、『阪中正夫文学選集』（二〇〇二）等の編著書があるように、「紀伊半島」が「最も関心のある研究課題の一つ」であり、佐藤春夫研究もその一環にあると思われる。本書は、春夫の全体像を捉えた「序章」、春夫と関わりの深かった晶子や太宰等とその作品を論じた

は保田與重郎の「詩人自身の語るものを、将来に向かって明らかにしようと思ふ。」という言葉を引き、「私の佐藤春夫研究は、基本的には保田與重郎の方法に近く、その距離は、鷗外、晶子、太宰を補助線とした点にある。」という。また、『詩文半世紀』の中で、春夫が多大な影響を受けたという生田長江に注目し、「文学は自己の精神的種族の保護と拡大を目的とし」て、

「佐藤春夫の晶子像」では、春夫の二著「晶子曼陀羅」「みだれ髪を読む」が取り上げられている。前者は「その生きた時代の空気の中にこの女恋愛詩人の人がらを書」すことを眼目とし、春夫の「詩的幻想」が捉えた晶子の「真実」であり、「真の創作」であり、前者は後者によって裏打ちされて「より強固な晶子像を屹立せしめた」と評している。

「Ⅰ」～「Ⅱ」、「研究文献」「参考文献」の目録類や「研究動向」の「Ⅲ」、「講談社版『佐藤春夫全集』総目次」「同全集未収録資料」「同全集逸文拾遺」の「Ⅳ」、子規研究会会報連載の再録からなる「付章」で構成されている。

「詩と批評とを文学者」の「二大要素」だとした長江の教えから、それらが春夫文学の性格を形成していると指摘する。

次に、芥川賞をめぐる春夫と太宰の確執

その他、蕪村・子規・春夫に「人事的美」の類縁を指摘した「佐藤春夫と蕪村・子規」や、春夫が「半日」に言及したエッセイに端を発した「鷗外「半日」を読む」等がある。

以上の中から、紙幅の都合上、「序章」

を追求したのが「佐藤春夫「芥川賞」の意味」「佐藤春夫と太宰治」の二論考である。両者には重複する点が多いが、第一回芥川賞論衡の経緯を当時の資料で再現しな

（二〇〇二年九月二五日 双文社出版 三三六頁 本体六八〇〇円）

「Ⅰ」「Ⅱ」を中心に取り上げてみたい。

布野栄一著

『小林多喜二の人と文学』

松澤信祐

原克の紹介でセキを訪れ、「防雪林」

(改作)や、刊行時に削除された

「一九二八年三月十五日」の結末部

作家は稀だ」(小林多喜二と小樽)、「青春期の生き方、苦悩の愛が彼の人生と文学の方向に決定的な影響を与えている」(小林多喜二の青春の一時期)という指摘や、「『蟹工船』制作の背景考」にみられる、徹底的な原資料調査など、学ぶべきものが多い。

本年二月には、「小林多喜二没後七〇周年、生誕百周年の集い」が、各界の著名人の呼びかけで、九段会館で盛大に行われる。この時期に本書が、多喜二の人と文学をこよなく愛した著者によって出版された意義は大きい。

「多喜二文学を育んだ北海道へ小樽」その文学の原点に迫る」と表紙帯書きにあるように、著者が、若き日を過した小樽の地と、その地に育ち、その地を深く愛した多喜二、そして、その多喜二に無限の愛情を注ぎつづけた母セキ、姉チマ、さらには、今は亡き多喜二研究者小笠原克たちへの深い思いが、一本の太い縦糸となつて貫かれており、優れてヒューマンな研究書となっている。

最初の発表論文は、一九五七年冬、小笠

分の遺稿断片などを発見して、解説を付けて発表した「資料小考」であった。前者については、「蔵原惟人のプロレタリアアリズムの提唱にこたえて改稿された『不在地主』よりも、北国の大自然の描写や農村とその若者たちのとらえ方に多喜二の作家的純粋さが生きている」と指摘し、後者については、「よかれ悪しかれ作家の意志を尊重すべきだ」とする大原則と、多喜二自身の「切取った最後の二章があった方が、幾分でもその決定的な欠陥を補い得たかもしれない」という意見を紹介して論じている。いずれも、多喜二の側に身を置いた卓見である。

その他、「日本近代文学の中で、彼ほどその生きた大地と、そこに住む人間の形象を描きつづけ、その文学を形成して行った

不満な点もないわけではない。「政治の中の陥穽と文学——ハウス・キーパーの人間悲劇」で、「党生活」の主人公と笠原の関係を、多喜二と伊藤ふじ子の関係にへぼそのまま重なりあっている」ととらえて、ふじ子をハウス・キーパーであったかに論じている。

伊藤ふじ子の実像については、沢地久枝『小林多喜二への愛』をはじめ、多くの研究書が、すでに明らかにしている。残酷な権力弾圧の時代を、深い信頼と愛情で結ばれて闘った二人を傷つけるべきではないように思う。

(翰林書房刊 二〇〇二年一月一〇日 二二三頁 二八〇〇円)

村田秀明 著

『中島敦』『弟子』の創造

渡邊ルリ

と弟子達との問答」を記す「先進第十一」に、その四割が見られること等、「弟子」研究の貴重な裏付け

本書は、平成十一年に刊行された『中島敦』『李陵』の創造——創作関係資料の研究——に続く村田氏の、中島敦作品の典拠をめぐる精密な考証の成果である。神奈川近代文学館と日本大学法学部図書館との、二つのへ中島敦文庫へに所蔵される原稿・書簡・中島の蔵書等から、『弟子』『盈虚』と草稿『妖氛録』成立に関わる資料を読解考証した本書は、次の諸点で中島作品研究の重要な手がかりを与えてくれる。

第一は、蔵書中の書き入れを、敦のものとして祖父や父によるものとに弁別した上、敦の書き入れが、『國譯漢文大成』ならびに有朋堂『漢文叢書』の『春秋左氏傳』では、「魯の哀公十一年孔子の帰魯直前から十五年子路の死までの時期」に集中し、また斯文会『袖珍論語』二十篇では、「孔子

となる事柄を指摘する点である。さらに中島が『袖珍論語』に書き入れた孔子の弟子達の年齢を、『國譯漢文大成』「春秋左氏傳年表」に訂正して記入したことから、書き入れ時期の前後関係も導き出されている。なお、この「春秋左氏傳年表」中の書き入れが翻刻され、複写と共に収められたのは有難い配慮である。

第二は、『東洋思想叢書2 春秋』の叙述に、『弟子』の子路最期の記述との顕著な共通点を見出し、この作品を論ずるにおいて核心となるはずの子路最期の絶叫「見よ！ 君子は、冠を、正しうして、死ぬものぞぞ！」を『東洋思想叢書』に拠るものとして点である。

第三は、書き入れの筆記具にまで渉る考証によって、例えば『袖珍論語』に、まず

「子路関係の章への黒鉛筆による書き入れ」が行われ、「その後、子路の登場しない章への黒インクペンによる書き入れが行われた」と推察するなど、『弟子』構想・執筆の状況を髣髴とさせる点である。

第四は、「著者自筆地図」を分析し、「吃公子」の構想との関連を指摘した点である。

本書は全体として、『弟子』構想段階において中島がいかなる資料を用い、そこから何を活かし何を削り落としたかというプロセスを、原点に立ち返って辿った貴重な実証研究の書であるが、例えば第三の「黒鉛筆」と「黒インクペン」の読み分けに代表される丹念な考証が、「六十年の時空を超えて創作の現場に立ち会うことのできる喜び」（あとがき）に裏付けられているという、作家中島の心に迫ろうとする村田氏の情熱に支えられている意味でも、深い意義をもつものである。

二〇〇二年十月十二日 明治書院 四六八頁
本体九五〇〇円

事務局報告

（二〇〇二年度（その二））

◎秋季大会 十月二十六日（土）・二十七日（日）

日本女子大学 二十六日は香雪館、

二十七日は成瀬記念講堂

・〈毒婦〉の身体性

——『高橋阿傳夜叉譚』をめぐる——

北原 泰邦

・佐多稲子の小説にみる抵抗表現の変化

——昭和一七年を中心に—— 小林美恵子

・「戦後」文学の基盤形成 横手 一彦

・「巡査の居る風景」論

——中島文学の出発点—— 安福 智行

・坂口安吾「真書 太閤記」論

——受容と創造をめぐる——

原 卓史

特集 太平洋戦争とメディア

・沖繩戦とメディア 大野 隆之

・軍事力は虚像に支配される 林 淑美

・演劇と太平洋戦争 林 廣親

・講演 グランド・ゼロに立って

林 京子

（司会）黒古 一夫・長谷川 啓

◎九月例会 二十八日（土）

早稲田大学 七号館一二二教室

テーマ ジェンダーと短歌

・離婚へ不倫へ性へ乳癌による乳房

切除へ

——中城ふみ子『乳房喪失』の世界——

加藤 孝男

・短歌界とジェンダー

——一九八〇年代以降を中心に——

中島 美幸

・近代文学のなかの短歌・短歌のなかの

〈女〉 阿木津 英

（司会）日置 俊次・下山 嬢子

◎十一月例会 三十日（土）

大妻女子大学 A棟三六六教室

テーマ 「少女小説」の生成と変容

・構成される「少女」

——明治期「少女」小説をめぐる——

久米 依子

・大正・昭和初期の〈少女小説〉と

その周辺 黒澤亜里子

・「少女型意識」小説・昭和期 高原 英理

（司会）大國 眞希・狩野 啓子

「日本近代文学」投稿規定

- 一、日本近代文学会の機関誌として、広く会員の意欲的な投稿を歓迎します。
 - 一、論文は四〇〇字詰原稿用紙換算で四〇枚程度、〈研究ノート〉〈資料室〉は同じく一五〜二〇枚程度の分量を原則とします。
 - 一、ワープロ原稿の場合は、冒頭に四〇〇字詰原稿用紙への換算枚数を必ず明記して下さい。
 - 一、投稿に際しては、必ず原稿にはコピーを添え、つごう四部をお送り下さい。また、原稿は返却致しませんので、お手許に控えをお残し下さい。
 - 一、三〇〇字程度のわかりやすい日本語による要約四部をあわせてお送り下さい。
 - 一、原稿のタイトルにはふりがなを、お名前にはアルファベット表記を必ずお付け下さい。
 - 一、投稿のメ切は、第七〇集は二〇〇三年一〇月一〇日、第七一集は二〇〇四年四月一〇日です。
- ※原文の引用は、新字のあるものはなるべく新字で記し、注の記号・配列なども本誌のスタイルにお合わせ下さいませよう、お願い致します。

〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10

亜細亜大学 関 礼子研究室内
日本近代文学会
編集委員会

「日本近代文学」の査読方法及び審査基準

【査読方法】

原則として三名以上の委員が査読し、さらに編集委員会での審議を経て、当該論文の採否を決定する。投稿者に対して客観的な立場をとり得る委員が査読を担当する。なお、掲載に際しては、論文の充実をはかるため、投稿者に加筆・訂正を依頼する場合があります。

【審査基準】

- 以下のいずれかに該当する論文であることが審査においては重視される。
- ・当該領域の研究史及び研究状況をふまえ、その領域で新しい地平を開拓する論文であること。
 - ・新しい研究領域・新しい研究方法を切り開く問題提起的な論文であること。
 - ・研究上有益な資料を発掘し、意味づけている論文であること。
 - ・研究の発展に貢献すると見なすことができる論文であること。
- 【採否及びその通知について】
- 採否とその通知にあたっては、以下の通り対応する。
- ・採用（ただし字句・表現などの修正を求める場合がある）。
 - ・改稿を求めるコメントを付け、当該号への再投稿を促す（再審査を行う）。
 - ・不採用。コメントを付けて次集以降への再投稿を促す。
 - ・不採用。コメントを付けない。

日本近代文学会
編集委員会

編集後記

第六八集をお届け致します。本集は八本の「論文」、(うち一本は「講演」)、六本の「展望」、三本の「研究ノート」、二三本の「書評」、一〇本の「紹介」欄から構成されています。

論文のうち、五本が会員からの投稿の結果採用されたもの、残りの三本はそれぞれ秋季大会、九月例会、十一月例会の発表が基となったものです。

本集は会員外の方々からたくさんお力添えを戴きました。お忙しいなか、ご執筆を快諾して下さった作家の林京子氏と歌人の阿木津英氏には、この場を借りて心よりお礼申し上げます。また「展望」欄では、『本格小説』で読売文学賞を受賞された作家の水村美苗氏、メディア研究で長年精力的な仕事をつづけておられる山本武利氏、ラジオの語り分析からリテラシーとオーラリティの問題に取り組んでおられる山口誠氏から、それぞれ貴重なご原稿を頂戴する

ことができました。さらに「研究ノート」欄では、中世文学専攻で、やはり文学とオーラリティの問題に関して研究を進めておられる兵藤裕己氏からもご原稿を戴くことができました。

本集は自由論文号ですが、私たちの研究のなかで自明化されていた「日本語で書かれた文学テクスト」の問題が、さまざまの他なる問題系と組み合わされることで、新しい研究のパスpekティヴが開かれる契機となれば、望外の喜びです。

書評がかなり多くなりました。書評は原則的に会員諸氏のものに限らせて戴いておりますので、会員諸氏の研究成果ゆえと判断しております。内向きではない、開かれた相互批評のできる書評の場を目指しておりますので、皆様のご協力とご理解をお願い致します。

新編集委員会になって二回目の刊行となりましたが、まだまだ至らない点も多いと思います。審査や編集作業にあたっては公平かつ厳正な姿勢で臨んでおりますが、なんと申しましても学会誌は会員諸氏の投稿

論文が生命線です。引き続き意欲的な論文をご投稿下さいますようお願い致します。なお、ご投稿およびご執筆に際しましては、本誌および会報掲載の「投稿規定」、「査読方法及び審査基準」をお読み下さいますよう、蛇足ながらお願い申し上げます。

この集は左記の委員が編集にあたりました。

大野 亮司	小平麻衣子	川津 誠
紅野 謙介	坂井セシル	佐藤 秀明
柴田 勝二	関 肇	高田 知波
竹内荣美子	田中 勳儀	坪井 秀人
戸松 泉	藤澤 秀幸	松下 浩幸
山口 直孝	和田 敦彦	
関 礼子 (委員長)		

入会手続き等のご案内

次の件に関しては、すべて左記「日本学会事務センター」へ直接ご連絡ください。

- 入会・退会の手続き（入会の場合は、事務センターへ連絡すると申込書が送られて来ます。退会の場合は、その旨を必ず葉書で届けてください）
- 会費納入手続き及び納入状況（学会事務センターから通知があります）
- 機関誌「日本近代文学」・会報・名簿の送付
- 住所・所属等の変更

〒113-8622 東京都文京区駒込五―一六九

学会センター C 21

日本学会事務センター内

日本近代文学会

〇三（五八一四）五八一〇

「日本近代文学」刊行にあたっては、直接出版費の一部として、日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けています。

「日本近代文学」第67集では、以下の誤りがありました。ここに訂正致します。

- ・ 122頁下段7行目：
誤 「〈機械の眼——レンズへ。〉」 正 「機械の眼——レンズへ。」
- ・ 127頁上段注（10）：
誤 「『機械と文明』」 正 「『技術と文明』」
- ・ 271頁英文要旨本文14～15行目：
誤 "modern literature studies in Korea"
正 "modern Korean literary studies in Korea"

なお、訂正の掲載は、編集過程において生じたものに限らせていただきます。

between narrator and addressee, and the written word (or writing) in Nakagami's texts takes as its purpose the expression of the discomfort that arises out of this.

The Voice of the *Kyôdôtai* [Community]:
Radio, Voice, and Writing in the Wartime Journal *Hôsô*

KURODA Taiga

The memories produced by the “voice” of radio broadcasting cannot clearly be the object of analysis like the printed word: they exist in the subconscious of each and every individual. But it is necessary to attempt to examine the way in which those memories were rearranged as text to accord with the requirements of the *kyôdôtai*. In so doing we might restore to those memories their multiplicity-and bring to life the multiplicity of voices that existed behind that single voice. Such a project is also one way of demystifying the difference between orality and literacy in modern culture. The journal *Hôsô* [Broadcast] put out by NHK during the war is a suitable object for such an analysis. By making clear the ways in which writers [*bungakusha*] involved themselves through the act of writing with voice and its capacity to produce a feeling of community, it might become possible to analyze “voice” and its nature.

水村美苗氏と山口誠氏のもの以外の英文目次と英文要旨の翻訳及びチェックは、
Lucy North さんにお願ひしました。

Research Notes

Kôshô [Orality],
and the Significance of Embodied Voices and Words

HYÔDÔ Hiromi

What explains the recent obsession with the Japanese language in the publishing world? Or the runaway sales of books such as *Koe ni Dashite Yomitai Nihongo* [Japanese To Read Aloud] and many others? In midst of the stormy seas of “globalization” that have followed the collapse of all the structures in place during the Cold War, people seem desperate for some firm place from which to resist global standardization. The recent preoccupation with “voice” and “the body” in the Japanese language in Japan is, I believe, is not unrelated to growth of fundamentalism and nationalism in various parts of the world. These first few years at beginning of the twenty-first century do in many ways resemble the 1930s when Yanagita Kunio put out his work *Kôshô Bungei-shi* [The History of Japanese Oral Literature]. In this article, I examine the changes in meaning undergone by the term *kôshô* in Japan’s modern period, with a view to starting a discussion with meaning for today of embodied voices and words.

Voices from Afar:

The “Written Word” and “Writing” in Nakagami Kenji’s Narratives

TANEDA Wakako

In this paper I consider the problem of voice and written word in Nakagami Kenji’s narratives, looking especially at his use of colloquial language. What happens when Nakagami includes a folk tale chant “*Kinji niya-niya*,” words that have even less status than words written in the style of a song, in a *shôsetsu*? The violence of the chant derives from the fact that it designates its addressee unilaterally. A comparison of the highly similar writing style of two of Nakagami’s short stories, *Edo* [Impure Land] and *Fushi* [Immortality], shows that even though voice is highlighted through restricted use of breaks and punctuation marks, in no place is a feeling of harmony allowed between the narrator in the text and addressee. Even in the particular spelling chosen to render the expression *ja-a-ra-ja-a-ra*, ジャアラジャアラ, for example, there is a sense of excess, forcing the reader to read the letter ア as a syllable in its own right. Voice in Nakagami’s narrative always implies the possibility of unequal relations

have materialized by friendly relations on the level of nation alone.

Okay, So What Do You Actually Want to Accomplish?

ATOGAMI Shirô

Like so many other academic disciplines, modern Japanese literary studies now seems to be stagnating; we have lost faith in universal values and all the old myths and stories. But this is a situation that should be used to advantage by people in non-mainstream fields. The reason why I have taken up an interest in the achievements of the liberation movement of sexual minorities is because I think they can provide a model. What is important is to decide what you personally want and to set your sights on obtaining this clear objective. Once you do this, you get a much clearer picture of which strategies are useful and which are not. The other important thing is to join hands with others who are also still in a weak position. Experimenting with crossing the boundaries of one's academic specialty and researching subcultures is an effective way of building up a common base.

counterpart. I thus contend that we must re-consider the relationship between these two vectors of “narrative,” and re-examine the inter-relationship between orality and literacy in the axis of “narrative” in modern Japan.

Reading the Same Text:

Japanese Literary Studies and Japanese Literature

NAKAGAWA Shigemi

Why is it that we use the term “Japanese literature” to designate writing by Japanese people, as if it were a category that needs no explanation? This is an essay that starts by raising such basic questions and goes on to consider contemporary Japanese literary studies. Lots of people all over the world are involved in one way or another with Japanese literature, though they have no direct contact with the research environment in Japan. Even so, to take the example of Europe and the United States, all sorts of studies are produced that consider issues of relevance for researchers in Japan. With this as my starting point, I consider how it might be possible to have mutual exchange and “traffic” between Japanese literary studies in Japan and other countries. We continually hear statements that the significance of literature is waning—almost as if people were willing this to happen. I look at the shared place from which people read the same texts. In that commonality I want to elucidate how literature can still have meaning for the future.

Toward Chinese-Japanese Relations in the 21st Century:

Six Years of the “Nitchû Chi no Kyôdôtai” [China-Japan Intellectual Community]

KOMORI Yôichi

In 1997 Mizoguchi Yûzô, Sun Ge, and I set up a group called the “China-Japan Intellectual Community,” and we have been engaged in a number of efforts and activities over the last six years. This group was organized to enable intellectuals from Japan and China to meet and engage in discussions in which we try to understand each other’s different contexts and carry out honest mutual criticism and self-criticism. We held symposiums centered on issues that have traditionally split the two countries and kept them apart—issues such as nationalism, war, and interpretations of history.

In this paper I aim to give my own account of the process by which we have built up a mutually stimulating intellectual relationship, such as would never

A Database of the Contents of the Periodicals (1945-1949)
of the Gordon W. Prange Collection and *Intelligence*

YAMAMOTO Taketoshi

Since 2000 I have been constructing a database for the periodical contents of the Gordon W. Prange Collection, part of which I published in November 2002. Searches may be made free of charge according to journal titles, index numbers, lists of contents, authors, publication years, and other criteria, at the following Web site. Please note that registration is required:

<http://www.prangedb.jp/>

In March 2002 I established the Institute of 20th Century Media, and also started publication of its journal *Intelligence*.

URL: <http://www8.ocn.ne.jp/~m20th/>

E-mail: m20th@luck.ocn.ne.jp

Reconsidering the Axis of “Narrative” Research

YAMAGUCHI Makoto

As is well known, the unification of the oral and written languages in the modernization of Japan was a project of creating a new “national language” (*kokugo*), through reforming the written language after the manner of the oral language. Many contemporary researchers have examined this unification of the oral and written languages, and the critical study of this process as a nationalistic act of violence against language itself has risen to prominence. While this paper agrees with this research approach, it also points out a drawback to the contemporary storm of criticism, which neglects attention to the axis of “narrative.”

This paper demonstrates that there was a stream of oral “narrative” in the early history of radio broadcasting, which intended to reform the oral language along the lines of forms of narrative prominent in the written language: a process opposite the one generally posited in studies of Meiji-era linguistic unification. The emergence of such a written/oral “narrative” in the early history of radio was not exceptional, but rather reflective of a popular form of narrative in the 1920s and 1930s. Despite its importance, this vector of exchange in written-oral “narrative” has been neglected in comparison to its

“Ground Zero” in this context refers to the center point of this test site. For miles around, waste ground is all there is to see. The only object taller than myself was a 3-meter tall memorial marker. The day I visited, the weather was sunny and clear; but there was nothing but silence all around me. Standing there I started to tremble from the depths of my being. We tend to think of human beings as the first victims of nuclear weapons: but in fact all living organisms die. There on that vast land, no plants, no animals, could live. The tears poured out of me. The thought of having been made a victim of a nuclear bomb at the start of my life, and having had to live that inescapable fact, and the knowledge that the earth and human beings still suffer, and will continue to suffer, from these deadly weapons of destruction, pierced me through and through.

Prospects

Tanizaki Jun'ichirō's “Turn”—on *The Portrait of Shunkin*

MIZUMURA Minae

This paper attempts to reassess the meaning of Tanizaki Jun'ichirō's “turn” in his work, often referred as his “return to Japan” or “return to the classics.” What Tanizaki encountered in his “turn” was the Japanese language itself, that is, the Japanese language as a language that is different from the Western languages. This encounter marked his recognition that *genbun icchi*, the written language of the modern Japanese literature, came to be what it is by suppressing other possibilities in the Japanese language. Taking *The Portrait of Shunkin* as an example, the paper tries to analyze how the tension created by the coexistence, within this work, of “Tanizaki's” own *genbun icchi* narrative on one hand and Sasuke's sinicized *Life of Mozuya Shunkin* on the other led to what he sought to achieve in his work—“trueness to life.”

this place. I follow the process by which she was rediscovered by the media on the edges of the Shin Nihon Bungakkai [New Japanese Literature Association], and narrativized as the fountainhead for the Seikatsu Tsuzurikata Undô [Movement for Essays on Life], and an identity formed for her as *musume* or “daughter.” The formation of an identity for Toyota by which she could continue to narrate as a “daughter” within the norms brought by this site of writing meant, in the context of the discussion of writing taking place on the periphery of the subject of literature, that she was one pre-war writer who did not disappear, but who could reappear on the scene.

The Place of *Tanka* in Japan’s Modern Literature [*Kindai bungaku*],
and the Place of *Onna* [Woman, the Feminine] in *Tanka*:

Debates on *Onna-uta*, or Women’s Poetry

AKITSU Ei

The term *onna-uta* first appeared in an essay by Orikuchi Shinobu titled “Joryû no uta wo heisoku shita mono” [What has shut down women’s poetry] written after World War II and in the course of ensuing debates it became an established term. The term *onna-uta* in fact was used with dual significance: it referred both to poetry composed by women, and to issues to do with method, technique, and style. Questions as to the real meaning of this term, and the significance accorded women’s poetry, arose three times, first in around 1955, then in the early 1970s, and then again in around 1984. The debates about *onna-uta* in the 1970s and 1980s in particular show a desire to be free from the strain of center-periphery relations, in an argument that relied on the equation of modernization with the masculine. It is possible to see in these debates a particularly Japanese gender pattern: the resistance of the *omote-ura* [surface/underside] argument devised by Motoori Norinaga is simply exchanged for an argument that relies on a modern-masculine equation. In Japan, always when there is a desire to escape pressure from foreign culture (center), resort is taken to the idea of the strength of the feminine.

Standing on “Ground Zero” [Lecture]

HAYASHI Kyôko

On October 2, 1999 I visited the Trinity Site in New Mexico, U. S. A., which was where the world’s first atomic detonation test took place on July 16, 1945.

has been that readers tend to overlook the texts as perfected and completed *as of that particular moment*. In this paper, I look at the preoccupation with prosody we can see in Miyazawa's texts, and the tendency towards literary [as opposed to colloquial] poetry we see in his very last works, and consider his writing process as a rendering into writing of pieces as of that particular moment. I look at Miyazawa's writing together with the writing of Miyazawa's contemporary, Nakahara Chûya, another poet who was continually rewriting his works, and consider the issue of rewriting as an issue of modern poetry in Japan.

Shishôsetsu Discourse around the Year Shôwa 10 [1935]:
Shishôsetsu Writers and Social Involvement

MATSUMOTO Katsuya

Research on the so-called second wave of *shishôsetsu* debates that flourished around the year Shôwa 10 has hinged on the main works of criticism of the *shishôsetsu*. In this article, I analyze a wide spectrum of contemporary *shishôsetsu* discourse, and elucidate how and to what extent *shishôsetsu* involved themselves with society and politics. As a supplement to *shishôsetsu* discourse, I also look at writers' discussions on their own role in and relationship to society. I show that in fact what was taking place behind the use of the ambiguous term *shishôsetsu* was a redirecting of such literature to include treatment of subjects of social and political relevance. The paradigm for the involvement of literature with politics, which researchers have tended to see as starting only after the war with China broke out in 1937, was already being prepared for around 1935. The political nature of the *shishôsetsu*, which played a key role in the initial work of making literature a tool for literature that followed Japanese national policies [*kokusaku bungaku*], as well as the covering up of this fact by later literary histories, will become clear.

Daughter of the Proletariat, Toyota Masako:
The Site of Writing around the Year 1950

NAKAYA Izumi

In 1938 Toyota Masako became the darling of the literary world with her *Tsuzurikata kyôshitsu*. Even after this text lost the influence it had once commanded, Toyota continued to hold a place on the edges of the media for some time. In this article I look at Toyota around the year 1950, when she had lost

The America Within:

Chijin no ai [transl. Naomi] and Discourse on the Anti-Japan Immigration Acts

GOMIBUCHI Noritsugu

Tanizaki Jun'ichirō's *Chijin no ai* is usually seen as a work that reflects *Americanizumu*, the fad for American ideas and fashions, that arose in Japan in the 1920s. But *Chijin no ai* was serialized in the *Osaka Asahi Shimbun*, a newspaper that also featured detailed reports on the Anti-Japan Immigration Acts being proposed at that time in the United States. In this paper I focus on the resonance between *Chijin no ai* and the discourse surrounding the Anti-Japan Immigration Acts. Naomi, for example, the object of the narrator's obsession in the story, and a strongly drawn character, is described in terms that suggest a racist: she discriminates against Japanese and has a definite preference for Westerners. Despite the narrator's growing disillusion with Naomi's character, however, he gets drawn inexorably into marriage with her. His position is worth comparing to that of numerous male intellectuals in Japan who felt disaffected by America but knew that relations with the U. S. were unavoidable since Japan was already in a position of economic dependence. Many newspapers and magazines that carried reports of the Anti-Japan Immigration Acts also featured articles arguing that English language education in schools was giving rise to extravagance among the Japanese. There are parallels in this stance with Jōji's regret at having encouraged Naomi to take lessons in English and ballroom dancing. The image of America as it was portrayed in newspapers at the time is of essential importance in our understanding of the story of *Chijin no ai*.

Behind the Act of Writing: Miyazawa Kenji and Nakahara Chūya

KATŌ Kunihiko

The publication of *Kōhon Miyazawa Kenji zenshū* [Collected Manuscripts of Miyazawa Kenji] has made clear the remarkably complicated process that lay behind Miyazawa Kenji's writing. But in that it puts every scribble, every deleted word, and sometimes even words that the author actually erased into print, this collection emphasizes the stage-by-stage transformation his stories underwent to reach their completion, which has tended to draw readers' attention only to Miyazawa's preoccupation with choice of diction. The result

ARTICLES

The Construction of the *Shôjo* [Girl],
and the Formation of the *Shôjo Shôsetsu* Genre in the Meiji Period

KUME Yoriko

Meiji period *shôjo shôsetsu* [girls' *shôsetsu*] for the most part dealt with melodramatic stories in family settings. In so doing they upheld the patriarchal system and education promoting ideas of *ryôsai kembo* [good wife, wise mother], and thus followed the construction of gender as it was taking place in modern Japan. In the Meiji 40's [1907-1912], however, a naturalistic preoccupation arose in *shôjo shôsetsu* with young girl's sensuality, and *shôjo shôsetsu* started to feature the friendship and love between beautiful girls. This led to *shôjo shôsetsu* being accorded a much lower literary status, allowing the literary community to trivialize the subject of *shôjo* at the same time as to take pleasure from girls' sexuality. It also led to a reconstruction of the image of the *shôjo* as a creature who could combine purity and sensual beauty.

Logic that Makes Subject Transparent:
the Implications of the Discourse surrounding Yanagi Muneyoshi's "Science"

NISHIYAMA Kôichi

Yanagi Muneyoshi wrote several "scientific" treatises in his early period as a writer, none of which has as yet been subjected to close scrutiny. In several of these treatises Yanagi takes up matters such as spiritualism that was currently in fashion in the United States and Europe, and ends by building up a particular religious world view. It is possible to see in this process the origin of the Orientalism in his theory of folk crafts, and in his later discourse with regard to Chôsen (Korea). Further, at the base of his readings of American and European philosophy there was the influence of the zeitgeist of the Meiji 30s and 40s [1897-1912]. I argue that the problems in Yanagi's discourse are for the most part the problems of the age in which he lived. This also has a bearing on the imperialism that later arose in Japan.

Hashimoto Hiroyuki, <i>Toshi Ôsaka: Bungaku no fûkei</i> [The City of Ôsaka: Landscapes of Literature]	ARAI Maria	267
Takagi Nobuyuki, <i>Inoue Yasushi kenkyû josetsu: Zairyô no ishôka no hôhô</i> [Introduction to Inoue Yasushi Studies: Conceptualization of Material]	MIYAZAKI Jun'ichi	268
Hoshino Kôichi, <i>Shinsei no shi</i> [The Poetry of <i>Shinsei</i>]	TAKEMOTO Hiroaki	269
Onishi Yasumitsu, Okamura Yôko eds. <i>Puroretaria shijin Suzuki Taiji: Sakuhin to shôgai</i> [The Proletarian Poet Suzuki Taiji: His Life and Works]	SATÔ Ken'ichi	270
Mizukawa Takao, <i>Sôseki to Bukkyô</i> [Sôseki and Buddhism]	KATÔ Yoshiyuki	271
Handa Yoshinaga, <i>Satô Haruo kenkyû</i> [Satô Haruo Studies]	NAKAMURA Miyoshi	272
Funô Ei'ichi, <i>Kobayashi Takiji no hito to bungaku</i> [Kobayashi Takiji: The Man and His Writing]	MATSUZAWA Shinsuke	273
Murata Hideaki, <i>Nakajima Atsushi: "Deshi" no sôzô</i> [Nakajima Atsushi: formation of <i>The Disciple</i>]	WATANABE Ruri	274

Sawa Masahiro, <i>Nishiwaki Junzaburô no modanizumu: "Girishia-teki jojôshi" zenpen wo yomu</i> [Nishiwaki Junzaburô's Modernism: Reading the Entirety of Girishia-teki jojôshi]	ICHIKAWA Takeshi	218
Telengut Aitor, <i>Mishima bungaku no genkei: Shigen, root metaphor, kôzô</i> [Archetypes of Mishima's Literature: Origin, Root Metaphor, and Structure]	YAMAZAKI Yoshimitsu	222
Yonekura Iwao, <i>Hagiwara Sakutarô ronkô: shigaku no kairo/kairo no shisaku</i> [An Essay on Hagiwara Sakutarô: Circuits of Poetry/Reflections on Circuits]	YAMAMOTO Kôji	225
Kashihara Osamu, <i>Kobayashi Hideo: Hihyô to iu hôhō</i> [Kobayashi Hideo: Critique as Method]	HOSOYA Hiroshi	229
Nagano Takashi, <i>Nagano Takashi chosakushû</i> [Writings of Nagano Takashi]	NORO Yoshinobu	232
Higuchi Ichiyô Kenkyû Kai Editorial Board, <i>Ronshû: Higuchi Ichiyô III</i> [Essays: Higuchi Ichiyô, Vol. 3].....	NAKAYAMA Kazuko	236
Shimizu Takayoshi, <i>Warai no ûtopia: "Wagahai wa neko de aru" no sekai</i> [Utopia of Humor: The World of <i>I am a Cat</i>]	AKAI Keiko	239
Itô Tadashi, <i>Sakuhin to rekishi no tsûro wo motomete: "Kindai bungaku" wo yomu</i> [Seeking a Link between Texts and History: Reading "Modern Japanese Literature"]	MORITA Kenji	243
Yamazaki Kazuhide, <i>Mori Ôgai: Rekishi bungaku kenkyû</i> [Mori Ôgai: Studies of Historical Literature]	SHIBAGUCHI Jun'ichi	247
Yamada Shunji, <i>Taishû shimbun ga tsukuru Meiji no "Nihon"</i> [Meiji Japan as Created by Mass Newspapers]	KAN Satoko	251
Higaya Mihoko, <i>Sôseki no gensen: Sôzô e no kaitei</i> [Sôseki's Wellspring: The Process toward Creativity] ...	OGURA Shyûzô	254
Ôkubo Tsuneo, <i>Iwano Hômei no kenkyû</i> [Iwano Hômei Studies]	KAMAKURA Yoshinobu	258
Nomura Kôichirô, <i>Mori Ôgai no rekishi ishiki to sono mondaiken: Kindaiteki shutai no kôzô</i> [Mori Ôgai's Historical Consciousness and its Issues: Structure of the Modern Subject]	HAYASHI Masako	262

INTRODUCTIONS

Korea Association of Japanese Modern Literature, <i>Nihon kindai bungaku; Kenkyû to hihyô dai-issshû</i> [Japanese Modern Literature: Research and Critique Vol. 1]	SHIN Eunju	265
Suzuki Kenji, <i>Miyazawa Kenji to iu genshō: Yomi to juyō e no riron</i> [The Phenomenon of Miyazawa Kenji: Reading and Reception Theory]	ITÔ Shin'ichirô	266

RESEARCH NOTES

- Kôshô* [Orality] and
the Significance of Embodied Voices and Words HYÔDÔ Hiromi 158
- Voices from Afar:
The "Written Word" and "Writing" in Nakagami Kenji's Narratives
..... TANEDA Wakako 165
- The Voice of the *Kyôdôtai* [Community]:
Radio, Voice, and Writing in the Wartime Journal *Hôsô* ... KURODA Taiga 173

BOOK CRITIQUES

- Hanada Toshinori, *Seishin na kôkei no kiseki : Nishi Nihon sengo bungaku shi*
[The Emergence of a New Landscape:
History of Postwar Literature in Western Japan] SHINJÔ Ikuo 181
- "Kindai bungaku kenkyû to wa nani ka" Publication Association,
Kindai bungaku to wa nani ka: Miyoshi Yukio no hatsugen
[What is Modern Literature? The Statements of Miyoshi Yukio]
..... TANAKA Minoru 185
- Komori Yôichi, *Rekishi ninshiki to shôsetsu*:
Ôe Kenzaburô ron [Historical Consciousness and the *shôsetsu*:
An Essay on Ôe Kenzaburô] ISHIBASHI Noritoshi 189
- Miyano Mitsuo, *Arishima Takeo no shi to shiron*
[Arishima Takeo's Poetry and Poetics] SASAKI Sayo 192
- Ôtsuka Miho, *Ôgai wo yomihiraku*
[Fresh Interpretations of Ôgai] AOTA Sumi 195
- Nagafuchi Tomoe, *Kitamura Tôkoku: "Bungaku," Ren'ai, Kirisuto-kyô*
[Kitamura Tôkoku: "Literature," Love, and Christianity]
..... SHIMIZU Hitoshi 199
- Makibayashi Kôji, *Makibayashi Kôji chosakushû*
[Writings of Makibayashi Kôji] HIRAOKA Toshio 203
- Itô Ujitaka, *Kokuhaku no bungaku: Mori Ôgai kara Mishima Yukio made*
[Literature of Confession: from Mori Ôgai to Mishima Yukio]
..... ÔKUBO Kenji 207
- Kurita Hiromi, *Shi to hiyaku: Arishima Takeo no seishun*:
"Yûtôsei" kara no ridatsu [Death and the Leap: the Young Arishima Takeo
and his Departure from "Model Student"] KAWAKAMI Minako 210
- Kôno Toshirô, *Ikôshû rensa: Kindai bungaku sokumen shi*
[A Series of Unpublished Manuscripts:
A Lateral History of Modern Literature] TANIZAWA Ei'ichi 214

Modern Japanese Literature No. 68
(Nihon Kindai Bungaku)

CONTENTS

ARTICLES

- The Construction of the *Shôjo* [Girl], and the Formation of
the *Shôjo Shôsetsu* Genre in the Meiji Period KUME Yoriko 1
- Logic that Makes Subject Transparent:
the Implications of the Discourse
surrounding Yanagi Muneyoshi's "Science." NISHIYAMA Kôichi 16
- The America Within:
Chijin no ai [transl. *Naomi*] and Discourse on the
Anti-Japan Immigration Acts GOMIBUCHI Noritsugu 34
- Behind the Act of Writing:
Miyazawa Kenji and Nakahara Chûya KATÔ Kunihiko 49
- Shishôsetsu* Discourse around the Year Shôwa 10 [1935]:
Shishôsetsu Writers and Social Involvement MATSUMOTO Katsuya 64
- Daughter of the Proletariat, Toyota Masako:
The Site of Writing around the Year 1950 NAKAYA Izumi 78
- The Place of *Tanka* in Japan's Modern Literature [*Kindai bungaku*];
and the Place of *Onna* [Woman, the Feminine] in *Tanka*:
Debates on *Onna-uta*, or Women's Poetry AKITSU Ei 92
- Standing on "Ground Zero" [Lecture] HAYASHI Kyôko 108

PROSPECTS

- Tanizaki Jun'ichirô's "Turn"
—on *The Portrait of Shunkin* MIZUMURA Minae 118
- A Database of the Contents of the Periodicals (1945-1949)
of the Gordon Prange Collection and *Intelligence*
..... YAMAMOTO Taketoshi 126
- Reconsidering the Axis of "Narrative" Research ... YAMAGUCHI Makoto 130
- Reading the Same Text: Japanese Literary Studies and
Japanese Literature NAKAGAWA Shigemi 137
- Toward Chinese-Japanese Relations in the 21st Century:
Six Years of the "Nitchû Chi no Kyôdôtai"
[China-Japan Intellectual Community] KOMORI Yôichi 145
- Okay, So What Do You Actually Want to Accomplish?... ATOGAMI Shirô 152

組織

第八條

1、会務を遂行するために理事会のもとに本部事務局をおく。本部事務局に運営委員会、編集委員会を設ける。ただし、編集委員会の事務は、本部事務局以外で行うことができる。

2、運営委員長、編集委員長並びに運営委員、編集委員は、理事会がこれを委嘱する。運営委員長、編集委員長の任期は、二年とする。

第九條 この会は、毎年一回通常総会を開催する。臨時総会は、理事会が必要と認めるとき、あるいは会員の十分の一以上から会議の目的とする事項を示して要求があったとき、これを開催する。

会計

第十條 この会の経費は、会費その他をもってあてる。

第十一條 この会の会計年度は、毎年四月一日にはじまり、翌年三月三十一日におわる。

第十二條 この会の会計報告は、監事の監査を受け、評議員会の議を経て、総会において承認する。

会則の変更

第十三條 会則の変更は、総会の議決を経なければならない。

付則

一、会費は、年額八、〇〇〇円とする。入会金は、一、〇〇〇円とする。

二、会費をつづけて二年分滞納した場合は、原則として退会したものと見なす。

別則

一、会則第三条にもとづき、支部を設けるには以下の書類を理事会に提出し、評議員会の承認を得なければならない。

1、支部の設立に賛同する会員の名簿

2、支部会則

二、支部には、支部長一名をおく。

三、支部長は、支部の推薦にもとづき、代表理事がこれを委嘱し、その在任中、この会の評議員となる。

四、支部は、会則第四条の事業を行うのに必要な援助を本部に求めることができる。

五、支部は、少なくとも年一回事業報告書を理事会に提出し、その承認を得なければならない。

〔一九九三（平成五）年五月二十二日の総会において改正

承認、施行〕

書評	花田俊典著『清新な光景の軌跡——西日本戦後文学史——』 『近代文学研究とは何か』刊行会編著 『近代文学研究とは何か 三好行雄の発言』 小森陽一著『歴史認識と小説 大江健三郎論』 宮野光男著『有島武郎の詩と詩論』 大塚美保著『鷗外を読み拓く』 永朔朋枝著『北村透谷——「文学」・恋愛・キリスト教』 横林混二著『横林混二著作集』全三巻 伊藤氏貴著『告白の文学 森鷗外から三島由紀夫まで』 栗田廣美著『死と飛躍・有島武郎の青春 ——〈優等生〉からの離脱——』 紅野敏郎著『遺稿集連鎖——近代文学側面誌——』 澤 正宏著『西脇順三郎のモダニズム 「ギリシア的抒情詩」全篇を読む』 テレンゴト・アイトル（艾特）著 『三島文学の原型——始原・根基隠喩・構造——』 米倉 巖著『萩原朔太郎論攷 詩学の回路 回路の詩学』 椋原 修著『小林秀雄 批評という方法』 長野 隆著『長野隆著作集』（全三巻） 樋口一葉研究会編著『論集 樋口一葉Ⅲ』 清水孝純著『笑いのユートピア 『吾輩は猫である』の世界』 伊藤 忠著『作品と歴史の通路を求めて 〈近代文学〉を読む』 山崎一穎著『森鷗外・歴史文学研究』 山田俊治著『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』 飛ヶ谷美穂子著『漱石の源泉 創造への階梯』 大久保典夫著『岩野泡鳴の研究』 野村幸一郎著『森鷗外の歴史意識とその問題圏 ——近代的主体の構造——』	新城 郁 夫 181 田 中 実 185 石 橋 紀 189 佐々木 さよ 192 青 田 寿 美 195 清 水 均 199 平 岡 敏 夫 203 大久保 健 治 207 川 上 美 那 子 210 谷 沢 永 一 214 市 川 毅 218 山 崎 義 光 222 山 本 康 治 225 細 呂 博 229 野 谷 芳 信 232 中 山 和 子 236 赤 井 惠 子 239 森 田 健 治 243 柴 口 順 一 247 菅 聡 子 251 小 倉 芳 三 254 鎌 倉 信 258 林 正 子 262 申 銀 珠 265 伊 藤 真 一 郎 266 荒 井 真 理 亜 267 宮 崎 潤 一 268 竹 本 寛 秋 269 佐 藤 健 一 270 加 藤 慎 行 271 中 村 三 代 司 272 松 澤 信 祐 273 渡 邊 ル リ 274
紹介	韓国日本近代文学会編著『日本近代文学——研究と批評——1』 鈴木健司著『宮沢賢治という現象 読みと受容への試論』 橋本寛之著『都市大阪〇文学の風景』 高木伸幸著『井上靖研究序説 材料の意匠化の方法』 星野見一編著『新生の詩』 尾西康充・岡村洋子編著『プロレタリア詩人 鈴木泰治 作品と生涯』 水川隆夫著『漱石と仏教 則天去私への道』 半田美永著『佐藤春夫研究』 布野栄一著『小林多喜二の人と文学』 村田秀明著『中島敦『弟子』の創造』	

日本近代文学

第68集

編集者 「日本近代文学」編集委員会

〒180-8629 東京都武蔵野市境5-24-10
亜細亜大学 関礼子研究室内

発行者 日本近代文学会 代表理事 東郷克美

発行所 日本近代文学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学教育学部東郷克美研究室内

印刷所 (株)早稲田大学事業部

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田1-1-7
電話03(3203)3308 FAX 03(3202)5935

2003年(平成15年)

5月15日 発行